橘高薫風川柳文集

沖積舎





平成13年4月　春の叙勲木杯一組台付

橘高薫風川柳文集

装釘＊伊丹啓子

目次

Ⅰ 「川柳塔」巻頭言 1

Ⅱ 名句のかおり(1)～(23) 103

Ⅲ 寺尾俊平第二句集『風の中』解説 133

Ⅳ 川柳「平安」誌掲載エッセイ 143

Ⅴ 佳句感想とこの句この人 163

Ⅵ 序文(1)～(7) 197

Ⅶ 麻生路郎先生の思い出（講演録） 217

Ⅷ 大空のこころ(1)～(121) 225
——麻生路郎の作品とその周辺

橘高薫風略歴 430

あとがき 橘高薫風 433

I

「川柳塔」巻頭言

麻生路郎先生

「自分の知っていることで間違いないと思っていることは、殆んどみんなルノワールに教わってやってきたことです」とは梅原龍三郎画伯の言葉である。このルノワールを麻生路郎と置き換えると私の思いに全く合致する。私は、実際には画伯ほどの実力や自信には遠く及ばないものの、これは一つの求道に対する思い入れ、むしろ宗教にも近い心の傾倒を表わしたものと取れば、まるっきり的の外れた虚言とは言えないと思っている。

現在、本社句会の出席者の顔ぶれを見ても、路郎先生の謦咳に接した人は百人のうち十人そこそこなので、今更の感はあるものの先生の横顔の一端を述べたい。

路郎先生は自らに厳しく弟子にも厳しかった。付かず離れずの人には付かず離れず対処されたが、近づけば近づくほど厳しさが増した。私が編集部に入って間もない頃、同じ編集部の、一言居士の仇名で個性派の後藤梅志氏が先生からお叱りを受けた。会っても下さらないので、毎日狭い玄関の間に正座してお許しを待つ。三日目とかに折よく堀口塊人氏が来訪されて事情を聞き、執り成してようやくお許しが出たと言う。後日塊人氏から「あんたとこには、まあえらい弟子がいやはるもんですなあ」とは私も聞いた。

路郎先生は生後一年三ヵ月で母と死別、里子にやられたり厳格な祖母に育てられた故か、「私の句は私の生活からにじみ出た句であり、川柳によって人間愛を求めて止まなかった」と句集『旅人』のはしがきに明記されている。

先生はまた野党派的ハングリー精神が旺盛で、絶えず進歩改革を心に留めておられた。大坂形水氏経営の社の

応接室に先生揮毫の「足踏みをすな」の横額が掲げられている。葭乃先生の若い時代の句に、

改札を出るも先駆者たらんとす

がある通り、先端を行く気概を常に持っておられた。『川柳雑誌』の月刊励行、朝日会館を満員にした「川柳の夕べ」の開催、職業川柳人宣言、私にとって思い出の尽きない藤村〆女さんと随行した青森県川柳大会への選者も、関西からは嚆矢であった。これに関して書けば際限がない。以上が靈靈火らしい先生の人物像のあらましであるが、なお『中央公論』六月号の田辺聖子先生の「道頓堀の雨に別れて以来なり」を読んで頂きたい。そこには折よく路郎・葭乃夫妻の苦闘が真に迫って綴られている。私は一読、涙が止めどなく溢れるのだった。

西尾　栞先生

厳といういかめしい本名に比べ、雅号の栞は如何にもやさしい。枝折に通じるところ、虚子の句と思うが「敲いても敲いても水鶏許されず」のような、枝折戸を叩く水鶏のいた八尾の在所を想起する水鶏庵の庵主であった。

私が川柳をはじめて程なく、最初に接した句集は水谷鮎美著『美をぷらす』で、そこには「いづもやで父たり夫たり子たり」という句があり、十七音字で何と多くのことを言い得ているかと感心したものだが、家族の様子を具体的に表わすと

頭ほど光らぬ父でありにけり
張り替えた障子の中に母います
最後の最後の味方は妻なりき
意見する儂がまだまだ遊びたし
ようきいときやと妹ついでに叱られる

栞先生のこのような句になる。先生は親思い、家族思いの人であった。自然を賛美し、人間の性善を信じて自らも実践、句に移された。それ故、先生の句はすべて温かでふくよかだ。

川柳の出発が麻生路郎先生指導の阪大川柳会で環境抜群であった。上達せぬ筈はない。自ら述懐しておられるが、「六角堂幾何学的に暮れて行き　路生」には昭和初期としての斬新さに啓発されたそうだ。以来川柳生活六十有余年、その作品において、その選句において、路郎門の三傑に挙げられる大きい存在だった。

元旦や我れ泰山の如く座す
一歩出ずれば吾旅人となる心
温泉や座り羅漢に寝る羅漢
牛の瞳に人間何をあわてとる
美容院から戻りあわてまいことか
虞や虞や汝を如何せん四十八
あの晩の風邪よと女嬉しそう
あほくさとも言わず炬燵を猫は出る

先生の句の幅と奥行きはこのように闊達で、鑑賞者に笑顔で語りかけてくれる。

丸いお顔をかしげ、やさしい目とおちょぼ口で、「ほな、薫風さんの健康に乾杯！」と盃を挙げて下さるとき、男の私にもと思うほど和顔愛語そのものの先生だった。

石曽根民郎先生

去る六月十一日、長野県松本市文化会館で第十九回全日本川柳大会が開催された。出席者五百六十名、印象まことに爽やかであった。

私にはこの大会の出席に大きなたのしみがあった。路

郎門の大先輩、石曽根民郎先生と久しぶりにお会い出来ることである。それがかなったのは、浅間温泉ウエストンホテルでの前夜祭の宴会場だった。いち早くお姿を見付けて堅い握手を交わす。無言の中にお互いの思い出が往き交い、路郎先生の鮮明な像がモノクロ写真のように浮かんで来た。

雨の松本にて

遠く来て信濃に山のない日なり

路郎先生が、この旅愁に満ちた句を詠まれたのは昭和十一年のことだ。そして

路郎師と別れる

師の汽車よひとしほ秋を縫ふてゆけ

の句で師弟の情を深められた民郎先生。古い『川柳雑誌』で勉強していた時代の私に、これらの句は深い感動を与えた。ところが、石曽根民郎処女句集『大空』には次の句も掲載されている。

麻生路郎師御来松　二句

朝空に雨は無帽の師を迎へ

徳利ひとつ乾さば旅路は師にはるか

路郎師と浅間温泉一泊

ねざめては湯の香の窓へ師をさそひ

師は五十歳、弟子は二十八歳、その頃の浅間温泉の宿は、鄙びたたたずまいであったろう。右手に盃、左手に煙草の師の姿が彷彿とする。朝の窓には常念岳が今日のように、頂上辺り雪に粧われていたであろうか。民謡浅間節の一節には

〽日本アルプス　浅間の宿じゃ

庭のけしきで　ひとながめ

とある。千余年の歴史を持ち犬飼の湯とも呼ばれ、元禄の頃には善光寺詣りの旅人あまた立ち寄る名どころとなった湯だ。

朝、屋上から見た残雪の常念とまほろばの国宝松本城。そして川柳大会の舞台の、長野大会相談役の席で身じろぎ一つされぬ、痩身の見るからに清廉なたたずまいの兄弟子、八十五歳の民郎先生が、帰阪後も三重写しとなって私の脳裏から消えない。

川柳塔まつり

西尾栞先生のご葬儀が五月十七日に営まれ、追悼句会が七月二十三日に開催されました。その間、あっと言う間でした。

葬儀も句会も、当方の予想を大幅に上回るご参席者で、故人の遺徳の大きさを改めて知らされました。と同時に、先生の薫陶を受けた川柳塔の仲間の和やかさも再認識出来たのではないかと思っています。栞先生亡きあと、私は、この和の精神を一層推進したいと願っています。

それは、今までは川柳塔本社と各地の川柳グループの交流は、適宜スムーズに持たれていて、意志の疎通に事欠かなかったのですが、地方と地方との交流は今一つという感じがあったように思います。先ずはこれを改めたいのです。

川柳塔まつり開催の大きな目的の一つは、このところにあります。八月号でそのあらましを、九月号には更に詳細を発表いたしましたが、今までの二賞発表句会を六賞表彰句会に一括集中させたのです。路郎賞、川柳塔賞だけでなく、渺湖賞、茴香の花賞、一路賞、各地柳壇賞をも併せ表彰し、総会と記念句会を持つことにしました。就中、前日に懇親会を催し、地方柳人相互の交歓の実を挙げられるよう、また、総会での地方からの活発なご意見、ご要望を開陳して頂けるよう企画を改更しました。

麻生路郎先生ご在世当時の不朽洞会員であった工藤甲吉、本田恵二朗、月原宵明三氏の相談役就任の内諾もすでに得て、体制を整え、各地の川柳塔所属グループを数ブロックに分け、毎年交互に選者を送って頂くシステムも確立決定しています。

九月三十日（土）、十月一日（日）にわたる第一回川

柳塔まつりに、華やかに和やかにご参加頂きたくお願い申します。

栞追悼句会の席上でご遺族から拝受しました過分の基金も、川柳塔社の発展、地方交流への効果的な運用を計っていますのでご期待下さい。

来世紀を目指す川柳塔社は、地方の時代、一同人すべて平等の精神をモットーに前進いたしたく思います。

同人・誌友各位のご理解とご支援を切にお願い致します。

鎌倉詣で

九月の日川協常任幹事会を済ませると例年足を西に向け、西日本川柳大会に出掛けるのが常の私は、今年は踵を返して上京した。三日開催の柳樽寺川柳創立九十周年、大石鶴子米寿祝賀の大会に出席するためである。十一年前には同じ鎌倉の建長寺で剣花坊五十回忌が営まれ、高杉鬼遊氏と同行したのを思い出す。

井上剣花坊は日本新聞に「新題柳樽」欄を設け、機関誌『川柳』を発行、再興の祖と称せられる。豪放磊落というから路郎と息が合ったに違いない。その論説「川柳王道論」の冒頭次のように書く。

〝成るたけ平易な文字をつかい深く人生に喰い入った句を作りたい、富貴虚栄のキモノを脱ぎ捨て、素裸になったこころもちを詩にしたい、麗辞綺語をならべて初学を眩惑するようなことを慎みたい、瑰奇感傷のかぎりをつくして若き人の気に入るような川柳を作りたくない、というのが私どもの今日の信条であるがついつい其処を踏みはづし、老杜の所謂「語、人を驚かさずんば死すともやまず」をさもない方に曲解して、誇張な語、奇抜の

字で、その拙、凡、浅浮の内容を飾ろうとする〟これは私の自戒の言葉である。

息女の大石鶴子女史は米寿とはいえ、白髪艶やかでまなざしに力ありお名前の通りのたたずまいで『川柳人』を発行し父君の遺志を継承しておられる。

こういう節目の大会には川柳人はなるべく出た方がよい。殊に指導者は偉大な先人を偲ぶことにより大きな自覚を促されるからである。

風邪気味の体を押して朝から鎌倉大仏、鶴岡八幡宮、東慶寺と回り歩いたので、句会場で発熱ダウン、鶴子女史に米寿の祝辞を述べ本社同人の菱田満秋氏と握手をしただけで心を残して中座する。

門前の茶亭「花心」で昼食、長時間休息居眠りの態。箸紙に印刷の電話番号が八八四八番、これはエベレストの高さであると添書あれば、ふと思い出したのが

どっしりと坐る一萬二千尺　　剣花坊

の句で、十一年前の大会の記念品だった。

今年また会うよろこびの春や秋

今年の記念品は鶴子女史の短冊、父娘二代の筆跡それぞれに力を与えられている今日この頃である。

感謝の二日間

第一回川柳塔まつりと銘を打って今までの総会と句会に前夜祭を設け、二賞表彰を六賞に拡大して催しましたところ、北は弘前から西は唐津までのお仲間のご参加を得て百七十名を越す本社句会を持つことが出来ました。

地方との緊密な交流という所期の目的を果せたように思います。地方の方に来て良かったと思って頂けたかどうか、来年も是非参加したいと思って下さったかが肝心ですが、来年はまた構想を新たに充実したものにして行き

たく思っています。

アウィーナ大阪での前夜祭、東野大八さん夫婦のご参加を得ました。大八さんは、麻生路郎先生の時代の「川雑川柳まつり」に触れ、千日前北極星でのすき焼パーティーの思い出を語られましたが、その年は石曽根民郎氏のお顔も見え、句会の済む頃「路郎のファンだが宴会だけに出るファン」という岩崎愛二氏も来会され、須崎豆秋作詞の「川雑川柳まつりの唄」を炭坑節の節で唄い、男も女も踊る。葭乃先生はじめ婦人友の会の人たちは浴衣姿で興は一入深まったものです。私はその思い出を聞きながら、大八さんの言葉こそ私の期するものであったのだと頷いたのでした。

路郎先生が特別課題の選をし、優秀句の作者の所属する支部に持ち回りの大楯を授与されたのも、作品の向上と支部の栄誉顕彰とを併せ考えられたのです。路郎精神をつぶさに見て来た私は、少しずつそれを現実のものとして行きたく思っています。今年は川内家叭笑会の大熱演の河内音頭が宴会に弾みをつけて好評を得ました。

アピオ大阪での総会は同人諸氏の活発で真摯な質問が飛び交いました。それも昨年の総会の二倍ほどのご出席のたまものと思われます。印刷費や郵送費の値上げにともなう雑誌経営の困難さを、五年間会計部長として尽力下さった春城武庫坊さんから収支の報告あり、引き続き来年度予算案を新任の榎本吐来さんが説明して、印刷費の節減と同人増加運動へのご支援を強調されましたが、同人の積極的な推薦は社を挙げての運動に致したく、大方のご協力をお願いします。

六賞表彰の記念句会は予想以上に盛り上りました。総会終了時の近づくにつれ地方からの同人お仲間の到着、昼食をはさんで午後一時までには、まるで潮の満ちるように、しずかに豊かな趣きで自然に席が埋められて行きました。それを見ながら、私の心も潮の満ちくるようで熱い力を貯えさせて頂きました。

賞状を読み上げ、川柳塔社主幹橘高薫風と声に出しましたとき、私の名で出す第一号が若い同人、三十五歳の小林一夫さんであることに深い感慨を覚えました。二十一世紀へつないで貰える若者たちを育てることの困難な課題もまた頭をよぎるのでした。

受賞者の皆さんおめでとう。遠来のお仲間たち、ありがとうございました。

平成七年を顧みて

平成七年の荒ぶる年も十二月になり、人皆今年の出来事を顧みる時期になった。

社会全般では、先ず阪神大震災の発生であり、オウム真理教に関する一連の事件である。これらに比べると激しい梅雨による被害も物の数ではないように扱われる、まことに不仕合わせな年であった。

震災では被災地の僚友柳社に義援金を送り、全国の柳社や連盟、本社系列の各川柳会から厚い友情を受けた。同人誌友の地震の被害もさまざまで、作品も多数詠まれたが、

罹災再び割れない亡母の碧い壷　亀岡　哲子

一月十七日　晴　街はつぶれた　小林　一夫

の二句が、それぞれ路郎賞準賞第一席と各地柳壇賞を得た。亀岡哲子さんは家屋全壊の被害、小林一夫さんは地震直後、被災地の同人へ給水のボランティアを続けた。

川柳塔社では、西尾栞名誉主幹の急逝が特筆される。昭和六年から六十有余年の川柳生活、作句と旅をたのしまれた。麻生路郎先生の遺志を継いだ初代主幹の中島生々庵氏の後を受け、川柳塔に和の精神を植え付けられた。多数の同人誌友をはじめ全柳界が遺徳を偲び、厳粛に御魂をお送りしたことは、まだ印象に新たである。

十月には新企画の第一回川柳塔まつりを開催、川柳塔の活性化を図ったが、九月三十日の前夜祭、一日の総会と句会、ともに予想外の成果を挙げた。来年は更に工夫を加え一層充実したものにしたいので、積極的な意見をお寄せ頂きたい。

十一月四日には高野山霊園にある川柳塔碑に、今年度の物故者十一名の御霊を合祀、ご遺族とともに四十八名

が参列して法要を営み、ご冥福をお祈りした。
終りに私事で恐縮であるが、古稀を記念して五冊目の句集『古稀薫風』を発刊した。生前の路郎先生が常々、「還暦や古稀という人生の節目を記念して句集を上梓する作者はいるが、五年十年に一度句集を発刊する作家が川柳界にも居てほしい。それも内輪での出版でなく、全国の書店にも配布出来る出版社から発行するような川柳界にならなければいけない」とおっしゃっていたのを実現したかったのである。詩、短歌、俳句の書を多く手掛ける学芸出版沖積舎から川柳第一番目の句集の出せたことをありがたく思っている。
古稀の感謝を明日への活力に致したく願っている。

新年新生

新年明けましておめでとうございます。
今年は西尾栞先生の
元旦や我れ泰山の如く座す
の色紙を床に掛け、しずかに新年を迎えました。句のような心境にはついにも成れぬことと思いながら、先生の境地に近づけるよう精進したいと思います。
「川柳は人間陶冶の詩」という路郎語録とともに私の大きな指針と受け取れる一句となりました。

旧臘、きゃらぼく忘年句会の後、先生ご推奨の海潮温泉へ足を伸ばし、海潮荘の岩風呂に浸りひとりごちながら、そして翌朝には、夜中降り積った庭の雪を見ながら、囲炉裏を囲んで頂いた朝粥の味に、先生と四十年のご厚誼に心からのお礼を申して参りました。
また古稀に際して『古稀薫風』なる第五句集を、予定より大幅に遅れながらも上梓することが出来ました。おかしなことに、川柳塔社主幹となりました今、句集を手

にしてとても恥ずかしいことに思えるのです。路郎・栞両先生のご生前には何らの抵抗もなしに句集を出し、奔放に振舞ってきたことなのに、これでよいのか、という思いが強く致します。

第四句集『愛染』以来十年、月々五冊ほどずつ寄贈を受けた句集や自分史が六百人を越えるリストとなり、その方々に謹呈する分はよしとするも、買って頂くことに何故か当然とは思えぬ思いが兆してくるのです。この思いは各地で催される川柳大会の選者に招待されることにも感じはじめています。句集を出すこと、大会の選を担当することも、慣れてしまうと当然のような顔で済ます思い上りに恥ずかしさがじんじん押し寄せて来ます。

主幹としての厳しさと責任を感じる器量の人になれと、両先生からの声なき声のせいかも知れません。

それ故、私は新年に際して再出発、一から出直すつもりで書棚に句集『旅人』と『水鶏苗』だけを残し、すべて納戸に蔵うことにしました。私は句集『旅人』に接し、これが川柳か、このような文芸なら挑戦してみたいと志を立てて路郎先生に師事したので、先生の句が目標でしたし、四十年、右顧左眄せずに来たので今更句風の変ることはないでしょうが、もう一度将来の川柳を考えながら進みたく思います。

所詮、それぞれの作者が「自分自身の句を創る」こと以外に道はないのですから、そしてその集大成が川柳塔なのですから、たのしく厳しく、皆さんとともども進みたく思います。

お伊勢さん

私が七十歳となる年、終戦から五十年過ぎ去った年、川柳生活四十年を経た年、しかも干支は子である。

「よし、行くぞ」の一声で、体調がどうのこうのと言っていた妻も支度をはじめ、大晦日の日のとっぷりと暮れた頃に家を出た。お伊勢さんへの初詣である。

伊勢に着いて更に驚いたのは「祝二〇〇〇年」の表示であった。個人も国も、神様さえ歴史を積み重ねて行くのだ。

平成八年になったばかりの午前二時、宇治橋を渡る。星の美しさに気づいた。豊中とは比べられぬほど大きく澄んでいて数も多い。この中には二千光年の星もあるに違いないと眺め入るのだった。

暗く広い神域には随所に大きな薪が組まれ、焚火の焔も威勢がよい。街の奉仕の人たちの黒い烏帽子と白い仕丁の衣が古代を偲ばせる。参道は若い人が多く、後から後から追い越して行く。私ら夫婦は、ただはぐれぬように腕を組んでしずかに歩を運んだ。そして西行法師の和歌を口ずさんでいた。

なにごとも変りのみゆく世の中に
おなじ影にもすめる月かな

拝殿は混んでいた。拝殿まで登る石段さえ身動き出来ぬほどだが、とにかく辿り着いてようように二礼二拍手一礼の礼拝をすませた。神殿に近い庭には、若い神官が二人向き合って座り、清浄な神の灯を守っていた。

私は平和と健康を祈り破魔矢を頂いた。そして出口へと向かったのであるが、その道すがら思わず息をのんだのは、突然暗い闇の中で神鶏が時をつくる意気揚々の声が聞こえたからだ。しかもそれは大樹の高い枝からの二声であった。見上げると白い鶏が二羽仲よく並んでいた。

私たちは鳥羽へ出て英虞の海から出る初日を拝むことにした。遊覧船に乗って七時三分の日の出を待つ。

やがて水平線に太陽の円い頭が見えた。海は快晴ではなかったので眩しいほどには光らず、線香花火の最後の火の滴のような美しい紅色で上がり切った。船中はどよめき万歳の声まで上がった。

私はここでも今年の平穏を海の魂のような初日に祈ったが、川柳は森羅万象との出会いであることをつくづく感じたのである。

◇作品

夜の水に夜の火映り初詣
師の叱咤神鶏の時樹上から
初日の出海の玉ゆえ滴るか

句集二冊

ふあうすと川柳社の同人に小池鯉生という人がいた。柳歴は中学（神戸商業）で三条東洋樹・鈴木九葉氏らと作句をはじめてからのもの。

請求書鼻をかまれるかも知れず
仏にもある取巻きの烈しさよ
九ツは仲居に呉れる太鼓焼

これらは初心時代の私に感銘を与えた句である。鯉生さんは戦後自営の商品倉庫が類焼、結核の療養も重なったことから神戸の生活を棄てる羽目となり、東京での再起を計られる。浦和駅前で卵商を営み瞬く間に立派な家を建てられた。私が海土天樹・河相すゝむさんらとバラの美しい庭の新居を訪ねたのはその頃のことで、典姫という名の小牛ほどに大きな犬が子の無い夫婦に甘えていた。

薔薇芽吹く今暫くの命乞い
知恵のない子を呼ぶ声で犬を呼ぶ

その後また心筋梗塞の大病をされたり、健康を取り戻してからは、武田泰雲師に就いて七十の手習いの書を始め、一日百枚のハードな研鑽を自らに課し、日展入選までの実力を養われた。このように生い立ち以来、波乱の人生を体験される。

さてここまでが前置きで、私の言いたいことはこれからなのである。

新居を訪ねた時のこと、麻生路郎先生の句集『旅人』の話が出た。鯉生さんの「出逢い」と題する次の文章がその話の様子を物語る。

私の書架に路郎師の〝旅人〟がある。
亡母の故里を出た翌早朝東京駅に着いた。三十数年前

の土地勘を頼りに中野区の川上三太郎先生の門を叩いた。川柳だけが頼りの一人旅であった。句は見て戴いてはいたものの初対面、上京の訳を簡単に告げた。朝食を出すようにと八千代夫人に言われ「わたしは急ぎの原稿があるから」と二階へ上られた。味噌汁が温く嬉しかった。一休みしなさい、と言われ炬燵にあたっている中に車中の疲れから寝入ってしまった。昼近く眼を覚ました。「都内に門下の多い周魚に逢え」と言われた。辞去しようとして玄関脇の書棚に〝旅人〟が二冊あるのが目にとまった。路郎先生には鳴尾に住んでいられた頃教えを受けたことが思い出されて、「二冊ありますね」と言うと「一冊持って行け、今は手に入り難いそうだから」代金は受け取って下さらなかった。

私は近頃句集の発刊を知る度、心ひかれる人のものは二冊以上需めることにしている。この時、三太郎先生から受けた御厚志が忘れられず、又その時、これは一生見ならうべきことだと感じた故もある。人の心はこうして人に伝えるものだと今も思う。

一月の本社句会で『古稀薫風』を二冊買って下さった方にそのわけを尋ねたら、いい句集なので一冊は街の図書館に寄贈するとの言葉が返ってきた。私は咄嗟に鯉生さんのお話が脳裏に甦った。

いい先輩いい後輩を持ったものだと胸を熱くしながら帰途に着いた。

司馬語録

司馬遼太郎氏が二月十二日夜、腹部大動脈瘤破裂のため急逝されたのをテレビで知ったとき、氏は河野一郎や石原裕次郎型のスケールの大きい人だったと、その病名で直感した。

私が藤沢桓夫先生の元にしょっちゅう出入りしていた頃、先生のお祝い事があると、その会場の料亭に、詩人の小野十三郎氏をはじめ、作家や棋界の高段者、ジャーナリスト達が大勢集まった。受付係の私は来会者から会費を頂き、記念品を渡したりした。司馬氏お一人の来会もあれば、夫人とご一緒のときもあった。田辺聖子先生に現在ご昵懇に願えるのも、そういう役目柄がきっかけになったからである。

司馬氏の文化勲章受章のときの言葉

「ごほうびはうれしいんですけれど、小説というものは書生でないと書けない。社会的身分もないし、一人前でもない。違う気分になるといけないので、明日からは忘れます」

には降参したいほどに感銘した。

作家の厳しさに比ぶべくもないが、われわれ柳人の研鑽のなさには自らを恥じる事が多い。私には過去に苦い経験がある。それは、保育社から出した『川柳にみる大阪』で織田作之助の小説「夫婦善哉」を戦後の作と書いてしまった。映画の名作、森繁久弥扮する柳吉と淡島千景の蝶子の演ずる名場面の印象から、ついそのように記したのである。柳吉の名までミスした。そして、その本が織田作と最も親しかった藤沢桓夫先生監修の共著であったのだ。この惨憺たる軽薄さに、私は以来、書く資格なしと、出版社からの著書は何一つ出していない。

司馬氏の言葉

「歴史はみんなの共有財産だから、勝手なことを書くのは公園を汚すようなものだ。可能な限り、よく調べてきちんと書きたい」

というのもまた私の身に沁みた。

「史実に忠実に」は作家の良心であろうが、取材にも際限のない厳しさを想像する。私は路郎先生から、作品の引用は句集で確認するか、本人に問い正すか、極めて慎重にしないといけない。間違いが孫引きされて、たった一字のことでも価値のない句になって喧伝される怖れがある。これを守らない者は文章を書く資格がなく、大いに自覚せよと厳しく指導された。悲しいことに、これがまだ柳界では守られていないのだ。

ところが、また別のところに私の悩みが出来して来た。それは老齢により惚けのはじまりである。正しく書いたつもりが全然別の字を書いたり、ひら仮名を一つ飛ばし

ていたりが時折起きるのである。
司馬氏はつゆも惚けへの悲哀をさびしむことなく、この世を去られた。それも厳しく美しいことに思える。

出会い

今年の春は高知佐川町と津軽弘前城の観桜句会に招かれた。深尾氏一万石、津軽氏十万石の城の桜で日本の桜百選に選ばれている。
佐川城は明治の始め廃城となったが、小規模ながら石垣や奥土居が残っていて田中光顕の青山文庫や牧野富太郎ゆかりの牧野公園など、文化的遺産に富んだところ。満開の桜とみやまつつじ、連翹の色彩豊かな競演が見事であった。
弘前へは東京盛岡経由にしたのは北上市の日本詩歌文学館を見学したかったからである。
弘前の桜はまだ蕾で、翌日にやっと開化宣言が出たのだが、それでも夜桜の下で宴をたのしむグループがそこここに見られた。そぞろ歩きの川柳塔みちのくの仲間は屋台の飲み屋に上がり込んだ。お化け屋敷やサーカス小屋からの呼び込みの声とオートバイのエンジンの音の中で地酒の酔いを深めて行った。
不本意な城の桜とは違い、後の二日間は岩木山、八甲田山の雪とグルメ、それに工藤甲吉さんをはじめとする川柳仲間との出会いに充実した時を持ったが、それらは詳しく述べず、ここで北上市に引き返すことにする。
日本詩歌文学館では常設展「水の旅」を見た。湧きいずる水、流れゆく水、波のうねり、そして雨・露・霧…など水の生態を分類して、多数の詩歌作品が半截、色紙、短冊、原稿に作者の個性を豊かに展観されていた。そし

て、クールベの「波」の絵や北斎の「富嶽三十六景神奈川沖浪裏」のパネル等で、海の舞台をひき立たせているのだった。

詩は井上靖や三好達治、有名な達治の

太郎をねむらせ
太郎の屋根に雪ふりつむ
次郎をねむらせ
次郎の屋根に雪ふりつむ

があり、短歌は空穂、茂吉、晶子、牧水、

かにかくに祇園はこひし寝るときも
　枕の下を水のながるる　　勇

が目を引き、俳句は

瀧の上に水現れて落ちにけり　　夜半
水枕ガバリと寒い海がある　　三鬼

などで、川柳は古句と現代川柳二句ずつ、

深川は蚊帳をまくるとすぐに船
船嫌い一人は川のへりを行き

これには武蔵第一名所角田河絵図並故跡附の絵が参考資料として掛かる。

人恋し人わずらわし波のおと　　栞

ぽたん雪別れた人のこと思う　　放浪児

T・S・エリオット、サトウハチロー、中也、白秋、鉄幹、山頭火、秋桜子、誓子、蕪村と名だたる名作家の中に、わが西尾栞先生が寂然とおられる。この偶然の感動は大きかった。水鶏庵栞の落款も、見覚えのある酔心化大空の遊印もなつかしく、いつまでも立ち去り難しの思いで、先生は生きておられると一人だけの広い部屋で叫びたかった。

出会いは感動である。川柳は出会いである。出会いはやはり動かねば得られぬと、震える思いの中で感じたのであった。

恩徳讃

五月二十五日土曜日、たのしみなＮＨＫの川柳選評がラジオから流れる。今日の課題は「煙草」、河内天笑君の声だ。

民主主義マッカーサーのパイプから　浅沼　清五

日本が負けたその月の三十日にマッカーサー元帥がパイプを咥えた軍服姿で、はやくも厚木飛行場に降り立った。その頃私は秋田の連隊にいた。

もう一個買い足して行く会議室　川口　俊定

ああ路郎先生はヘビースモーカーだったなあ、白い髭が黄色くなっていた。

そう思いながら私は家を出た。路郎先生の三十三回忌、葭乃先生の十七回忌法要をご遺族が1年繰り上げて営まれるので、五女梨里さんの嫁ぎ先の浄福寺へ行くのである。両先生を知る近在の門下生十一名が集まり定刻に読経がはじまる。導師はお孫さんの西村哲夫（てつゆう）師である。阿弥陀如来をまつる本堂正面には路郎先生の筆になる浄福寺の山号「天王山」の額が掛かる。一同は厳粛に焼香して両先生の恩徳を謝した。恩徳讃には「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし　師主知識の恩徳も骨を砕きても謝すべし」とある。

席を替えて、ご馳走をよばれながらくつろいだ懐旧談に移り、おのずから小句会の趣へと変っていった。

麻生アート氏は、今なお父母に深い支持をして下さる参会者に謝辞を述べられる。氏とは五十年ぶりかと言う人もいて、タイムトンネルを抜けたにしては古い記憶も鮮明で、しめやかな中にもたのしい半日を頂いた。集句は私が選をすることになり、次の句を披講した。（掲載一句）

鬼灯のみどりは葭乃朱は路郎　橘高　薫風
雲の峯早くも三十三回忌　宮口　笛生
弱い者いじめ政府のお墨付き　吉岡　美房
春爛漫河内三山渡る鐘　小池しげお
いのちある句いのちある句と八十路坂　藤村　〆女
掌のひらで折り畳まれて恙なし　森下　愛論
汚れきる日本見下ろす雲の峯　西田柳宏子

若い力

去る六月二十九日（土）、オール川柳創刊記念大会が三井アーバンホテルで開催され、オール川柳新人賞とオール川柳作家賞がそれぞれ発表になり、二百五十名の参加者の前で受賞者の表彰が執り行われた。

オール川柳作家賞の大賞は、石川県の前田義風氏の獲得されるところとなり、大正中期からの川柳活動の集積ともいえる「土との生活」を叙した作品が脚光を浴びた。

ここに一人名も無く生きる土の城

そして、次いでの高点を得て準賞になった三名のうちの二名が、川柳塔の同人であったことに私は大きな喜びを感じたのである。

桑原　道夫　（作品20句のうちの5句）

人間の顔ほど伸びる輪ゴムかな

政治家を一喝しそうな師を思う　阿萬　萬的
高速を出て山藤が美しい　黒川　紫香
足踏みの背中へ鋭い師の叱咤　大坂　形水
待たされた頃の恋しい一周忌　西尾美与子
緞帳が下りずもたもた生きている　西村　梨里
尚富を地に積まんとするもんじゅの爐（ひ）　麻生アート
寿無量を人間陶冶と言いにけり　西村　哲夫

子の臍へ如雨露で水をやりにけり
足で足洗う蛇口を全開に
ベランダの干し物　日本はアジア
シャボン玉海に沈んでみたくなり

小島　蘭幸

葦揺れる十七歳の葦揺れる
障子一枚父の威厳をなつかしむ
師を越えることなど出来ず弔詞読む
映画館が消えた銭湯が消えた
なんにもない古い町並みだけがある

道夫さんの句は、ご自身の長所である感性を充分に駆使しながら、一人よがりに陥ることがない。子の臍は森羅万象の芽の中で一番いとしく可愛い芽であろう。

団地の満艦色的干し物、韓国や中国をはじめ東洋の民族の生活に付随する風景なのである。

蘭幸さんは家族と竹原の町をテーマに、平凡を捉えて非凡であった。これらは蘭幸さんの毎月の雑詠のペースそのもので、路郎先生から代々受け継いだ川柳塔の体臭を発揮された。蘭幸さんは48歳、道夫さん39歳、ともに学生時代から作句をされていた印象を私は持っている。

目を転じて、『川柳塔』七月号を見る。川柳塔欄の巻頭は、肥後和香子さんで

うわっと笑ってる椿集団ってこわい
感情を透き通らせる桜シャワー
じゃれ合えば猫の眼となる君が好き

の句は、斬新さ若さそのものを感じさせる。田中叶さんや高瀬霜石さんらの世代の切磋琢磨の力感がいつも選者に伝わってくるのである。それは鳥取のグループにも、和歌山の仲間にも感じられるもので、川柳塔の将来を押し上げるパワーなのだ。

私は今、神平狂虎、後藤正子、赤木和子、藤田泰子、前川千賀子さんらをなつかしんでいる。

夢の力

七月二十日、海の日、大阪は朝から雨だった。朝刊を広げると「朝日なにわ柳壇」、兼題「海」は私の選である。

蜃気楼しばし海上美術館　下浜　和子
地中海と記して色のない画帳　高杉　千歩
青きカメオはるかナポリの海の色　相宅　寿平
友眠る海を半生撮りつづけ　堀江　光子

今回は他に栗谷春子さん以下川柳塔の同人が十名も入選し、ご支援を心からありがたく思う。

稚魚放流見てこいデカイ海の夢　川原　章久
水平線過去と未来が朱に染まる　井上　照子

海には底知れぬ夢がある。

海の日は、今年はじめて国民の祝日になったが、これが制定されたのは一九四一年（昭和16年）だった。この日は明治天皇が北海道・東北地方へ行幸になり、海路横浜港に帰着された日という。

朝食をすませてアトランタオリンピック「開会式」をテレビにかじりついて見る。主催国アメリカらしく音楽いっぱい光一杯の豪華な雰囲気の中で、特に感慨を深くしたのは、ポップス歌手のセリーヌ・ディオンの迫力ある歌唱「夢の力」だった。パーキンソン病のモハメドアリが聖火台に火を点す。動けぬアリ、手を震わせるアリに息をのみ、「夢の力」を思い直す。

路郎先生の句集『旅人』の自序には

「私にも多くの夢がある。私の一生はまだピリオドを打たれていない。せめてそれを力ぐさに、歩き続けよう」と結ばれている。

動物は眠っているとき夢を見るのだろうか。人間は眠っても目覚めても夢を見る。

夢に向かって力を尽くす。

NHKテレビを見つづけて「秀吉」や「故宮」をたのしむ。歴史は夢の具現であり足跡でもある。

名古屋場所十四日目は横綱曙が一敗、貴乃花二敗で迎えた。そして曙は若乃花に河津掛けで負ける。お兄ちゃんがまた弟の援護射撃をした。夢が絡まっては解け、解けてはまた絡まる。

夜に入るときまさに夢の球宴の展開があった。苦労人の山本和範選手がピンチ・ヒッターに立ち、3ラン・ホーマーを放ってパ・リーグへ勝利を導く。「人生意気に感ず」、お立ち台で仰木監督の起用に感謝していた。夢の力はとてつもないドラマをもたらす。

テレビの虚像とはいえ終日堪能させられた「海の日」であった。

八月に入りオリンピックも終りに近くヨットの女子470級の最終レースで、重・木下組がヨットでは初のメダル銀を獲得した。幾多の難関を克服しての凸凹コンビ（身長差26センチ）である。目的を持った「夢の力」がサバナ海域で花開いたのである。

銀はときに金より輝くものと感じた。

三十二年への出発

昭和40年10月1日、川柳雑誌改題第一号『川柳塔』が発行になった。それ以来十月が来ると、三十一年経った今もなお、誕生月の感慨に身の引き締る思いがする。

中島生々庵主幹の巻頭のことば

『川柳塔』が産れた。実はまだ哺育室で静かに生活を送っている未熟児である。未熟児といっても、早産児でもなく奇型児でもない。四肢五臓腑完全に整い生活力も旺盛である。ただ体重が25キロ以下であるために医学上

国際的約束で未熟児と呼ばれるわけである。未熟児というかよわい生命力をどう護ってゆくかに就いて小児科医にはきびしく申し渡されている心構えの条件がある。その中の二つ三つをあげて見る。

○弱いともしびに、いろいろ処置をすれば却ってともしびが弱くなったり時とすると消えることがあり、栄養も過剰に与えることは意味のないばかりでなく栄養不足よりも危険なことがある。

○「生命を救うこと」の方が「急速な体重増加」を考えるよりも重要である。

○いそいで大きく育てようとか自分のてがらにしようとか、そうしたあせりや功名心を出してはいけない。

『川柳塔』を逞しく明るく育ててゆく上に示唆される点が多々あるように思う。

宿命におろがみながら子を育て

三十一年経て66頁の雑誌が110ページになっても、この自覚の自戒は寸分違わない。

心して時勢に即応した体制で確実な歩みを続けたいと思う。三十二年への出発に当り第二回川柳塔まつりのご支援を心からお願い申し上げます。

この『川柳塔』第一号の表紙の絵は、直原玉青画伯の筆で、松の太幹に両脚を踏まえた大鷲が今にも飛び上りそうな前傾姿勢で、眼光炯炯と行手を見据えている。雑誌の門出にふさわしいものであった。爾来三十一年、九十四歳の画伯の恩を受け続けている。

日本南画院会長の画伯は誕生日の八月一日を期に、画業七十年・玉青館五周年記念画集『句画禅』を出版された。

田辺聖子先生が「ホンモノの心のときめき」と題して序文を書かれている。

画伯の絵のホンモノのもつ光芒には排他的な孤高の気配はなく暖かでとろっとしたやしさに充ちている。墨の濃淡でこんなにも駘蕩たる世界が表現されるとは、と述べ、画伯の作品に勇気づけられ慰められる。と結んでおられる。

尾形仂氏は、画伯の揮毫中の襖絵の梅の枝先に蝶が舞ったり止まったりした事実から、物我一如の東洋独特の宇宙観の具現で「入神の境」と賞賛を惜しまない。

また七月には句画集『早春譜』が六百部限定で出版された。俳誌『早春』への七十年に亘る句の集大成で、年

代別の、清閑抄、真観抄、自然抄の三部から成る。

紀伊の燈の銀河の果に走りゐる
母の日や生涯母を恋ふ子たれ

川柳日記

九月二十七日　川柳塔発送の日、十時過ぎ川柳塔社事務所へ。鍛原千里さんを中に笛生・美津留・金太・ダン吉諸氏がフル回転の作業中、一冊を取り上げる。

編集を担当していた時は、この一瞬、今よりも心ときめいたものだ。表紙の色の上がり具合から大凡全体の出来までが分かった。次いで美研アートへ。樫谷寿馬句集『銀海』が出来上がっていた。感無量で四日間の旅に発つ。犬山泊り。

二十八日　明治・大正・昭和の川柳史を飾った人々「東西諸大家染筆川柳展」を見る。若松屋千一庵ギャラリーで主催は佐藤一粒氏の主宰する鵜がご川柳社。終戦直後から山田祥園氏（すげ笠川柳社）の蒐集による揮毫作品や書籍、写真、胸像など百点を越す貴重な資料が揃い、富山入りの回り道をして立ち寄った甲斐があった。句と同じに書も又人間である。

魚河岸で見た東京の素晴らしさ　久良岐
川柳と号す其他に伝は無し　剣花坊
思ひ出の夫婦茶碗に怪我もなし　周魚
身の底の底に灯がつく冬の酒　三太郎
お揃いを着せても家の子が目立ち　雀郎
秋さらり銀のふすまの物おもい　路郎
西陣の男の襷二十年　水府

句画禅の一如確かむ花の宵
僧帽も杖も身につき風薫る
春寒やドラマでありし九十年

女連れみんな座席があってよし　紋太

二巨頭、六大家の遺品である。たのしい川柳寄せ書きの半截があった。

人生に苦はなしおもふだけのこと　鞍馬

子沢山僕の枕は何処へいた　路郎

だろうと思った　雲　がら〳〵ぴかり　紋太

その中には周魚・〇丸の句もある。

食満南北の絵入染筆が数点、

くたびれた頃に丁度な富士の山　南北

の句に、絵は槍持ちの奴である。芭蕉の

くたびれて宿かる頃や藤の花

を意識して詠んだ氏一流の機知であろう。

久留美・角恋坊・五花村・珍竹林・孝三郎・句沙弥・東洋鬼・一狂・素生・文久その他豪勢な短冊の揃い踏みである。

前日、一粒氏に

「栞先生の無ければ持って行きます」と言ったけれど、あったあった

あの晩の風邪よと女嬉しそう

が特製の額に入って頬笑んでおられた。

二十九日　第11回国民文化祭とやま96文芸祭川柳大会は大沢野町文化会館で開催された。四百人の参会者の前で開会式、事前投句発表。昼食後にアトラクション「金蔵獅子」の披露や当日句の披講あり、選評、優秀句発表から表彰式に移る。

本社関係では誌友の地元増田紗弓、新改め鷲見正子のお二人が栄誉に輝いた。

文部大臣奨励賞

立ち直るチャンスを呉れた平手打ち　富山県　増田　紗弓

大沢野町実行委員会会長賞

一発の銃弾が消す蜃気楼　鳥取県　鷲見　正子

大会終了後、富山の鯛家で鷲見正子、但見石花菜、小林由多香氏ら四人で受賞の祝杯を挙げた。

犬山の一粒さん、富山の杏花、ひかる、紗弓の皆さん、お世話になりました。

ご挨拶

明けましておめでとうございます。

今年は川柳塔社には一つ大きな目標があります。

それは、麻生路郎先生の三十三回忌、葭乃先生の十七回忌、中島生々庵先生の十三回忌（一年繰り上げ）、西尾栞先生の三回忌を迎え、四先生の法要を修し、川柳大会を開催することです。

路郎先生は六大家の一人として、他の三先生も全国的規模での川柳功労者であります。川柳塔のみならず、柳会挙げてのご支援を得て、大会を盛大に、また心に残るものと致したく存じています。

六月二十八日（土）、たかつガーデン（大阪市天王寺区）でお会いしましょう。

今年は、この大会の開催と共に地方との交流を一層深めるため、各地指導者の本社運営への参画の体制造りを積極的に進めたく思っています。手はじめに、地方からの本社句会への投句復活も決めました。活気ある地方の力で本社を盛り上げて頂きたい。

本社は、若い世代の自覚と行動力を促進しながら来世紀の川柳塔社のビジョンを確立するよう努める所存です。

昨秋、主幹の私に力添えを頂く理事長に小出智子さんが就任、昨今の川柳界の趨勢に即応した新しい体制で出発しましたが、智子さんは直後に体調をくずし、入院手術をされました。発送部長の山下美津留氏も入院加療中です。両氏の速やかな快癒と一日も早い復帰を祈るばかりです。

旧臘七日の朝日新聞「天声人語」に、「塔は権力、ドームは民主主義をかたどる。そんな解釈があるそうだ。塔は眺めるだけ、ドームは多くの人を受け入れるからだ

という。原爆ドームをぜひ、民主主義の象徴にしたい。」とありました。そのとき私は、麻生路郎先生の高邁なる遺志の力を体しながら、祈りの川柳塔、多くの人を受け入れる川柳塔であるべきだと実感したのです。

皆様のご多幸と、川柳塔に実りある年でありますように祈りながら、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。

麻生路郎先生

昨年十二月五日に山陽柳壇は五百回を迎え、記念特集として榎本聡夢、寺尾俊平両氏と私の三人揃い踏みで選評を掲載した。第一回は昭和二十四年十二月三十日の夕刊にはじまる麻生路郎選の山陽川柳で、それが母胎となって今に至った。

用心は妻にも記憶して貰い

三原・糸崎　斉藤　正一

これが第一席の句で、二席三席の次の十秀に、福島鉄児、丸山弓削平、浜田久米雄となつかしい名が並んでいるのだが、それぞれの個性の滲んだ句であることに路郎先生の炯眼を感じる。

翌二十五年の九月には久米南町に第三句碑が建立され、日本一の川柳の町として発展する楔のような「俺に似よ」の一基であった。

ところが三十年に川柳岡山社が創立、川柳雑誌社から独立したことで路郎先生は怒って取り巻きを伴い殴り込みをかける。こういう事件は昭和初期にも神戸であった「爆弾を抱えてきた男」の演説である。路郎先生の直情はどこかで反転してわが身に刺さってくる。

田辺聖子先生の「道頓堀の雨に別れて以来なり」にも「番傘四十年記念全国川柳大会」に際しての路郎先生の仕打ちを厳しく批判しておられる。少年時代の水府・路

郎のまるで琴瑟相和す夫婦のごとき友情が、何時からどうして確執多き二人となったのか。私が川柳雑誌社の編集部に入り、早速、短詩文学連盟主事として連盟通信や揮毫展の世話に奔走した時は、今度は路郎先生が臍を噛む思いをさせられている。それはその前年の三十一年六月に関西短詩文学連盟が結成され、初代理事長に路郎先生が就任されると、水府先生はじめ番傘系会員数十名が総員脱会という挙に出られたのである。近江砂人、中島生々庵両氏らが如何に水府路郎の反目に気を遣われたかが想像出来るのである。霹靂火の路郎に多分の負い目があろう。そしてその路郎先生のよき理解者が葭乃先生であるが、これは次回に触れることにする。

路郎先生については八年ほど仕えた間に教えられたことが多かったから、いろいろな機会に書いて来た。そして今改めて思うに、「真底句に生きた人」を第一に掲げなければならないと思う。須崎豆秋さんを川柳界の一茶と言ったのは路郎先生だが、その気持ちには、俺は川柳界の芭蕉であるとの思いが色濃くあったように思う。芭蕉の「奥の細道」の真筆が出て来て、推敲のあとから句や文に対する厳しさを窺うことが出来たが、先生の思い入れも近寄り難いものを感じた。

資質高き故に容れられぬ経営の悩みもあったと思う。俗に居て俗にまみれ得ず、酒を好んで酒に痴れ得ずの路郎先生でなかったか。また、俊秀の揃う門下生に対しても満腔の信を託し得なかったのではないか。路郎先生の気概をよしとして傾倒を惜しまずに来た硬骨漢東野大八、工藤甲吉氏らも八十を越えられた。

最晩年の先生ならずとも、「孤独」の二字の川柳行脚でなかったか。

六月の追悼大会では、孫の西村哲夫師にその孤独の魂を鎮めて頂く。

麻生葭乃先生

改札を出るも先駆者たらんとす
夕立は小気味よし君が叱咤も

これは路郎先生の激しい気性を表現した葭乃（本名ヨシノ）奥さんの句である。明治二十六年生まれの長流水は路郎の霹靂火を包み込み、あるいは見事に逸らして悠々と流れる。

それは江戸時代回船問屋を広く営んだ堺の名家河盛一族のしたたかで物に動ぜぬ血と、早く母を亡くしたあとも父君の一方ならぬ愛情を受けて気ままに育ったのびやかさのたまものと思える。

われ充てり充てりと裏の菜種咲く
揚雲雀わが魂を持って行け

ミッションスクールの英文科を卒業した葭乃先生はルツという洗礼名を持つので右に類した句も多い。

しかし、西洋の機械文明や拝金主義には馴染まず、東洋的精神性と生き方に徹しられた。

行末はハムとなる声のどかにて
蟇口も襟も子供の払い下げ
懐が寒くなっての純喫茶

などの句や路郎先生の述懐を知ればその様に思えるのである。

路郎先生の話とは、ある夏の朝出勤前の食膳に掻き氷を盛った器が出たきりで何一つ運ばれて来ないので「飯は？」と言ったら、「これで」と氷を指したから「俺は出勤するんだぜ。朝っぱらから氷を食べただけで働けるか」と言うと、「暑いやろと思うて…」とさしうつむいたというものである。

この話を知ったとき私は、人間は無欲または寡欲の生

き方をよしとする老子の根本教義に通じると思った。

路郎先生の死後、一度は路郎の元を去った中島生々庵先生の復帰を許されたのも、混沌の中からほのかな光明を見出して進む拠りどころを与えて下さったものである。欲望は押さえなければ際限もなく高じて破滅に向かうもので、まあぼちぼちにしなはれの、老子無為自然の道だ。真の暗闇ではない玄の世界を尊ぶ。

浴槽へずらり立ったは皆わが子

四男五女を生み育てた葭乃先生は踊りとお酒が大好きであった。路郎先生の誕生日を祝う「川雑川柳まつり」や、その他の機会あるごとに婦人友の会の仲間に率先して揃いの浴衣で踊られた。

死出の旅にも日本酒党であるかしら

先生は日本酒党で晩年も自動販売機でワンカップを買うてはアートさんやアート夫人の目を盗んでたしなまれていた。「お母ちゃん隠れて飲んではるけど、空のカップが見つかるのですぐバレますのや」と何べんとなく聞いた。酒には強くたのしい飲み手であった。

「路郎は生きんがための職業と川柳とを天秤にかけて、常に均衡を保っているが、どちらかを選べと言えば一も二もなく川柳と答えるであろう」と断言される一事をみても、路郎先生のよき理解者、協力者であったのが分かる。それ故か、路郎先生の辞世の句に応えた奥さんの句の一体感の見事さには言うべき言葉が見つからない。女ながら度量の人であった。

さらばさらばまだ私は夢を見てます

書類焼く火は落城の火とも見ゆ

中島生々庵先生

去る三月十八日、私は岡山県久米南町の「川柳の小道公園」の中島生々庵句碑の前に立った。

うき草は浮きくさなりに花が咲き

昭和五十七年六月十三日の除幕の日も小石夫人とその前に立っていた。つつじの花が美しかった。揮毫の折は脳梗塞の不自由な手に太筆を持ち、難渋の限りを尽くした一字一字だったが、遂に句碑と対面することなくこの世を去られた。

川雑浜寺支部時代から松坂倶楽部時代を経て二十年近く麻生路郎先生に私淑、昭和三十三年一月、福田山雨楼氏逝去のあと空席の川柳雑誌社副主幹に就任。一時は路郎の元を去られたが、路郎の死後昭和四十年十月から新生川柳塔社主幹・理事長に推され、社の礎を築き昭和五十七年西尾栞先生に社の代表を譲られた。

生々庵先生を偲ぶに当たり、私の著書『なにわ川柳この一句』に掲載した先生の句の解説を左に記すことにする。

尉は古稀媼は還暦わか緑

作者は日本川柳協会理事長、川柳塔社主幹。昭和三十年の元旦から夫妻で合作の書画作品を残し、今年元日作成のを入れると軸の数は二十七点になる。新年の感懐を句と絵にまとめたもので、これは昭和四十二年の作。人生の一里塚的モニュメントである。

表面は茶の会にして両巨頭

どの世界にもボスがいて牛耳る。茶会にかこつけて謀議談合をなすのは戦国武将の昔からのことだ。氏は麻生路郎の死後、同志をまとめて『川柳塔』誌二百号（通算六百六十号）の礎を築いた。今日（昭和五十七年四月四

日）阪急グランドビルで記念大会を開く。

可愛らしい目になって来た酔うている

舞妓や半玉の衿元は、固い花の蕾を思わせられるのだが、多少なりと酒が入ると、目もとがほんのりと色めいてくる。すると、座敷の空気までが和むようなのは酒の功徳というものであろう。男冥利に尽きる句だ。「迷子札妻は俺にもつけたがり　生々庵」

表札に書いて我が名に一寸惚れ

表札に中島蓬太郎と書き、雅号も書き添えた。ともに貫禄のある名だと思わず顎を撫でそうになる。日本川柳協会会長で謹厳そのもののお人柄だが、微醺を帯びてタクシーに乗ると、三休橋の蕎麦屋だと言うユーモアも持ち合わせる。

西尾栞先生

四月十二日の久世町は陽光眩しく、旭川河畔の桜トンネルは満開、丸山大師堂山内のミツバツツジも見事な花

先生は中島蓬太郎としては小児科の泰斗、恩師大坪博士の診療所に勤め、師の死後、同所で医業を引き継いで門前市を成した。先生は恩師思いであり、ご母堂にも思い入れが深かった。診療室には大坪博士の写真を、居間にはご母堂の遺影が掲げられてあった。命日には京都東山の大谷廟への月詣りを欠かさず、墓の小石を一つずつ持ち帰り、机に溜ると今度は参詣時に一つ返すことを繰り返しておられた。鴛鴦句集『生々楽天』の一句。

日に疎くなれそうもなし母恋し

診療所の庭には路郎先生の第一句碑

すべりんこ親は涼しいとこで待ち

を建てられている。（昭和二十五年）

恩義に厚く温情の人であった。

をつけていた。ここに九十二歳の二宗吟平氏の

丸うなれまるうなれと石の声

の句碑があり、建立当時からこの方、私は対面の日を待ちかねていた。それは、西尾栞先生と同道を約束していたことでもある。

藤村〆女さんと同宿の「おかもと」の座敷に入ると、床の間の絵軸は鶏でありいま一幅は仙涯の水墨画「漓江風景」であった。先生は一白水星の酉年、中国の漓江は曽遊の地であるから、偶然ながら、これはまるで先生がいらっしゃるように私には思えた。桃源郷にいるような一日、和顔愛語は常にこのような麗らかな境地のことを言うのであろう。

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

の句も庶民の平和な像の写実であった。

先生の第一句碑は八尾の大聖将軍寺の

一歩出ずれば我れ（ママ）旅人となる心

で、昭和五十五年五月に建てられた。

旅行の好きだった先生、旅先では郵便貯金千円也のスタンプを通帳に残すのが楽しみで、通帳も貯金の額も増え続けた。

従兄弟会というのがあって一年に一度六組の夫婦が揃って旅に出て、その日ばかりは奥方に床の間に近い上座に座って貰い、日頃の内助に感謝をするというエピソードも頬笑ましく聞いた。このユーモアは余裕である。栞先生の句にも酒にも、すべてに余裕がにじみ出ていた。

平成五年の春に出版の『水鶏庵こらむ散歩』も例外ではない。読後の印象今なお新しい文章のタッチのように天衣無縫であった。書も絵も闊達だった。

先生が中島生々庵先生から川柳塔社の主幹・理事長を譲られたのは昭和五十六年七十二歳の時で、以来十二年間ご苦労を願ったのであるが、晩年にはご自身老齢にしてトップの座を続けるマイナスを感じられたのか、社の運営にも定年制を敷く検討を私たちにうながされた。平成二年の頃であった。俳句や短歌の世界でも、飯田龍太氏の『雲母』廃刊や土屋文明氏の死去からの『アララギ』の実体や終刊宣言からして、老齢化の弊を見越しておられたのかも知れない。結果はどうあれ、川柳塔の活性化に踏み切った。

先生のもう一つの業績は、高野山霊園の川柳塔碑建立と毎年の物故者法要を義務づけられたことである。

平成元年十一月に建てたれた背丈より高い碑の裏面には立派な栞語録がある。

倶会一処

川柳塔同人並に川柳愛好家は死して尚柳号で呼びあい永遠に川柳を語り合う絆を以て此処に愉しく眠る

同人と誌友の有志は基金を納め、墓域の管理と法要の経費に資するのである。

この実績も合掌と和の精神の発露だ。

昭和六十年九月の川柳塔七百号と先生ご夫妻の喜寿金婚、平成元年の叙勲記念、平成六年の八百号祝賀と、次々開催された大会の中の先生の和顔を忘れ得ない。

四十年に亘り目を掛けて頂いた私の印象は「徳の人」の一語に尽きる。

カップル

比叡山・高野山　名宝展を見た。

伝教大師座像と弘法大師座像が並んでいた。二人は七歳違い、同じ船で入唐しそれぞれ天台教学や真言密教を修得、日本の仏教界に寄与したことでも双璧といえる。

最澄の像は頭巾を着していて瞑想の姿、いかにも学僧らしく気難しそうだ。一方、空海の像は、若い修業時代には阿波や土佐の山中を駆け巡っていたにしては全身ふくよかで、包容力のある慈眼の持ち主だ。

両者は時に助け合い、あるいは反目しながらも、お互い大きな事業を成し遂げた。私は二つの座像から、書斎学者型の麻生路郎、事業行動型の岸本水府両先生のイメージをダブらせるのであった。

作家の藤沢桓夫先生は川柳にご理解の深い方だったが、関西の巨人的な存在だった両先生を次のように比較され

ている。短いながら誠に的確な指摘であろう。

「この二人の偉大なる川柳作家が持つ作品の特長は、世相風刺、人情風俗への切り込みにおいて、岸本水府には、どこかに柔道を思わせるやわらかさがあり、麻生路郎には剣道を思わせるきびしさがあったといえないだろうか。

熊野灘鯨がみえた母の背

大阪の恋人といわれた初代中村鴈次郎の舞台姿を写して

頬冠りの中に日本一の顔

とうたった岸本水府のソフト・トーンに比べて麻生路郎の方は、

古くとも僕には仁義礼智信

と、どこか肩ひじ張って見得を切っている日本人の潔癖さが、風刺とはむしろ反対になにか暖かな人間の優しさを訴えてくる。そこのところに麻生路郎の独自の持ち味があったともいえそうだ。」

大阪柳界の偉大なライバルであった。

ライバルといえば直ちに思い起こされるのが、野球の阪神村山投手と巨人の長嶋選手である。

すでに半ば神話のようになっているが野球でのライバルは競争相手ではなくて好敵手、敵対者なのである。それでいて美事なカップルとも言うことが出来る。

巨人に移籍してから成績振わず呻吟している清原和博選手は、私もファンの一人であるので気が気でない。しかし理由がないではないとも思っている。清原はこの世で一番大切な「天の時」に背かれたのである。私は野茂英雄投手が米大リーグへ移籍したとき、これで清原は精彩を無くすると直感した。村山・長嶋に匹敵する野茂・清原の対決だけが、現在のプロの見せ場だとたのしんでいた実感なのであった。野茂のあの直球やフォークボールをホームランした清原が、セ・リーグの凡投手に三振の山を築かれるのも天の配剤であるかも知れぬ。

さて、昨年の同人総会で私が主幹に、小出智子さんが理事長に推されて新体制で出発することになった。その直後智子さんの病気再発で入院加療が今に続いている。一度は克服した病だ。再度打ち勝って復帰して下さらないと、私は清原選手のように三振ばかりしているのです。

六月有事

今年の六月は慌ただしいうち、あっという間に過ぎ去って行った。空しさと充実感がないまぜに打ち寄せては去る。まるで高波に身を預けたような一ヶ月だった。

七日は「男女雇用機会均等月間記念川柳大会」がクレオ大阪西の会場で開催され、高杉鬼遊、島村美津子両氏と私の三名が選を担当、男女平等キャンペーンの趣旨に協力したが、今年は第四回で投句の数も年々増加している。

その日のうちに近鉄で津市へ。日川協の全国大会の前夜祭には遅刻、翌日には第二次選者の責を果たした。ジュニアの部の表彰など新鮮な収穫と感じたが、二次選のあり方には考えさせるものが多いと思った。次回の開催を引き継いだ山口県萩市への期待は、観光行事とともに大きいものがある。

十日は句集『ほたる』が発刊になった。豊中市蛍池公民館の川柳講座をきっかけに月例句会が発足し、五年経ったら合同句集を出そうと何気なく言った言葉が実現したのである。三十六名の参加、会長井上直次氏とスタッフの人柄が光る。

十四日は古川柳研究家の清博美氏との会合を田中正坊、奥田みつ子両編集子に任せて倉吉市入り、翌日の平成九年度の「一県民一文化」事業である「とっとり文化指導者セミナー（川柳部門）開講式」に臨むためである。五年後の国民文化祭とっとり開催までに、六十二万県民の一人に一文化（趣味）を体得していただくという壮大な企画で、川柳部門がその嚆矢となり、川柳指導者を増員するためのゼミナールである。開講式なので私の担当は基調講演ということだった。

二十二日は番傘川柳社主幹磯野いさむご夫妻の金婚のお祝いの会、麻雀という珍しい題で選を担当させて頂いた。

宴会に移り乾杯をすませて清興の出る時分にそっと中座をさせて頂いた。

今ここに時実新子さんの書信がある。

「拝復、小出智子さんご逝去のおしらせにおどろきました。一時は、私が茨木時代に通っていた医院へ智子さんも通院されていました。あなたやうちの父と打たれた麻雀の音、智子さんのピシッピシッという高音が今も耳に残っていて、あの音に私は智子さんの芯のお強さを見た思いでした。」（以下略）

句集『蕗の薹』の出版を曽我さんにお頼みに行ったときのことであった。

祝典から通夜へ、私は板尾岳人君と暗い夜道を黙々と歩いた。

翌日の葬儀におだやかなお顔を見た。いい処へ行かれる、それだけでよかった。

二十八日は四先生法要追悼川柳大会である。前夜からの台風情報に眠れなかった。

何より先ず簡素にということを指示して、今回は予算案から始めてもらった。法要は路郎先生の孫、西村哲夫師と西田柳宏子氏の演出であった。それぞれの責任者は適材適所、会の進行に尽力して予想を越えた参会の方たちから清々しく爽やかな会だったとの感想を頂くことが出来た。ありがたいことである。

「川柳塔は不滅です」

その夜一隅で聞いた女性の声を私は生涯忘れない。

弘前ねぷたまつり　川柳塔みちのく　十周年川柳大会に参加して

小出智子理事長の死去により、車の両輪の片方が損なわれた現状では、川柳塔の活性化は地方との一層密接な交流を促進するほかはない。

その手始めの弘前行きであり川柳塔みちのく十周年記念川柳大会への参加である。

一行は十九名、西田柳宏子、野村太茂津、高杉鬼遊の三相談役と高須賀金太、宮崎シマ子常任理事の参加で本社挙げての協力を示すことが出来た。

大会はまことにスムーズに進行、句会後の懇親の宴も和やかで、会場の格式あるさくら亭はたっぷり二時間、歓談の渦で賑わった。

課題「思いやり」は七名の選者での共選であったが、関西の作風と多少異なる表現に得るところ大であったと思う。

夜七時三十分からの弘前ねぷたの運行は感動の連続であった。

大型扇五十台、組み六台、小型扇八台、担ぎ一台の華麗な装いが、太鼓と笛との勇壮な調べに乗って出陣するのである。私は数年前に青森のねぶたを妻と見物したことがある。工藤甲吉さんを呼び出し居酒屋でビールを痛飲、桟敷席で豪壮な運行を見た。「はねと」の小さい鈴の音が優雅に耳に残った。ねぶたは戦の勝利の凱旋、いわば勝関の象徴でいやが上にも高揚するのだった。

出陣を意味するねぷたは扇の表の絵に三国志や水滸伝、日本の酒呑童子など昔話の英雄豪傑が描かれ、これを鏡絵と言う。肥後和香子さんお住居の宮園の鏡絵は「閻魔大王怒る」で、見送りと呼ぶ裏絵は「官女」であった。見送りもさまざま、「悲母観音」「楊貴妃」「静御前」「八

百屋お七」と艶を競うてたのしい。

情緒的な雰囲気にも酔えるのが「動」に対する「静」と言われる所以かと見るうち、ふと小出智子さんの面影が浮かんできた。智子さんが何人もの女人に姿を換え、つぎつぎに遠ざかって行く。

先刻、ギネスブックにも記載されているという直径三米三十糎の「津軽強情張太鼓」の音に感動して涙ぐんだのと異質の涙が込み上げてくるのだった。

「祈五穀豊穣厳鬼大権現」の大幟が迫ってくる。豊作を祈り、祖先の霊を迎え送り、魔の退散を念ずる北国のまつりは老若男女の別なく溶け込んで短い夏を駆け抜けるのだ。ヤーヤドーの掛け声が今度は耳に残った。

川柳塔まつりへご参加を

今日現在訪中の橋本龍太郎首相は、帰国後自民党総裁に再選されて、党の役員人事や内閣改造に取り組むことになろうが、派閥の均衡に乗っかる結果は目に見えている。改革は難しである。

九時過ぎ、ホテルの近くの酒場で新鮮な山海の珍味をいただく。またまた酒とビールの饗宴で、至れり尽くせりのおもてなしに夜の更けるのを忘れる。

翌日はホテルを八時に出発、三内丸山遺跡の広大豪壮なたたずまいを見学、奥入瀬渓流の美と十和田湖の景観を遊覧船で見て三沢空港へ。

五楽庵氏をはじめ、ゐ、花峯、一花、叶、隆樹の同人諸氏が空港まで行を共にして下さった友情と、村田伊都子さんご一家のお心遣い、川柳塔みちのく、その他青森の柳人お仲間のご厚誼に心からのお礼を申し上げます。

関空着は定刻八時ジャスト。爽やかな旅を象徴したかのような帰阪だった。

川柳塔社も、主幹と理事長を男女の両輪で担当し活性化しようとした展望は、小出智子さんの病臥急逝で何一つ実績を残すことなく終ってしまった。

社会党の村山さんを首相に据え、さきがけとも組んだ驚天動地の手法で政権を手繰り寄せた党は、ひらりと表裏を返したかと思うと、過日衆院では過半数を占めるまでになる。

政治の世界ではない川柳塔社は？

わたくしは来年十月までの一年間に腹を据えてもう一度考え直さなければならない。

大震災で体験した神戸の更地のような状態にして、将来の機構を組み立てたい。

一つは若い世代の自覚（責任感と努力）、一つは地方役員の常任理事会への参画を軌道に乗せたい。

去る八月二日、川柳塔みちのく十周年大会に参加した大阪からの十九人は、大会とねぷた祭りと観光にそれぞれ感銘を深くした。

工藤甲吉さんのお姿に接することの出来なかったのは残念であったが、句会、編集その他のスタッフの充実ぶりは、主幹波多野五楽庵さん、副主幹斉藤劦さんのお人柄にもよるが、まことに見事なまとまりを両三日のうちに理解することが出来た。

このような会が、和歌山に、山陽山陰に、東海北陸に、また四国九州にと存在している。

「三年先、十年先のことを僕は常に考えている」というのが口癖であった路郎先生を思いながら、地方の積極的な意見を頂くようお願いする。

十月三日（金）の川柳塔まつりへのご参加をお待ちしています。

川柳風のまち

太宰治の小説「津軽」に「蟹田ってのは、風の町だね」と言うくだりがある。

太宰のお気に入りの、陸奥湾を広く見渡せる観瀾山公園、彼はここで好きな酒をたのしんだ。公園の海に最も近い場所に太宰文学碑がある。

風の町蟹田は、この五年「風」の川柳を全国から募集して町起こしに資し、その秀句を句碑にして文学碑に詩華を添えるかたちに建立した。

口笛がやがて大きな風になる　高橋　真紀
寂しくて風はときどき樹をゆする　盛合　秋水
ふるさとに待たせたままの風がある　原田　都子
大声のかあちゃんがいる風の町　蔦　作太郎
茄子の馬風がふわりと来て座る　藤澤　三春

今年も一万句を越える応募句の中から長野県の藤沢三春氏の句が、書家の原田宵雪氏の筆で立派な句碑になった。

十月十二日にその除幕式と第五回風のまち川柳大会が盛大に挙行され、選者の斎藤大雄、尾藤三柳、森中恵美子、寺尾俊平諸氏と私が参加した。

除幕式の観瀾山は「ふわりと来て座る」風とは異質の「やませ」に、昨夜来の冷たい雨が降りしきる。

大会は選者五人をパネラーにした川柳フォーラムあり、金子栄風氏の書のパフォーマンスによる「印象吟」あり、一般の部、ジュニアの部の作品発表を軸に、バラエティーに富みいかにもたのしい。

一般の部「芽」の課題で私の選んだ句は次の通り斬新で充実したものだった。

（吝）大砲ひとつドスンと僕が芽生えている

（客）炎の芽裸身の少女見るごとし　佐藤　俊一
（客）孤立した海に芽吹いた昼の月　佐藤　悠
（客）動脈を螺旋に登る子の芽吹き　三浦ひとは
（客）芽・花・種　神は呪文をくり返す　岩崎　雪州
（人）一通の芽に火傷した郵便夫　高橋　真紀
（地）相抱く月に濡れてる芽のように　藤澤　三春
（天）休戦へ大地が果てしなく芽吹く　野沢　省悟
懇親パーティーの蟹田風太鼓の演奏も見事だった。　松尾　喬介
翌日の奥入瀬、十和田の観光では秋色華麗な景観を満喫した。去る八月四日、弘前ねぷた祭りの帰途に接した緑翠一色の印象とは違った感動を覚えた。

それは将に中国東晋の書家王献之の言

「山陰道上より行けば、山川自ら相映発し、人をして応接に暇あらざらしむ。秋冬の際の如きは、尤も懐を為し難し」を眼前に体験する思いであった。

蟹田町の主催者をはじめ、柳人仲間のご厚誼は言わずもがな、青森入りに際し工藤甲吉相談役を訪問できたことは望外の喜びで、心から感謝申し上げる。またまた川柳の功徳を存分に頂いた旅であった。

唐津おくんち

唐津は文字通り唐からの津、そして唐への港である。唐津へは何度来たであろう。西尾栞先生や大坂形水氏らと十数年も前に来たのが最初であった。

マイクロバスで虹の松原を抜け、昔、任那へ赴く大伴狭手比古との別れに領巾を振って悲しみ、後追いながら石になったという佐用姫伝説の鏡山へ案内されたが、案内の山崎猛夫氏の物静かなお人柄は今も忘れられない。

東唐津の宿洋々閣の広い立派な庭が印象的だった。

玄武岩の断崖に波が掘り続けた七つの洞窟、海中公園の七ツ釜を見物し、呼子の活魚料理に舌鼓を打ったこともあった。

舞鶴城や唐津くんちの曳山展示場を見たり、唐津焼の窯元で小ぶりの夫婦茶碗を買った日もあった。

一度は名護屋城趾まで足を伸ばした。玄界灘に臨んで丸い句碑が迎えてくれた。

太閤の睨みし海の霞かな　　月　斗

青木月斗は大阪道修町の薬種問屋の主人であった。私の少年の頃、その特徴ある筆太の俳句が料理屋寿司屋でしばしば目に止まったものだからなつかしい感動を覚えた。

思い出はまだまだあるが、これだけの来し方が唐津に馴染んでいる。その上に人間模様、いや友情が絡んでいるのだ。

このたびは展示場を見るだけだった曳山が実際に町中を練り巡るのである。観光の総仕上げと言うことも出来そうだ。

十五周年の大会は和やかなムードで終始した。唐津シティーホテルに着くと、「からつ」と染め抜いた腕章を会員全員が付け、何くれと世話をしながらの握手攻め、なつかしいお顔がそれぞれに年輪を増やしておられる。

披講も順調に進行して、六題の秀句から一句を選び、特別賞の特大トロフィーを射止められたのは作句歴二年程という井上勝視氏で川柳塔唐津支部の所属だ。

大背伸びローンも済んだ妻も留守

懇親宴は新鮮な魚介類でテーブル狭しの感である。一番遠くからの女性出席者清水潮華さん（横浜市）の音頭で乾杯、一同唐津支部の発展を祈念した。

酒は聚楽太閤なる銘の吟醸酒、その旨さに堪能する。高須賀金太さんは早くも「海を睨む太閤」の顔になりつつある。

「曳山見物は遅くまで続くのでしっかり飲んで食べて風邪を引かぬように」との幹事さんの声にまたも宴は弾んでいく。

唐津の秋を彩る唐津くんちの主役たち十四台の曳山は、文永二年からの赤獅子を魁に、青獅子、亀と浦島太郎、源義経の兜、鯛と続き、明治九年からの七宝丸が殿を勤める。丸い提灯、長手の提灯、それに町の灯が漆の一閑

張りの艶と絢爛たる色彩を誇示する。鯛や鯱は頭や尾を上げ下げして真実泳ぐさまに迫って来る。
曳山の上には二人の若頭、笛と太鼓の囃子とエッサエッサのひきも切らぬ掛け声、何よりも綱を引く少年少女、青年から成人に至る一体感は百八十年の伝統を思わせた。故里は良きかな。

新春偶感

新年明けましておめでとうございます。平成十年戊寅の今年は私の当り年です。
虎に関することわざや名言の類を調べてみると、虎は日本には生息しない動物ですから、殆どが中国からの説話で、
「虎穴にいらずんば　虎子を得ず」
「前門の虎　後門の狼」
「虎の威をかる狐」
など人口に膾炙したものが沢山あります。
その中で私の心を引いたのは
苛政は虎よりも猛し
という『礼記』にある孔子に関わる伝記の一つで、次のような内容のものです。
孔子、泰山の側を過ぎりしとき、婦人墓に哭する者有りて哀し。夫子、式して之を聴き、子路をして之に問わしめて曰く、「子の哭するや、壱に重ねて憂有る者に似たり」と。而ち曰く、「然り、昔者吾が舅虎に死し、吾が夫又死せり。今吾が子又死せり」と。夫子曰く、「何為れぞ去らざるや」と。曰く、「苛政無ければなり」と。夫子曰く、「小子之を識せ。苛政は虎よりも猛し」と。
その意味を述べるとこうです。
孔子が弟子たちを供に、泰山の裾を通りかかった時、

一人の婦人が墓の前で激しく泣き悲しんでいた。孔子は弟子の子路に尋ねさせて言う。

「あなたの嘆く声を聞くと、それは何度も重なる憂き目に遇われたようですが、どうなさったのですか」

婦人は答える。

「おっしゃるとおりです。昔、私の舅が虎に食い殺されました。そして夫もおなじように死に、今また息子が虎のため命を失ったのです」

孔子が尋ねる。

「どうしてそのような恐ろしい土地から離れようとしないのですか」

「それはこの地にはむごい政治がないからでございます」

婦人の「苛政無ければなり」の一言にいたく感じ入った孔子は、弟子に諭す。

「お前たちもこのことをよく胸に刻んでおきなさい。むごい政治は庶民にとって人食い虎よりも恐ろしいことなのだ」。

苛政とは戦乱をはじめ過酷な税の取り立てをいうのであろう。

さて新年に当たり川柳塔社の運営を顧みて、改める点の多々あることを思うのです。先の婦人の言葉に相当する川柳塔社のテーゼは「和」です。

川柳から離れられない、川柳塔から離れられない人たちに親しみ深い私の存在でありたいと思います。

路郎先生が『川柳雑誌』を構成するうちの、石垣になる人たちを大切にしなければいけないと仰有った精神を後進にもしかと伝えたく思っています。主幹も理事長も一同人の精神で奉仕したいのです。

新役員による担当部署を別項に発表しましたが、地方の声を密にして頂きたく、本社も一地方として歓迎したく存じます。

川柳は五・七・五のリズム感とうがちを基本とするものだというのが、私の堅い信念です。

今年も右の基本によるあなた自身のまことの句を寄せられるよう願っています。

辞書の効用

故堀口塊人先生のハガキが舞い込んだのを広辞苑に挿んだのが切っかけとなって、机辺にある漢和大字典や国語辞典、外国語辞典など分厚い辞書の到る処にハガキを挿む癖がついた。先生の便りの消印の日付けは昭和五十五年三月二十九日、

箱梯子上って下りて子を育て
花代が勝手に踊る好景気
梅は咲いたがお上りさんはまだかいな

という句が並び（四句略）、三月二十八日食満南北の顕彰式へ出席後祇園へ出るとの添書がある。辞書を引きにくいということもなく、その時々の思い出が甦り、励まされ慰められることが多く、これが中々に楽しいのだ。

昭和五十七年四月号の自選集で

亡母の闇この世は雨が降ってます

と発表した句を見た時実新子さんは間髪を入れず、お母さんを思う至情はよく理解できますが、ここは「雨が降っています」と下六になっても丁寧に表現なさらないと効果は半減どころか思いが半端になってしまいます。とハガキを下さる。この時は隙を衝かれた口惜しさと、いい友達を持ったありがたさに胸を熱くした。

第一回川柳塔まつりご盛会で良かったですね。ご多忙とは思いますが川柳塔のために頑張っていただきたいと思います。私も応援いたします。お元気で！

これは平成七年十月十一日小島蘭幸氏。

ご免下さいませ。いつも何かとお世話様、本当にご苦労さまでございます。

川柳塔の益々の発展と末広がりを信じて八の字にこだわりを…大切にしたくて一筆、どうぞお体大切に。

平成八年八月八日の消印、のうぜんかずらの満開の下猫を抱いた宮口克子さん。

ハガキは印象深い文面だけでなく、美しい景色や名高い絵、写真など気に入りのがあれば挿み、旅の旅館の箸袋に句を書いたもの、紅葉や珍しい三本の松葉などもあり、まさにラッシュの混雑ぶりだ。

薫風先生、無理したはらしませんね。寒いのにあちこち出歩いてたら又入院でっせ。義理かき我が身大切にしとくなはれや。もう心にかけないで自宅で拝んで（西尾栞先生の霊）こちらへ来る分寝ていて下さい。ホント心配しますねん。

以下略してのこれは昨年二月二十日発の栞夫人で、ご自身お風邪を召されていた。

次のは小出智子さん、死の略二ヶ月前の私への最後の便りとなった。

再入院をして早一ヶ月も過ぎました。何のお役にもたたないことを心から申し訳なく思っています。先日は大好きなものを、そして「すし萬」のお寿司をありがとうございました。食欲がありませんので毎日困っていましたが、とても美味しく頂戴致しました。私のことなどどうぞお気遣いくださいませんように。先生のご健康が一番気掛りです。

最後に浦和からの嫁の妙子の一枚。

お父さんからのみのりと匠へのお便りは、近頃みーちゃんひらがなややさしい漢字は読めるようになり、ずっと自分で読んでいます。内容もたっくんの方が多いと機嫌を悪くして駄々をこねるのです。一筆啓上父上様　みのり泣かすな馬肥やせですよ。

感動をともに

二月七日の第十八回オリンピック冬季競技大会開会式では、伊藤みどり扮する能の衣装をつけた卑弥呼が聖火台に点火した。南長野運動公園に一瞬の感動が走った。

また、小澤征爾が棒を振って、五大陸のメーン都市をつなぎ、ベートーベンの第九を演奏、歓喜の歌のグローバルな大合唱で世界へ感動のうねりを送った。

イベントの成功は、演技者と観客一人一人の情熱の盛り上がりによるものである。

三月六日の川柳塔八百五十号の大会は、すでに聖火台に点火、各部門の指揮を担当する役割りも決まっているが、一人でも多くの参加者が、熱い情熱で答えて下さることを心からお願いする。

長野をアウィーナ大阪に移して、大勢の皆さんと大きい感動を交わしたい。私が主幹として開催する最初で最後の誌寿記念大会へのご支援を、重ねてお願い申し上げる。

◇　◇　◇

病妻に花買う晩年の明かり
葉牡丹も自問自答の渦の中
豆の数昭和も遠くになりにけり（節分）
ああ平和卑弥呼アテネの火をともす（オリンピック）

感動をありがとう

三月六日、夜来の雨はすっかり上がり、春光燦々として川柳塔誌寿八百五十号を祝福するかのようである。

梅田の阪急三番街、大阪の名産品売場で大会委員長黒川紫香さんとバッタリ。

「これから新大阪駅へ熊本からの二人を迎えに行きます」とのこと、九十翁のこのやさしさが川柳塔の底力、マグマなのだと思う。

地下鉄谷町九丁目を降りると楊井二南さんの後ろ姿が見えた。九十一歳である。おそらく今日の最高齢者だろう。ありがたい。氏は大正十三年の『川柳雑誌』発刊当時から学校（大阪高商）の先輩麻生路郎先生に師事し、後輩に住田乱耽氏がいた、いわば八百五十号の草創期の人。やる気充分の常任理事たちの企画運営の大会に、私の目に飛び込んだお二人の最ベテラン、おのずから頭が下がる。

大会は寺尾俊平氏のお話、これは俊平・新子・薫風三人の同期の桜の出会いと、初心時代を振り返り、将来川柳会のためになろうなと誓いを交わしたこと、その後のエピソードをユーモアを交じえて語り、最後に川柳塔の将来を祝福して結ばれた。川柳塔社同人誌友の皆さんは等しく感動を得られたものと思う。

時実新子さんには、兼題「さくら」の選を通して、同人誌友の句のレベルの高さを確認させて頂いた。新子さんは今少し厳選の方が良かったかなと言われてはいたが、先ず粒揃いであったことに私はわれら仲間の大きい力を感じた。

懇親宴は、大会出席者の半数近くが参加、熱気と和気で盛り上がった。

青森、熊本、唐津、今治、島根、鳥取、富山、横浜と遠来の諸兄姉が二十程のテーブルに陣取り、常任理事が分散して接待に当たる。

山本翠公日川協事務局長、小松原爽介時の川柳主幹、田頭良子番傘川柳本社編集長らが最後まで雰囲気と一体になって頂けたことを心からありがたく思います。

今回の催しは、選者に木本朱夏、野口節子さんを登用、司会を高須賀金太、山本希久子（大会）、吉村一風、大内朝子（宴会）の新顔が担当した清新さが目に立ったが、これも成功だった。

新年号の発表後、一番に出雲市からの二十一名の参加申し込みがあり、本社の気勢の上がった日から大会への感動の予感が身に沁みて感じられた。

同人拡張をお願いした前日の役員会とともに、大会が平日の開催となって、出席不可能となった方の多くに心からのお詫びを申し上げ、最大の反省事項とする次第です。

散会後の仲間の笑顔と目の色、満足感を確かめ合った握手に感動が走る。

川柳塔社は、人の和の上に天の時を得たと感じたのは私だけではなかろう。

万感をこめてありがとうを申します。

「道頓堀の雨に…」を読んで

田辺聖子著「道頓堀の雨に別れて以来なり」の出版記念川柳大会が三月二十九日、三井アーバンホテル大阪ベイタワーで開催された。六年間に亘り掲載された中央公論社の会長兼社長の中嶋雅子氏、作家の難波利三氏や落語の露乃五郎師匠をはじめ、柳人四百余人が華やかな雰囲気の中で聖子先生に祝意と心からの謝意を表した。以

下は私の読後感である。

聖子先生と私の年の差は二歳、戦前の住居も福島と堂島、隣り合わせであったことから幼少時の大阪風景への残像は、人情までをからめて共通する所が多い。

逢引のサーチライトに照らされて

（以下句は岸本　水府）

昼過ぎから夕刻、時には夜に入って私と母は玉水の金光さんへ散歩がてらのお参りをした。たそがれどきから朝日ビルのサーチライトが黄、緑、赤と回転し始める。豪華船の趣の当時の朝日ビル最上階はレストラン・アラスカ、一階に千疋屋のティールーム、地下には瀟洒なお寿司屋があり俳人青木月斗の筆跡で店名が「かんばやし」と印象的に書かれていた。

母と私は往復に階段のある水晶橋を渡り、時間によりそれらの店のどこかで一息つくのを例としていた。なるほど逢引のムードの中のサーチライトは一層情緒が深かろうと、まるでわがことのように想像することが出来る。そのような大阪が随所に出てくるのである。

また、人物像、それは剣花坊・久良伎をはじめ、六大家や高名な柳人であるのだが、その姿勢と消息が的確に書かれている。聖子先生はそれらの人たちをご存知ないのであるが、多くの柳人に会って故人の話を聞き、本を集めて得た詳細な資料の上に、当人の句の理解を深めることで人物の性格まで把握されたのである。一読して主役的な岸本水府を第一等に、井上剣花坊、麻生路郎・葭乃夫妻、食満南北、小田夢路、鶴彬、小島祝平、林照子らが際立って理解できるのも、例に挙げられたいつわりのない句の功徳によるものであろう。それに、南北紹介の項で南北の弟子の長谷川幸延の、南北に対する「南北が不遇である」とする感懐とは別に、聖子先生の独自の南北観を披瀝しておられる。南北喜寿の際の言葉「私は私の一代を通じて『苦痛』というものを味わっていない」とする述懐を、「こういえるのこそ大通である、大通には順境も不遇もないのだ」と仰有る。聖子先生は柳人一人一人を独自の作家としての慧眼で見据えて書いておられるのが分かる。

次は句について教えられたことで

母の顔夜中にともす豆ランプ

かんざしをさす時腕が太くみえ

雪に来てさて割箸も悪からず

麻生路郎の句に惚れ、その薫陶によって穿ちのかった鋭さ、清冽な気韻、ふとこぼれたような述懐に魅力を傾けている私だが、前掲三句のような句の味に心を注がれるのだった。それは、これからの選評の上で大きい影響を私に与えるものと思われる。

上下二巻、合わせて千三百頁に余る労作を一人でも多くの柳人に読んで頂きたい。そして先達のたゆまぬ尽力により確立した川柳の質的向上の成果を見詰め、現在蔓延しつつある亜流の川柳に流されぬ確固たる見識を養ってほしい。それが聖子先生の「川柳大好き」の心に報いる柳人の心意気であり、聖子先生著書出版の目的でもあると思う。

藻介さんと智子さん

川上富湖さんがオール川柳大賞を受けられた大会で私は雑詠の選を担当した。

本社句会に於ても雑詠の選を試みたいと思っている私なので、大いに感激して選に当った。

特選の句は「神はもう地に満てよとは仰有らぬ　杉野睦朗」、第一席に「見晴らしのいい場所に来て死を思う　海地大破」を頂戴した。それぞれすばらしい句である。殊に第一席の句にはある感慨を持った。それは今年になって相次いで、中尾藻介、田中好啓という親しい先輩を見送ったことである。高みの見晴らしの利く所から空を眺めて死者と心を繋ぐ、作者の気持ちもそのようでなかったか。

中尾藻介さんからは教えられることが多かった。岩井三窓さんと三人で阪急沿線岡町駅前の丹波屋という飲み屋で何かにつけて飲んだ。大正生まれの十一人で「たいしょうの会」をつくり、大阪北の割烹入船の二階で毎月

例会を開いた。すべてがなつかしい。

藻介さんの性は、表面淡白で瓢然と屈託ないが、内面は深奥にして複雑剛腸であった。後進には常に「句は軽うに軽うに」と教えておられたが、ご自身の句の内容には深みがあり「言わずして言う」広がりを感得させるものが多かった。

ご先祖には池大雅ら文人仲間と交流のあった俳諧連衆の方もおられたようで、おのずから環境にも恵まれていた。

浴衣着ていると浴衣が通るなり
どっちが先に死んでも葬儀委員長
妻に字を聞いて知ってたことがなし
外套をひっかけるとき父の職
絵馬を抜けだして渚を走る馬
人間の夢を見ている犬の耳
惜命や口のはたなる飯の粒
萬華鏡この世は夢を見るところ

昭和五十五年、朝日なにわ柳壇が創設され、私が選者を担当したとき、藻介さんはすばらしい句を投句してご支援下さった。十数回も続けて入選という、それは見事な援護ぶりであった。

藻介さんの句に惚れ込んで範となし、精進を続けたのが小出智子さんであった。

麻生路郎先生の句集「旅人」に出会いこのような川柳を目指して挑戦したいと思った私の衝動と同じものを持たれたのであろう。結果は藻介さんにも遜色のないと思える多くの佳句を残された。

草を踏む緋の絨毯にまさりけり
お年玉無駄な言葉は添えぬもの
友達と一緒に齢をとってゆく
いつまでの女と思う春の傘
合格をしたのか会釈してくれる
あじさい寺の冬を想像せぬことだ
夫より包容力のあるポスト
心配は海苔が湿ったほどのこと
うちの酒が美味しいなどと言いはじめ
展示会娘が一人欲しくなる

智子さんの命日は六月二十二日、七日の本社句会にはひそやかに紫陽花が飾られることであろう。

こんにちは川柳塔です

「こんにちは、川柳塔です」というタイトルで川柳塔の役員通信を出すことを決めたのは五月の常任理事会で、以来若い人たちの構想に任せていたのだが、八月から季刊として発行することになる。

このところ私が常に強調する地方との緊密な交流、また地方相互の和の大切さを認識し、川柳塔社の機構を更に強固にして来世紀を迎えねばならないとする方針の、具体的な布石の一つでもある。

役員（本社運営執行の役職、相談役、会計監査、参与、理事）各位の幅の広いご意見と地方同士の連繋に寄与する積極的なご支援をお願いする。

路郎先生から受けた薫陶で私の身に沁みているのは、役員の責任ということだ。己を殺すこと、人を活かすこと、城の石垣に当る一般同人誌友の人たちに、川柳をたのしんで貰えることの大切さを知ることであった。それには虚心坦懐、決してこだわりを持たぬこと、奉仕の精神を養うことである。

ある日、編集作業を終えた雑談時、私は路郎先生にお聞きしたことがある。

「先生は何故本社句会で句をお作りにならんのですか」と。

「僕は僕で常に気を遣うてるんやで。句会でも参加者が今日はどんな顔をしているか。新参の人にさり気なく声を掛けさせるには誰が適当か、などと会場を見ていると、作句してたらお留守になる」という答えだった。

先生は一人一人の顔付きを見て、生活の上にも思いや

って下さっているのかと、さすがと感じ入ったり、その気配りがお留守になる意味だけでなく、句もおろそかになり、作句には如何に真剣に対処されていたかをも感じさせられたのだ。

それは、指導者とは上から下へ力を致すものではなく、後進から先輩へと盛り上がるベクトルを頼む大切さに触れておられる。傲慢な思い上がりは、たちまち結果が出てくるものだ。

路郎忌の七月に当り、このようなことを殊更に強調したのは、私の思い上がった油断から、突如呼吸困難の発作を起したからである。五月三十一日の夜中のことで、救急車で病院に運ばれる。幸いに心臓が頑健そのものだったことで回復に向かったが、取り敢えず、二十四時間の酸素吸入と静養を申し渡された。

今世紀の終りとともに私は七十五歳となる。それまでに川柳塔の明るい未来を迎える体制をしっかり確立したい。

役員通信をフルに生かして頂くよう、「こんにちは」と問い続けるつもりでいます。

路郎忌

有無を言わさず持たす杯
誰そ彼も彼は誰もなし夏の酒
鯨呑をよしと思わずや酒と恋
酒とろりとろり母似の観世音
嬶曳も酸素ボンベを背たろうて

サッカー観戦記

この冬長野で開催されたオリンピック大会では、数々の名勝負と日本選手の活躍に大きい感動を得たが、夏は夏でサッカーのW杯がフランス各地に展開され、岡田ジャパンの敢闘ぶりに興奮を覚えた。

アジア地区から先行する韓国、イラン、サウジアラビアの各チームが予選リーグでもまだ一勝もしていない事実から、日本とて初出場でいきなり勝てるはずはないと思うのが先ずは常識であろう。

岡田監督は、その立場から予選リーグ一勝一敗一引分けで決勝トーナメントへの進出の目標を立てた。そして目標達成への策を立て、手順を練習に打ち込んだ。それは守り第一主義であった。三戦ともに主義信念を通したことは良い。

選考に上がった中の中田選手を見て

「茶髪の目立ちがりの子が一人いる」と妻が言った。

私は答えた。

「あの選手は攻めや守りの司令塔のような役柄なので、中田はここに居るぞと常に他の選手に分かることが必要なので、そのための目立ちがり屋になってるのや」

果たして一行がフランスへ発つ時は、ますますの金きらに染めていた。

開会式の翌日、予選リーグの第一戦はブラジルとスコットランドであった。キックオフ五分後、早々とゴールをヘディング（肩でか）で決めた選手がいた。

ブラジルのサンパイオである。ブラジルから出稼ぎのJリーグ横浜フリューゲルスの所属でもある。出稼ぎという言葉が悪いなら助っ人だ。Jリーグ並の選手と思っていたのが本場に出ていきなり力を発揮する。相手によ

り、場所により相応に大きくなれる器量は何処かが違う。

予選リーグが終り、トーナメントが進むにつれ、その差は基礎の違いだと感じるようになった。ドリブルとパスとシュートの基礎を、個性的専門的技術にどれだけ伸ばすことが出来ているかにある。

フランスとイタリアの対決で強く感じたことが、両チームの攻撃への波と、防御へと引くリズムの美しさである。前後半九十分の熱闘、延長戦の前後半の計三十分の死闘の間も、このリズムは崩れずに立派だった。名勝負だと思った。

川柳とサッカーは何一つ関連付けるものはないが、一つの道として基礎の大切さ、作句や選句が個性的で専門的であらまほしいこと、リズムの有無が内容を如何に生かしまた損うかを知り、共通したものを実感した。

岡田ジャパンの戦果は三試合ともに一点差の敗退であった。差は一点だが実力には格段の相違を感じた。

世界の舞台で貴重な体験をした選手たちが、口惜しさとハングリー精神をもち、研鑽を積んで二〇〇二年の日本開催にまで飛躍成長をすればよい。大いにたのしませて貰ったことに満足している。

悼　吉本菁風君

雨降らぬ梅雨も寂しや君逝けり
男一匹目刺一尾見つめ合い
髭だけで女に勝てるはずがない
男なら生まれ変って見せましょう
閻王の前に立つ時に男

Tip Top Tap

昨年の十月十二日、青森県の蟹田町で第五回風のまち川柳大賞に関するイベントが開かれた。メーンの川柳大会に先立ち、観瀾山公園では、例年と同じに雨を伴う強風の中、受賞句の句碑除幕式が行われた。

茄子の馬風がふわりと来て座る

長野県生坂村の藤澤三春氏の句である。揮毫は若い女流書家の原田宵雪さん。除幕の瞬間、私は息をのんだ。五・七・五が三段横並びに書かれてある。従来のような縦書きでなく横書きの句碑だった。

今年になって梅田の阪神百貨店の一階のコーナーにチップ・トップ・タップという瀟洒なティー・ルームが開店した。

コーヒー、紅茶は二百六十円、ケーキとセットで四百八十円、他の品も格安だから気安く利用している。お向かいに見える店はコーヒー四百円だが、客筋は女性が多く時に並んで待っていることもある。世の中はつくづく面白く出来ているなと思わされるのだ。

店の名が変っているので、その意味をウエートレスに聞いたら

「ホップ・ステップ・ジャンプと同じようなものでは」

との答え、

「まるで雨垂れやね」と私。

そこで煙草に火を点けて、

雨垂れのチップ・トップ・タップ　珈琲館

と一句がメモされる。無論、阪神百貨店には雨垂れなど無縁だが、ここで私の想像が広がって行く。

青森の小さい町の粋な喫茶店だ。雨垂れの上句が「氷柱解け」と変化する。川柳塔の自選欄に発表した句の謂

れはこのようなことであった。

川柳塔みちのくの一句集にも
　ワンサポンナタイムと　孫について行く

という句を出した。

この句も英語そのままの綴りで横書きに表記したら一層気分が乗る。昔昔ある所に…と語りはじめる昔話の出だしである。私は、Tip・Top・Tapの句とワンサ・ポンナ・タイムの句を短冊に横書きしてみた。そして、これ面白いでと言わんばかりに田中正坊さんに貰っていただいた。

インター・ネットの時代、二十一世紀には川柳も横書きになるであろう。

それは、新聞が横書きを採用したときであると私は思っている。

悼　児島与呂志さん

その頃の水客　与呂志　阿茶　豆秋
孫の飴一つ欲しいに言い出せず
密談の男ふたりの観覧車
曼珠沙華入日に馴染む色となり

恩

私の恩人、武田義章先生が亡くなられた。命を助けられたのだからこの世の中の第一番の恩人と言える。

先生は明治三十七年のお生まれで九十四歳、「鄧小平と同い年だ」が晩年の口癖で、「長生きするには、酒や煙草をたしなんでいては駄目だぞ」と、私に会うたびに仰有った。

大阪大学医学部教授、厚生年金病院名誉院長を歴任、肺臓外科の第一人者だった。葬儀のあった六甲カトリッ

ク教会の初秋の空は美しかった。帰宅してテレビニュースを見ていたら、黒沢明監督の葬儀に出た、やはり映画の大林宣彦監督が空を仰いで「今日の空の美しさ」を強調していて、私と同じ思いでお見送りなさったのだなと思う。

川柳での恩人は多いが麻生路郎先生は別格であった。先生の川柳界への貢献は広範に亘るが、戦後の昭和二十四年十二月、山陽新聞に夕刊が復刊してすぐ山陽柳壇が創設され選者を担当された。翌二十五年の九月、先生の第三句碑が久米南町のＪＲ弓削駅前に建立された。

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

の句で、「句碑ありぬ亡き先生の背丈ほどの」と私が後年その前に立ったときに詠んだものだ。この町には二百を越す句碑が山の遊歩道に建っていて、日本一の川柳町といわれる所以も諾える。

頂上には

浮き草は浮き草なりに花が咲き　　中島生々庵

の句碑がある。先生が脳梗塞の後遺症の不自由な身で、小石夫人の介添えを頼りに渾身の力を込めて書かれたものである。

路郎先生の句碑の建ったあと第一回の西日本川柳大会が開かれて、今年は五十回の記念大会が十一月一日に大々的に開催される。前夜祭のイベントも華やかだと言う。

生前の路郎先生の誕生日をお祝いした川雑川柳まつりが川柳塔まつりに引き継がれているのだが、今年は西日本川柳大会とペアで予定の中に入れ、一人でも多くご参加下さい。

日本の四季の巡りが少しずれたような今年の気候の不順に、私は体調を崩し、呼吸不全という厄介なアクシデントに見舞われた。その年に精神的な守護神を失い、心もとない思いでいる。

それに、路郎先生の足跡を「大空のこころ」に毎月記録していても、先生の偉大さがちっとも伝えられないような気がして仕様がない。私の目は、また私の筆は私の器量であって、先生の器量は私の器量で写し取れないのである。

私は先輩の恩、後進の恩をしみじみと感じて、この秋に居る。

武田義章先生に捧ぐ

アレルヤアレルヤいのちの永遠恩義も永遠
敬老の日にて猿島孫と見る

老いらくは蟬の歌より蛍の詩
悔い一つ持ちいつまでも生きられる

「現代歌まくら」から

「敬老の日の前日に、おじいちゃんとおばあちゃんをお呼びして、孫たちとお遊びをしていただく催しが幼稚園であります」という嫁の知らせに、私は万障繰り合わせて新幹線に乗ることになる。

乗る前に紀伊国屋で本を一冊、ちらと目を通して旅のつれづれにふさわしいのを抜き取る。「現代歌まくら」という本であった。

電車に乗って取り出して見て驚いた。著者の名は小池光とある。山陽歌壇の選者で、柳壇の選者の私と同じ紙面で選評を担当している方なのだ。その偶然を喜んだことは勿論であった。

昔の歌枕は、宮城野といえば萩、吉野ならば桜の名所と想定する。他にも四季のくさぐさの花も咲くであろうけれど、とにかく萩の宮城野であり、花の吉野山でなければならないのである。

現代の歌枕はどうか。地名においては代表的なのに銀座がある。全国に何々銀座と、銀座を冠した街は余りにも多い。その地一番の繁華街のイメージは確固としたものになっているのだ。

多様性に富む現代では、歌枕や歌枕的情感をわれわれに与える言葉や句語は、実に多岐に亘り、この本では二百項目を挙げて、それぞれに例としてふさわしい短歌が示されている。八月十五日やコカコーラ、邪馬台国やヘアまで入っているのだが、すべて頷けて、俳句の季語と

同じに川柳に駆使すれば効果的と思われるものばかりだ。

そのコスモスの項の一首

コスモスの揺れ合ふあひに母の恋
見しより少年は粗暴となりき　中城ふみ子

を一読して、私はすぐさま岩井三窓さんの次の二句を想起した。

しんし張りの波をくぐれば母がいる
綴り方貧しき父は母を打つ

前掲の短歌は前半章で因、後半章で果、原因結果を明快に叙述している。第四節が二音の字余りだから計三十三音の作品である。乳癌との闘いと恋の情熱の歌で名を成した作者らしい佳什である。

三窓さんの五・七・五は二句、計三十四音。短歌一首と川柳二句が殆んど同じ音数で表現されているのだ。こんな事が今更と思いながらも深く私に考えさせるものを与えた。音数は音量ではないし、短歌と川柳とのリズム感の違いは考慮に入れても、川柳は如何に短いかを思わねばならないのだ。そぎ落しそぎ落ししなければならない。

二句で一首に立ち向かうのではなくて、一句で一首と対決することを胆に銘じていたい。小太刀の冴えの修得は、リズム感が基礎になり、うがちを主な手段とする厳しさの積み重ねの外にないと信ずる。

サーカスを老妻としみじみ旅の果て
老いらくの雄蕊雌蕊の露天風呂
魚屋に蝿の居らぬが世紀末

今年を顧みて

四季の巡りの少しずれて、不順ずくめの一九九八年も残るところ僅かで、はや一年を振り返る時期となった。

柳界を展望して見ると、先ずＮＨＫの川柳選評の番組が、ＢＫ発進からＡＫに移ったことである。六十数年の歴史ある番組が匆匆のうちに変更になったのは、まことにあっけなく残念でならないが、川柳選評が消滅したのではなく、東京での担当者の活躍に期待を寄せたのだった。

日川協主催の全国大会は十月に湯布院町で開催されたが、十月三十一日と十一月一日の両日に亘り盛大に開かれた第五十回西日本川柳大会の有意義な催しは私の大きな関心事であった。

三十一日の川柳サミットは、青森県の風の町蟹田町、新津市、伊予市、地元の久米南町のパネラーと、基調講演をされたコーディネーターとの息の合ったディスカッションで、川柳による人と町づくりの経過、現状、将来の展望を認識させて頂き、「全国川柳サミット宣言」採択で全国ネットへの来世紀の発展を願った。

麻生路郎、中島生々庵両先生の句碑の前で、この山間の小さな町に四百人もの柳人の集まるパワーは何かを思う。

古くとも僕には仁義礼智信　　路　郎

「川柳は人間陶冶の詩」この町の一人一人の川柳愛の積み重ねであると思った。

川柳塔社関係では、三月の八五〇号記念大会、十月の第四回川柳塔まつりを予想を遥かに越えた出席者で盛会にして頂いたこと、殊に最近の参会者の眼の色の生き生きとして、会を楽しんで下さっている様子が、主催者に

伝わってくるのに感慨を深くした。

一月に仲間づくりのプロジェクトチームを結成し、各地へ呼びかけた成果で、川柳塔まつりには七十二名の新同人を紹介、ずらりと並んで頂いた壮観には胸の熱くなる思いがした。

川柳塔、水煙抄の作品も充実して質的向上の目標に沿うているようで、これが最も大切な私の責務、新春号からは秀句鑑賞の頁を貰って、私の主張を書くことになる。二賞選考の方法もすっかり形の変わったものになるが、それも新春号で発表になる。各自の個性尊重の意図だ。

合同句集、個人句集の発行もようやく増えて行く傾向にあるが、今年は路郎先生の旧著「川柳とは何か」の復刻版が出た。これは先生畢生の名著で、初心者ばかりでなく、指導の立場にある人も必携の価値あるものと思う。テキストとして利用して頂きたい。

平成元年に建立の川柳塔碑も十年の歳月を経た。今年も十一月十四日に参詣、今年度の物故者八名の合祀法要を行ったが、歳晩に当り改めて諸霊のご冥福をお祈りする。

年賀状に添える一句を案じ、千二百枚の宛名を書く労力のひと山を越えて、心静かに除夜の鐘を聞く。そして新年の爽やかな光を迎える。健康を取り戻す闘いの半年であったが、ご先祖の加護でまだまだ活躍出来そうである。

来年も川柳塔飛躍の年であります様に。

バイアグラ養生訓へつけ足され
アメンボは股立ち取って急ぐなり
その中で猪口持つは良し酔羅漢
毎朝の一人散歩は若い寡婦

新春ご挨拶

明けましておめでとうございます。今年は己卯（つちのと・う）ですから、小学校で習った歌「ふるさと」を先ず思い起し、穏やかな年になりそうな気が致します。その一方で一九九九年と書けば俄然世紀末の様相が感じられて、いよいよどん詰まりかとも思えます。何れにしろ川柳塔は七十五周年を迎えるのですから盛運を授かりたく、三月二十日（土）には各位のご支援を切にお願い致します。

私は年賀状に、少しでも遠く少しでも高くとは思わないが、美しく熱く跳びたいと書きました。熱い心を持ち寄って、ホテルアウィーナ大阪での大会を盛会にして下さい。

兎は鶏と同じに一羽二羽と数えられ、昔から人間との付き合いは密なのですが、あの可愛い毛物が必ずしもイメージ通りに受け取られていないことも多いのです。

カチカチ山の兎も、因幡の白兎も意地悪であったりずるい性格を持ち合わせています。兎と亀の童話も油断をいましめる例に挙げられ、兎として心外に思っていることでしょう。兎の容姿や雰囲気にそのような気配は毛ほどもないと私は思うのですが…。

「株を守りて兎を待つ」という諺が古い中国にあります。韓非子に見える話によりますと、昔、宋の国の人が畠の中の木の切り株に兎が衝突して首を折って死んだのを見て、それ以後、畠を耕すのをやめて切り株を守っていたが、二度と兎はかからず、その人は国中の笑いものになった、というのです。

この話は、日本では童謡にもなっていて、「待ちぼうけ」のあほらしくもおっとりした不条理の味を教えられ、

子供心にもほのぼのとした思いさえ感得したものです。

こうも科学が進歩して宇宙時代に突入の世となり、誰もが追われるばかりの生活をしていると、兎の頓死を待つ大陸的性格をうらやむ思いもしないではありません。

路郎先生は晩年に、何処か静かな山小屋が欲しい、ゆっくりと気儘な執筆で余生を楽しみたいと仰有っていましたが、私もあと二年で七十五歳になります。

寅年の私は虎視眈々というほどではありませんが、力以上に背のびをし続けて来たようで、多くの先輩、同僚、後輩のお陰で川柳塔社の運営を大過なく果して来ることが出来ました。苦労知らず世間知らずですが誠意をモットーにしました。

赤心を推して　人の腹中に置く

五十嵐播水先生

旧臘、朝日歌壇俳壇の頁の友岡子郷の「時間を超える」という言葉は私の人生のテーゼです。

肺結核を患って得たのは、柳が風に逆らわぬ自然体と誠意で生きることの大切さでした。

川柳塔を次の世代に引き渡すための組織を、地方との関係を密に改めて行くことに次の二年を努めたく思っています。

新年を迎え川柳生活四十五年に入り、「烏兎匆々」の思い切なるものがあります。

作品

四方拝今年も旅の豊かなれ

酒供養生きてる人のためにある

の一文を読んでいて、次の個所に私の眼は釘付けになっ

た。

月日が経っても、あざやかに覚えている句がある。あたかも記憶の珠となったかのように。

額の花美事に咲きぬ虚子も来よ　　五十嵐播水

作者は今年数えて百歳になられた。高浜虚子門の最高齢の俳人である。

それにつけても、この「虚子も来よ」の呼びかけのなんと純粋にういういしいことか。四十年も前に彼岸に去った虚子に時空を超えて到達しそうな声韻がある。

右の抜粋はその一部分だけであるが、今年百歳になられたというのに私は感慨を深くしたのであった。

昭和二十九年十二月、明和病院に入院した翌日、胸からごぼごぼ込み上げてくるものがあると思えば、それが喀血で、私の気分は沈む一方、年が改まった二月から川柳に手を染めるようになった。

同じ頃、兵庫県下の療養文芸祭があり、俳句が募集になっていて、選者は五十嵐播水先生（医学博士）だった。川柳仲間とのお付き合いで出した私の句が第二席に入選したという知らせに、病院事務長の西尾青一路先生（阪大川柳会出身の路郎門）に付き添われて表彰式に神戸へ出掛け、賞状と選者の色紙を頂いた。

猫柳湖畔の春はととのはず　　播　水

という私も知っていた有名な句で、今も色紙箱に大切に蔵ってある。

揚雲雀盲（めしい）も雲を感じいむ

というのが私の句で、第三席と第一席は

春愁を捨てむと出づる夜勤かな

水温む重なる父母の忌を勤め

で、四十四年も前の句であるのにしっかり覚えている。このような喜びを頂いた播水先生に、私はほかにも得難い力を授かっているのだ。

というのは、西尾栞前主幹の死去の後、大阪府警本部教養課発行の月刊誌である「なにわ」の文芸欄川柳選評を担当しているが、播水先生は、その俳句部門でご指導されておられる。半世紀に手の届くほどの昔、色紙を頂いた若者が、大先生と選者の名を並べる因縁を頂いたのだ。

毎月のこんな大きい励ましは外にない。

また、いきなり俳句の第二席に入選するラッキーを呼んだ原因も、その以前にある週刊誌の短歌（吉野秀雄

選）に毎週応募し続けながら、一年間一度も入選出来なかったことから、私は万葉から現代短歌へ、芭蕉から鷹羽狩行まで、おびただしい詞華集を渉猟し、文庫本を購読してひたすら耽溺玩味したのを思い出す。

句作りにはその人に合った腐葉土が大切で、長い絶えざる努力を量ねて良質の土作りを行ってこそ叶うものだ。句の上達にも「急がば回れ」が生きている。それを私に認識させて下さったのが先生で、播水先生百歳の活字から、私の走馬灯はひとときこのように回り続けた。

パーテイー

パーティーといってもささやかなのから豪勢なものまでさまざまだが、今年になってからはや五つのパーティーに出た。

来る二十日には川柳塔の七十五周年記念大会があり、その後ほんの内輪でのパーティーになろうが、和やかでくつろいだ雰囲気にしたいと願っている。

一月中に出たのは先ず九日、香川県の三本松ロイヤルホテルでの同人木村晃氏の叙勲祝賀の会であった。近隣の名士の顔が揃って豪華だったが、私は雪に弱い新幹線の影響で遅れて駈けつけ、亡き西尾栞前主幹や川柳塔同人の人達の祝意も込めて貧しい祝辞を申し上げた。

ふあうすと同人の島田治大内町議会議長の隣席で種々のお世話をお掛けした。

二十二日は黒川紫香、奥田みつ子句集出版の小宴で、改まったものではなく、花束だけが目立って大きいお祝いだった。

二十四日は時実新子全句集出版のお祝いの会。神戸ハーバーランドのホテルニューオータニに二百四十名が

参集した。呼び掛け人の私は板尾岳人さんと出たが、新子さんらしくきっぱりとしていながら温かいムードに溢れていた。

新子さんは参会者二百四十名への記念の色紙にすべて異なる句を書いたという。

まるで大字典のような厚さの句集は鮮やかな朱色の装いで袋に入っていた。

昭和三十八年に発刊の句集「新子」はブルーであった。新子さんの色は赤やで、臙脂がええ、と私は進言していたが

冬誕まれこれがいのちの青である

と当時の句にある通り、私には意想外の色で登場した。それが今回、卑弥呼の出現のように燦然と現れたのだ。まさに

あかあかや　あかあかあかや　あかあかや

である。新子さんは三十五年後の今日の日を見越して、この色を取っておいたかと思ったりもしたのである。

司会の道上洋三氏の質問に答えて、「新子さんの川柳出発の頃の句を拝見して、幻の名馬ときのみのると勝手に呼んでいたが、今では幻ではなく、日本の川柳界に存在感のある、ときのみのるになられた。体をいとわずお互い長生きしましょ、と帰るまでに言いたかったです。」と私は発言した。

田辺聖子先生の解説のある一万二千句以上の集大成は迫力をもって迫ってくる。

二十八日は「オール川柳」の葉文館出版の主催するトークの会で、織田正吉VS坪内稔典両先生の対談が三井アーバンホテル大阪ベイタワーで行われた。

語り口もジェスチュアも静と動の対照的で、内容も頷けること多く、大いに勉強になった。柳人はこういう会に努めて出席すべきだと思う。

七十五周年の大会でお話をして下さる織田正吉先生の横で乾杯をして、パーティー早々に本社委員会の会場へ走った。

二十九日は「上方芸能」誌の創刊三十年記念、菊池寛賞受賞の祝賀パーティー、ここでも織田正吉先生、直原玉青先生とご一緒した。これもホテルニューオータニ大阪を埋め尽くした参会者の中で、木津川計先生ご夫妻に心からお祝いを申し上げた。すべて川柳に繋がるご縁を頂いているのである。

田辺聖子先生　第五十回読売文学賞受賞

二月二十二日午後の新幹線の窓から見た富士山はすこぶるご機嫌で、ほんの薄い霞をまとっているものの、足の先まで全容を見せてくれて気高かった。うっとりと富士を眺めたのは久しぶりである。

富士山の藍に一礼してしまう

私がこの句を創ったのは電車の中からではない。同時に嘗て見た横山大観の富士山の小品を思い起こした。晩年の大家の到達した藍の色の澄んだ気韻に圧倒され、芸の力の無限を感じた。

さて、今日は田辺聖子著『道頓堀の雨に別れて以来なり』の読売文学賞受賞式に出席するための上京で、午後六時前に着いたパレスホテルの会場には、日川協の仲川たけし会長をはじめ、岸本吟一、磯野いさむ、田中新一、田頭良子、今川乱魚諸氏のお顔が見えた。

聖子先生とご主人様にお祝いを心からの感謝を込めて申し上げた。

式は読売新聞社社長渡辺恒雄氏の挨拶に始まる。この方は、番傘の編集長をなさっていた松本波郎さんと同期に入社され、大阪の当時のＪＯＢＫや警察回りを共にしていたとお聞きしていたので、亡き波郎さんをなつかしく思い出していた。

正面に並ばれた七名の受賞者、多数の選考委員の方は皆さん本物なのである。

本物の大江健三郎氏が立って総評を述べられる。各部門の選考委員代表の選評を説明し、補足してまことに誠実、丁寧で優れたお人柄をしのばせた。

次いで受賞者のスピーチに移る。

わが田辺聖子先生は、久良伎、剣花坊の明治の川柳改

革期以来、川柳の誤解を是正しようとこれ努めた多くの柳人の尽力にも拘らず、昨今またサラリーマン川柳や老人介護川柳など逸脱ぶりが目に余るが、現代川柳にはこんないい句がある。

ぬぎすててうちが一番よいという

と切り出された。次は路郎先生の句かと聞き耳を立てていると、橘高薫風さんの「遠き人を北斗の杓で掬わんか」と私のが披露され、胸はどきどき、続いて磯野いさむ、須崎豆秋（葬式で会い）、山川阿茶（男皆阿呆に）、松江梅里（命まで賭けた）等々路郎門下の大阪ムードの句が続々、東野大八氏の三島由紀夫終焉の句も参会者に感銘を与えた。

聖子先生はまた受賞の言葉に

「私は長いこと、庶民のうちなる生命力や、不逞な人生観や、逆境になってもおのずから湧く復元力に共感と親愛をもって、庶民をテーマにした小説を書いてきました。その究極は川柳であります。川柳ほど人々の生々たるちからがこめられている文芸はありません。（中略）好きな川柳について、好きな作家について書いた作品に、賞が頂けたのは、望外の喜びです」

と仰有っている。

選考委員の井上ひさし氏の選評の締めくくりの言葉もまた感銘深いものである。

「水府に田辺さんがぶつかったこと、こういうのを美しい遭遇というにちがいない。」

パレスホテルを後にしながらの私は、夜道を神田駅まで歩いてしまっていた。

路郎の精神　川柳の質的向上

川柳塔創刊75周年記念川柳大会を盛会裡に終ることが出来た。懇親宴から最後のお一人が退出されるまでテーブルの前に腰掛けたまま動かなかった私の胸は、感謝の念でいっぱいだった。ご参加の各位に心からお礼を申し上げます。今年は可能な限り各地の句会に、そのお礼の意味を込めて出席したいと念願している。

突然の上梓であった句集『師弟』は、麻生路郎先生のお作と私のを並べてみてその距りがよくよく分かった。先生のには生活の臭いが沁み込んでいるのに、私のはきれい事で終っている脆弱さが顕著だ。今になって気付いても遅いのだが、この差は如何ともし難い。

それでは自分の目で見た自分の句の特徴はというと、一句に言わんとする一事を明白に述べていること、そして句のリズムが頑固なまでに私のリズムで通していることであろうか。前者は穿ちの徹底であり、後者は路郎語録の一つ

「句はその人のこころである。十七音字はその人の姿である。リズムはその人の呼吸である」

の遵守であると思う。

親しい友人が私の句に関しての発言で、「胃半分肺半分の湯呑だなあ」と作句して、後日下句を「湯呑かな」と推敲したと発言しているのを聞いたが、それは間違いで、語尾のあやふやな句は忌避することはあっても納得することはない。

手術後ベッドに帰り、麻酔が覚めて意識を取り戻したとき、

胃半分肺半分のいのちかな

と句が出来、数日して使い慣れた湯呑で熱いお茶を飲ん

だとき、湯呑のいとおしさから、いのちが湯呑に転換したのだ。心境がいささか客観的に見られるようになったわけで、句集には後者を定着させたことになる。また、

菊活けて一ト時慾を忘れたり

という清水白柳さんの句がある。これを「忘れけり」と引用した人があったのでその間違いをすぐに指摘したことがあった。孫引きをされると間違いがどんどん広がるからである。

恩のある人の娘をきらい抜き

一寸した血はなめて置く大工の手

というふうな剛直なリズム感を好む作者（もちろん例外もあるが）だから、けりではなく、たりを用いられるということは、その作者のスタイル（内容とリズム）を理解し、句を記憶することで正確を期することが出来ると私は思っている。

作句の道は主観客観の別はあっても、句の内容に文芸的把握を、句の綾にリズムを取り入れ、諷刺、ユーモア、抒情の硬軟、剛柔を引き立てる用語の能力を修得することにあると思う。

あとは真実、感動、出会いがあるばかりなのだ。

とは言え川柳が、ひちむずかしい言辞を弄する類のものばかりでは滅んでしまう。それぞれの人がそれぞれの色で句を成して隆盛を見るのだが、須崎豆秋さんのように、雨の題が出たら雨の日に街へ出て作句するような、真実の出会いを求める作者になりたいものである。

窓あかり　小松原爽介句集

四月二十九日みどりの日、豊中のアイボリーホテルで開催のみどり川柳会35周年記念川柳大会に出た。

赤い絨緞の敷かれた部屋の椅子に掛けていて、突如野火に取り囲まれた幻想にさいなまれる。日本武尊の草薙剣さながら炎を振り払わねばならぬと思うほどで、余程神経が疲れているように思えた。

それで五月一日のときせんの大会に欠席し安静にしていたが、大会を偲びながら小松原爽介句集『窓あかり』を読む。

爽介さんは創始者の三条東洋樹先生の川柳のこころを立派に引き継いでおられる。平素から自らの意向を明確に示すタイプのお人柄とお見受けしていたが、まことにやさしさに溢れている。

階段の手すりを掴む敗け戦

人生の過程を勝ちと敗けで処すことは男らしい。手すりに手を掛けて階段を上がるのは敗者の姿、思いひしがれている。

勝者は階段の真ん中をどっどっと駈け降りる。個性鮮明なる作品だ。

ゆっくりと水呑む父に近寄らず

酔醒めの水を立ったまま飲む父の姿か、薬を服む水のあとの思案の態か、具体的に触れず父の苦悩に関わるたたずまいを感じさせる。「水呑む」ことで心情の厳しさを表現する、これが短詩の腹芸だ。

地下街で一度こだまを試したい

地下街を改めて眺め、地下街の本質を見直すと、これは四角に区切られた隧道ではないか。無人の夜にはずい分遠く迄こだますることだろう。しかし文明の斫は味気ないだけである。底流に批判あり。

余生とか子のやさしさが胸に棲む

東洋樹先生の薫陶がそっくり形に出たと思える句で、爽介さんの師への眼指しの尋常ならぬを感じる。

子と暮らす月日の中の春惜しむ　東洋樹

爽介さんも師を越える難しさを実感されているに違いない。

俎板の凹みは勲八等ぐらい

人生の重荷を振り分けにしている妻への感謝が惻々と迫る。勲八等とないがしろに述べているようで必してそうではない。爽介さんのこころは、勲章など俺は要らぬが妻には八等位でも贈ってやりたいとの思いなのである。

スーパーへ行こう仕方のない夫婦

「仕方のない」夫婦の有り様は文字通り仕方のない毎

日で、所在がないとか、屈託のないとかでは充分に表わせない。荒い措辞を求め、それを成功させられた。

路郎先生に去就の似た東洋樹先生も川柳は批判詩と標榜されていた。川柳塔の目指す句作りに通じる句柄を、句集の最前部四十頁の中から寸評させて頂いた。

妄言多謝

作品

蝶蟻に無益な死無しコソボ飢ゆ
日の丸がまたも爆発しはせぬか

路郎忌に思う

今年も路郎忌が巡って来た。七夕の夜にこの世を去られるとはと、この日が来ると先生のロマンチストぶりに毎年感銘を深くするのである。

こう書き出すと、また路郎のことかと思う仲間もいるかも知れない。けれど私は生きている限り路郎路郎と言い続けるであろう。

五月十五日に冷泉家展を見た。葵祭と重なり、翌日が最終日というので、その混雑ぶりは大変なものだった。どうしてこんなに人が集まるのか。それは八百年以上も前に生きて和歌に徹した藤原俊成、定家父子の言霊の力と、それを伝え続けた家人の尽力による。路郎死後たかだか三十年、その言霊の光を絶え絶えに出来ますか。

川柳塔の仲間なら誰も知っている路郎語録は後世に語り継ぐべき価値のある教えで、どんな言葉よりも秀れている。

私は川柳を人間陶冶の詩であるといっている。人間へ締め木をあてて絞ると、いろんな悪汁が流れ出て、そのあとには朗らかな脱俗した人間が残るのではない

かと思う。その締め木の役を川柳が果してくれているように思えてならない。句はその人の心であり、十七音字はその人の姿であり、リズムはその人の呼吸であるからである。後略

これは川柳に魅入られ想像に絶する苦闘をした人の魂である。

空海が密教を開くのにどれだけの修業を成したか、利休が茶を極めるに如何に肚を据え胆力を養ったか。

川柳ものたうちまわる鍛練なくては、立派な業績は残せない。

例えば中興の祖と言われる剣花坊がそうだ。鶴彬を守り通した井上信子も女流ながら見上げた人物と言える。その二人を両親に持つ大石鶴子女史が、去る五月二十一日死去され、二十三日千葉市営霊園で告別式が執り行われた。

剣花坊は明治時代、雑誌『川柳』に拠り、大正に時代が移れば『大正川柳』と、更に昭和には『川柳人』と改題して社会化に努めた。それは信子、鶴子に引き継がれ、今年の新春号で八百号（川柳人）に至ったのである。女史はそれを機に後を佐藤岳俊氏に託し、身辺整理に取りかかられた矢先の脳出血であった。丸四日の苦悶の末、五日目の未明にこの世を去られる。四日間は阿修羅の形相であったという。整理に心を残すものがあったのだろう。ご遺族のお話を聞きながら、私は偉丈夫とは男だけのものではない気にさせられた。

田辺聖子先生の『道頓堀の雨に別れて以来なり』にあるように、五番目の末娘として、あの破れ鐘和尚に殊の外愛された乙女の変身ぶりはご立派であった。

剣花坊五十回忌や鶴子米寿の祝賀に出た私は、このたびもお見送りをして、剣花坊と路郎との友誼を思い冥福を祈った。

鶴子女史は毀誉褒貶には恬淡としておられた。行年九十一歳、法名なく無宗教の信念を通し、清楚反骨の潔いお人柄であった。

柩の遠ざかるとき私の頭に浮かんだのは、「紅旗征戎非吾事」（紅旗征戎吾が事にあらず）の定家の一語であった。

旅人・福寿草・私達

川柳雑誌社発刊の句集に三部作とも言える三冊がある。それは路郎先生の『旅人』と葭乃先生の『福寿草』、門下生の合同句集『私達』である。

『旅人』は先生の川柳生活五十年に際してのモニュメントとしての発刊で、昭和二十八年十月三十日であった。縦十六糎、横十二糎、厚さ四・五糎の変型上製本で、片方の掌にすっぽりと収まり、ずしりとした重量感を覚える。

二階を降りてどこへ行く身ぞ

という七七の十四音字の句を巻頭に千百十句が収録されている。一頁に一句のところ、二句や三句の頁もあれば、一句一句も一行で書かれたもの、二行三行と分かち書きになっている句、それぞれ作者の呼吸に合わせて姿が決められている。

『福寿草』は厚さは路郎の三分の一だが型は同じ、『私達』も変わらない。

『福寿草』は昭和三十年七月一日発行。両先生の名吟佳句は枚挙にいとまがないが、今回は長男ロンドンさんの急逝時と、その一周忌の句を揃えてみたい。

路郎先生の句

学校の横に住みて
子を死なし学校に子の多いこと

おおきな事実子が死んでいる
まだ弟があるようにいう悔み聞き

ロンドンの一周忌に
お父さんはやはり川柳々々言ってるよ

お前がいたらと思い出すと煙草ばかり喫う
お父さんはネ覚束なくも生きている

お父さんの神経衰弱がわかるかい
湯ざめするまでお前と話そ夢に来よ

葭乃先生の句

長男のロンドンを喪いて

弟へ残す形見のかたボール

ロンドンの一周忌

まぼろしであったか死んだ児の裸
一周忌かしこもここも草萌ゆる
一周忌こんな蒲団で寝ていたか
紺絣今はアートのために裁つ
香を焚いてまぎるる事も凡夫なる

『私達』は『旅人』と『福寿草』の間の厚さで三百六十頁、不朽洞会員（路郎の門下生）のうち参加を希望した百五十名ほどの作品集で、物故された名作者の句も収められている。一人五十三句掲載の作者もあれば七句だけの人もある。路郎先生は作者の個性を伸ばすのに秀れておられたので、多士済済の故にまた多句彩彩の趣である。

その中で今なお川柳塔でご活躍、購読者としてご支援の諸氏の句を列記する。

聊はどれもはげてる一等車　倪流洞
水害の駅から今日も応召兵　形水
入院の妻に月賦があったのか　文秋
みんな寝てしもうて母のいい月見　紫香
保険屋もいそいで去んだヒステリー　雄々
大阪へ来た団体は走らされ　しげお
観光地ただで遊ばす様に書き　ト占
奥様にされて市場を出て笑い　梨里
折詰を開けば妻は値ぶみする　柳慶
月横に動くと見れば汽車曲る　水客
秋はよしこんな所にこんな花　杜的
お年玉貰えば子供去ぬと云い　愛論

不易流行

国立文楽劇場で「曽根崎心中」を見た。これは近松の世話浄瑠璃の第一号で、実際に心中のあった日から二週間目に初日を出したキワ物だったが、作が良かったので興行的にも当り、竹本座の借財を弁済出来たという。ここで竹本義太夫は座本引退を声明したのである。

世話物の人気は心中の流行を招き、衰微して昭和の代には床本だけが残り、曲は途絶えていた。

昭和三十年の正月、四ッ橋文楽座の舞台に、この「曽根崎心中」が公演になる。

西亭脚色並作曲であった。西亭とは、三味線の野澤松之輔師匠の別号である。

松之輔師匠とはしばしば麻雀を囲んだお仲間の一人であったので、その新曲を聞きに行った。麻雀では物しずかな小柄の師匠の芸の上のお姿に接して、深い感動を覚え、以来お初、徳兵衛は欠かさず見ることにしている。

二十五と十九の共に厄年の相愛の男女が、金と主従の恩の葛藤にさいなまれての心中行である。

「天満屋の段」では縁の下の徳兵衛がお初の足を取って押し載き、息を殺して焦れ泣く場面がある。

ペディキュアの足を仏足頂礼す

の私の句を思い出し、江戸時代も今も愛の形は似たものであると思ったり、見るたびに新しい感慨に浸る。

新しい感慨はちらりちらりと興味を起させるが、不易の感動はずしんと脳天から心の内へ訴えてくる。

いわば「さわり」のくだりである。

へこの世の名残り、夜も名残り。

死にに行く身をたとふれば、あだしが原の道の霜。

一足づつに消えて行く、夢の夢こそ哀れなれ。

あれ数ふれば暁の、七つの時が六つ鳴りて、残る一つが今生の
鐘の響きの聞き納め。
寂滅為楽と響くなり。

語る太夫五人、三味線の師匠も五人、高ぶる声、重く沈もる三味、聞く私も一体感でいやが上にも昂ぶるのである。

人形を遣うのは吉田玉男と吉田文雀、それぞれ徳兵衛とお初を生き生きと、人間文化財の貫禄で堪能させて下さる。

昭和三十年のときも平野屋徳兵衛の人形は吉田玉男であった。天満屋の段を語った竹本綱太夫は先代であったろう。今回も綱太夫であった。

総合芸術は多くの個人技の集合体で、すばらしい調和が感銘を深くする。

四十年前の意識を甦らせながら国立文楽劇場を後にした。

川柳は、文楽のような総合芸術ではなく、個人技に近いものだが、選者と作者との微妙な連繋もないではない。師匠という秀れた人との出会いが、いつまでも胸の底に沈んで、テクニック以上に心情の上で影響を受ける。

伝統の芸の「不易流行」、文楽も川柳も変りはない。

句碑まつり

岡山県芸術祭参加、麻生路郎句碑建立50周年記念、第51回西日本川柳大会（九月四日・五日）に参加した。

ＮＨＫ文化センター川柳教室の仲間を主に二十名ほどが前日から行動を共にしたのだが、路郎先生の五女西村梨里さんの同行は今回特筆すべきことで、主催の弓削川柳社にも喜んでいただけた。

それに先生の生まれ故郷の尾道市からも路郎顕彰キャンペーンに積極的にご支援下さる島本実旺氏（元市会議員）をはじめ四名の方のご来駕あり、私には感慨深いものであった。

当日には小林由多香氏（鳥取市同人）たち八名の句碑除幕式があって、句碑の総数は二百三十一基となった。

昭和二十五年九月、

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

の句碑がJR駅前に建ってから、この数に至るまでの経緯にはさまざまな地元のご尽力、特に管理のご苦労を思わずにはおられない。しかし、句の力も絶大な効果あってのことと私には思えるのだ。

先生の門下の一人後藤梅志氏は、この句に接し、「路郎先生はこの一句を創るためにこの世に生まれてきたと思える」と仰有っていた。路郎先生ご自身は

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

が一番好もしいと言い、葭乃先生は

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

の句が好きだと言われていた。それぞれに好みは違うが、弓削川柳社は「俺に似よ」を選んで句碑にされた。

当時四人で発足した川柳社だが、町民の方たちが朝夕に見るこの句に親しみを覚え、何という温かい親心であろう、川柳とは何とやさしい文芸であろうと心を動かし、これなら私たちも親しんでみようと川柳愛好家が増え、句碑を建てる人が出来て近隣に広がって行き、果ては北海道など遠隔の地に至るまでになった。

私はこれを言霊の力だと思う。

万葉集の千五百年ほども前の歌が残るのも言霊の力だが、句碑の建立にも句の魂が呼びかけるに違いなく、それの支援と尽力を借しまぬ町当局や町民皆さんの力が相俟っての成果でありましょう。

午後四時過ぎからはじまった句碑の前での川柳まつりは、地元銘酒の鏡割りにはじまり、献茶の儀も行われた。町長さんらに酒を掛けて貰った先生はまことにご満悦であったろうが、初のこととて献茶には驚かれたに違いない。

一服を拝しての梨里さんは、挨拶にも涙涙であった。

「何もかも投げ捨てて川柳一筋に生きた父でしたが、たった十七音字の詩に魅入られた人生だったと思います」という言葉ではじまり、先生の語録「川柳は人間陶

冶の詩である」を強調、多くの川柳人の励みとなられた源泉、弓削川柳杜の五十年のご苦労に深い感謝の意を述べられ、また、苦闘を続けた父を尊敬していますと結ばれた。

あとは模擬店が出て賑やかな二時間、銭太鼓の妙技に酔い、ユニークな楽団の演奏とカラオケに我を忘れて時を過した。弓削川柳社の皆さんに深謝です。

ご挨拶

皆さん、ようこそいらっしゃいました。遠方からお出まし下さった方、昨日から総会にもご出席頂いた方、大勢のご参加を心から御礼申します。

麻生路郎先生ご在世の頃、七月の先生の誕生日近く「川雑川柳祭り」というのを催していましたのを、「川柳塔」改題の十月に替えて発足したのですが、今回第五回となりようやく軌道に乗った思いが致します。

今年、事情があって同人総会を前日に開きましたことは、遠方からの方に特にご迷惑をお掛けし、深くお詫びします。

総会では種々の報告を致しますと共に、規約改正、役員補充などのご賛成を得て、社の運営に更なる強化を進める体制が整いました。私もこれからの二年、川柳塔の発展に微力を尽くしたく思いますので、変らぬご支援をお願い致します。

これからは地方の時代です。広い視野で社の運営をはかり、次の世代に引き継ぐ所存でおります。積極的なご協力を重ねてお願いします。

皆様方今日一日、たのしいお祭りを楽しんで下さい。

右は、今大会で申し上げた私のご挨拶。

さて、鳥取県は川柳塔のお仲間の多い所で、その不参はとても寂しいことでしたが、予想を越えるご出席者を得、また佳句も多く披露され、大会ムードは盛り上がりました。懇親会も、よく飲みよく語り、友情とアルコールが溶けて和やかに弾み、来年の再会を誓い合いました。

鳥取勢の不参になったことは避けねばならぬことでした。分かりきったことの出来なかった運営を反省しなければなりません。私自身、大しくじりをして事前投句の方に厄介を掛けました。老化体調の不安はありますが、あと二年の主幹の役割りを渾身の力で尽力致します。

私は去る五月に醍醐寺（太閤花見の会の名刹）で文化講座の講師として「川柳のたのしさ」について話をしてからの縁で、月に一度写経に出向いています。体調悪化すると精神も安定を欠くからです。

凡聖不二　実修実證

とある双幅の揮毫の前では、路郎先生の句の息づかいまでが偲ばれて半日の対話をたのしんで来るのです。

若いうちに生命を断つ人は苦の中に旅立ちます。七十を越えての老化は、無の世界へ近づく修業であるに違いなく、般若心経を写しながら、かつての私の句

心経の無の字の多き金泥なり

を思い返したり、いのち衰えてなお川柳をたのしめる自分を果報者と思えと言われているようで、先生の終焉と思いを重ねながら私なりに心に納得をさせて帰るのです。その日その日に別の安心を頂けるのです。

写経の目的を記す欄に、今までは「為　父母の霊菩提」と書いていますが、次の時には「為　自己安心」と書けば、笑われるでしょうか。

今年を顧みて

今年もはや歳晩を迎えて一年を振り返る時がきた。年が寄るとともに酸素ボンベを抱えた活動であるから、今迄の三分の一しかこなせない仕事量に、かえってそれが増えてくるので、いよいよ自分の時間の手詰りは限界にきてしまう。

三月二十日には川柳塔75周年記念川柳大会をホテルアウィーナ大阪で開催し、四百五十五名の参加者を得た。初めて四百人突破の感激を一同で喜んだ。

第23回全日本川柳秋田大会は六月十三日、大潟村のサンルーラル大潟で開かれ、波多野五楽庵氏が「招待」の選を担当された。前夜祭から終了までの運営の手際良さは見事で、実行委員長の猿田寒坊氏のご尽力に感銘した。これは十月二十四日の第14回国民文化祭・ぎふ99の郡上八幡町の大会にも言えることだが、大阪本社からの幹部の出席が皆無であったのはいささか恥ずかしい思いがした。大きいイベントは、それに接して長所を取り入れる才覚や責任感につながる自覚、全国柳人との交歓や歴史につらなる見聞を後進に語る材料を蓄積して欲しい。

郡上八幡は曽遊の地、栞先生、大八先生や俊平さんと同行して翠柳川柳会と合同句会を開いた。立枕よし子、山田かずさんらとなつかしく旧交を温めた。

九月四日五日は麻生路郎句碑建立五十年記念、第51回西日本川柳大会へ出席、先生の五女西村梨里さんも感慨深い面持ちで、「俺に似よ」一句の力を認識し、先生の偉大さを偲んだ。

第5回川柳塔まつりは十月十日アウィーナ大阪で開催、爽やかなムードで終始した。二賞選考の方法を変更した心配もなく、今後この形で行う自信につながる。

改善すべきところは広く意見を取り入れたい。

今治市の汐風川柳社の50周年記念大会は、しまなみ海道開通に因んで五月九日に開催され、「川柳からつ」は二百号を自祝して六月六日、「川柳あしなみ」は五百号記念大会を七月十一日それぞれ開催された。

各地の柳社の記念大会とともに今年の顕著な足跡は、句集の出版であった。

黒川紫香著『地球の塵』、月原宵明著『しまなみ』、奥田みつ子著『白い梅』、八木千代著、『椿守』、川上大輪・富湖著『二重奏』、森井菁居著『愛すれば』、恒松叮紅著、『愛たしか』、田中正坊著『ペンシル』、村田善保遺句集、『鬼手仏心』等々、実り多い年であった。

最後に特筆したいのは、国民文化祭で同人中原諷人氏が「踊り」の課題の第一席、文部大臣奨励賞を獲得（一般の部）、乾優香さんが「鮎」の課題の第一席やはり文部大臣奨励賞を手にされた（ジュニアの部）。同じ町の二人が同時にビッグタイトルを獲得する空前絶後の奇跡とも言える足跡は川柳塔の誇りでもある。

十一月十四日の第20回みか月川柳大会はいやが上にも盛り上がることであろう。

画竜点睛

二十世紀最後の年を迎えました。

長い不況とコンピューターの二〇〇〇年のトラブルの起りかねない不安の中ですが、先ずはおめでとうを申し上げて、川柳塔への変らぬご支援を願い上げます。

今年は辰歳、昇竜の気運で景気の上昇と川柳界の隆盛を期待したく思います。

そこで竜に因んだ話から幕を開けます。

中国の南朝の梁の張僧繇という人は、官吏としても太

守などを歴任しましたが、それ以上に画家としての名が高く多くの秀れた技倆に関する逸話を残しています。

ある時、壁面に森林を描いたところ、翌朝おびただしい数の鳥が死んでいました。鳥が森と思って衝突したのです。

また、金陵の安楽寺の壁に四匹の竜を描いたときは眼を入れませんでした。

「これを入れると天へ昇ってしまうから」と言います。人が信じないので一匹の竜に睛（ひとみ）を入れますと、たちまち稲妻が走り、雷鳴とどろいて竜が壁を抜け出し雲を呼んで昇天したのでした。

以来、「画竜点睛」は絵画や文章の一番大切な所に筆を入れて完成させる意に用いられるようになります。

これに類する入神の技を語るエピソードが、わが表紙絵を執筆して下さる直原玉青画伯にも、一度ならず二度までもあったのです。

大井川の上流にダムが出来、水没する歴史ある庄屋の建物を島田に移した時のことです。南禅寺の管長故柴山全慶師の揮毫の軸、「松寿千年緑」に因んで画伯は松竹梅（歳寒三友）を描かれたのですが、梅に秋の蝶が来て戯れるのです。花から花へと。それを折よく完成図を撮影に来た静岡放送のカメラマンがビデオに収めたのですが、それがその年の全国での撮影賞の大賞を獲得したと言うのです。

また、宇治の瑞光院の襖絵にもよく似た事実がありました。玉青画伯の鷺の絵の部屋のガラス戸を本物の鷺が嘴でつつきはじめたのですが、入れないと分かると、鷺も考えたのでしょうね、裏へ回り裏口から部屋に入り、絵の鷺に挑みます。ひょっとして鷺は交尾期であったのかなと思われるのですが、形が立派に描かれていると、それは目に見えるのですから、そのような現象も起るのでしょう。

ここ数年来のことですから、今年九十七歳の画伯、九十歳を過ぎての入神の技なればこそと言えます。

絵の力はこのように自然までも感動させると同じように、言葉の力、詩の力も例えば源実朝の和歌や宝井其角の俳句が雨を止ませたり、降らせたりした話も残っています。神通力、言霊というのがそれであるのでしょう。

人を感じ入らせるだけでなく、天地自然を動かす川柳が残せる境地もあるはずだと思うのです。

人類は悲しからずや左派と右派
一ト握りああ人生は和に如かず

路郎先生の句ですが、年の初めに当り世界の平和と人類の幸福を願います。

自然は動かせずとも人を感じ入らせる句へ、私達は精進を続けたく思います。

今年も川柳を大いに楽しみましょう。

ああわが友

湖北長浜に近い高月町の渡岸寺は雪雲の下に静まり返っていた。暖冬の今年は小寒を過ぎて伊吹山にも冠雪なく、雪渓のように白い亀裂が一筋走るばかりだ。

畏友寺尾俊平さんは、ますかっと誌の第三雑詠の選評（昭和61年9月号）に次のように書いている。

この夏、渡岸寺の観音さまを拝みに行くつもりでいる。薫風さんと私はこの観音さまに魅入られて長い。数珠を持つ旅も楽しいものである。

ほうほうと笑うて芒野に消える　俊平

これは俊平さんが渡岸寺の国宝十一面観音像の写真に魅せられてのことで、ご本体は無論のこと、裏仏の暴悪大笑面に異常な関心を示していた。

私は十年来約束を果たせずにいた仏様に、今日会いに来たのである。

大和法華寺の十一面観音に似た貞観時代の特徴を持つ仏は、金箔の剝げた風情に森厳を極め且つ優美であらせられる。

私は冥福を祈るだけでなく、慙愧の思いで瞑目を続けた。

私は今年の年賀状に次のように書いた。

寂しい新春です。

満目百里　雪白く
広袤山河　風あれて
枯木に宿る　鳥もなく
ただ上弦の　月蒼し

これはまだ私の小学生の頃、母が眠る前に歌ってくれると言って、しばしば口ずさんだ歌です。と。

この歌は昭和11年頃からの軍歌で、題は「ああわが戦友」、当時の満州で関東軍の演習時兵隊が常に歌ったものと聞く。

死なば共にと　日頃から（三番）
思いし事も　夢なれや
君は護国の　鬼となり
われは銃火に　まだ死なず

俊平さんはかねがね私に、お互い年を取ったのだから折りを見て伯夷・叔斉になろうよ、と言っていたが、昭和が平成に変る頃から体調を極度に崩し、明子夫人と交代に入退院を繰り返していた。

第三雑詠の選評にもしばしば「諸君、健闘を祈る。がんばれ」と書く。彼はそう言って自分を鼓舞していたのだ。昨秋「お前がぐずぐずするなら、冬二と一緒にグッドバイだ」とせかせか逝ってしまった。明子夫人より後に残ることを一番怖れていたので、彼の死を自殺と思う。

慈悲深い菩薩のかんばせも暴悪大笑面もこの世のこと、彼の「新世界より」の便りはまだ来ない。

その夜低気圧が通過し豊中にも八つ手の葉に雪がつもる。伊吹山も白い神の座の偉容を輝かしていることだろう。

翌日、新春コンサートあり、朝比奈隆指揮のベートーベンピアノ協奏曲「皇帝」を聞く。ピアノは伊藤恵、大阪フィルハーモニー交響楽団の演奏である。

昭和50年秋、俊平さんとウィーン・シンフォニカを聞いた。同じ曲「皇帝」である。その夜、両陛下が親善の旅に発たれたことまで思い出し、生きるありがたさと寂しさをかみしめたのである。

ああわが友ぬくもりを皆持ち去りて　　薫　風

五十の晩年

年を取ると感性が鈍くなり、ひらめくものに疎く、近来句も文章もしぼり出さなければ出て来なくなった。

二月六日、大阪は知事選の投票日であったが、雨の中投票を済ませ銭湯へ行く。

湯船に首を浮かせて気の付いたのは、今日の湯は目立って黄色い。それは温泉の素のような匂いもなく、白い袋の浮いているのを見ると紅花だと分かった。

袋の湯に浸った部分が美しい紅に染まっている。その時、私の衰えた感性が作動して、これは川上富湖さんの色だと思った。ふろの日（二月六日）の湯屋の趣向が、私に巻頭の文を書くきっかけを与えてくれた。執筆期限の限界の日である。

一昨年秋から昨年の春までに、黒川紫香、奥田みつ子、月原宵明、八木千代、川上大輪・富湖、田中正坊諸氏の句集の序文を次々と書き、うれしい悲鳴を上げたのと打って変って、昨年の秋から一月末までのうちに、定金冬二、寺尾俊平、松川杜的、辻白渓子、福元みのる、北山悟郎、田中透太、川上富湖といった私には浅からぬ絆の方たちがこの世を去られた。慌ただしい通夜と告別式へのお別れが続き、風邪発熱の難儀まで加わって、惨憺たる越年であった。老妻が「あんた御祓いをしておもらい」と心配する。

一月三十一日の大阪の朝は冷え込みがきつかった。しかし、オーシャンアローで二時間四十分ほどで着いた新宮は、さながらに秋、空青く温暖でまるで別世界だった。黒潮流れる海を越えて浄土へと目指す補陀落渡海の土地柄を思わせた。

途中の枯木灘辺りからの海岸線の岩礁美もさりながら、

串本に近い橋杭岩が、この日は仏の姿に見えた。

新宮熊野地会館での川上家告別式は、正面に富湖さんの遺影がカラーで頬笑む。

平素からお洒落に徹した人らしいし、大輪さんにこれ以上なく愛された人らしい満足感に溢れたお顔も、逆縁に耐えておられるご母堂、大矢まさ子さんの胸中を察すると、飾られた花も正視出来ない。

読経の中を川柳塔を代表して謹んで焼香し、冥福を祈った。

川上富湖の句

本誌先月号のこの欄に「五十の晩年」と題して亡き川上富湖さんの事を書いた。

重ねてもう一度書きたい。その理由は富湖さんの句がすばらしく、これからの川柳塔の句風に寄与すること大で、故人の将来の精進、更なる向上を私は期待していた。

富湖さんは、一昨年葉文館出版主催の第三回オール川柳大賞を受賞、昨年には路郎賞を獲得、稀に見る派手な栄誉に輝やかれた。花火のような晩年と言うべきか。五十歳の晩年は如何にも悲しい。

新宮から帰宅したら同人結城君子さんから電話があったと言う。これまた暗い予感が的中して、掛けた閻の向うの電話の声は、敬愛する栗谷春子さんの訃報だった。

再会は初対面よりはずかしい　春子

含羞の人をまた私は失ったのである。

後々誰彼が見て習ってほしいと思うので『二重奏』から引用する。

螺旋階段有頂天まであと少し

灯台など狭い所の階段に多い螺旋階段を、際限もないと思えるほどに登ると、誰しもうんざりする。しかし作

者は格別「有頂天」という並みの者では考えられぬ語を据えるのだ。単調な階段がたちまちロマンの花街道にすり変わるのである。

撲れば楷書も崩れ出すだろう

人形をくすぐることは一般でも出来る。楷書体を行書や草書にするのだ。字を撲るなど発想の時点からの特異性を思う。

リセットボタン笑って押せるのは女

女はロマンチックだと言っても根は現実的で性根が据わっている。ここというとき容赦なくリセットボタンが押せるのだ。男はがっくりとして押すが、女はしっかりとした姿勢で押すのである。

男爵という名の芋を擂り潰す

函館ドックの川田男爵が明治時代に輸入して北海道に広めた薯で、この名がある。台所でのウィット、軽い句である。

ワレモノと家族写真に書いておく

このワレモノも前句と同じ作者の機知であるが、核家族という現実を引きずる故に深刻だ。それを宅急便扱いにする。

莢を出てサラリーマンになった豆

豌豆が莢を出て社会人になっていったが、やはり豆の子は豆であった。それでもみずみずしい門出の姿にほっとする。

骨拾う箸冷静な太さかな

この句は父上大矢十郎氏の骨上げの時の感懐を表白したものと思われる。私は「冷静な」の一語に自然に出て揺るがぬ心理を読み取る。心乱れず拾い上げることの出来たのは箸の太さにも由来し、もっと細ければ心を刺したかも知れない。

触れられて一気に咲いてしまいそう

富湖さんはバラであったか、牡丹であったか、時を経て大輪さんに聞いてみる。

茶わん蒸し宝探しを始めよう

昔は良かったと強いて言わないが、事茶碗蒸しに関しては昔がなつかしい。今は若者向きになったからか、百合根とか銀杏の実の入ったのは稀だ。私も宝探しの思いで食べるが、どこも味は落ちた。

終焉はお見事でした流れ星

この句、富湖さんへの弔吟ではない。富湖さんご自身

の句だから胸がつまる。ご親族の方には一層の思いが迫ろう。

句集『二重奏』やその後の句を辿ってまだまだ作意の出過ぎた句や、若さだけという作もあるが、これからが楽しみだった。富湖さんはそれの出来る人だった。

私は、ここで更に大輪さんを追い詰めようとする。川柳塔誌平成十年二月号の特集「おしどり同人」に掲載の大輪さんの句である。たった二年を経た句に対する思いにも、天国と地獄、川柳とはそういうものなのだ。人生がそうなのだから。

夫婦茶碗並べて語ることもなし　　大輪

川柳の質

川上大輪さんが第五回オール川柳大賞を受賞されたことは川柳塔社にとっても嬉しいことだ。大輪さんは昨年に準賞を貰われている。川柳塔では大賞に川上大輪・富湖夫妻、準賞は第一回に桑原道夫さん小島蘭幸さん、第五回に西谷大吾さんが獲得された。成績優秀である。

これは麻生路郎先生の畢生の目標である川柳の社会的進出、質的向上を目指しての指導が、中島生々庵、西尾栞両先生を経て私に引き継がれ、「人間陶冶の詩」の研鑽の積み重ねが花を開きはじめ、他の柳社より際立った成果が具現したのだ。

これは代々の主幹の選だけでなく、本社や各地の主宰者の柳人の育て方に「人間陶冶の詩」の厳しい裏付けがあったからに外ならない。川柳は真実の詩、人生のいのちある足跡だとする路郎先生の教えの力強さである。

それは決して古い領域に踏み止まらず、絶えず新境地へ指向することの大切さを物語ってもいる。路郎先生の

目指された窮極の境地はどのようなものか。私はもう一度目を据えて私の心の底に映そうと、先生晩年の句や文章を辿りたく思っている。私の忙しさは、蒲柳の身がよく耐え続けて来たと不思議に思うのだが、そろそろ余裕づくりを考えて、三月末を期に川柳塔の運営を若い人たちに任せることにした。若いスタッフは一層各地との連繋を密にして、和を第一に進んで頂くようお願いしたのである。

『俳句現代』六月号（四月二十五日発行）に「俳句と川柳」の企画があって、川柳十句提出の依頼を受けた。

現在マスコミに取り上げられる量産的浅薄な俳句と川柳への問いかけになるありがたいものと喜んで参加した。そして私なりに自分自身で問題提起をしながら作句をした。第一には俳句と川柳をずばり一句に仕立てる。誰もそう感じてはくれないだろうが、その川柳になぞらえたフレーズを作品のタイトルにした。第二は川柳にもいる頑迷な定型固執者に、リズムの融通無碍なるを訴える。外来語の増加の目に立つ昨今、一句に外来語三つを使用してみる試行錯誤。ユーモアの一句と恋の一句。あとは川柳らしい現代社会と人間への批判をうがちを利かして述べればよい。かつて朝日新聞夕刊の文化欄に二度、五句と七句の掲載があったときも、滅多にない機会を生かすのにまことに涙ぐましい齷齪を繰り返した。一句なりとこの句で勝負というのを生まんがためである。今回はそういう句は皆無であった。ユーモアも恋の句も力足らずで出せなかった。髀肉の嘆と言うべきか。

四月二十五日角川春樹事務所発行の一冊、『俳句現代』六月号をご一見下さい。

本誌に掲載の自選集の五句は、その落穂拾いである。

丸丸連休

四月二十五日、近くの本屋で『俳句現代』を買い、その足で刀根山病院に入院した。

鳥取の梨花吟行会の翌日、一ヶ月に一度の診察があって、レントゲンとCTを撮った結果の入院指示であった。私は個室でないと嫌だと理由をつけて一週間の猶予を得た。すぐに出るつもりであった。

病院のベッドに横になると遠い過去のことが今も鮮明に思い出された。

昭和二十二年九月一日、当時の渡辺三郎院長に即日入院を言い渡されたとき、その当時肺結核は死病であったから目の前が真っ暗になり、体が奈落へ落ちて行くように感じた。そして兵隊で入営した時のようにもう一度頭を丸刈りにして覚悟を決めたのだった。

戦後間もない頃の病院は、今では想像もつかぬことが多く、掛け蒲団の上に置いた着物をかっ払われるは、主治医は疎開をしている妻子の元へ買い出しに行くと戻って来ない。気胸療法もしたりせなんだりなので、肋膜に水が溜り出し、膿に変って行く。そして大発熱を起こした。

隣室の少女は寒い雪の日曜日に教会へ礼拝に行って風邪を引き、それが因であっと言う間に天国に召された。

またその隣の青年も、熱が続いていたが、虫下しを飲んだら回虫が一ぴき出たので、この虫が災いをしていたんだから、これですっきりすると喜んだ数日後に身まかる。それを無知だ、喜劇だと言えないものが当時の療養所にはあった。

私の大発熱というのは、朝方には八度五分、昼過ぎから夜にかけて四十度を越える日が十日以上も続く。食事

は進まず氷水ばかりを欲しがった。親戚の医者が訪ねてくれて、もうあかんでと父母に告げたそうである。

父は入院時、「病気を癒すことを職業と思え」と言っていたが、剣ヶ峯に立った時は、「死生命あり、富貴天にあり」で人間何事も自然に任すことが大切、南無阿弥陀仏なり、一二三四を百まで唱えることを繰り返すなり、一つ事に集中しろ、と言って帰った。

母はというと、院長室へ行き院長の胸倉をひっ掴むように病室へ連れて来て、もう一度診てやってくれと強引に頼む。

院長は主治医に指示して薬を出してくれた。それを服むと翌日から早くも熱が下がりはじめ、三日後には平熱になる。

熱が下がれば食欲も出て文字通り起死回生であった。後に主治医に聞くと、薬は体温を調節する機能の鈍くなった脳を刺激するものだと言う。病状の悪化ではなく脳の働きが狂っていたのらしい。

母の強さを思い返し胸を熱くする。

五十年前から現実に返り『俳句現代』を開く。つたない十句が巻頭にあった。

『川柳大学』の露払いを勤める形だが、伝統派の作品を代表していてよしとする。

大胆な独自の編集だが、きっと次次と各柳社の作家の登場が続き、俳句との違いを展開して頂けるものと思う。私の句の「風見鶏の館」は俳句を、「タツノオトシゴの家」は川柳を象徴させたつもり。

長い連休は入院で丸丸連休と相なった。

今世紀最後の山

今世紀最後の路郎忌が巡って来た。

来し方を思えば、路郎先生はじめ六大家への思い出は多い。前田雀郎先生は講演を拝聴しただけだが、他の先生方とは歓談交々ご教示を得た。椙元紋太先生とは初心時代毎月二、三度は会っていた。ふあうすとの大会で時実新子を紹介され、その後寺尾俊平と出会った。

大阪、神戸や京都まで斬新な句会に臆面もなく出た。大山竹二、中尾藻介、岩井三窓、堀豊次諸先輩の句に注目して、それら豊かな感性を砂に沁み入る水のように吸収した。私も感受性に富んだ句を指向したが、その類の句は路郎先生には抜けなかった。従来の型の句ばかりが入選して私の作句意欲を大いに殺いだ。私の新鮮なと思う句の抜け出したのは、先生に師事して五年も経ってからで、その後は一気呵成であった。川柳が麻薬になった。

先生は恐ろしい人だと思った。

短歌や俳句、詩も心して見詰め直した。

井伏鱒二の翻訳で有名な一篇、

勧　酒　　干　武陵

勧君金屈巵

満酌不須辞

花発多風雨

人生足別離

コノサカヅキヲ受ケテクレ

ドウゾナミナミツガシテオクレ

ハナニアラシノタトヘモアルゾ

「サヨナラ」ダケガ人生ダ

に感服したのもその頃のことである。

ルノアール日記に「蛇長すぎる」との洒落た句語のあることを知ると、冊子全体を通読して、言葉探しをした。内外の小説や随想、内田百閒やバーナード・ショーを読んだ。

研鑽のグループも時代時代で変ったものが出来た。田中好啓を主宰に、海地大破、藤川良子、窪田久美子、山本柳化、西山寛子らと「いずみ」を結成したり、後年、中堅作家の頃には、中尾藻介、岩井三窓を中心に、寺尾俊平、森本夷一郎、越智禎、室田千尋、光森良、海士天樹、高杉鬼遊、樫谷寿馬らと共にたいしょうの会を持った。それは大阪北の繁華街の一角「入船」という飲み屋の二階で、月例会を開き、酒食第一、談論第二、作句第三の寄り合いだった。たいしょうは大正であり、大将であり隊商でもある。大笑、大勝、大賞、対症と何でも御座れ、対照対象どれもたいしょうになるような梁山泊めいた雰囲気で、今でもすき焼の肉の匂いが甦る。

こう書いてくると、それでは路郎門での勉強が問われそうだが、初心には川雑にしなり支部の後藤梅志、魚住満潮、阿倍野支部での須崎豆秋に刮目し、川柳塔雑詠の正本水客、真鍋一瓢、早川清生、西川晃に教えられた。

当時、いち早く個性派に目をつけて佳句を記憶したことになる。

人間形成には、中島生々庵、西尾栞両主幹と、近江砂人番傘主幹に負う所大であった。

好きな川柳をと言えば少し語弊があり、正しくは川柳にたずさわっているうちにずんずん好きになった川柳に、思い切り打ち込めた私は仕合わせ者である。

今しみじみ、私は二十世紀の川柳作家であることを自覚する。

今世紀最後の一つの小さな山で終りたい。

ありがとう

最後の巻頭言を何から書き始めたらよいか、二、三日手が付けられずにいた。

半世紀近い川柳生活のさまざまな感慨が、一度に打ち寄せてくる。

先ずは三人の恩人にお礼を言わねばならぬ。一番は命の恩人である大阪大学医学部教授武田義章博士である。瀕死の私をこの世に引き戻し、以後三人の子を育てることが出来た。第二の恩人は麻生路郎先生で、句集『旅人』に接して私は川柳にのめり込んで行く。第三のお人は藤沢桓夫先生。まだ初心者の域を出ぬうちに電波新聞の柳壇選者を斡旋して下さり、ジャーナリズムの選者への道を与えて、田辺聖子先生や木津川計先生とのご交誼を得るきっかけや、小野十三郎、秋田実両先生という大阪の一流文化人の人柄に接することも出来た。

川柳では路郎先生だけでなく、病院での初心の作句時代からすれば四十年に近い庇護を受けた西尾栞、中島生々庵両先生の恩もある。師だけでなく、多くの先輩、仲間、後進の柳人諸氏のご支援も大きな力であった。仲間には先輩格の岸本吟一、岩井三窓、中尾藻介の諸氏、同期には寺尾俊平、時実新子が居た。共に高ぶらず卑下せず、それぞれのペースで研鑽した。私はふあうすとの大山竹二氏の句にあこがれた。物故者、生存者にかかわらず心からの御礼を申し上げたい。

新聞雑誌、大会などでどれだけ多くの句の選をしたであろうか。佳句を得て満足のゆく選の出来たときの充実感は選者冥利に尽きる。それだけで柳人としての見返りは充分に得た思いがしたのだから、その他に何の報酬も望むことはない。ただただ川柳生活への感謝あるのみで、

没句への心残りも今にして深い。

川柳塔社だけでなく柳界の各位に心からの御礼を申し上げる。

西暦二千年という節目の年に川柳生活のけじめを付けられる仕合せをしみじみ感じている。これからは川柳塔を見守る位置で余生を過したい。

昨年十一月に、畏友寺尾俊平が先立ってしまった。二人は伯夷・叔斉に倣って首陽山で蕨を採るような生活を約していたのだが、私が川柳塔にかまけているうちに定金冬二氏と一緒に幽明境を異にしてしまう。その時、川柳塔の主幹を降りたら世捨て人になろうと決心をした。しかしながらそれは許されずに川柳塔社の体面上とて、名誉主幹の名を頂くことになる。私は今、体力の限界を切実に感じている。体力の衰えは気力を萎えさせる。この肩書きをどう受け止めるとよいのか。

馬車馬のように走り続けて来た半生に悔いはなく、ありがたいの一語に尽きる。我が儘を長らく見守ってくれた家族にも感謝を言わねばならない。今は四方八方にお礼を申したい気持ちの他は何もない。

余生をたのしく送れるよう健康に留意して、気が向けば、やあやあと地方の皆さんに会いに行きたい。新しい世紀を迎え、新生川柳塔の発展をひたすらに願う。

皆さん、川柳塔をいつまでもご支援下さい。ご健勝を祈ります。

半世紀の幕を下ろして安らかに　　薫風

Ⅱ　名句のかおり　(1)～(23)

(1)

禮帳に徳兵衛とこそ書かれたり　　古川柳

「誹風柳多留拾遺」初篇の巻頭句である。前句いさみ社すれ〳〵。

句解には二説あり、一つは年始帳にすでに徳兵衛なる名が書かれていて、次の家に行っても、またその次の年始帳にも記載ずみ、徳兵衛なる人に先を越された思いを言ったもの。

もう一つは、徳兵衛さんが来て礼帳に署名をしたという説である。

徳兵衛の「徳」は新年にふさわしい縁起のよい名であること、それにわたしは特に川柳という文芸にもぴったりと思うのだ。それかあらぬか、堀口塊人は柳家徳兵衛のペンネームで『川柳文学』誌上健筆を揮った時期があった。

どっしりと坐る一萬二千尺　　井上剣花坊

剣花坊は自ら唐明の漢詩を読み、万葉集がすきだったことで「脅かし」「誇大」と目せられる句を作るに至らしめたと言っている。剣花坊が剣花坊の気持ちをだしたのだから恥ずかしいとも思わない、とも言っている。

いっぱいに富士をひろげる浅黄空　　同

の句も大きい。空の浅黄色を存分に吸った富士、その逆様の扇をまだまだ拡げたいそらなのだ。剣花坊の句の二つの富士は、それぞれ剣花坊、信子夫妻の姿と思えてならない。

正月の乏しさ餅の円さ愛ず　　三條東洋樹

昭和三十二年の句。この年ソ連では世界初の人工衛星スプートニク第一号の成功を見たが、日本では五千円札や百円硬貨が登場し、経済再建の途次であった。池田首相の所得倍増政策発表はまだ三年後のことである。

経済発展の前夜であれば、正月の貧しさも頷けるので

あるが、これにはアメリカナイズされ続けるわが国情を乏しと見た作者の思いも推量できる。そこで鏡餅の白いゆったりしたまるさに心の安らぎを寄せる新年の感慨があった。

(2)

思わじと椿の花を火に焙べて　　川上　日車

「日車句集」の冒頭、恋の二句の中の一句。

大正三年というから当時としては、否、今に至るまで極めて鮮烈である。

赤い椿が火中に存在するそれだけで生身を焼かれるような衝撃が伝わり、上句の激しさが理解出来る。それでいてロマンの肌合いは失われていない。日車の個性なのだ。

子の手紙前田雀郎様とあり　　前田　雀郎

前田雀郎は美食家であった久保田万太郎に師事した故か、食通であり、句もまた俳句の色濃い傾向に終始した作家であった。

句集「榴花洞日録」の序の末尾に万太郎は次のように書く。

腹這ひになって子供といゝ話

とは何事だといひたくなる。…そこまで智慧も器量も捨てなければならないのか?…

作者よ、あなたはあなたの心の艱難に敗けてはいけないのである。…あなたの目のまへを遮った現実だけがあなたの現実ではないのである。と、まァ、一応からいって恰好をつけたあと、

何となく柳目につく寒のあけ

この句があれば大丈夫。わたくしはさういふであろう。わたくしは安心して明日へこの作者をみ送れるのである。

以上の文で権威のある俳人宗匠の句を見る目、句への評価が推測出来るのであるが「腹這ひ」の句も、一枚の

スナップ写真のような微笑ましい情景が鮮やかで、何よりも温かだ。これは人柄であって、前掲の秀句につながるもの。雀郎には子を詠んだ句は多い。

この句、作者の気持ちは一切示されていないが、くすぐったいような複雑な親心は充分理解出来る。

「いい子せて何かある」の名言通りの句だ。

(3)

孤独地蔵お玉じゃくしが梵字書く　川上三太郎

川上三太郎の本領は、鋭い感性そのままをさらけ出すことなく、文芸的香気にまで沈潜させたことにあり、殊に私は、「河童天国」をはじめとする連作に感銘を深くする。

冒頭の句は「孤独地蔵」の七句の中の一句。

孤独地蔵花ちりぬるを手に受けず
孤独地蔵誰がかぶせた子の帽子
孤独地蔵お玉じゃくしが梵字書く
孤独地蔵悲劇喜劇に涸れはてし
孤独地蔵うつつに見つむ日ぐれがた
孤独地蔵月したたりてなみだするか
孤独地蔵いよいよひとり歩むべし

作者は孤独地蔵と全くの一体ではなく、主観客観ないまぜの場で独自の世界を描出する。

「涸れはてし」と述べて暗くなく、全体の印象まこと地蔵のお顔のように茫洋として明るく稚い。そして「ひとり歩むべし」と自問に自答を返す。

春の池の汀はお玉じゃくしの群れが経文を書き、寂光の境地を現出するのであるが、次の古句（柳多留　六篇）も感性は鋭い。

燕（つばくら）ハぼん字のやうにとんで行

愛咬やはるかはるかにさくら散る　時実　新子

髪と汗ばんだ皮膚の匂いが、卓の上の花の強い香を混じて、この不意に立たされた暗闇を、海のように変えていた。その中に溺れ入りながら、恭吾は、濡れた唇の柔らかく、燃えるような抵抗を知った。歯が、かちかち鳴

る音がして。

右は大仏次郎の小説「帰郷」の一節で、当時二十二歳の私は歯の鳴る描写に驚いたものだ。愛咬の二字に接したとき、往時のショックがいきなり甦ったのである。

鑑賞者によれば、犬猫をはじめとする動物の交尾時の姿勢をイメージする者もあろう。すこぶる現実的な語句である。

その上句に対して、中七下五は夢幻の世界に息づく。しずごころなく散るさくらは遠景で、ほのかな色合いを匂わせる。これは恍惚の余韻と、万象の行きつく必滅との交響楽だ。

愛咬は諸橋轍次著大漢和辞典にない新子創造の語だが、古語と同じ存在感を備えている。

(4)

旅役者誰の位牌か一つ持ち　　西田　当百

旅から旅へのはかない旅役者の哀愁が、一つの位牌で極限にまで表現されている。

それは親のものとも子のものともわからず、忘れ得ぬ女のものであるとも、恩ある人のものとも知れないのだ。肌身離さずにいるそのことで、旅役者は人情劇の永遠の主役となる。

法善寺一皮むけてめぐり合い　　桑原　狂雨

〽包丁一本　晒にまいて　旅へ出るのも

板場の修業　待ってて　こいさん

この句は流行歌「月の法善寺横町」を地で行くドラマがある。

法善寺の水かけ不動は、年中水を掛けられ願をかけられて、御身全体青い分厚い苔に覆われている。

キューピットのいたずらから適わぬ恋に泣いた若い二人が、人生経験を経て偶然に巡り合ったのが、この不動さんの前であった。

人間一皮むけるには、言うに言えぬ苦難の歳月が潜んでいる。

流れ者只の単でございます　　小池　鯉生

前掲の二句が、人生のドラマ性を客観的にしっかり見詰めたものであるのに対し、これは作者自身を人前に曝したドラマである。

喜劇か悲劇かは、その人の生きざまによるし、また鑑賞者の生きざまにも左右されよう。

鯉生の一生は波乱万丈だった。

小泉信三の書生、ぐれて賭場を渡り歩き、戦後の商店街の再建、療養生活、倒産し東上、浦和で再起といった風であった。

それの象徴のような一句がこれだ。

昭和三十九年頃だったか、北浦和の新築の家に、ふあうすと社同人数氏と訪ねたことがあった。蔓バラが咲き、典姫という名の大きい犬を娘のように育てておられた。

人間の転げる音と夜が一つ　同

友だちの殖える早さも流れ者　同

(5)

盃を挙げて天下は廻りもち　村田　周魚

古川柳の人事句は、高番・中番・末番と三様に分類されている。この句の素材は、古句でいう中番でありながら高番句の格調を備えている。祝儀の句と解せられることもあってのことだろう。

天の配剤は凡そ平等、この世の手順もギブアンドテークがよろしいと言うのである。いつまでも俺が俺がで片寄ってはならないと。

五月の空のようにおおどかで爽やかである。

この句の句碑が昭和三十二年四月七日、上野東照宮に建つ。

これに比べ、同じ酒の句でも次のは常住座臥の中の所産、晩酌のふんいきがあますところなく出ている。まさに中番句である。

二合では多いと二合飲んで寝る　同

虞や虞や汝を如何せん四十八　　西尾　栞

四面楚歌の語の由来となった西楚の王項羽と漢の劉邦との垓下の戦でのこと、追い詰められた項羽に従っていたのは駿馬と美人であった。項羽は終焉の詩「抜山蓋世の歌」を成し、みずから歌い続ける。

力は山を抜き　気は世を蓋う
時　利あらず騅逝かず
騅逝かず　奈何にす可き
虞や虞や　若を奈何せん

これの本歌取りの句が前掲の句である。
四十八歳といえば働き盛り遊び盛り、男の最も充実した年配にさしかかる。
酒旨し、女うるわし、夜の闇も葡萄色のような。
短歌の北原白秋や吉井勇の世界を大まかに採集して、川柳に仕立てたという風な味だ。
女がそれに応える

あの晩の風邪と女嬉しそう　　同

一人の作者が男と女を詠み分ける。その二句を挙げて洒脱和顔の故人を偲ぶ。
五月十五日は西尾栞忌である。

(6)

寝転べば畳一帖ふさぐのみ　　麻生　路郎

諺に「起きて半畳、寝て一畳」というのがある。人間は足るを知って分に安んじるものだ、との意であろう。
七月に生まれ七月にこの世を去った情熱の路郎なら、ここで「だが」と言うはずである。
豆粒の存在の人間とて、俺の抱く夢はでかいと。燃え滾っていると。別号を納音からの霹靂火や不死鳥とつけ、色は朱を好んだ。私が師に初めて会ったのは昭和三十二年でその年の七月古希のお祝いがあった。師に一番にお似合いの花は紅薔薇だとその時に感じた。

酒は日本酒党だったが、なにかにモダニズムが身についていた。晩年になり

老人におもちゃなしバラの前に立つ　　同

と詠まれたとき私は大いに合点をしたものだ。

画家もそうだが、詩人も年を取ると色彩感が一層鮮やかになっていく。七月の最もロマンを極める七夕の夜に星となった師は、最高のロマンチストに違いなかろう。

たちあがると　鬼である　　中村　冨二

革新川柳を認識せねばと思わせたのは、この作者の句に接してからだ。山頭火の俳句にも言えることだが、自由律で殊に短い句、内容を削り削ってシンプルなのは、鑑賞側にも人それぞれの過ぎ来し方の体験に左右されるものがあり、興味をそそる。この句も私の場合、特別な感性の働きで、歌舞伎の「土蜘」の舞台を想起する。

蹲った影が立ち上がってくるり振り向くと、異様な雰囲気に観客はのまれる。それは尾上松緑扮する僧形の蜘蛛のもののけが、病に臥す源の頼光の寝所をうかがい、花道の出から一切瞬きをしない。「これは凄い」と感じたものが、一読この句の鬼に直結した。感覚的共鳴といえる。

では私のシッポを振ってごらんにいれる　　同

この句は長い形の自由律である。冨二には虚無的な性格らしい句が多く、この句も自嘲と取れぬこともないが、私は弱者と見せかけて、その実、裏にしたたかな自負を感得する。

別号冨山人、古きも充分理解通達した上で革新の花を咲かされたのであろう。

(7)

花火黄に空の重心全く西　　大山　竹二

西の空に花火が揚がる。黄色い花が飛び散る明るさに比べて、東の方角の闇は濃い。

観衆の目もすべて西に向いている。かくて空の、地球までもの重心はすっかり西に偏ってしまう。下句は「まったくにし」の字余り。

それがまた歯切れのよい肯定なので、句自体の自負とさえ受け取れる。斬新な句だ。

中尾藻介、岩井三窓、寺尾俊平、時実新子や私たち大正から昭和初期に生まれた多くが竹二の句に影響を受けた。

かぶと虫死んだ軽さになっている　　同

一夏のこと、祇園神社の縁日で買って来た甲虫を近所の子と育てていた。虫篭に入れ、砂糖水をなめさせていたのが秋口に死んだ。そのとき出来たのがこの句であると、あや子夫人から聞いた。

肺結核で長期の療養生活を強いられ、常にいのちと対決していた竹二の死生観の一端が痛々しく迫る。次の俳句とは好対照。

ひっぱれる糸まっすぐや甲虫　　高野　素十

仏ただにこやかに居る恐ろしさ　　西島　〇丸

西島〇丸は東都四谷、西念寺の和尚である。この句、私などは最も安直に解釈して

「若し妻が仏のようなたたずまいで、夫の裏切りや無理無体にも大らかな態度を崩さずにいたら、それは不気味なことに違いない」と理解するのが関の山で、仏の慈悲はもちろん、高徳〇丸和尚の作句の真意もはかり難い。

私はただ次の有名な俳句

せきをしてもひとり　　尾崎　放哉

の悟りすました風な寂寥感よりも、人間臭くて好きだ。川柳と俳句の違いなのであろう。

泳ぎつく蛙蛙へ這い上り　　〇丸

亀の池の亀も這い上ったり上られたりしているが俳句の趣に近く、この句蛙ゆえ川柳味を存分に発揮できた。

(8)

目に見えぬ霧におもたい世の姿　井上　信子

『川柳人』昭和十二年七月号に掲載の句。その月の七日には盧構橋での銃声一発から日華事変が起こっている。言わば戦争前夜の句で、同誌九月号では次の二句が目に付く。

ここだけはあらそひのない墓の秋　同
軍歌と萬歳と千人針の夏の街　同

井上信子には外にも知られた佳句は多いが、国民を戦へ駆り立てようとする陰鬱な方途に喘ぐ庶民の姿を、スケールを大に洞察したこの句に焦点を当てたい。

そして戦の始まるや、ただちに街頭風景を写し、争いなき境地を提示して平和平等を訴える。それは句の内容以上に、川柳の精神を体得した、肚の据わった器量の賜であると畏敬の念を抱かされる。

初日キラキラ網は殺生忘れてる　麻生　葭乃
ちょぼちょぼちょぼちょぼちょぼと咲く女郎花　同

麻生葭乃は本来感性の鋭い句が持ち味であったと思われる。有名な句に

飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ　同

などがあるが、これは主宰者の伴侶としての傘下への一つの指針のよう句で、路郎の「俺に似よ」の類型でしかない。

信子を社会派とすれば葭乃は生活派だ。

へちまへちまここは行水するところ　同
初蚊帳の中はシャツ着たキリギリス　同

とセンスよく暮らしの周辺で遊んでいる。

霹靂火の路郎には長流水の葭乃に優る人はなかったと私には思える。

破れ鐘和尚の剣花坊と無産党代議士、爆弾などの異名をとった路郎を支えた二人の女流は、内助どころではない功績においても共通したものがあった。

夫の死に際しての感動的な句にも頭が下がるばかりである。

一人去り二人去り佛と二人　信子
書類焼く火は落城の火とも見ゆ　葭乃

(9)

貧乏をしても東京おもしろし　小谷　源氏
大阪は糶かれかけてもよい所　高橋かほる

右の二句を比べてみると「東は東西は西」の味がある。前の句には、貧しい長屋暮らしの身でも天下のお江戸の住人、「すっぱりと面白おかしく生きてまさあ」といった伝統の建前が感じられ、後の句は、現実的な大阪らしい。糶かれるは言うまでもなくお上りさんの驚きではなくて、大阪人の大阪礼賛なのだ。

糟糠の妻を忘れるあぶく銭　源氏
うらぶれてなおお茶だけは吟味する　同

昭和三十年代の後半、東西川柳界の交流が繁くなりはじめた頃、筆者は宴席で源氏氏の余技に接したことがある。背広を脱いだだけで「奴さん」を踊られたが、その腰の据わり方、両手でつくる拳のかたちにただならぬ格調を感じ、江戸の下町文化の程が偲ばれた。

さて、この二句も粋人らしい味で、宵越しの金は持たぬという東京人の面目が察しられ、江戸っ子としての矜持も表現されている。

最後の最後、「お茶だけは吟味する」気分は上方にもあり、殊に京都人に当てはまるところであるが、趣味人のプライドが垣間見える。まことに江戸木遣りの末裔である。

花道は相合傘の幅に出来　かほる
辻うらが出そうに思うもなかなり　同

路郎門の中でも個性的な句で鳴らした一人で、川柳仲間の素人一座の立女形、芝居好きの変わり者である。

戦後もまだ

へ淡路島通う千鳥の恋のつじうら

と提灯をさげた辻占売りの少女がいた宗右衛門町辺りのムードを持った贅六であった。

路郎の標榜する「川柳は人間陶冶の詩」をそのままに、この人の句も正真正銘を通している。

(10)

万歳とあげて行った手を大陸において来た　鶴彬

胎内の動き知るころ骨がつき　同

鶴彬が川柳界に登場したのは大正十四年で『影像』にはのっけから尖鋭な句語を駆使した作品と評論をものしている。

昭和十二年のはじめ、戦時色が迫っても、

もう綿くずも吸えない肺でクビになる　同

などの反体制の句を発表し続けていたが、十月には初掲の作品をはじめ六句が『川柳人』に掲載される。鶴の最後の作品であった。

同年九月十三日応召入隊、即日帰郷を命じられ、十二月三日出勤した通信社で特高警察に検挙された。

翌年八月、留置場で赤痢に罹り、東京の豊多摩病院に入院、九月十四日死去、二十九歳であった。

川柳活動八年余り、短い革新への闘争の間の諷刺作品は明快そのもので晦渋を廃した。

一句一句、抜き身の刃の感を覚える。

私は鶴が大正十四年『影像』の創刊二周年記念号に発表した中の一句に、視点が動かなくなったことがある。

可憐なる母が私を生みました　堀口　塊人

満州国の建国宣言は昭和七年三月一日、犬養毅内閣の時であった。元号は大同、執政・前清国宣統帝溥儀、首都を新京に定める。

満州の切手は溥儀の肖像や古塔のデザインの種類が印

象に残り、料金により色分けがなされていた。

この句、戦後その古い切手に接し、懐旧の情措くあたわず、商社マンとしてしばしば往来した旧地の思い出が甦る作者であった。

国際連盟からの満州紛争リットン調査団あり、日本国内の農村恐慌の立直しを図るため満州への分村移民あり、満蒙開拓青少年義勇軍まで組織されたが、沃土へは程遠き感あり、満州国自体十三年の夢で、色褪せた古切手が残るのみ。

(11)

頬冠りの中に日本一の顔　　岸本　水府

十二月が近づくと上方では「京の顔見世」の話題で持ち切りとなる。東の荒事と西の和事が妍を競うからである。

この句は初代中村鴈治郎の当り役、紙屋治兵衛の舞台姿を写したものだ。妻と二人の子がありながら、恋仲の北新地の遊女小春に逢いに行く。人目を憚る頬冠りをして花道を

へ魂ぬけて　とぼとぼ　うかうか…

竹本の義太夫節の通りに辿るのだが、客席は水を打ったようにしずまり返る。

大阪の夢七三の鴈治郎　　**食満　南北**

紙治は花道の七三のところで片方のぞうりが脱げるのだが、それにも気がつかぬほど思いは小春に傾いてしまっている。

この花道七三での演技が天下一品で、芸裏（花道の左側にある狭い客席）の客にも存分に見てもらえる演出であった。そして、この辺りではもう大向うから〝日本一〟のぞめきが聞こえる雰囲気になっている。

頬冠りいまだに口をきらぬなり　　**近江　砂人**

演芸一般、落語や浪花節もそうだが、観客はその「触り」に最も関心を寄せるもので、熟知するほど期待感も強い。今か今かと高揚した気分を充分に言い仰せたのが

「いまだに口をきらぬ」なのである。

鴈治郎は美声とは言えずむしろつぶれた声だったが、独自の節回しでファンを魅了した。

「いま向うの煮売り屋で、顔は見えねど善六太兵衛、高声あげて小春がうわさ、侍客で河庄方。どうぞ首尾して逢いたいものじゃなぁ」

演者の吐息が客の溜息に変わる。

淋しさはこの花道のあのあたり　　松本　波郎

鴈治郎は萬延元年に生まれ昭和十年二月一日この世を去った。

水府が日本一の顔と言い、南北が大阪の夢と賛えた名優には多くの悼吟が寄せられた。その中でこの句は「この」と「あの」の的確な使い分けで、花道の七三での二度と見ることの出来なくなった不滅の絵姿を惜しむ。

(12)

凡聖一如元旦のこころ知る　　麻生　路郎

凡聖一如（ぼんしょういちにょ）は仏教語で、広辞苑では「事相に違いはあっても、理性（りしょう）においては凡夫も聖者も同一、平等無差別であるということ」とある。

つまりは有為転変のこの世の姿（現象世界）も、万有の不変の本性、真如に繋がるのだから、新年を迎えた気分は凡人も聖人も何ら変わりなどありはしない。元旦の空気に接したら、等しく身の引き締まる思いがするということであろう。

一つの個性的な言葉の持つアトモスフェアは、句の厳しいリズム感と相俟って相乗的に句の格調を高める。この句には塵も止めぬ明鏡のたたずまいを感得する。

義理がたい人に元日起こされる　　西尾　栞

大阪は商人の街である。元旦の挨拶には何を措いてもという人がいるもので、殊更主家への義理立てを大切にするのだ。

正月ぐらいゆっくりと寝ていようと思うのに起こされて身繕いを整えねばならぬ。起きたついでのことに近く

の氏神へ初詣というふうになりそうだ。

お元旦ばかりは小原の庄助さん　須崎　豆秋

〽朝寝朝酒朝湯が大好きで、それで身上つぶした　小原庄助さんさながらの元旦だった。

ユーモアの権化豆秋は、がんたんのゆとりをたちまち「もっともだもっともだ」に直結することの出来る感性の持ち主なのだ。

でかんしょ節の「あとの半年や寝て暮す」と同様、上方人豆秋のおとぼけぶりは徹底しておおどかである。

寝正月鬢をあたって松がとれ　塚越　迷亭

松の内は関西では正月十五日までをいうのだが、東京では七日までで松がとれる。

年明けをゆったり過ごしたけれど、髭剃りを境に本人も世間もすっかり様子が変わり、常の生活に戻る。

行住座臥に即しての句作りに徹した作者らしい句である。

(13)

年上の女とくぐるてっちり屋　菊沢小松園

年上の女といえば如何にも官能的で、中って運が悪ければ死ぬようなふぐの毒と、何処か一脈相通ずる陰影を引きずっている。

食い道楽の大阪人はふぐには殊の外眼がなくて、大阪を主とした京阪神のふぐの消費量は全国の半分以上を占めているという。

菊づくり有田の絵柄透けて見え　野谷　竹路

この句は「ながや」の句会で河豚という題での上位入選作である。

関東地方でも一般には「菊づくり」という呼称はないが、あの大皿に一枚一枚美しく並べられた薄手の刺身は、たしかに菊の花びらのように見える。洒落たネーミングだ。

有田焼の皿もふぐの本場らしくうなずける。

ふぐ料理人の資格を得た第一号は、日清戦争の講和、下関条約の結ばれた舞台、春帆楼である。

ひれ酒はしのび逢う人待つ酒か　　近江　砂人

ふぐの味はてっさが一番であろうが、骨の付いた身をから揚げにしたのもうまい。白子の塩焼きもとろりと口に溶けてひれ酒には欠かせない。一人浅酌低唱しながら彼女の駆けつけるのを待つのはまことに男冥利に尽きる思いがする。

てっちりや路郎門下の生き残り　　西尾　栞

路郎忌や美濃の大八備後の亜鈍　　同

という句もあり、路郎忌には東から西から路郎ゆかりの柳人が集まって故人を偲んだ。

また、何かの記念川柳大会を催した時にも遠来の大八大人を囲んで、栞、板尾岳人や私らがふぐ鍋で師を思うのが例となっていた。

次の作者は神戸の住人、ふぐについ後ずさりをしたのである。

ふぐ料理すわり直して笑われる　　鈴木　九葉

ふぐ提灯逃がしてやれば泳ぎそう　　高橋　散二

散二のユーモアは小肥りしていて温かだ。この句も私には作者の自画像のように思える。

(14)

雪の字が三つ並べば雪のよう　　白井　涼花

中谷宇吉郎の名著『雪の結晶』を読むまで、私はずっと子供のときに覚えた「雪の結晶かならず六角」というカルタの文句を信じていた。それ故、この句を見たときには作者の感性をストレートに受け入れることが出来た。

雪の字を二つ並べて、その上にもう一つちょんと載せると、その形は顕微鏡の中の美しい結晶に通ずるからである。

雪国の赤いポストを探し当て　　三條東洋樹

雪の深い温泉地であろうか。旅信を書いてポストの所在を聞く。煙草屋の角と教えられたがそのたばこの看板も雪に隠れて見当らない。

ようやく半分ほども雪に埋もれた寸足らずのポストに出会う。こんなに目立つポストなのにと白と赤のコントラストの鮮やかさに、北国の抒情を感じるのであった。

ポストは言うまでもなく昔の丸いポストでなければならぬ。

新しい傘を雪の日におろす　　小出　智子

この傘は蛇の目である。新しいから開くときにはバリバリと音を立てる。また油紙特有の匂いもする。匂いといえば雪には匂いがある。白い冷たい清浄な匂いである。これは視覚から入ってくる匂いだ。臭覚からの匂いや耳からの音を総合して、この句には微妙なアトモスフェアが感じられる。透明艶冶な気だ。

殺伐な退廃した都会に、つい先達てまではこんな生活の潤いがあった。

雪達磨春を迎えに行ったきり　　土橋　螢

春にこがれて迎えに行った雪だるまは、あっという間に解けてしまった。

「春なんか探しに行くからさ」と言われるに違いないが、雪だるまだって身のほどをわきまえぬときがあってもいいではないか。

私はこの句を一読したとき、太平洋戦争で亡くした肉親をはっと想い起こしたので、後日そのことに触れたら、特攻隊生き残りの作者は、にっこり頷かれたように思った。

(15)

春がまずそうっとともるいぬふぐり　　渡邊　蓮夫

犬ふぐりの小さい花に関心を抱く人はすくない。薄青色の、まるで春の空に近い色のせいかも知れぬ。

家の庭の隅にも咲いていて、道に出ると道端に、それは到る所でひっそりと咲いて花野に続いている。可愛い花だから群れをなしていても「そうっとともる」というにふさわしい風情だ。この句、春だけが漢字である。散歩の犬とは仲好しの花だろう。

くたびれた羽織の紋に梅香り　　**泉　淳夫**

梅花の凜としたたたずまいを人物や風景に対照させた佳句は多いが、この句は生活の陰翳に触れていて、作者独自の個性と作句の幅の広さを偲ばせる。

柳原涙の痕や酒の汚染　　**吉川雉子郎**

の哀感に梅の矜持を配することにより情感の姿を一転させた。

桃の字が思い出せずにおかしけれ　　**須崎　豆秋**

この作者の常人との感性のずれは、私にはさしたる差ではないように思えるのだが、そのいささかの差がユーモアに向けられると、天衣無縫、さまざまに花開く。森羅万象の中の一字、桃、これが豆秋の真骨頂であると思う。

夕桜とんぼがへりがしてみたし　　**麻生　路郎**

菖蒲池遊園地にて、の前書がある昭和五年の作。春爛漫の候、家族連れに賑わう場所で川柳を広めるキャンペーンをしたとき、子供たちの元気な姿に童心を触発されたのだ。

路郎は、若草山の山焼きの日などにも、努めて川柳を市民に宣伝した。

(16)

暴風と海との恋を見ましたか　　**喜多　一児**

大正十四年五月五日発行の「影像」十九号に掲載された、鶴彬の柳界へのデビュー作の中の一句である。

強烈な反戦歌で有名な鶴の生涯を象徴しているように思える。

暴風と海、想像するだに壮絶な取組だが、「恋を見ましたか」に作者の心根のやさしさを垣間見る。

眼の軽く〳〵なるまで嘆きたし　同

同誌七月五日発行にあるこの句も独自の肌合いの表現だ。鶴十六歳頃の作なので実際に恋の過程にあったのではなかろうか。不明な私は事実を知らないが、大正年間にしては新鮮な句をのっけから発表したものと、その才に感じ入る。

子煩悩まだその上にこどもの日　福島　郁三

二人の女の子のあと男が生まれたときの男親の感激は言葉に尽くせない。隣近所で一番大きく目立つ鯉のぼりを立てるぞと思ったりする。

そのような気分を、こんなに自然に分かりやすい言葉で、しかも有効に表現した作者は番傘のベテランの一人。鑑賞者それぞれに具体的な子煩悩振りを想像させるのも行き届いた手法による。

母の日に母と見上げるつばめの巣　平賀　紅寿

近江砂人の「佳句佳吟一読明快いつの世も」の句の通り、前句もこの句も簡潔ながらしみじみとした味を醸す。ともに肉親愛という真実味のせいと思うが、川柳で愛を謳う時代だった。

燕の子育てのまめまめしさを母と幼い娘が心を通わせて見守っているのは、人間形成への尊い姿である。

こどもの日も母の日も、青葉の五月にうってつけの嬉しい日だ。

(17)

帯揚げがほどけたやうな藤の花　川上三太郎

中年の女の胸元に藤の花房が垂れるさまは艶冶で、「佳句佳吟一読明快」である。

子が出来て川の字に形りに寝る夫婦

私は柳多留初篇のこの句を川柳の原点のように思うている。形には「ように（やうに）」「ごとし」「似て」と同様比喩に通じる。

この直喩法を用いた手段は、誰しもが初心時代に試みるもので作句の基礎の一つだが、これ程作者の力量を計れる目安は他にない。つまり直喩の句の上手な作者はすべてに上等なのだ。三太郎はその典型で、右の句のほか

さぼてんにひとり娘のやうな花
鯛ちりの骨飛行機が落ちたやう

なども傑出している。当を得たうがちの句、つかず離れずの微妙さ、意外性の成功した味わい分けて鑑賞したい。

巣作りの燕に気付き剰銭を待ち　藤島　茶六

この作者の句集を見るに東都の川柳家らしく、課題でまとめたものが多い。田植えを終えた田園風景の中で、子育ての燕に関心をそそられたのは、たばこ屋の店であろうか。燕の気ぜわしい出入りをしっかり受けとめている。

これが「芸人」という題での一句

芸人の本名を知る配達夫

となると、下語の変化で「死亡欄」「選挙戦」の古川柳的没個性の句になりがちである。とは言え、作者の代表句

身を潔く持つ天皇と同い年

にしてからが、「偶然」という題詠であると知れば、題詠に対しての認識を改めて検討致したいと今更に思うのである。

ゴルフする友だちがみな詩を忘れ　礒野いさむ

文学青年であった仲間がそれぞれに社会へと袂を分かち、戦後復興の尖兵として活躍し出してから、所得倍増エコノミックアニマルの路線を突っ走る。社用族やゴルフウイドーの語の生まれた時代である。

川柳でほそぼそと文芸の領域を守り続けた作者は、孤影ながらも分身のような多くの句を残した。

(18)

さても〳〵火の部にありぬ燕（つばくらめ）　木村半文銭

つばめを描いた象形文字を見ると、その下部は二つに分かれた尾の形であり、火ではない。しかし、辞典では火部の十二画に掲載されているので、作者はそれに関心を示し、詩心まで喚起したのであろう。

そして、上句の「さてもさても」の惜辞を得た。そこが半文銭の力量で、懐疑、矛盾、肯定、悔蔑と複雑な思いを推察させるのである。

芭蕉去って一列白き浪がしら　同

はすでに高い評価を得ているので、視点を変えて別の句を取り上げた。

今回半文銭の句を得たくて、木村半文銭著「川柳作法」を繙いた。巻末に川柳代表句選という項があり、西田当百をはじめとする高名な当時の作家の句が並んでいる。すべて大正時代末までに発表の課題吟らしいのが多い。

薬屋の抽斗四百四病ほど　安川久流美

漢方薬の店には数多くの生薬、薬剤を区分けした抽斗が備えつけられていて、それらを調合したのである。味のある誇張法の句だ。

日本語の妙味は、おのずから五・七・五型にのっとっているのが多く、八百八橋（町）、四百四病など音韻豊かにリズムに乗る。

以下十句余り妙出することにした。

朝顔は枯れて二鉢重ねられ　岸本　水府
俺の子を俺が折檻する大工　麻生　路郎
夜学から帰れば丁稚にて候　椙元　紋太
蠟舟でまてば何所かの果太鼓　松村柳珍堂
伯父さんは紅葉露伴以后よまず　西田　当百
麗さ左へとれば野崎村　川上　日車
昼顔は打ち上げられた傍で咲き　藤村　青明
成金が踊りの情緒崩す也　食満　南北
除隊兵馬に別れの草もやり　本田渓花坊
子澤山四五年夢は見ぬといふ　麻生　葭乃
お妾のたま〳〵つかう糸切歯　齋藤　松窓
敷島を仲居に言へば積んで来る　片山　雲雀
孝行で知られた役者役がなし　川上三太郎
小説に妻と意見が違ふ也　冨士野鞍馬
法善寺三人立って煮へきらず　浅井　五葉

(19)

仏陀瞳をパッと見開き核弾ぜる　大石　鶴子

半世紀以上の歳月が経過しても、八月になると日本人の記憶によみがえるのは、六日と九日の原爆の炸裂である。

愚かな人類はいまだに核実験を続け、昨年パキスタンに続いてインドが成功を治めた。

仏陀の瞳が仁王の目玉となった。『川柳人』昨年の六月号に掲載の句。

作者は剣花坊・信子という両親の後を継ぎ、『川柳人』の発行と、反骨の作句に生きたが、去る五月二十一日幽明境を異にされた。行年九十一。戒名無し、無宗教を通した。ご冥福をお祈りする。

無愛想の家から蝿がついてくる　**白石朝太郎**

『柳都』昭和四十八年六月号に掲載の句。

日本人には骨肉的に仏教の空、老荘の無、儒教の天、これらの混融した伝統が、心の奥底のどこかに生きている。

ということばが添えてある。

きっちりきっちり片付いたたずまいの家ではなかろ

う。雑然としていて、温かみというより隙だらけといえそうな家から蠅が一匹まといついてくる。味のあることをするじゃないかと作者は蠅に声をかけたげである。

わたしは、こういう雰囲気の家から芸術が生まれるのではないかと思う者だ。

異教徒のごとくお金に膝まずく　　同

十二使徒のイスカリオテのユダは銀三十枚でキリストを敵に売った。

この句も昭和四十八年八月発表の句であれば、経済再建途上の日本が、完全にアメリカナイズされて行くのを慨嘆されての所産であろう。

この思いの先端を切った句、

古くとも僕には仁義礼智信　　麻生　路郎

は昭和二十二年の作であった。

蟬三日蛍二十日の尊厳死　　谷垣　史好

わが国の医学の発達の目覚ましさは、世界一の長寿国や最近の臓器移植の成功例に明らかであるが、反面、その弊害も一方ならず取沙汰されている。その一つにこの句の言う尊厳死がある。植物人間という言葉さえ出来た人類の幸と不幸を考えざるを得ないのである。

(20)

音もなく花火があがる他所(よそ)の町　　前田　雀郎

一人の旅では宿を決め食事をすますと所在無いもので、手すりから川を眺めるぐらいのものだ。そんなとき、向こう岸の家並のまだ向こうの空に花火が揚がる。音の聞こえぬ花火は一層旅愁を深くする。花火でも裏打ちのないことはまことに寂しい。夏の終わりの秋の心、それは愁である。

ガム噛んで古都の秋訪う顔でなし　　三條東洋樹

薄の穂われ放浪の旅ならば　　同

という抒情的旅吟にも秀れていた作者のこの句は、批判の方向で一味違った相槌を打たせる。お行儀の悪い修学旅行生でなくて、日本人の信仰心の欠如への批判、ひょっとして、観光寺社への一矢かも知れない。

雨の松本にて

遠く来て信濃に山のない日なり　　麻生　路郎

前書のある句、昭和十一年九月二十一日、しなの吟社から招聘された路郎は、雨の松本駅頭に降り立った。「遠く来て」とのさり気ない措辞がこの句の味で旅の感慨のすべてを語っているように思える。

川柳趣味展観会松本市大名町の鶴林堂で開かれ、夕刻には翁堂三階で座談を催し、二十名ほどが集ったという。

松本平は晴れた日には北アルプスの常念岳をはじめ、西縁も飛騨山系の山々に囲まれ、爽やかな歓迎を受けるのであるが、雨では如何ともしがたい。これも深い旅愁である。

石曽根民郎は後年再び師の路郎を招き、浅間温泉で共に一泊、歓談の一夜を過ごしたが、次の佳句をものして、先の路郎の佳汁に応じたのである。

師の汽車よ信濃の秋を縫うて行け　　石曽根民郎

こう書いてきて私は川上日車の句を思わずにはいられない。

信濃路

宵は酒浅間の煙けさ見たり
信州小諸ただそれだけでよし
うれしくも町の櫓が見ゆるかな
片泊まり信濃の色は膳の上

(21)

秋となればひとしお酒の味が増す。

「白玉の歯にしみとおる秋の夜の」、と若山牧水は詠む。

川柳の六大家の酒の句を見ると東の横綱は

酒とろりおもむろに世ははなれゆく　川上三太郎

であろう。羽化登仙の気分になるまで酔い痴れる。しかし「酒に酔い本性を忘れず」で、飲むほどに透徹し、深く慮る器であったろう。

二日酔鎌首というものをあげ　同

などは、まことに自己を見通し切っている。

「三太郎君とはよく飲んだ。二人で飲んだ酒やビールの瓶をつなぐと、浜松辺りで東海道がつながってしまうだろう」と述懐していた西の横綱の

青春を飲むべく生れ来し如し　麻生　路郎

もスケールが大きい。路郎は生活派だから

まあがれ女房の風呂は長いから
のみにきた友に家賃をきかれて居
寒がりがつまみ出してる黒の石

こういう句を並べると、しみじみとした庶民の肌合いが感じられ、「酒は愁を掃う玉箒」の趣で、ムードを愛した人柄が推測出来る。

村田周魚の酒は本誌の昨年六月号で述べた。実直な「二合独酌型」と言えそうだ。

屠蘇の座にきのふ思えば遥かなり　前田　雀郎
良い酒にされ良い酒にして帰り　同

雀郎のには「酒に十の徳あり」の諺を思わせる。良質の酒を身に合うほどにたしなむ風情で、酒を天の美禄と言うが、その言葉に当てはまるけじめを感じる。

盃は眉毛の前でありがたし　岸本　水府
美しい指みな動く酒のかん　同
人の世に酔ざめの水知る女　椙元　紋太
酔うていて旨いうどんが分かるらし　同

水府と紋太は句の上から見て、酒を受けつけなかったか、たしなんでも極少量でなかったかと思える。

水府の二句のよろしさ。前者は乾杯、献杯を交わしている姿、後者は白魚の指の女らしい科（しな）がそれぞれ目に見えるようだ。

また紋太の句は、酔うのは皆他人、本人は的確な観察者の位置にある。お饅頭屋さんだから甘党にこだわられたのかも知れない。

(22)

味噌汁がうまいぞ千尋君起きろ　　田中　好啓

田中好啓さんの遺句集がこの秋に出る。

故人の句の抄出作業をしていて前掲の句に出会いハッと思い当たるものがあった。

調べてみるとこの句は平成元年度の「ふあうすと年鑑」の七句のうちの一句であった。

ふあうすと副主幹、室田千尋さんの死は、昭和六十一年十月五日、これは柳友であり、雀友である千尋さんへの弔吟ではないか。

徹夜に近い仮眠のあと起き出して軽い朝食を摂り、戦闘再開するのが私たち麻雀仲間のしきたりで、「いつまで寝とるんじゃ」と一斉に叩き起こしたものである。それを死に重ねる。

このような友情があろうか。

こんなやさしさがあろうか。

言霊の力はいつまでも新鮮に死者の魂を呼ぶことを知り、作句はかくあるべしと感銘を深くしたのである。

人の世は祇園町から建仁寺　　大島無冠王

これが浮世というものか。色街に隣して寺町の多いのはさながら色即是空の縮図であろう。

京都祇園一力を南に折れて花見小路をたどると、軒並みお茶屋が続き、夜の弦歌を想像するだに艶めくものがある。

左手に女紅場（舞妓の学校・歌舞演場）のあるところは、もうそこに建仁寺の入口が見える。

建仁寺の開祖は栄西禅師、建仁二年に建てられた臨済宗建仁寺派の総本山で、俵屋宗達作風神雷神図が寺宝にある。

京都市民は、けんねんじさんと呼び慣わして境内を通り抜け、親しみ深く接しているが、少し東へとってまた南へ下ルと安居神社も近い。

この辺りの道は高瀬川の流れる木屋町とともに、男女のペアで散策するにふさわしい道筋なのである。

秋の夜の雌に喰われてしまいけり　同

(23)

精神一到酒は欠かさず　桜川　不水

作者は麻生路郎門下の一人、「精神一到何事か成らざらん」の諺を踏まえ、好きな酒を一日とて欠かすことはないと、揚言する。

四字熟語の用い方は申し分ないが、このような酒は、えてして体に災いを及ぼす。

悪運つきず資本家の端　路郎

書斎はいいがゐた事はなし　同

しらじらしき悔みの淀まず　同

師路郎の短句に類した七・七型で、如何にも歯切れがよい。

へそくり溜めて唯我独尊　不水

十二月飲んで来られて腹が立ち　佐藤　正敏

忘年会の時節、午前様が続くと、女房は嫌味を言わざるを得ず、けわしい顔になる。

私にもお正月へのこしらえがあるのにと、その忙しさを強調したいのだ。

男の付合い酒は、時につらくもあるのだが、この句は内容のおかしさ以上に、作者の作句心理に思い及ぶと尚更おかしい。

あるとこに金がもどって十二月　内藤　凡柳

十二月という月は金銭に関して殊更庶民の哀感が濃い。

低金利のせいで箪笥貯金の額は膨大だと言うが、長期の不景気に小商人にはそのような余裕はない。

是小判たった一ト晩居てくれろ　　古川　柳

とちっとも変わりはない。

銀行は貸さず、神仏の前でも埒は明かぬ。一九九九年は苦の果てなのである。

教会も救ってくれず年の暮れ　　前田　伍健

浪人へ来年といういい言葉　　志水　剣人

一浪二浪という語が学歴偏重の世相をそのままに表現する。

暗い木枯しの歳晩を抜けると、新しい春がそこにある。せめてもの励ましのような「来年」という言葉に期待して、大きな夢を捕まえよう。

十二月うれしい風も少し吹け　　麻生　路郎

Ⅲ

寺尾俊平第二句集『風の中』解説

大理石の風の中で

寺尾俊平さんは善魔です。それ故、俊平邸が新築落成したとき、私は勝手なことながら善魔堂と名付けました。文芸をたしなむ者は、魔物でなければなりません。芒洋たる覇気や多分の狂気のあった方がよいとの意味合いです。魔物といっても陰々滅々の悪魔では、庶民の闊達な生活や心情を表現する川柳には向きません。暢適にして鷹揚な善魔がふさわしいのです。

句集は題して『風の中』とあります。昭和六十三年発刊の句集『葦川』にも、

風の中思うことなし掌をさらし

風の中一つ揃わぬ鼓笛隊

という句があり、「風の中」は俊平さん生涯のテーマの一つであるように思えます。

風の中亡母を搏ったる亡父の記憶

俊平さんの父君は江田三郎氏らと社会主義運動に参画された方です。明治人間の固陋に加え、思想上の悩みからか、時に妻を打つことがあったのでしょう。ここで俊平さんから問わず語りに聞いたご両親のことに触れます。

母の名は、あきの、婦徳と言われた三従の道を歩いた人でした。ここ半世紀前の日本の子沢山の家庭は、母は四六時中家事にかまけていて、年長の子供は弟妹を背負い、自ら遊びながら子守をしたものです。亡母三周忌に集まった一族は敬虔な祈りの後、誰からともなく、墓前で童謡「赤とんぼ」を歌いだしたのです。母が子守唄のように歌ってくれた歌を。

私の書斎の葉書の束には、俊平さんからの便りが沢山

あります。その一枚の日付けは昭和五十七年八月十七日、文面は、

「麻吉さんもよろこびましたでありましょう。おばあちゃんもでしょう。こころ満ちて疲れました。みな様によろしく」

という短いものです。麻吉は俊平さんの父君の名、おばあちゃんは私の亡母のことです。

父君の遺骨を故郷の川に流し、とって返して盆には私の母の仏前で麻雀の会を持ったことを思い出させます。

麻吉さんは土佐の生まれ、幼少の頃から仁淀川の上流で魚を捕り、山を駆け回って育っただけに、遺言に「故里の川に骨を流してほしい」とあったそうです。

その日、俊平さんと私が乗った車を海地大破さんが運転して、仁淀川を縫うように遡行しました。川はいよいよ細く水は澄んできます。深い山の中の橋のたもとで車を止め、俊平さんが橋のまん中へと歩を運びました。大破さんと私は少し離れて見守ります。その時突如として黒雲が山を覆い、大粒の雨が降り出しました。俊平さんは小さな容器の蓋を取り、遺骨に仏の好きだった持参の酒を掛けます。「これ見て、これ見て」、なんともいえぬ声に私たちが近づくと、骨がボーッと朱を帯びています。「骨が酔うとるきに」、大破さんが気持ちを押さえて声を上げました。二人は雨に濡れ、涙まみれの顔で、骨を橋から投げる俊平さんを見つめます。骨はすぐに川底に沈みました。「魚に食べられるか、太平洋まで流れて行くか」、俊平さんのひとり言を何べんも聞きました。

それは三分ほどでしたか、五分も経ったのか、空は豁然と晴れてすでに青空が広がっています。般若心経を唱えるうちの、この天の演出に、三人は夢を見る顔付きでいつまでも身じろぎもしないでいました。

晩学の綿畠など歩むべし

この句は俊平さんの祖父の地につながる深層の意識から生まれたものと思えます。フォスターの名曲、オールド・ブラック・ジョーを想起すると同時に、俊平さんが思慕の人であり、思慕される人だと改めて思い知るのです。

綿畠の彼方、夕映えの果てには、かすかに〝わが名〟を呼ぶ風の浄土が見え隠れします。

やあ来たか来たかと蟬と石ひとつ

ひとつの石は故山の墓石かとも思われるものの、私にはさる遠い日の思い出が甦ります。

当時そこそこに句が作られようになって、興に乗った時期でしたが、俊平さん、窪田久美子さん、私の三人は、京都東山の寺を巡拝して、清水坂で楽焼をたのしみ、夜、平安川柳社の月例句会にでました。席題に連想吟なるものがあり、∨の形からイメージを広げ、定着させて一句を為すものでした。披講された作品には、リボンがあり、鳥が詠われていました。俊平さんの句が天位で、

犬死の雑兵雨が降っている

と、雑兵の陣笠を想作したものでした。

また、ある年に同行した北国の大会でも連想吟があり、「俺は天位を取るよ」と私に宣言、その言葉通りになりましたが、

「このような句は、まことしやかな句であって、まことの句ではないからなと」つぶやいていたのです。

ひらかなのわの字に病んでいる妻よ
茅の輪くぐって夫婦の俗な願いごと

俊平さんが「わ」の字に病んでいると表現する奥さんは、おおどかなまるさとあたたか味をそなえておられます。失礼な言い方になりますが、女優の一条さゆりと間違われるという美形です。俊平さん一家は、俊平さんが口癖のように「うちのかみさんが」という、この明子夫人と、長女の千江利さん、次女の里会さん、それに、ペルシャのネロとお染とで長らく構成されていました。「お父さんのお友達は家族の友だち」の心で私たち川柳仲間をもてなして下さいます。「ますかっと」の第三雑詠の作品評の場で、俊平さんが家族の消息に触れるのを、師の川上三太郎の編集後記のそれとは違った味で、私は頬を弛めて読みます。

俊平さん夫婦は出雲大社にお参りに行くことが長年続いていて、願をかけるというのはこのようなものかと思わせます。また、俊平さんは、神様とも絆で結ばれてい

る人だとも思わせます。私には、瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）と木花之開耶姫（このはなのさくやびめ）が赤い愛車を駆って出雲路を天駆ける姿にみえるのです。

秋ざくら革命好きな銅版画
マルコポーロが雑踏に消ゆ十二月
無為無策倫敦塔に在るごとし

俊平さんはまた、会うたびに私の芸術への知識を啓発してくれます。それは、絵画・音楽・陶芸など多岐にわたっていて計り知れないものですから、顧みて、ピカソのゲルニカなど一緒に見てはいない作品まで、共に鑑賞し作品の成り立ちや歴史を説明して貰ったように錯覚します。音楽に関しての造詣の深さは格別です。毎年の五月二十日の俊平さんの誕生日前後には、演奏会に行くことに決めていました。ニューヨーク、フィラデルフィア、ボストン、ウィーン、ベルリン、その他一流の交響楽団の演奏を聞きましたが、俊平さんは演奏の終ったあと、「もうこれで死んでもいい」と必ず言うのでした。劇場を出てからの道筋は、人影も俊平さん自身の影もエトランゼの雰囲気になっていたものです。

俊平さんの書斎は、句集『葦川』の扉の写真で分かる通り、思想集をはじめ、社会・宗教・文学・趣味と広汎な種類の本で埋められています。それ故に、城にいるような充実感と獄舎に閉じ込められたような孤独感がないまぜになった思いがするのでしょう。「ロンドン塔に在るごとし」は、書斎でのひと時の、俊平さんの屈託だと受け取られます。

傲然と食うばかりなる老いた獅子よ

世の中には生きるための最低限の食物以外、関心を示さぬ人もありますが、私はそうではなく、恥ずかしながら体面もかなぐり捨てたという姿で、食べることに執心します。

その点においても俊平さんは私以上で、好物の前では子供の顔になります。それでいて傲然と食うという気持ちは持ち合わせているのです。

笛も太鼓もその後そのまま風景で

句集『葦川』発刊のとき、俊平さんは栞を作成しました。その栞に私は次のように書いたのです。

〝俊平さんと私は、まるで弥次さん喜多さんである。秋祭の太鼓と笛のようだとも言える。二人が会えば、前句と附け句さながら自然の調和が出来上がる。私は俊平さんから、川柳はやさしさであることを教えられる。

　秋が来て笛は太鼓を恋しがる　　薫風〟

笛は音（ね）、太鼓は音（おと）。笛は細く鋭く遠方へ透らんことを願い、太鼓は豪快に響いて辺りを広く抱擁しようとします。

昭和四十三年六月、柳都川柳社の二十周年記念川柳大会への出席を兼ねて、俊平さんと私は初めて能登半島一周と佐渡への旅を持ちました。輪島の宿で、宿帳に寺尾弥次郎兵衛と書いた俊平さんに続いて、私は橘高喜多八と書きます。電車に乗り合わせた朝市に店を出すおばさんが、ポリバケツ一杯の荷を開けて、手に余る新鮮な苺をくれます。半島突端の禄剛崎では一軒の食堂でおでんを食べながら主人の話を聞きます。すでに微醺を帯びた語り手は、

「父親は八十に近いが二時に起きて漁に出、明け方帰って来る。女房はそれを料理して客に供するのが役目、息子は東京の大学で修業中、自分は朝から酒を喰らってこのように気楽な渡世をしている」

と言う。ここでは、白い燈台と白いマーガレットの植え込みが印象に残りました。

俊平さんとの旅は、このように誰とでも話そう、何でも見てやろうの意欲的なものだから仲々にたのしいのです。だが四泊の旅で、大太鼓の鼾のため睡眠不足の笛は三キロばかり痩せたのでした。

　無憂華の種を少うし持っている

「無憂華というの知ってるか」と聞かれたので、「クサカゲロウの卵で電燈のかさなどに……」と言い終わらぬうちに、「それは優曇華で、無憂華はな……」と、ある時友人が教えてくれたのは、無憂樹（菩提樹）に咲く花が無憂華で、摩耶夫人がお釈迦さんを産まれたのがこの樹の下であったらしい。憂いの無い花とは極楽に咲く花

のようで、俊平さんの肌合の持つ光りと匂いを感じさせます。ということは、俊平さんの心は常に憂いに満ちているのではなかろうかとも思わせるのです。ところが、わがままな私は、時に我を通して礼を失してしまうのです。俊平さんが朱で私が紫だから、朱が紫に交じると紫に化してしまう。私の自戒とするところなのです。

陶渕明氏とよき隣人になれそうで

句集『葦川』出版のとき、俊平さんへのお祝いに、藤沢桓夫先生にお願いして陶渕明の詩を書いて頂きました。先生は大型の色紙に次の詩句を書かれました。

少無適俗韻　少きより俗に適うの韻無く
性本愛邱山　性　本　邱山を愛す

これは「帰田園居」五首の巻頭の詩の、その一番最初の詩句なのです。この詩には後続して、「羈鳥恋旧林池魚思故淵」という名高い詩句があり、楡柳、桑樹の字句も出てきます。俊平さんが、

楊柳も桑樹も待たん職を辞せん

と、退職時に詠んだのも、如何に陶渕明に傾倒しているかがうかがえる一事です。

みまかりて後の誹謗は耐えがたし

俗人というものは、例えば、告別式に来るべき人が来なかったとか、見えるだけのこと、聞こえるだけのことでしか判断しません。また判断出来ないものです。俊平さんは、悲しいときにおろおろ泣ける人を好く。句集『葦川』発刊時の栞に丸山弓削平さんも一筆されましたが、次のように書かれています。

〝薫風さんが私に斯う言った。「私は俊平さんを大変尊敬している。その俊平さんが弓削平さんを凄く尊敬している。だから私はあなたを尊敬するのだ」と。

これは私のCMではない。信の尊さ、美しさ、有難さを、である。〟

弓削平さんは今年の一月この世を去られました。弓削平さんのあと山陽新聞柳壇の選評を引き継いだ俊平さんは、この第一回の総評欄で次のように述べました。川柳

をしっかり知らぬ人たちにも分かるように書いた温かい文章です。

「川柳は市井の詩としての長い歴史がございます。私は、その町のかいわいの中から、ほのぼのとした詩情と絡み合う愛憎に触れながら、これから先、川柳作品を通して、みなさんと対話を重ねたいと考えております。肩衣をはずした心の触れあいができれば本望と考えております。」

大八も馬鹿山茶花も馬鹿旅をせり

東野大八さんと俊平さんは気が合うに違いありません。可成りの変わり者であること女性にやさしいことがお二人に共通しています。

この句は数年前の柳都川柳大会に出席されたときのもので、西山茶花さんが選者であるのに駅へ土産を買いに行き線路に草履を落したこと、落した草履を大八さんが線路に下りて拾ってあげたこと、そこへ俊平さんが帰りの遅い山茶花さんを探しに来たこと、などの事実がひそんでいます。「先生と言われることの大嫌いな大八さんだから、馬鹿といわれる方が性に合うと仰言るよ」と私は言ったものです。

この句集を編むにあたって、各地の俊平ファンが散逸した句を整理したそうで、それがすべて女性であると聞くと、さもあろうと思えるのです。

三人の友が凡愚の顔でくる

これは麻雀好きの悪友を迎えての句です。田中好啓、河内天笑、故室田千尋ら三人と私がこもごも俊平居へ挑戦に押しかけます。実力にはさして差はないものの、俊平さんは午前零時を過ぎると急にスタミナが切れます。鉢巻をしたりサロンパスを貼って抵抗を試みますが効果は少いのです。俊平さんは短距離走者です。

布衣俊平愛することを背に負いて
わが夢は絹街道の湖に浮く

くつろいだ浴衣姿の布袋を自認する俊平さんのお腹には、善意が一杯詰まっています。

その上にまだ大黒のように愛の袋を背負って世に処せんとするのです。悪が業なら善も業であるはず、いい加減にしたらと私など思うのですが、俊平さんの懐はとてつもなく深いのです。

俊平さんの夢は、アジア大陸中央、タリム盆地の砂漠にあるロブ・ノール湖らしい。砂丘が常に移動するので湖もまた位置や形が変わる、いうところの「さまよえる湖」なのです。

俊平さん六十五歳の純情は、ホーソンの言葉、「人生は大理石と泥とで作り上げられている」を思い出させます。まさしく大理石に吹く春風駘蕩たる句集となるでしょう。

俊平駘蕩と言いたくなります。

Ⅳ

川柳「平安」誌 掲載エッセイ（初心時代）

知的抒情

昨秋の第六回関西短詩文学作品展で、私は安田青風氏の揮毫作品を買い求めた。その掛軸には、

茫々となが き過去あり紺碧の空に白梅が貼りつけられて

の一首が美しく書かれてあった。知的抒情を標榜する短歌誌「白珠」の主宰者のこの澄み切った一首に一目惚れしたわけなのである。

現代に生きる作家は現代を詠む。批判詩である川柳の場に於ける社会批判も、単なる報道的時事吟にとどまっていては価値がない。人間（生活）諷詠といわれる川柳で、恒久不変の人情を詠むにも、現代に生活するにふさわしい知的な眼の裏付けがなくては適わぬ。川柳とて時代の推移とともに少しずつ変化して行く。より知的に、より知的にと。知的抒情こそ、現代川柳の糧であると言えるのではなかろうか。

玉杯ありや　一人のボクに　一足の靴　　**礫**

作者自身の境涯に於ける感慨をずばり上五句に述べていて、以下を「一人のボクに一足の靴」という表現で押さえている。古い綻びた靴から、ガラスの美しい光を放つ靴にめぐり逢えたのは、童話の中のシンデレラ姫一人でしかあり得ぬことなのであろう。

秋の風　マッチの焔　生き返り　　**幸　男**

夏は太陽と雲と、天上にあるもののみに生気があふれ、厳しい炎暑に地上にあるすべてのものが萎える。木も草も、人も金魚も、蠅も。そして、秋が立つと生気をとり戻すのである。マッチの焔もその例に洩れなかった。発見は常に新鮮さをともなうものである。

振り向けば　恋は喪服を　着ていたよ　　**博　造**

華やかな恋の裏側には、黒い悲傷がひそんでいて破局を待っている。私の恋もその範疇を出なかったか、と作者は慨嘆するのである。色感が句を引き締める作用をしているが、結句に今少しの緊張が欲しいようにも思う。

孤児の夢　母は大きな　乳房持つ　照夫

孤児を題材にした四句の中ではこの句がいちばん良い。凡庸な想が良いのは、とりすましたところがないからであろう。

アンプルのから　ごみ箱に　疲れ果て　康明

薬液の入っていたアンプルの殻。疲れた人間に吸い尽くされて、ごみ箱に放り込まれたアンプルは、人間が元気を取り戻すと同時に疲労困憊するのだ。疑人法は効いているが表現に物足りなさを感ずる。

判ったような　顔をしているので　不安　鮮山

淡々とした老練な句と思う。持つものを持ち鑑賞者に一応訴えるものがあるこういう句も、川柳の一分野に存在し続けて欲しい。

あたたかな　灯かげに　柿と栗ならぶ　ひろし

白桃、二十世紀がくだものでの若者だとすると、柿や栗はさしずめくだものでの初老になぞらえることが出来よう。あたたかな灯は和やかな家庭の灯火に相違ない。愛に満ちた、落ち着いた初老の夫婦の語らいが聞こえて来るようだ。寡黙な句だが趣きは深い。およそ句の表現には饒舌より寡黙のほうがよく、大仰なのよりも謙虚なほうが好ましい。

聖なる火は燃える　弱者は滅びよと　豊次

「弱者は滅びよと」という力強さは、火の根本的な本質である。火は弱者をも、また強者をも滅ぼさないではおかぬ。作者は聖火にもそれを感じた。そして、どうしようもない人間の、否、世の中全般に通じる業を思い、胸を痛めたのである。聖火を目のあたりにして、作者には、単なる美しいオレンジ色の焔とのみは思えないものがあったのだ。

少年胸を張れ聖火の右に海　青二

右手に海の続く街道を聖火がひた走る。美しく心に沁み入る句だ。

一年に儲ける月と使う月　入仙

商人の家の家計はことにこの句のようなのであろう。金銭の出入りのけじめがあるようでないようで、実は大いにあるのである。事実商いをしていないと生まれぬ句

と思う。生活からじかに生まれた句はこのように深い道理をしばしば穿つものだ。

花に降る　雨を　見ている　罪　ひとつ　　静

雨に濡れれば、その朱が溶けそうな、真赤な真赤な花なのだろうか。あるいは可憐有愁の野花を、心に沁み入るような雨が濡らしている沈潜した情感を詠っているのだろうか。私は、「罪一つ」の下五の語感から推して、「死びと花」と呼ばれる曼珠沙華を想像する。そして「一つの罪」は恋の罪でなければならぬ。

巣を揺する　蜘蛛の　なみだをみるここち　　静

作者は蜘蛛に見入っていた。蜘蛛はしきりに巣を揺り動かす。その動作を止めようとはしない。作者の情感は高まってゆく。蜘蛛はまるで心の内部に激しい嘆き憤りを持つもののようだ。それは作者の心にある深い慚愧の情に通じ合うものであった。そう感じたとき、作者は蜘蛛と一体になってしまう。そして一句が生まれたのであろう。この句から、作者の感情の激しい起伏を感ずるのである。これも悲痛な恋情を詠んだ句だ。

さて、細川静氏は恋の句二句をもって私を賛嘆させられた。川柳界（俳句界を含めて）には恋の句が極めて少ないのである。若い川柳家、大いに恋の句を詠むべしと宣伝して置く。

街灯の　心を守る　雨の情　　右　門

「心」の一字が安易ではなかろうか。が、深い美しさを持っていて雰囲気を伝えてくれている。

眼球へ　喜劇をならべると　こぼれてしまう　　たかほ

奇想だ。喜劇がこぼれてゆく背景に、ころころと笑い声がする。視覚に訴える喜劇だから「眼球へ」と持って来たのだろうか。こういういきさつが、抽象的になると判らぬままに鑑賞をすることになり、鑑賞そのものが暗中模索でピンボケのうちに終わってしまう。

釣鐘の　吊り上げられて　ある　恐怖　　冬　二

釣鐘が異形に吊り上げられてあるのか。吊り上げられてある大釣鐘を下から仰いでの威圧感からの恐怖なのか。私達の感覚からすれば、「吊り上げられてある」のは普通で恐怖ではない。むしろ、地上にあったりする方が恐怖感を抱くのである。「パラシュート遂に開かず歓喜の天（時実新子）」という句を見たが、普通感覚からいうと解せない心理だ。

失言に　理屈をつけて　夫寝る　　雨音美

失言にも一応の理屈をつけるのが男というものだ。お父さんの威厳に関することである。句の結着が何より良い。

新撰苑欄が、平安誌発刊当初からあったのだろうか、そのころの句の内容はどんなであったのだろうかと思いをめぐらす。おいおい進歩向上して来ているに違いない。それは投句者の顔ぶれでもよくわかり、選者に媚び、新撰苑欄におもねる投句作家が少なくなり現代川柳に挑む精鋭がひしめいているからだ。願わくば現代川柳に造詣の深い選者堀豊次氏の選後評、短評があれば、われわれ後進の鑑賞理解に大いなる役割を果たすに違いないと、その実現を渇望している。

古川柳の周辺

清盛の医者ははだかで脈をとり（16ウ）

宝十礼1才（はつめいな事〳〵）

おもしろい句を一句と言われてこの句をあげたのは、学生時代の教科書に掲載されていたのが印象付けられているせいかも知れぬ。懸賞に応募するような軽い気持ちの真剣さでつくられた句、娯楽としての川柳がもてはやされた時代なのだから、理屈なし、底抜けである。遊びの精神でかたまっている。社会批判がなければとか、苦悩をともなわねばならぬとかうんぬんする現代の川柳人が当時いたとすると馬鹿にされたろう。三要素などというものももちろん後世言いだされたことだし、天衣無縫融通無礙である。悩みがないからからっとしている。蟬殻のように軽いのである。しかし、じっと鑑賞していると、庶民の喜怒哀楽がじんじん響いてくる。哀歓もまた

蝉殻のように深いはずである。柳多留の多くは判らぬくだらぬ句だが、中にはすばらしい句もしばしば見出すことが出来る。私はそれらの佳句を深く鑑賞することを心掛け、川柳の過去に柳多留を持つことを誇りに感じている。

しかし、古典としての価値を認めながらも大いに不満でもある。底のある余韻の深い、大げさだが、苦悩や哲理にまで手の届く、重量感あるユーモアを欲求したいのだ。私と同門の先輩、須崎豆秋さんの句に、

子が追えば鳩は歩いて逃げるなり
骨立てたまま二次会へ従いて行き
直角に質屋の中へ折れ込んだ

降りる客いとののんのんと続くなり
恋人のすわったあとへすわってみ
秋風の中で乞食に拝まれる

などがある。文楽座（今は朝日座）での句会の、トイレで「文楽へ来て小便をして帰り」とつぶやきながら放尿していた人。「雨」という兼題が出たら傘をさして雨の中を歩くのですと述懐した人。

院長があかん言うてる独逸語で
杉になりたや千年という樹齢
日の暮れるごとき往生したいもの

各ユーモア作家晩年の句だが、ユーモアの行きつくところもかくありたきものである。

やや鈍き刀で

新進、老巧、左右各派作家の心をこめた絢爛充実した平安誌の作品群は、評者の人間を姿から心まで、あますことなく映し出す恐るべき鏡である。それゆえ、筆者のごとき若輩には、「平安」の句評ははなはだ重荷と言わ

ねばならないが、現在、句を創ることはもちろん、読むこと、選評をすること、その一つ一つがすべて血肉となり自己の川柳への栄養となることを思って、敢えて編集部のご好意に甘えることとした。いたらぬところはご容赦ご教示願いたい。

雪の舞う　前二人行く　後ろにも　紫　蘭

何でもない街の寸描にすぎないが、「雪の舞う」という上句があってこの風景が濃厚に必然性を帯びて来た。短詩のおもしろさであろう。三条あたりの橋の景を連想させた。

その位置に涯あり昼の風呂にいる　礫

「その位置に涯あり」とは昼の風呂のうつろな性情を、作者の感慨に転稼して余さず言い得ている。礫氏の鋭い才能がやわらかく包まれて奥行きの深い句にした。昼の風呂での放心、筋肉のゆるむような感慨が伝わってくる。

夜具を敷くこともこの世の果に似つ　日　車

に一脈相通ずるものがある。

十二月一月二月靴の泥　幸　男

この表現のうまさ、たしかさ。一年中につづく靴の泥だ。

咲かぬ花　咲く花　壺の抱くいのち　緋沙子

「壺の抱くいのち」とは愛情のこもった観照だと思う。句のよくようも内容にふさわしいものになって、作者のまろやかな包擁力のある人柄まで偲ばせてくれる。

箸よなにいそぐめざしのつめたきに　絢一朗

作者の自嘲か。やりきれぬわびしさを詠いながら作者は言っている。かみしめろ、かみしめろ、めざしを、飯を、貧乏を、人生を、と。

作句はすべからく、これほど作者自身の身に対象をひきつけて詠いあげるべきだ。

これらの句は、句の表面の意味だけではなく、文字の裏側にも奥深く読者の心をとらえるものを持っている。またおしなべて内部に充溢している才気を寸分表面には見せていない。立派だと思う。「よき細工は少し鈍き刀を使うという」との兼好のことばを思い出した。

街の　雪女は　はだか　水銀灯　紫　蘭

この感覚に敬服した。「街の　雪女は　はだか　水銀灯」と字句に間隔を置いた編集もよい。どの柳誌もかくありたいのだが。

ハンガーへ吊った疲れにある思想　三　郎

類想の句がないかが気がかりだが、サラリーマンの疲れ

た思想を見つめて、まとまりのある佳句に仕立てている。

一筋の　愛を　つらぬく　金を　ため　　峰　子

上句、中句の大ぎょうな言いまわしがおもしろく、句を平凡から救った。

くもりのちはれバラ色のあすがある　　ひよこ
あめのちくもり愛情のピンチ去る　　同

作者は最近「平安」の編集部にはいられたと聞くし、かって平安誌上で山本礫氏との書信の掲載もあって、若い有為の作家だと思うので、川柳は単なる語句のとりあわせではいけないと、一言苦言を呈しておく。

占いとおんなじことを祖父は言う　　子　楽
白足袋を　はく日の娘　おとなめき　　喜　山
掘りこたつ遠慮の母に気がつかず　　ふたよ

家庭でのスケッチだが味がある。それぞれ些細な事柄だが、発見から出た味と言えよう。たいせつにすべき味だと思う。

都会の放尿空に地にたむろして煙霧　　青　二
家計にひびく米価へしゃくしデモもせず　　千代子
啄木の師走を思う物価高　　みさお
空中汚染　無言で絶えた　赤トンボ　　其　柳

都会の放尿とは奇抜だが、社会性の句は「平安」誌上でも極めて少数でもありひ弱だ。むつかしいこととつくづく思う。

瞳がぬれて来て真実をさぐりあて　　晏　子

生理的な方面から可憐な女心を言い得ている。この主観的な句と、

他人との　比較　おんなの　幸　不幸　　緋沙子

の、自身から距離をおいて女を詠っている句と世代の相違のためか、興味をそそられた。

しあわせになろう初春の陽あたたかい　　全　子
下腹部に　きずある　女　昼の　湯に　　同
あんな人　なぜ　思い出す　夜の　雨　　同

事　故

六人の柩　発つ　あさの　雪の花　　同

全子さんの作品、自若として、わたしはわたしの句をつくっているのだという気概といったものが、なぜだか並んだ四句から汲み取れたので、ちょっと触れさせてもらった。

マフラーのぬくもり視野を乏しくす　　寛　哉

頤を埋めて好漢、冬の街を行く。表現、句の勢い、これ

みな寛哉にあらざるはない。青年にあらざるはない。

また金にあともどりする死後のこと　泰典

凡人の　域を越せない　死後のこと　同

根っからの川柳人というべきか。「平安」代表の面目躍如としている。

悼　竹二氏

こころふかくつたわりをもつ竹二の目　秋善

善意の人と言われた故大山竹二氏を、立派に描出している。それがおのずから悼意につながる。

竹二を偲ぶ

竹二から　習いし黄なり　夏はなお　鯉生

人間に体臭があるように句にも匂いがある。この句には追憶の匂いが出ている。

花火黄に空の重心全く西　竹二

の故人の句から推して、下句がきわ立っている。弔吟にはだれにでも通じるといった安易なものが多いが、この二句はともに故人を色濃く特徴づけていて感銘を深くしていると思う。

からっぽのくらにりんごのにおいする　秋善

いやしさを包む仮面へ鼻がつかえ　たかほ

歯にしむ　孤愁を　唾であたためる　百日亭

ゴム長に　雪　五　六寸　おもしろし　碧水

春　を　待ちあぐむ　土ばかりの　鉢　京詩

前三句は新しい表現法と、訴えんとする内容との均衡がとれた前向きの句。後の二句はそれぞれの味を生かすべく調子が仕立てられて、成功の句だと思う。

阿修羅像が笑う文明　千加夫

阿修羅像が笑うとははなはだ意表を衝いている。そこにこの句のいのちがある。しかし、この句が新聞種になった阿修羅像の石膏事件を詠んだものととれば、おもしろ味は半減以下となる。

新撰苑に対しては、筆者も抽象句の理解への努力のため常に心をこめて鑑賞しているが、単に句に重量感のあるのと、大層な語彙を駆使しながら軽い句のあるのとを識別し得るていどで恥ずかしいしだいなのである。新しい川柳の領域を拓く作家としての、自己の力への信念、確固とした自己を頼む心を持って進んでいただきたい。「平安」2月号の句評を受け持って、豊次氏の青空のような爽快な句、藻介氏の近代的軽妙、換言すれば心憎いまでのスマートさを持つ句、冬二氏の気魄のこもるずっ

しりとした密度のある句などに、触れたかったが例句がなかった。一抹の淋しさを禁じ得ない。

小さいあの日に

「ハナ、ハト、マメ、マス」明治、大正を思わせるあの暗い色をした表紙の国定教科書を、私は五才になるかならずであてがわれ、毎日毎日音読していた。学校へ上がるまでは虚弱であった私は、屋内で過ごす時間が多く絵本や童話に親しんでいたが、とりわけ、この教科書を愛好していたのを記憶している。音読の快さを覚えた第一期と言える。小学校時代には教科書に掲載された和歌俳句の類に特別に興味は示さなかったが、六年生のとき、父が私に買って来た本の中の一冊に、川田順編「幕末愛国歌集」があり、それを読んだのが契機で、万葉集、古今集、新古今集、山家集、金槐和歌集……から、明治、大正、昭和の有名作家の歌集を次々読みついだ。とりわけ初期に読んだ万葉集の長歌のリズムは私をとりこにし、数多くの長歌を暗記してしまうほどであった。それに並行して、沢潟久孝、斉藤茂吉といった識者の秀歌鑑賞や意訳の書も手あたりしだいに読んだが、私の偏執癖はこの辺にもよく現れていて、この時代（六年生―中学三年）には俳句・詩にはまったく振り向くことがなかった。

俳句に関する幼少年時代の記憶は、わが家の風鈴に母の手で、

瀬を越えて静かに泳ぐ子持鮎

という句などが書かれてあったのを覚えているに過ぎない。それが母自身の作かどうかはいまだにたしかめもせずにいるが、ときおり句が変わっていたのと、母の机辺に山家集や金槐和歌集が散見されたことからして母は和歌に多少の興味を持っていて、俳句もときおりの心境を

詠むていどにたしなんでいたものと思われる。私の幼少年時代よりもずっと以前の、これは血に繋がることだが、父方の曾祖父が、大垣藩主に漢学を進講していた漢学者であったので、中学生時代、漢文漢詩の素読には身内から湧き出る爽快感を感じたものだった。

このように、少年時代から五七五型文学の鑑賞になじんでいたので、川柳の作句しはじめにも指を折り数えるということはなく、発想が十七音字に直ちに連らなってくるのであったが、これは長所なのだろうか。あるいは致命的な短所であるやも知れぬと、おりおり考え考えするのだが、現在の私にはわからぬことである。

そして、いまの私には、五七五の音律に対して、万葉集の長歌をそらんじ、古今新古今の恋歌を口ずさんだころの純粋な感激はない。何か惰性といった力で金縛りにあっているような気持ちのまま、画期的な我が意を得たりとする型、自由な型も見当たらぬまま、伝統の枠を継承している格好なのである。川柳の第一義である十七音字に牢固とした信念を持つまでには、まだ相当の修行が必要なのだろうが、淋しい限りである。

私の血の中に多量に流れているはずの十七音字の律に自信を持ちたい。川柳の入門初歩のところをこのように、いまだにうろうろしている私は、「小さいあの日にかえりたい」と、自身の幼少年時代をなつかしく回顧するのである。

詩性と穿ち—将来の川柳の両輪—

川柳は、十七音字を基調とした形式の人生諷詠・社会批判詩である。しかるに、川柳はなおかつ自由自在なものであると容認して、伝統であれ、革新であれ、俳句に近かれ、狂句に似てあれ、形式・内容、各派各自が思い

思いの句を作りつつある現状は、川柳三要素などに、まだ、真剣に固執していたのが、ほんの一昔前とは思えぬほどのものがあって、実作者としてもはなはだ感慨が深い。

敗戦で新しい風潮がどっと興ったように、あるいはそれ以上に、ここ数年来の、路郎・水府・周魚ら巨頭の死は、川柳界に旧来の秩序をかくも乱れさせる因となったのであろうか。川柳界はどこまで自由に、勝手気ままに伸び弛むのか。収縮する力を内蔵して伸びて欲しい。むろん、歴史が繰り返すように、再び川柳性を深く認識して、あるいは新しい川柳性を生んで還り来ることであろう。十年、二十年、川柳は詩性と穿ちを両輪に、現代の話し言葉の口語体を主体として、気骨ある批判詩の伝統を持続して行くのではあるまいか。

ちるさくら殉死はむかしむかしのこと　**無冠王**

昭和41年の平安新春号に

元旦や　天子につづく　兵馬はなし　**無冠王**

の句がある。ともに、作者の古武士老将の風格がそのまま句の風格になっている趣である。

春昼夢　のっぺらぼうの　女人かな　**無冠王**

春昼のけだるい艶が出ている。

腹のすいた　聖者の如く　傘を手に　**礫**

俳句の香西照雄と「黒い傘」のイメージではないが、この傘も厚手の木綿の洋傘であろう。西洋の人物画像を見る感がある。

完敗の　ボクサーねむる　水のなか　**杼　馬**

ノックアウトをくらったボクサーの朦朧とした意識、ぼやけた視野はまるで水中世界だ。汗にまみれて横たわる綿のごとき身体に、「水の中」の表現は心にくい。

吊皮を止まり木にして世を生きる　**みさお**

吊皮の形態をうまく穿っている。皮相的な穿ちのようでありながら、意外に内部の真をえぐっているようなのは、作者も鑑賞者も市民という共通の場にいる故だろう。

北爆停止　その日　燦々　春が　降り　**冗　児**

ベトナム戦北爆停止の日、日本では春光が降り灑いだ。あえて日本だけではあるまい。

父よ父あるメロディーがあるばかり　**寛　哉**

やや気負った感あるも、それが作者の若さであろう。好漢寛哉、君もメロディーを変えぬ男だ。

テレビはマラソン重湯の飲めぬ病母を置く　豊　次

マラソンは、肉体と精神をあわせての死闘だ。重篤の病人、それも母を目前においての重苦しい心情がよく出ている。

公害を耐えるカーテン荒らく引く　光影子
闇に　寝る　妻は　反旗を　闇に挙げ　同

蒼竜閣の巻頭作家の作句意図に賛意を表す。

そんな字が　昔にあって　父が書く　貴代坊

父と子の世代のずれを作者は見た。字を介して表現したので味が出た。

耳輪がゆれる家族主義よりはみ出して　操

「耳輪がゆれる」と作者が表現する。「耳輪がゆれる程度の浮薄な自由しか得られないのか、所詮は。」と鑑賞者が反問する。そこらに句の伝達性が内在する。

かたうでのない　人形や　納税日　一吠

納税日の自画像であり心象なのである。

坂の父ヒューマニストの貌でなし　冬二

坂道にあえぐ父。人生の一区間ででもあろうか。坂を上りつめたら人間味豊かな表情に戻る父なのである。

沈丁に　むせて　安楽死を願う　温子

沈丁花の香りを沈丁と省略するの可否は鑑賞者個々に異なる。「むせて」の言いまわしは稚いが、「安楽死を願う」感応は鋭い。

腹話術ほんとにいいたいことがある　温子

そこはかとなきもの、イロニー、ペーソス。好作家と言えよう。

昂ぶりも　奢りも見せず　春が来る　睦雄

万物絢爛たる相を内蔵した春が近づく。それは静かにひそやかに物の芽の芽吹きのような形でやってくる。まことに謙虚な姿なのである。春の到来をこのような観点から掴んで、爛漫の春を直接詠わず、句裏に強調出来ている手腕は凡庸でない。

なにもしてあげられない掌石となる　津弥子

「なにもしてあげられない掌」このリズムに真実の、真心の裏打ちが感じられる。

返済期　奨学金が　税に似る　きよし

うなずかせる。微笑ませる。句のいのちである。

銀扇の　雲のむこうに　母はなお　玲子

雲の形容を銀扇としたことは独創的でありながら、母の追憶にふさわしい。この調和が魅力となり価値となる

のである。

ブレーキが　きかぬ　夢の中の僕　　**無　双**

夢そのものが、ブレーキのきかぬようなものなのだ。誰もがこういう夢を見るが、誰でもがこういう表現には気付かない。

新撰苑の句への理解を深めようと見つめていて、昼が夜になり、夜が朝になっても堂々めぐりで、あまり進展しない。自分の感覚をパッと閃めかせて好悪を一挙に決めるのがよい方法のようだ。以前、気ままに書物をとり出して、きままにページを繰って、きままに抽出した語句を繋ぎ合わせて出しているんだが、よく入選するよと言っていた不逞の輩が、やはり名前を連らねている。もちろん、筆者をからかう冗談にすぎなかったのであろうが、筆者自身、そういう句と、そうでない句との識別が、しかと出来ないので困るのである。新撰苑で良いかなと思った句も今まで再三あるのだが、不思議に一句たりとも覚えていない。難解の句も多いが、難記憶の句も多いということであろうか。これは句の価値には何の関係もないことかも知れないが……。

ネクタイを買うすでに貞淑な首である　　**荒　星**
虚空へ急ぐ貧しい父のクーデター　　**土　竜**
春陰の　どこかで始まる　私の火刑　　**同**
トマトジュースたしかな重みを恋人に　　**杉　馬**
エレベーター昇る速さで吃りになる　　**憲　治**
片翅の蝶がさがした黄色いてのひら　　**玲　子**

平安誌にも病紋太の句が掲載され出した。最近目を通す柳誌で、その句を見ぬものはないありさまだが、老骨を鞭打ちながらの作句、不自由な左手で書く通信は、悲壮なまでの執念とさえ感じられるのである。川柳紋太快癒は、その句のあまねく柳誌、その句を目にする柳人大方の祈願になろうとしているかに思えてならない。

永病い　俺も反骨　度々　起こし　　**紋　太**

『檸檬』　昭和40年刊
視野無限を目指して

処女句集「有情」と第二句集の「檸檬」を著者の私自身が比べて見て、その感慨は大いに異なる。病重篤の麻生路郎に見つめられながら、私が何もかも独断でやってのけた「檸檬」には、力を尽くし切った満足感が残った。今なお内容体裁に後悔がない。それでも、繰り返しひもといてわが句集を省みるとき、よくこそこれまでこれらの句を生み続けたものだと充足感に浸れる日と、取るに足らぬ句の羅列に過ぎぬと、深い淋しさを味わうときとが、こもごも入りまじって情感を左右するのは、句集を世に問うた誰もが感ずる意思の混沌であろう。

路郎在世中その指導を仰いでいた時期には、大きな壁に向かって球を打ち据え打ち据えしておれば事が足りた。ちょうど、剣道の稽古のように、相手が面を空けて待てば面を打ち、篭手に隙を与えれば渾身の力で「お篭手」をとればよかった。「檸檬」以降は、私にとっては、路郎没後と同義語なのである。

作家は過去を踏襲してはならない。新しい句境を常に拓いて行く情熱と精進がなくてはならぬ。しかしながら、実際には路郎の死の衝撃は大きく、歳月が経つにつれて、より深い混迷を思い知らされるばかりである。その何よりの証左に、路郎の没後、当分はまがりなりにも句が作れた。自信の句も生まれた。人に問われれば、一年二年の間の自作はすぐさま口をついて出て、空んじて披露が出来た。

ところが、最近の句のありようはどうにもならぬほど自信喪失、混濁を極めているように思われてならない。数も少ない。快作もない。ただ、灯を消さずにいれば、またいかなる進展かが生まれてくるやも知れぬと細々続

けている態たらくである。家業に追われての昨今が大いなる因となっているのだろうが、それは言いわけにもならぬ。

その低調さを見かねて、この八月には、冬二・俊平・作二郎・新子の諸兄姉が、「薫風を励ます集まり」を持ってやろうと言ってくれた。友情をありがたく思ったことである。私はこれから、ひたすら路郎の句を読み日車の作品を味わう今までの修練のほかに、われわれの世代の作家らとしばしば論じ合わねばならない。そしてさらに、柳界各地で澎湃と興って来たもう一世代若い作家とも大いに交流して、切磋琢磨しなければならないと考える。これは、私個人の問題だけではなく、柳界発展のためにも、儀礼的なものだけではない横の交流を、円滑頻繁に行うべきだと思っている。小さな円を繰り返し書きながら年老いるか、さながらアポロ11号のごとく新境地を開拓するか、菲才の限りに努力するほかない。

私が路郎の句集「旅人」を飽かずひもとくように、「私の句集」を飽かずひもとく人が仮に一人でも出来るまで、また、私が「竹二句集」を掌にした時の心のたかぶりのような熱っぽい思いをもって、「私の句集」を掌にする人が一人でも出来るまで、私は私の句境を高めたい。路郎が私に指し示した、「視野無限、この言葉に尽く」（第二句集の序文）を胆に銘じて作句の業を重ねる覚悟でいる。

穿ちと定型

今年、麻生路郎の十三回忌に当たり、川柳塔社では路郎一代の句集「旅人」と旅人以降晩年の句を編纂発行いたしました。その作業を担当していて私が再認識しましたことは、路郎の偉大さは、その勁さにあるということ

であります。若い躍動期に佳吟を発表しつづけた作家も、老境に入ると充実した句は詠めなくなってしまいます。晩年なお佳什を発表することは、壮年時の数倍の努力が必要なのです。路郎の句が、老来、死にいたるまで、創作力が落ちるどころか、ますますいのち漲って行ったことは、専門家なき世界は発達せずと職業川柳人を宣言して、川柳の社会化に尽力したこととともに、路郎の勁さを示す二本の柱と思います。

その路郎が、晩年、穿ちの重要さを強調しました。路郎のいう穿ちは、英語のインサイトという語の持つ意味に近く、内を見、奥を見、本質を見るということで、看破する、洞察すると同義語なのです。だから単に風刺に通じる批判的穿ちだけでなく、ユーモア的穿ち、抒情的感覚的穿ち、軽み的穿ちなどと広範な解釈ができるわけで、穿ちの追求だけでも作家一生の研鑽には事欠かぬものであると言えます。

骨立てたまま二次会へついて行き
けなげにも家主の犬を噛んで来た
降りる客いとのんのんと続くなり
院長が　あかん言うてる　独逸語で

これらは須崎豆秋のユーモア的穿ちであります。

羊羹をいただいてると　地震かな

という句もございます。かなの二字は加えなくて良いようです。だが、このかな、けっして語呂合わせだけのものではない、この助詞はまことに独創的で、ユーモアのかな、川柳のかなだと言いたいほどのものです。だから、リズムを崩したいと思う場合でも、もう一度定型に回帰させるとき、作品はさらに緊迫や余韻を加えるのではないでしょうか。路郎の穿ち、豆秋のリズムから抜き ん出た、よりナウな穿ちやリズム、呼吸の体得を私は指向しております。「句はその人の心、十七音字はその人の姿、リズムはその人の呼吸である」とは路郎の言葉であります。

わたしの恋は水のなかにある夕日のかほ

感情的に尖鋭でしゃれた句です。このような傾向の作品が最近ずいぶんと増えました。

ところが、これは

わたしの恋は水のなかにある夕日のかほ
わたしの恋は真夜中のおちばのおもひ
ことばも、こえも、かげもなく

という大手拓次の詩なのです。やはり一篇の詩となると強く訴える力が備わります。川柳が詩に負けぬに必要なものは何か。穿ちであり定型であると極言しても、それを目指すという時点では間違いとは言えないと思われます。

私、寺尾俊平さんと能登半島一周の旅をしたときのことでした。輪島塗りを見ていたすぐあと、てんとう虫を見つけたのです。

てんとう虫ここにも小さい輪島塗

と私はさっそくに詠んだのですが、これはもう、てんとう虫が俺を詠んでくれと言ってやって来たような感じがして、こんな場合はだれだってこう詠むに違いないと思い、これが作句の真のあり方だと思ったのです。そのとき、また、それまで路郎の作品は、あの路郎特有の強さで句をかちとる形で得られたものと思っていたのですが、そうではない。路郎は、心遣いということを日常生活全般にいたしていたことに気づいたわけであります。対象の方から句を成してくれとやって来たればこそ、

寝転べば畳一帖ふさぐのみ
凡聖一如元旦のこころ知る
俺に似よ俺に似るなと子をおもひ

などなど、ある人に言わせると、路郎はこの一句を生むために生まれてきたのだという風な、絶唱ができたのだと思います。

句集旅人の冒頭の句は

二階を　降りて　何処へ　行く　身ぞ

というのです。路郎は演出がうまい。まことに冒頭にうってつけで、ここからドラマが始まるのです。啄木の「汽車を降りしに行くところなし」に少し似ています。だがこの二階は路郎の生活の坩堝です。そこから降りて行くのに、「何処へ行く身ぞ」なんて表現するのですから、路郎の魂が揺曳していそうな思いがします。それで私は私の好きな和泉式部の歌

もの思へば沢の蛍もわが身より
あくがれ出づる魂かとぞ見る

を思い出します。

句集最後の句は、

雲の峯という手もありさらばさらばです

というのです。辞世の句だというのに芭蕉の辞世のような執着はなく、実に爽やかです。これは達人の境地で

す。

恋と言へば世のつねのとや思ふらむ
今朝の心はたぐひだになし

和泉式部に文字通り炸裂の恋をなさった帥宮敦道親王の歌です。後朝の別れをして、つまり女を抱いて帰って来て、すぐこの歌を送られたのですが、これも達人の域で、「今朝の心はたぐいだになし」なんて爽やかどころか、凡人にはいい気なもんだというような思いまでさせます。しかし、路郎が言った「いのちある句を創れ」の意はここにあります。

瞬時、瞬時、いのちを燃やして詠いあげた作品は千年近く経っても今に燃焼しつづけています。

最後に、川端康成が豊田穣（この方は後に直木賞を受賞され、東野大八さんの親友です）に送った書状を紹介します。

『お書きになったものを拝見しました。
文学を志される由、このやうな片々たるものをお書きになっても、致し方ありません。根底が浅いのです。もっと深いところで、人間をお見詰めになることです。大切な経験をなさいました由、その御経験を丹心籠めて、お書きになってみることです。なお多くの本をお読みになることをお薦めします。――川端康成』

川柳のたった十七音字の文芸を、片々たるものでないようにするには、高邁な精神の昂揚によらねばなりません。路郎の言った「人間陶冶の詩」、人間へ締め木をあてて絞るといろんな悪汁が流れ出て、あとには朗らかな脱俗した人間が残るのではないだろうか、その締め木の役を川柳が果たしてくれているように思えてならない。こう喝破した路郎の辞世の朗らかさ。まことに「川柳は人間陶冶の詩である」は川端康成の手紙の、「深いところで人間を見詰め」「丹心籠める」という名言に通じるものと思います。

わが「川柳塔」は、路郎の精神を引き継いで行くことを、その基本方針にしています。路郎忌も十三回忌、いつまでも路郎ではございません。私も路郎を賞揚することこれが最後になるでしょう。すばらしい機会を与えてくださいました平安川柳社に深く感謝申しあげます。

V

佳句感想とこの句この人

佳句感想

穿（うが）ち

子が出来て川の字形りに寝る夫婦　（はなれ社すれ〳〵）

役人の子はにぎ〳〵を能覚　（うんのよい事〳〵）

右は柳多留の名高い句で、私は前者を穿ちの、つまりは川柳の原形のように思う。後者は明らかに権力者への批判で、ある時期には穿ちと言えば諷刺の句と解していた。

寝転べば畳一帖ふさぐのみ　麻生　路郎

「起きて半畳、寝て一畳」の諺を五七五に格調高くまとめた名句も、

子沢山使いにやったのを忘れ　正本　水客

あの産めよ殖やせよの時代の生活の些事を軽みの味にさらりと写した佳句も穿ちである。

恋人の膝は檸檬のまるさかな

解説をしやすいので私の句を挙げるが、現代川柳に多い暗諭の句も、若い女性の膝とレモンの形、また内在する精神性の上での爽やかさに相通ずるものがあるので穿ちと言えなくもない。路郎先生説の、穿ちは英語で言うインサイト、穴を穿って内部を観る観照の意味合いに取れば、うがちの川柳に占める領域はまことに広い。

私は川柳はうがちだと解している。

論語から老子に変えた五十坂　浅田　隆樹

道徳の本を仁と観じ、政治・教育など広範に亘り高度の見解を述べたのが孔子だ。道家の祖老子は、恬淡・無為など自然に帰れをモットーとする。五十の働き盛りにいささか早過ぎはしないかと思えるが、地球の荒廃を見

れば頷けないこともない。

季節感狂う人生観狂う　　川端　柳子

従来の日本の季節感は、今年いささかのずれを来たした。花も雨も猛暑も半月ばかり早くおとずれ、洪水も台風も荒々しかった。春夏秋冬それぞれが育んできた国土や国民性は狂いはしないか。季節感と人生観は直結する。時に一九九九年を迎えた。

魂を抜いても六十瓩はある　　土橋　螢

特攻隊の生き残りのこの作者は、魂の存在を常に強く意識しておられる。私の好きな

雪達磨春を迎えに行ったきり　　螢

も春に近い風物詩と見るだけで価値があるが、ひょっとして神風特攻隊へのレクイエムかとお訊きしたとき頷かれたので、やはりそうかという思いがした。この句、魂を抜かずに計ると優に百瓩になるのであろう。

渾身の一筆書きの飛行雲　　牧渕富喜子

柳人は省略が好きなので飛行機雲を飛行雲と言い習わして通じさせてしまった。

一直線に伸びる航跡は乗る人の意思のようでもある。見送る人は、その意気やよしとする。「渾身の一筆書き」の力強さは感銘深い。

目くじらを立てて女が歳をとり　　仁部　四郎

目くじらは目の端、目角のこと。目くじらを立てるとは、小さいことをとがめ立てする、目に角を立てることだ。

女が擦れ違うとき、ちらりと観察する目付きは目くじらの芽であろうか。目尻の皺にご用心と言ってるようにも思える。

ユーモア（滑稽）　　須崎豆秋

葬式で会いボロいことおまへんか
羊羹をいただいてると地震かな
恋人の坐ったとこへ坐って見
狸より短い寿命とはさみし

豆秋さんは「にん」そのものからして、根っからのユーモアの持ち主で、普通人間とは感受性の微妙なところにずれがあり、素っ惚けた味は天与のものがあった。単なる滑稽だけでなく、哀愁までがにじみ出た句が多い。句に連用形止めの効果や大阪弁の味をフルに生かしたの

も豆秋さんだ。

ユーモアの作家は少なくなり、殊に女流には顕著であると言われるが、川柳塔には過去山川阿茶、高橋千万子ら印象に残る好作家があり、現在もそれは健在である。

本日の機嫌ところにより曇り　木本　朱夏

天気予報の聞き馴れた言葉を効果よく引用して、現代風作品に仕立てた技巧が目立つ。

路傍の石を本歌取りにしたようなウイットは、意外性のたまもの、充分自分に引きつけた句姿はこの作者の本領で、豆秋の色から抜け出た時代の味にも注目すべきものがある。

バイバイとまた遊ばれたのは男　石谷美恵子

大学の卒業式の各部総代が女性に占められたり、どでかい踵の靴で闊歩して夜道の男をおびえさせたり、大ジョッキで痛飲してカンラカンラと大口開けて笑うギャルは、一足先に来世紀に突入している。

へ籠の鳥でも知恵ある鳥は—

やがてこう歌われるのは、ベランダへ出て煙草を喫うアッシー君である。この例も古いか。

拾った命　口から先に癒えてくる　原　みさを

句の価値に絶対はないようだ。時代により人それぞれの趣向ですべて異なるのだが、女がお喋り好きであることは

ふり袖は言ひそこないの蓋に成　柳多留

の時代からちっとも変わってない。

手術のあと麻酔から醒めて生気を取り戻すのは、女は口からである。このような当座は男は見舞いに行くものではない。辛口の滑稽。

墓まいりこれから顔見世ですねんわ　安藤寿美子

この大阪弁のニュアンスがおかしい。一寸遠慮がちに言っているように取れもするし、「先を急いでますねんわ」のトーンにも聞こえる。歳晩の墓掃除もそこそこにと仏に思わせて、「死に急いだか」と嘆かせてはならぬ。

パソコンを習い母上どうなさる　田村きみ子

母上様のお元気に越したことはないが、八十を幾ばくも過ぎて、それでなくとも習得のわずらわしいパソコンを買うと言い出して、とうとう実現させてしまった。何を考えているのか、これは惚けのはじめに違いないのだ。

パソコン持って夜中あたりを徘徊されるようにならないか。老人力にもいろいろあるもんね。

今月のユーモアは、原みさを氏をのぞき女流の句に偏った。ユーモアの句は殊に自然でなければ失敗に終わりやすい。川柳塔は女性がぐんぐん育ちつつある。

軽み

日めくりは1と出ている大晦日　　黒川　紫香

近頃はカレンダー一辺倒だから日めくりがなつかしい。追憶回想の思いが句に奥行きをもたらすが、この作句時にはほんの写生で、今より一層軽みの例として受け取られたろう。

大根よお前何処から来たのかい　　小出　智子

毎日のように行く市場の八百屋で、野菜にこのような呼びかけの出来る人の仕合せを思う。京都なら九条ねぎとか聖護院蕪といった産地の名が冠せられるがそれは問題外、余計なことにかかずらうと軽味が台無しになる。

降りる客いとのんのんと続くなり　　須崎　豆秋

軽いうがちとにんまりさせるユーモア、それに軽みを合わせ、三要素の揃った句である。ラッシュ時の電車の乗降時には常に思い出させる句だが、意識をして見ると、三要素を併せ備えた句は意外に多い。

傘寿尚昨日と同じ飯が炊け　　秋元　てる

一読軽みの句と受け取れて、実はさして軽くない句もあるのだ。この句もその一例で、傘寿という歳月の重みのせいであろう。

薪や炭からガスに電気釜と時代により変遷する炊飯も、八十の今となっては、昨日と同じに炊ければ上々、心が安定するのである。余生は日日の寸分変らぬ繰り返しが大切で、一寸した隙から健康や生活のリズムが崩れる予感にさいなまれる。

万国旗なびく事情は風まかせ　　福士　慕情

運動会の万国旗が風になびく。風のままになびくのだが、「事情は」の一語が介入すると、万国旗に国際的事情がともなってくる。

覇権主義の強大国には勝てないで「無理強い」にも「ごもっとも」で通すしかないのだ。

耳遠く念押して聞く初笑い　　長谷川春蘭

念を押して聞く人は耳の遠いことは明らかだから、この上五は言わずもがな、ダサイ表現と言える。ところが、ありふれた上句ゆえ続く中七の措辞が味良く連繋役を果

たし、下句の結果を納得させた。

この句の味は自然体にある。気取らぬ平凡な語の効果を教えられた。一気に述べるこだわりのなさが軽みの句の作句要領であろう。

水筒は一口飲んで見せて分け　　酒井　輝

「飲んで見せて」が一つのフレーズである。ハイキングの休憩時、水筒で咽喉を潤す有様が軽く言えている。その通り、と相槌を打つ気分にさせる句で、老齢の作者の童心のような屈託のなさが嬉しい。

侘び助にないしょ白梅植えたこと　　滝北　博史

狭い庭のことだから、咲けば梅の香りで椿も気づくであろうが、それまでは内緒にしておきたい。筒袖の絣の着物を着た田舎娘のような侘び助に、高貴な白梅を配したのが手柄だ。取り合わせの妙で、侘び助が川柳の匂いをにじませる。

こう見てくると軽みの句はむずかしい。

知ってるかアハハと手品やめにする　　椙元　紋太

おおそうか今日は夕刊来ぬ日なり　　浅井　五葉

など、有名な軽みの句の値打ちが今更に思い知らされる。軽みもまたユーモア同様、人が物を言うのである。

感性の句

死の影が紋十郎の背後（うしろ）から　　麻生　路郎

麻生路郎先生まさに命絶えなんとする時期の作で、絢爛とした文楽の舞台に死の影を感じ取る。それは黒子のようで黒子ではない。

ちょぼちょぼちょぼちょぼちょぼと咲く女郎花　　麻生　葭乃

秋の七草の一つ女郎花は寂しい花で、確かにちょぼちょぼとした花である。最も手近な言葉で最も当を得た描写の出来る作者の感性はすばらしいと思う。

花火黄に空の重心全く西　　大山　竹二

花火が立て続けに西の空に揚ると、誰も彼もが西に顔を向けそれを堪能している。東の空は暗いままで、まるで重心が西に偏ってしまったように思える。実に斬新な感覚である。

白い月淀川堤は長いなァ　　森川まさお

巻頭の句である。作者はこの句を投句した半月後に亡くなられた。死の直前まで川柳に生きられた。五人の兄

妹が本社同人だった川柳一族、ご冥福をお祈りする。

病室の窓から見下ろす淀川の堤防、その上に昼の月が懸る。白い月の上句がいのちだ。

諸行無常のこの世の往来と清浄の月を配した。根っからの大阪人である作者らしく古い大阪の童謡「テンジンバシャナァガイナァ」（天神橋は長いな、落ちたらこわいな）を胸に蘇らせておられる。感性の句の域を出た絶唱で、胸ふさがる思いがする。

春風馬堤曲の蕪村の後ろ、同じ道を杖を引く作者の姿がありありと浮かぶようである。

天の花地の星姉妹清々し　山本　半銭

「み空の花を星と言ひ、この世の星を花と言ふ」とは土井晩翠の詩である。この句はその本歌取りだ。姉妹の一人が天に、一人はなお生き長らえている様子を効果的に伝える。そして下半句、これが佳い。感性豊にすらりと自然だ。うまく言おうとする衒いがない。

息をするついでにあやまっておこう　谷口　義

ふざけるなと江戸っ子なら言いそうな句だ。人を喰った言辞はむしろさわやかでもある。

息を吐くのに少し追い足しをして「アイムソリー」と言うだけで、相手は「ドンマイ、ドンマイ」とつられてしまうだろう。

こういう句も、傾向の少し違った感性の句と言えるのではないか。やはり天性のものだ。

雪の白宥めることも知っている　増田　紗弓

北国の住人だけに雪への感応に真実味がある。雪はなだめてくれる色と言う。その伝でいくと、赤はおだてる挑発の色であり、黒は沈もる消滅の色か。感性が相通じたときは、うがちの理解以上に鑑賞がたのしい。

お手伝い米寿煮干の頭取り　堀江　芳子

全盲の傷痍軍人堀江正朗さんが米寿になられた。ご夫婦には長い辛いご苦労があったことだろう。そして今、子供のお手伝いのように煮干しの頭を取る動作を無心に続けておられる。感性の句とは類を異にするが、どうしても挙げたくなった句である。

敷のしの重しとなっただけで暮れ　武部　香林

やはり中年から全盲になった先輩の句を思い出す。面壁九年座禅の僧の姿を思う。

感性の句は感性で波長を合わせて読む。

句のリズム

酒とろりとろり大空のこころかも　　麻生　路郎

しんとろりとした美酒の滴りを凝し、黒田武士の大杯を呑み取る気概を大空につないで文語体で締めくくる。おおらかなリズム。

のみに来た友に家賃をきかれて居　　同

軽みにふさわしく連用形の居止めにして、意表当惑の思いをにじませる。先生のはこのような軽みの句にも生活の臭いが濃く出る。

ムザ〳〵と使える金が少し欲し　　同

つぶやくようなリズムでありながら切実である。庶民の本性に迫る上句の力に注目する。

似た物同士　津軽毎日雪見酒　　佐治千加子

この句七・七・五型である。上句、中句、下句がポツンポツンと切れている。これは指を折りながら作句する初心者にありがちな手法だ。しかし、この句はまだその上に中句が三音と四音に切れる。この中七のリズム感が殊の他深い味を出している。日本の言葉の連繫の味、リズムとアクセントの相互作用の複雑な抑揚はその内容を効果的に高めてくれる。

津軽凧はるかな春を呼ぶように　　同

「はるかな春」、はるの繰り返しは春の明るさ軽快さをうながす。この感覚も偶然のようで偶然ではない。作者の体内に備わるリズム感のしからしめるもの、伝統美なのだ。

春風に水の美術館がひらく　　吉田孔美子

内容まことにすばらしい。春の到来と水の美術館は想像力をそそられてたのしい限りだ。

この句の構成は五・九・三の十七音字だ。今、一字を取って十六音字にしたらリズム感はどうだろう。「が」という重い一字の或る無しは三度続けて声を出して読むと明らかになる。定型より破調の方がリズムのよいときもあるのだからリズムの研究は奥深い。

春風へ開幕水の美術館

この形が一番スタンダードだが魅力はない。

ガイドライン日本守るとは神話　　越智　一水

北朝鮮の工作船二隻の逃走事件がクローズアップされる昨今、当然出てくる句であろう。この日本はニッポンと発音すべきかニホンの方がよいか、これは明白だ。

六・九・三の句で、ガイドライン（字余り）に九・三と続けると口調が良い。「ニホンを」としても音数のつじつまは合うが力強さに劣る。

快調な朝のリズムに春近し　　佐野木みえ
快調な指先に春らしきもの　　川本　畔

二句とも快調と春の語が用いられていて、お二人とも松江市の方である。前者はすらりと素直な詠みぶり、後者は指先という具体的な指示と春らしきものという微妙な表現を試みられている。快調と春以外の用語もリズム感のある語を選んで、「が」などの重い言葉のないのも共通して良い。

赤い傘青い傘今日月曜日　　岩本　笑子

五・五・二・五型の定型十七音字の句だ。赤と青の傘はOLの世界を表現するのだろうが、句のリズムは弾むのがよいのか。ここで検討が必要なのである。弾むムードならこのままの形で畳み込むリズムでよい。

赤い傘、青い傘と休止の節を重ねたのだがら「今日は月曜日」とする手法もある。中八という忌避すべき形を敢えてとっても、リズムの点で変化があり、思い入れという面の味も出る。一考して比較する価値ありである。

句の匂い

その日ぐらしも軒に雀がこぼるるよ
寒うおまんなあと芸者も年をとり

路郎先生の句集はどの頁を開けてどの句を取り上げても味がある。一句一句が個性的なのだ。内容にリズムが適切に応ずるからだ。

貧しい長屋の生活ながら軒は雀の子育ての最中で日射しも暖かくまろやかである。

火鉢一つの四畳半、手をこすりながらに、「私も一杯呼んどくなはれ」と熱燗を所望する馴染みの芸者もめっきり年を取った。客に本音の言えるのは年季の味であろう。

長男ロンドンさんの一周忌に際しての
お父さんはネ覚束なくも生きている
お父さんの神経衰弱がわかるかい

の一連の作や、終焉近くこぼれ落ちた

死の影が紋十郎の背後（うしろ）から

などの句は触れるまでもなかろう。

境界のそばの魚がよくふとる
境界の杭が行ったりきたりする
テリトリーの境に犬の糞がある

原みさをさんの三句である。みさをさんは75周年の大会で月間賞獲得のきっぱりした力量のある作者で、今月の巻頭第二位を占められた。三句のうち一句を削るのに私は最も明快な、犬の習性を縄張りの絡みでとらえたのを外した。うがちも堂に入り過ぎる見え見えのマイナス面を意識したわけである。調和の点で前二句にひけをとったことになる。

満州に行けば蒙古に陽が落ちる　菱田　満秋

満州生まれの満秋さんは今なお同窓会で中国東北部へ旅をするらしい。彼の地の夕陽の美しさは定評があるが、満州へ行けば更に西の蒙古の落日のたたずまいを瞼に浮かべる。男のあこがれの雄渾さ、際限のなさが二つの固有名詞により大らかに表現される。構成はシンプルだ。自然リズムも壮大となる。それが短詩文芸なのだ。

娘の新居ダックスフントと初対面　佐野木みえ

娘の新居を訪う人一倍のうれしさ、その真実味がそのまま感じられる。斬新な犬の種類名がポイントとなり一句の味を支配する。表現していない事柄まで新鮮に想像させる。

わたくしの絵にはたくさん窓を描く　倉益　一瑤

鳥取の柳人は先輩に現代川柳に挑む好作家が多いので少なからず影響を受ける。わたくしを見詰める眼は現代的だ。すべての部屋に灯を点ける句は出尽くしたが作者は窓を増やす。ストレスへの対応か、秘密のない明るさへの希求はお人柄であろう。

病院の前で別れてからダンス　中塚　礎石

自分自身を老人の範疇に入れての際立った表現が効果を出した。一息に述べて二様の姿を垣間見せる転換のうまさ、現代を詠む。

モンタンに枯れ葉　雨情に枯れ芒　岩津ようじ
人生は不可解である　枝雀　同

私と同じ世代の二句。前者はモダニズムと明治調を対句にまとめて趣を得た。対句はリズムに乗る。この句も滑り過ぎの感を後半の内容が補う。後者は藤村操の古事を想起させて、時事吟の妙を披瀝出来た。短句の効果だ。二句ともに広いうがちに通じ句いを持つ。

事実の句

写生は真を写すのであるが、先ずは見た目のありのままを表現する技を習得する。正岡子規が短歌で示す一例で有名なのが次の一首。

瓶にさす藤の花ぶさみじかければ
　たたみの上にとどかざりけり

ここで言う事実の句は写生とはいささか異なる。写生の外に附随するものがある。

阪急が見えて旅から帰って来　　正本　水客

旅帰りの車窓に阪急百貨店のビルが見え出したのは写生であり旅帰りも事実だ。藤の花の短いのは写生のままだが、旅帰りに阪急の見えるのは、いささかの感慨がともなう。旅の終りの疲労倦怠感がずしりと存在する。

花火黄に空の重心全く西　　大山　竹二

黄色い花火が西の空にあがる。これが事実。それへ作者は空にも重心があるという独創的な見解を提示する。それはそうだろう、東の空は真っ暗なのだから。空の重心の傾きは仮空の事実。それでも読者は同感共鳴する。

聖書一冊菊一輪の二階也　　麻生　路郎

一冊一輪の潔さ。黒と白の色の簡素な組み合わせの効果で、二階は敬虔な雰囲気である。これは事実。書斎らしいことや主人の人柄の想像までもそそるのは単なる写生だけではないからだ。

次の句なども、それぞれの事実でその味を出している佳句である。

手術痕ちょっとだけよと見せてくれ　　早川　盛夫

手術の傷は糸を抜いたあと、まるで火事場のようにむさいものだ。うら若い女性が、恥ずかし気にそれを見せようとするしなが目に見える。恋人か好意を持つ相手であることを推察出来る。

そのうちの一人に又も向くカメラ　　堀江　光子

一対一のデートとまでは行かない同士、女性が友だちと一緒に来たのであろう。写す目標の人は一人でもあからさまには出来ぬ心理、カモフラージュに心を配る様子がしっかりと分かる。心理描写は川柳の一領域だ。

興味ない家族写真を見せられる　　寺川　弘一

女性に多いのだけれど、家族の写真や独立した子女の家族のまで、それは孫自慢に繋がるのだろうが、写真を見せる人がいる。むげに拒否は出来ないから相槌ぐらい打っておくが調子に乗ると白けることにもなる。

一寸した事実だが、巧妙にすくい上げられると、そうだそうだという気にさせられる。

留守電のようにポストにある名刺　江口　度

営業マンになったとき、如何に人に会って貰えるか、如何に名刺を多活用出来るかに腐心する。訪問先が留守のときでも名刺はポストに入れておく。そのさびしい空振りの名刺を留守電に連繋させたのが、この作者の才覚で、うがちのユーモアといえる程にどんぴしゃりなのである。この作者の個性、本領だ。

仏壇から庭の老松よく見える　野坂　なみ

仏間の正面に仏壇、庭の正面に老松、これが事実の描写。それだけで、亡き父が手塩にかけた松であることや、作者の子供のときの父母兄弟と松との関りなどを思う作者を想像する。仏壇の父と一緒にひと時松を見るたたずまいが絵画の味になってくる。

外来語の句

英語だけではない。よく例に引かれるのが大阪が発祥のアルサロで、アルバイトとサロンの独仏混交語だ。国際化とともに急激な増加は選者を戸惑わせる。

ボーナスで父の腕前疑うな　麻生　路郎

資本家はキャラクターまで買いたがり　同

平成不況は長引きボーナスの大幅減はまだしも、カットされる企業も多い。ボーナスは頻繁に使われる語だが、キャラクターなど硬質なカタカナ語が句に生かし切れているのは先生の幅の広さであろう。

ヒヤシンスの音沙汰でなしパンの事　麻生　葭乃

女流らしい趣味のやりとりと見せて、生活苦を言ってきた便りである。若い才が迸る。

表情を殺してＹＥＳ・ＳＩＲと云う　奥村　丹路

物品にはメイドインオキュパイドジャパンの明示があった時代、米兵が上官に靴を鳴らして敬礼し、イエスサアと言っていた口ぶりで、ごもっともごもっともを通したのが日本人だ。以来、恥の文化は薄れて消えた。

登園拒否ベッドの中に雨が降る　榎原　公子

幼稚園児の抵抗は、朝のベッドから出ようとしない。そのような時は梅雨期であろうとなかろうと、涙が出ようが出まいが関係なく、ベッドの中は陰湿度九十％を越す。

グリーンサラダとパスタを食べる秘密基地　嵯峨根保子

緑野菜のサラダとマカロニやスパゲッティの軽食で、これという特徴もないのに秘密基地であるのは、お昼をすませたあと飛び立つたのしみがあるからで、女同士は他愛ない。現代性があって下句が味だ。

飛行士の視線で見てるエコロジー　後藤　早智

かつては鳥瞰図と言った。今は飛行機から宇宙船の規模で宇宙の生態観察に焦点の行く時代となった。若い視線のたまものである。

初恋へタイムスリップさくらんぼ　津守　柳伸

「苺は毒婦処女の桜ン坊　葭乃」の句を思い出させる。外来語が本領発揮した。

プロポーズ君を終身刑に処す　川上　富湖

夫唱婦随と思えばはや婦唱夫随的になり、たちまちにまた逆転する。句集『二重奏（デュエット）』を出したカップルは、互いに鏑を削っていて気持ちがよい。

実際プロポーズの言葉でがんじがらめになってしまうと、終身刑の判決を受けたも同様、子が巣立ったあとも惰性あるのみだ。

現代のことだ、女性からの求婚か。

よく稼ぐ満身創痍ダンプカー　田中　文時

公共事業に注ぎ込む予算の高はダンプカーの疾走に比例する。泥まみれ、土砂満載の姿と、排気ガスのすさまじいのが象徴するように、満身創痍の猪にもなぞらえられる。

八月十五日ムンクも叫びつづけてる　緒方美津子

終戦記念日にしずかに平和を祈る脳裏には、阿鼻叫喚の絵が存在する。ムンクの叫びに似たと捉えた作者にたちどころに共鳴した。

味のある句

今回は味のある句と題したが、これは味わい深い句というより、味な句というか、洒落た句を含めて、一寸した趣向や表現の形の上で工夫を加えたという意味合いで取り上げた。平凡な句と紙一重といったところもある。

恋の罠あの眼だろうか眼だろうか　麻生　路郎

「目も口ほどに物をいう」との諺がある。女の秋波は男を虜にするのは衆知の事実だが、それをこのように提示されると、うなってしまう。並みの句とほんの少し違

うその効力は「眼だろうか」のありふれた言葉ながら、リフレーンさせた手柄による。無論、その前に恋の罠という語の適切さがあるのだが…。

浮き草は浮き草なりに花が咲き　　中島生々庵

浮き草は緑白色の小さな花を咲かせるのもあるが、ほとんどは葉のような形の茎が分裂して増殖する。目立たぬ草の目立たぬ花は下積みのひそやかな存在で、憂き草と呼んでも過言ではあるまい。

大毎も止まり豆腐屋も止まり　　須崎　豆秋

昭和九年の室戸台風のときの句で、大会社と小商人の対照を際立たせて一句にしたもの。この時、朝日新聞社は自家発電の装置で、印刷をし、新聞が発行出来たのであった。

動物園どうぶつえんの匂いする　　酒井　一壺

動物はそれぞれ体臭を持つ。犬もそうだ。猫は臭いがしないというが麝香猫の分泌物は香料となる。狸だって熊だって変りなく臭う。それをひっくるめたのが動物園のにおいで、具体的には言えぬが、概念の上でも実際にも存在する。それを味な表現と思うものだ。

おおよそは涙の顔に書いてあり　　永井三津子

涙を流しているのは女か子供か、何一つ具体的な示唆はない。しかし、想像をたくましくして、女なら、また子供であれば子供で、涙のわけありをある程度察することが出来る。

ぼんやりと言われて理解できぬ句もあれば、納得のいく句もある。この句がその例である。

腰かけた石を拝んで遍路立つ　　宮崎シマ子

お遍路は常に同行二人、お大師さんに感謝の礼の行である。だから巡礼というのであろう。ひょっとして、俳句にもありそうな堂に入った内容だが、故里が阿波の句主なれば、深くうなずけるものがある。

白湯は白湯これからミルク溶かします　増田　紗弓

白湯というものを見据えている。原点の白湯からさまざまな展開がはじまるのだ。お茶を淹れたり、消毒に用いたり、昔の行水もなつかしい。ミルクを溶かすのもその一つで、新生児の面倒を見る句主の職場も思わせる句でもある。

銀行もコンクリートも信じない　　唐住　実

銀行のトップの醜態にもあきれるが、新幹線のトンネ

ルの手抜き工事によるコンクリート塊の剝落も、末世の様相を帯びて、庶民の鬱屈につながっていく。銀行とコンクリート、この取り合わせが妙に句趣を高める。

乱暴なほどの措辞に力感を覚える。

はじめに言葉ありきの句

昭和32年、私は路郎先生川柳生活五十年を記念して出版された句集『旅人』に接し、病院を抜け出して先生に会いに行き、弟子入りを懇願した。そして『旅人』の句に自分流の物差しを当てて勉強をした。その中に言葉が先ず存在して、それを芯に最大限に生かすような句作りの形に気付いた。

酒女酒で不惑に手がとどき　　麻生　路郎

の「不惑」である。孔子の言葉の「四十にして惑わず」の意が最大限に生かされている。

凡聖一如元旦のこころ知る　　同

の凡聖一如（仏教語）もその一例である。私は以来「辞書の散歩」をはじめた。川柳に適した句語を辞書から採集して頭の引出しにインプットする作業である。

今年二月に作句した次の句は「御御御汁」の句語に惹かれて生まれた。明治生まれの母刀自を介し、即席味噌汁の手抜きを批判した。

母刀自の在せし頃の御御御汁　　薫　風

四面楚歌故郷は豆の花の頃　　同

という初心時代の句も一例で四字熟語は格好の対象となる。

はじめに言葉ありきと言ったが、はじめに心があって、それに即した適切語を用い、佳句に仕立てるのが本筋で、実際の作句上でも数は多い。道筋は異なるが到る所は同じだから今回はそういう句も引用する。

浮雲を眺めて飽きず考えず　　内海　幸生

この浮雲は言葉であって言葉でない。作者と浮雲は一体なのである。とりもなおさず、亡妻と作者は融和している。「考えず」の措辞がその心域にまで踏み込んだ。

芥箱で未だ咲いている七変化　　小西未佐子

七変化がこの句の芯。紫陽花の別名である。みどり、白、淡紅、藍、紫と様々に変わる花だから、捨てられてからも変化するか。

あじさゐの最後の変化枯変化　　山口　誓子

の佳什がある。

立秋やここをせんどと蟬が鳴く　　山門　幸夫

この句の焦点は中七であるが、先途という漢字を使われなかったのが良い。蟬のいのちのせとぎわが表現出来た。

神のマウスで辿った文科理科の軸　　竹内　紫錆

コンピュータの「神のマウス」でなぞるカーソルは、仏教でいう胎臓界、金剛界の曼陀羅さながらに文科理科の軸を識別する。秀でた科学者の目の独自な発想が尊い。

かわいそう螢の字から火を取って　　栗林　光夫

戦後略字を常用するようになり螢が蛍となる。火を取られた蛍はただの黒い虫に過ぎない。亀など万年も生きられないと思っている。

合歓の花ふわりとおとこ匿いぬ　　木本　朱夏

「匿いぬ」の言葉が先か、合歓の花の先導か、これは作者の感慨の自然な伏流であろうと私は推察する。

私はかつて母の乳房を合歓の花になぞらえたことがあるので印象深い。昔、西施も男をこのように匿ったことであろう。

矛盾・齟齬の順当化

人の世には真っ当な常識だけでは律し得ないものが多く、そういう対象を詠む句ほどに興味深く味があって、川柳にはうってつけの材料になり、批判、ユーモアの種に繋がる。

自分すら救えぬ人の立候補　　麻生　路郎

代議士にしろ地方自治の議員にしろ、国益や市民のためになる人物でないと、それはマイナスになる。党利党略、私利私欲の候補者を叱るこの句は、強烈な批判とともに世の矛盾を衝いて鋭い。

老司祭黒にも無垢の衣あり　　薫　風

日本では古来から白を無垢とした。神官や花嫁の衣装は白無垢を基調とする。ところが神父の衣は黒だ。神父も聖職だから黒無垢と言える。これは一つの矛盾や齟齬の順当化で、川柳的眼が効を得たのだと思う。今回は、そのような句を選んだ。

蛸焼屋公的資金に恵まれず　　久保　正剣

たこ焼き屋が破綻の金融筋やゼネコンのように公的資

金を恵まれることはない。

この二つのかけ離れた句語を並べることでさわやかなまでのユーモアを具現する。大手偏重の施策の批判をやんわりとしているのだ。

生まれつき良心虚弱体質だ　新家　完司

普通、身体虚弱と用いるのを、心、それも良心としたことで、やったなとほくそ笑むものに繋がった。他人への批判か自分への反省か、両方に取れるのが多少の難ではあるが。

夏ごもり自動制御の風の中　藤田　泰子

今年の酷暑は尋常ではなかったので、確かに「夏ごもり」の毎日だった。それ自体に自動制御のおもむきありで、クーラーの機能と一緒やと感付かせるウイットが味付になった。

私の予定を聞いてどうなさる　古川喜美子

他人の私にくどくど予定を聞くのは、一生面倒を見て下さるおつもりか。それでなければ、さしでがましくうとましい。そういう気分が結語の言葉の力で、複雑に強烈に表現出来た。男心の曖昧矛盾に逆ネジを喰わせる。

東京タワーのてっぺんで見る我が手相　澤田　千春

東京タワーにのぼり東京湾を見はるかす。晴れていれば富士山も見える。直下には豆粒のプリンスホテルのプールが色とりどりにある。ところが、句には手相とあるのみ。この予想外の転換、自動占い機であろうが一句としてまことにおかしい。

赤ちゃんが乗っておりますシルバーマーク　斎藤　劦

自動車のシルバーマークや乗り物のシルバーシートは老齢化のシンボルだが、赤ちゃんも同乗している。老人を二度童子と言うのだから、似た者同士、同格にして頬笑ましいのである。

乱打戦野球ではないゴルフです　板山まみ子

野球で11対8などという結果は、逆転また逆転の経過で、きっと面白いはずなのだが、乱打戦といってもゴルフとなると笑っちゃう。二者の齟齬がうまくユーモアに繋がったのである。

嬉しくて笑い淋しくても笑う　平田　実男

異質の笑いだが、この句も何故か捨て難い。

新年号から始めた佳句感想も歳晩を迎える。いろいろ

な見方での、いささかこじつけの鑑賞であったかも知れないが、今回は何の制約もない感想で、このシリーズの幕としたい。

兄ねむる金沢雪の早いこと　　中井　ゆき

この句の情緒に溢れたたたずまいは、金沢という固有名詞の作用によるもの。また句の上半、下半の内容と措辞もまことにやさしい情感に満ちている。作者のお人柄であろう。

相手には軽い約束だったよう　　小西未佐子

私にとっては命がけの思いの約束だったのに、相手はそれほど真剣に受け入れてくれたのではなかった。それが今日の破綻の姿だ。さり気なく言ってはいるが、リズムは重い。

ブランコがきしむ初恋もきしきし　　森　茜

この句8・9の変型十七音での構成。結語が独特なので、余程風変りに感じられる。内容は目に立てて見るべきものではないが、リズムの上での工夫に惚れた。五・七・五型のみかたくなに遵守する定型の固執者は、この句を不定型だと言うに違いない。

焼きするめ裂くアチチチチお留守番　　武田　帆雀

焼いたするめが網の上で反り返っている。素手でつまみ上げて、これはほとんど火傷の指を耳に持っていく、そんな素振りが目に見える。下五のまとめが瓢逸だ。

このあと、するめだけをかじるわけはない。

京ことば一言だけの舞子はん　　池永　正匍

NHK大河ドラマの「元禄繚乱」でお軽の役の娘が可愛いイントネーションで京言葉を喋る。あの伝で舞妓さんも短い言葉で応対する。それが色気だ。舞妓さんが多言を弄すると卑しくなる。

どうしたと父の返事の温かし　　堀江　光子

父親もまた多言を弄さない。「どうした」の一言が重くもあり、軽きにも通じる。

小遣いをせびったときも、婚家を飛び出して帰ったときも「どうした」であった。

壁のような父は、毬に対して大きくも小さくも対応する容量を持ち合わせる。

君の頭は軽いと枕さえ言うよ　　土橋はるお

ユーモア作家は、川柳塔では須崎豆秋さん、土居耕花さんと続き、今では江口度さん、相馬一花さん、土橋は

るおさんらが本領を発揮され、女性のユーモア作家も育っている。

枕よ、「固い」ぐらいに言っておいてくれ。

人間をやめたか靴が捨ててある　高田美代子

靴が揃えて脱いであればギョッとするところだが、捨ててあるのは何処にでも見当たる。

普通何ともなしに見過すものが、その時の感性を刺激して異様に映ることがあるのだ。それが作者の個性につながる。

彼岸花運動会が無事に済み　岩本　笑子

身の内の鬼立ち上がる曼珠沙華　木本　朱夏

曼珠沙華間抜けの花火音がない　園山多賀子

彼岸花描いて黒猫かき添える　坂田和歌子

種々の曼珠沙華、あなたのお気に入りは…。

この句　この人

かき氷の山から捜す登山口　古久保和子

宇治金が運ばれて来た。緑一色の山を匙ですくう。最初から頂上の甘い場所を占有してはいけません。麓から麓からです。

手足れの揃う和歌山にあって作句力はトップクラス。それも優しいご主人が句会場へのアッシー君を勤めるたまものか。

お迎え火何をうろうろしてなはる　安藤寿美子

お迎え火を焚いたところである。門口に気配はしたものの仏間の蝋燭に「仏来たまう」様子はない。十年も過ぎたので忘れたんかいな。あんたは相変わらず世話のやける人や。

女に惜しい才人だけれど謙虚そのもので、この頃着用の帽が似つかわしくなられた。

秋風に両手で湯呑み持ってみる　緒方美津子

女だから行儀よくの他に、冷えまさる秋の気から、茶碗のぬくもりが両手に欲しくなる。

あっさりした句だが、中々この境地になれない。先日も家の近くの小句会を覗かれたら、そこの指導者が私と同じ病院で作句していた樋口舟遊氏であったという。勇気がある。

ＭＶＰ孫が笑いを撒きちらす　井上　森生

孫の可愛さは誰も言うことだが、ＭＶＰが抜群だ。早く言った者が勝ちとは、工業の先端技術と同じ。松下コンツェルンの偉いさん。

端正な顔もリストラ容赦ない　桜井　千秀

一流会社であろうと、今の日本では安心してはいられない。端正な顔のつくりも、洒脱な服装もリストラの対象に関係はないのだ。

中筋三幸、菅井智水庵両会長の後の三幸教室二百名の会員を切盛りする女丈夫で、会うて話すと孫娘恵利子さんのことばかり。

大根の葉っぱをくれた店が消え　川端　一歩

スーパーやコンビニの勢いに押され、商店街の凋落は歯の抜けたように廃業する。近くの農家の朝掘りの筍、大根を買えば葉っぱも一緒に新聞紙にくるんでくれた。お百姓と同じ太い指をしたあの夫婦はどうしているか。

第二の勤務に精を出す作者は、常に本を携えている読書家。能ある鷹のたたずまいだ。

梅雨あける金庫の金を虫干しに　加島　由一

「お父ちゃん、よう言うわ」と奥さんに言われそう。まるで金丸さんの金庫番のようだ。

大阪府警に勤務の硬骨漢だが句の幅は広い。器量が大きいからであろう。

まんじゅうを三つも食べた仏さま　早川　盛夫

饅頭を商う作者だから、朝こしらえたのを仏壇に供える。日暮れには三つも減っている。

ピアノと塾通いに忙しい仏の仕業である。

炎天の暗さ自転車屋の暗さ　桑原　道夫

昭和二十年八月には炎天ながら暗い日が続いた。原爆の投下であり終戦の詔勅であった。人は肉親の死にも奈落の暗さを感じる。

一方、町の自転車屋の暗さはどうだ。眼を馴らしてからでないと奥は見えない。雑然と置かれた小さい機械、

道具の類を踏んづける。ようこんな所で仕事が出来るなあと思う。心理的な暗さも物理的な暗さも同じ「暗さ」で表現する。詩の面白さ、味というものだ。

それを自由に駆使出来るかどうか。作品は言葉だけでしか勝負出来ないのである。

国会の時計で時を合わせない　仁部　四郎

政治家の時間と庶民の時間とは同じでない。秒読みで立ち回らねばならぬ時、法案を通す日時を短縮したりもする。反対に、先伸ばしや牛歩戦術もやれば、得意の居眠りもある。

高校の校長の経歴はその目の高さの批判力、人柄の故から自らに溺れることがない。

木曜日君は朴念仁である　桑原　道夫

木曜日は月曜や金曜と違ってとらえどころのない日である。勤め人は朴念仁となってしまう。朴念仁という中句がこの句の焦点だ。「朴念仁の君である」の形で五・七・五が全うするが、リズムの上で物足りずに位置を替えた。君と表現しているが自分の実感なのだ。

携帯で親を呼び出すランドセル　三好　専平

携帯の便利さがエスカレートして、今に詐欺恐喝、脱税もという時代になりそうだ。その予備軍が今の子供達だ。しっかり機械を駆使して、体を機械にしておくことだ。この作者ズバリと言いおおせる句が多く快い。しっかり路郎の手法、精神を研究して頂きたい。

孫娘よそれで充分美しい　春城　年代

中七の表現の真実味、上句の字余りの効果、リズムと適切な言葉がこの句を佳句にした。

孫娘への愛情表現にこれ以上のものはない。夫君の武庫坊氏とは幼稚園からの恋仲、七十数年それが続いているので傍目にも羨ましい。

始皇帝の願いがわかりかけて来た　井上　勝視

あっさりとこのように言われると思わず相槌を打つことになる。権力者になると誰もが命の限界に突き当るらしい。秦の始皇帝の命で不老不死の仙薬を探しに日本へ来たという徐福の伝説は新宮にもある。鬘鑁という語の当てはまる御仁だが、もうそんなお年か。

他人には小さきことよ我が涙　富坂　志重

須崎豆秋さんの「葬式で会いぼろいことおまへんか」の句を思わせる。年を取ると涙もろくなるが、実際、自分の事は自分にしか分からぬ。今日の朝日の夕刊に作家

の三浦しをんさんが、猿の涙の話から「目から出る水を涙と意味づけざるを得ない、人間である自分が哀しかった」との短文の結びの言葉を思う。何か心を撫で鎮めている気配の句だが、私はふと美しく明るい久世の川堤の桜トンネルを見たい。吟平さんや志重さん、秀香さんらともう一度会いたくなる句である。

地に伏してフォークリフトの休養日　竹治ちかし

休養日には人間も大口開けて眠り続ける。リフトも降参して深々と頭を地にあずける。機械の擬人化。祈りまで感じられもする。

鉄腕アトムを少し年取らせて、教養の味付けを程良く纏わせると、ちかし像になる。万年青年の面持ちを持つ。

くらやみを押してる車椅子の音　徳田ひろこ

スリラーとも介護批判とも言わぬが、何かを読者に感じさせる。従来の句から抜きん出たセンスから創られた句と思う。川柳塔にもこのような句が散見出来るようになった。喜怒哀楽は具体的であれ、抽象的であれ、真実を訴えてくる。作者は若い世代と思うが、鳥取の水で斬新さを研いで、個性ある作者、指導者になって頂きたい。

行き交うものあり縦の樹を守る　林　瑞枝

上半句は松尾芭蕉の「奥の細道」や鴨長明の「方丈記」の冒頭に似た無常観である。

縦の樹は、荒介はんが大山に蕨採りに出掛けるのが、例年早春の楽しみであったことから、その目印になった樹であろうか。一樹の貫禄が故人の貫禄に繋がる。

男らしい荒介氏の陰でなよなよとした奥さんと思っていたが、巻頭の海に近い故里の句、また、すでに玉野の川柳会に参加の意欲を見ると、夫君と同じ筋金入りの作家に思える。

宙ぶらりんになりそうだから雑草を抜く　園山多賀子

私の器もう歓びは溢れない

これらの二句も卒寿に近く夫君を亡くされた実体験から生まれた句だ。私はこの欄には二度の登場をして貰わぬつもりでいたが方針を替えた。肉体は雑草にすがりついておられるのに句には力がある。年と関係なしだ。

凡例にしたがいながら種を播く　青戸　田鶴

種袋の指示通りに種を播く。それだけの内容だけれど、味もしゃしゃりもない言葉を使った裏に、絢爛とした開花時の夢を蔵している。さり気なく詠み流して味のある句。

きゃらぼくの本尊八木千代さんを盛り立てる四天王の一人と私は思っている。

老妻の口紅異なもの味なもの　西岡　洛酔

川柳の楽しさはこのような句に接した時である。女は化粧に執心するものだが、そうでもない大雑把な人もいる。まして年取ってからは美への関心も薄れる。ところがある日異なことをと、思わせられ、まんざらでもないと感じたと言うのだから、女性の化粧は常に男を誤らせるものか。

大阪交通局で市電の運転手を四十年、後に地下鉄、ニュートラムに変わるが、如何にも謹厳実直なお人柄である。

藤棚の下にわたしの好きなひと　山口　高明

満開の藤の花の下に好きなひとがいる。一幅の絵だ。女性が立っているか腰かけているか、それは藤の房の長さからポーズも決まる。

作者は元漁連に勤められ、海の男との取引きで鍛えた重厚なたたずまいの持ち主だ。六十過ぎか。唐津おくんちが棲んでいる。

お子さまランチの旗には向かう敵がない　長浜　澄子

この句には驚いた。と言うのは、私は時折孫たちを思い出してお子様ランチを注文するからだ。そこで「旗のないお子様ランチなんて…」とつぶやく場合も出来する。父の天職を継ぐ一人娘の成長に母娘一体の感あり。いかにもよく笑うのは、お子さまランチの旗に吹く風のムードか。

内申書に十把ひとからげの少年　原　みさを

厳しい競争の世界では生徒も大変、先生も大変だ。同じ大変でも蒙る大きさは無論のこと生徒の方で、先生のあり方では十七歳になって切れることになる。家庭環境も肝心であるが、「じゅっぱひとからげ」の対応ではと思えないこともない。現代はどの領域においても、一部エリートのものとの感が深いが、来世紀にはその差が広がるばかりだろう。

作者は川柳塔おおとりのお世話役、幅広く農作業に従事されている質実剛健の男性である。私は島根の森茂美氏とよく間違える。

牙がとれ男だんだん萎えてゆく　井上　勝視

男は格好をつけなければ生きて行けぬところがあるの

は、人間も動物も同じだ。狼に牙が抜け、獅子の鬣が瘠せてはしめしがつかぬのである。人も入れ歯になり、白髪のかさの減る頃は、限界を自覚しはじめる。

作者は唐津の記念大会の私の選で天位を獲得、同人に加わって頂いた。日本の父の典型を思わせる方、これは実感の句であろう。

雲流れ時が流れて石舞台　　安藤寿美子

蘇我馬子の墓と言われる石舞台古墳の岩石のたたずまいは、確かに雲の移行の下にしずまる悠久の時を感じさせる。そして王朝時代の華美な宮廷を幻覚させもするのだ。

寿美子さんの器量は大きい。このような句とともに洒脱なユーモア、皮肉の作も得意だが、卑しさのないのは教養のたまものだろう。

モナリザの微笑プーチン氏の微笑　　藤解　静風

謎の微笑と言われるモナリザと、ロシアの大統領プーチンの白皙冷徹な表情から洩れた微笑の対照は、効果的に思索の知性をそそる。それは文芸の醍醐味の一種で、女と男の別、時代の差も一層佳句に仕立てた要因と思える。

人を殺した後かも知れぬモナリザ、これから殺すかも知れぬプーチン、私の鑑賞である。

作者は私と同じ名、雅号を薫風としたかったが山内静水氏の一字を継ぎ静風と号された。「藤解けて風に薫る」もふさわしいムードである。私と同じ雅号に改めませんか。

恋文にならないように花便り　　長谷川春蘭

半世紀平和の続いた日本は、花の多い和やかな印象の国になった。それで様々な花便りが出来るようだが、恋文とまぎらわしい書き方をすれば年甲斐もなく思われるに違いない。

そこは年の功のけじめである。軽みの句。

平素は温厚で口数も少ないが、挨拶その他の丁寧さは明治生まれそのものの御仁である。

花みずき咲く頃生まれみずきちゃん　　福田　満州

桜が終れば花みずきの爽やかな季に入る。好い季節に生まれて好い名を付けられた女の子は、きっとやさしい分をわきまえた娘に成長するだろう。リズムが内容に即して良い。

満州さんのやさしさは本社句会や川柳大会の録音テー

プを作成して下さることで、後々迄残る川柳塔声のミュージアムとなっている。

スポーツもモデルもこなす車椅子　木村貴代子

車椅子の性能の良くなったのと、身障者への社会の理解が行き届いてきたのとで、今やサッカーやバスケをはじめスポーツにも、ファッションに関わる華麗なモデル界にも、身障者が進出するようになった。この社会性川柳は、文学でのバリアフリーだ。

出陣のねぷたの如く行く砂丘　櫻庭　順風

弘前のねぷたは出陣の高揚、青森のねぶたは凱旋の歓喜であるという。四月の梨花の吟行会に青森県から十名の仲間をお迎えしたが、まるでねぷたの威勢に通じた快挙だった。その先頭に立たれていたのが順風氏で、風格あるお人柄は鳥取の風にも馴染んだ。砂丘を見はるかす海辺での一行はまさにこの句のように、ねぷたの大太鼓、笛の音までが聞こえるたたずまいであった。

単線へ瀬戸内海がカーブする　岩本　笑子

山陽本線三原駅から呉線に乗り換えると、車窓には海が開け、竹原に着くまでの辺り、忠海（ただのうみ）の島影の美しさは心に残る。列車がゆっくりと曲ると、渚の緩やかなカーブが見通せて何時見ても飽きない。列車のカーブを海岸線のカーブと叙したのが焦点。

作者は多趣味で、自作の陶器の可愛い箸置きを頂いたことがある。

口ひとつ耳がふたつをつい忘れ　川端　一歩

言うまでもなく人間は一つの口、二つの耳を持っている。自ら主張をするより多く他人の主張を聞くべしと教えられているようだが、これが中中むずかしい。「筆は一本箸は二本」の諺に似た形のうがちが決まった。

川柳塔社の母体、大阪市交通局出身なので次代を背負うて欲しい人。句も人柄もよい。

過半数木に竹を継ぐことぐらい　唐住　実

自民、公明、保守三党の連立政権の批判だ。「木に竹を継ぐ」の言葉が有効に働いている。保守党党首が扇千景だから、松竹梅のおめでたさだと洒落の一つも言いたくなる。

もの静かだが厳しい目の持ち主、その眼光で一層の客観、批判を深めて頂きたい。

腹切りの場面も茶の間お茶と菓子　結城　君子

テレビでの観劇である。

浅野内匠頭の切腹の場、菅原伝授手習鑑の首実験の場、その他残酷なお芝居も、茶菓を前にして平和な涙を流す老夫婦なのである。

森川五兄妹の同人のうち、抜智、まさお、栗谷春子さんらが他界、森本節子さんとのお二人になってしまわれた。老姉妹の緊密な仲は、川柳で実を結んで頂きたい。

象の鼻やさしい話だけ拾う　　西川　和子

象が好物の芋や藁を食べる仕草は、その眼差しと同じにとてもやさしく愛嬌がある。

この象は作者自身で、善意の話だけを胸に納め、怪しげな取り沙汰には取り合わない。

象の姿態を表面に、わが心理を裏に、誠に手際よくまとめられた句だと思う。

昭和十年生まれの作者は理容院を営むしっかり者だが、ご主人の趣味に合わせて協調される幅のある人でもある。

片思い薔薇を渡してほっとする　　橋本多哥由

まるで初心な少年に似た内容である。それ故にか、俄然この句の真実味がそくそくと迫り、作者のその時の顔まで思い浮かべて微笑を禁じ得ない。

鳥取砂丘とらっきょうの生産地で有名な福部村の住人、温厚な村夫子然としたお人柄は、私には打ち解けやすい仲間である。

ゼロ金利春の野に出で若菜摘む　　徳山みつこ

銀行の預金利子がゼロに近いことは、庶民生活にとっての傷手である。ケセラセラでは済まされぬ憤りを感じての行動が、せめて百人一首にある「君がため春の野に出でて若菜摘むわが衣手に雪はふりつつ　光孝天皇」の優雅な王朝時代の野遊びであった。厳しい現実感との絶妙な取り合わせは本歌取りの手本。

作者は小柄だが考えのしっかりしておられるのは教職にたずさわっていたからで、平素はユーモアを解する明るいお方である。

朝刊を読む時わたし素顔です　　岸　桂子

確かにたしかに、起き抜け新聞を読むのにあらかた化粧を済ませてから、という人は少ないであろう。男なら寝床で煙草をくゆらせながらというのもあった。平凡を非凡に詠むとはこのような句である。

男と同様、女にも仁義礼智信というふうな型を人柄の上で識別出来るが、彼女は義理をわきまえた知的なたたずまいを持っている。

グウチョキパア土をもたげる春の音　木村富美子

北国の春はどっと自然の中から到来する。グウの姿は蕨、チョキは芹や楤の芽、パアは蕗の薹や現の証拠であろう。大山の麓の山菜採りは、それぞれの人が穴場を持っている。

川柳塔きゃらぼくの踊り好きのメンバーを統括するお師匠さん役で、貫禄が備わる。

春場所の土俵に大阪四股を踏む　太田とし子

大阪の春は高校の選抜野球と大相撲から幕が開く、と言われる。力士の四股を大阪の都市の活力に拡大解釈して、早期の景気回復に繋いだ。お隣りの兵庫県では花博でわが世の春を呼び込もうとしている。とし子さんと坂上高栄さんは二十五周年を迎えるねや川句会のベテラン女流、この五月に合同句集が出る。

七十年雛も妻には負けず老い　八田　敏

初節句に親の買ってくれたお雛さまも七十歳、妻の皺に負けず古びて臈長けてこられた。

淡淡と叙するが、その妻は介護を必要とする身、作者のご苦労の句も多く見られる。

今は埼玉の大宮在住だが、大阪の頃の楽しい仲間を思い出していらっしゃることだろう。

当て字には書き得て妙とひとり笑み　井上　松煙

複雑な日本語には当て字まであって、野暮とか出鱈目などから、明治天皇が好んで賞味された理由で鯣（ひがい）の字を当てた魚もある。作者はふと思い違いをして書いた文字が理にかなっているので思わず北叟笑んだ。中中に面白い句である。北叟笑むも当て字。

定年退職後、悠悠と趣味をたのしむという風情の人、現役時代からの囲碁は五段。

割り勘で上司の家族思いやり　薗田　獏沓

通夜とか告別式のあと、参列者が居酒屋で故人を偲ぶ。遺族である老人や子供たちを案じての話題となったが、上句のわびしさでこの句を際立ったものにした。平社員的処世。

静岡県の大井川鉄道の名物車掌さん。お座敷列車のユニークさは西尾栞主幹の時代に団体を組んで寸又峡に遊び、お世話を掛けた。

亡父と亡母パントマイムで楽しそう　安食　友子

娘の眼に生前の父母は仲が良かった。今も彼の世で以心伝心の対話を楽しんでいると思える。まるで手話を交

わすような中七の措辞が温かだ。六十をちょっと過ぎたご年配のきちんとした方。郵便局の勤務だったので郵政の恒松町紅さんの引きで川柳に入られたか。

手はすでに藁しべだけを握ってる　政岡日枝子

作者のご母堂石垣花子さんは、昨年十一月以来脳梗塞で植物人間のように眠り続けておられる。人は藁しべ一本で何時まで生かされるのか。五ヶ月程が永遠の時に思えて悲しい。

一刻を預かっただけ胸の花　園山多賀子

胸に大きな菊やバラの花、派手なリボンを付けて様になるような顔でいるのは政治家に多い。作者をはじめ庶民は、滅多にない事で気恥ずかしいのである。中七の措辞がよい。

昨年米寿のお祝いを受けられたところなので、その日の感懐であろうか。尼緑之助氏や原独仙氏の名コンビに色を添えた「いずも」の花の時代を思う。今年はいずもの75周年。

サウンドが聴こえてきそう蕗のとう　増田　紗弓

富山といえば立山山麓の雪の中から顔を出す蕗の薹は壮観である。若々しい色と勢いは若者達のライブの音響の綺羅の様に燃え立つ。

ナースを職とする紗弓さんは蕗のとうの淡いやさしさと活力を持ち合わせておられる。

大寒のガムはバリッと音をたて　福士　慕情

弘前は北国、厳寒期にはチューインガムも噛めば煎餅のように音がするのだろう。暖国では、まさかと感じられることなのだ。このように土地柄では当然のことを句にして、頷いて貰えるのも意外性のある面白さによる。

本社の大会にも参加下さる六十歳前の堅実派、雅号はロマン派。きちんとした組織立てに堪能なお人柄とお見受けする。

傘一本人はこんなにぬくいのか　倉益　一瑤

相愛の二人が雨をしのぐのを相合傘と言うが、傘の字には人が四人もいる。二人でも四人でも心通うた同士はあたたかい。この句の「ぬくい」には、あたたかいを越える霊肉の実感がともなう。自分に正直な真実の歌い手で、これからの川柳の姿と言いたい。

大きなラッパの奥に居るわたくし　坂田和歌子

ホルンのような楽器を見ると、音の出口の大きく開いた形に反して、奥の方にはまことに静かな所があるので

はなかろうかと思わせられる。そう思わせる句の仕立てに独自な腰の据わったものがある。

今のこの作者を私の若い日に似ていると見て、積極性に感じ入っている。

若いキス　サーフボードを砂に立て　久保　正剣

パドルボードともいう波乗り用の板は細長くて、砂浜に立てると如何にもカッコいい。

若いキスの背景には夕日の落ちる椰子の木まで想像出来る。こんな若い句をものにする御仁は唐津在、肥後の細川家に仕えた宮本武蔵の自画像に似たたたずまいのお方である。

不孝者嫁とはうまくやっている　川村　映輝

いつも言うことだが民主主義のお蔭で老後は寂しい。愚痴の一つも出るというものだがその愚痴にまた味があるのだ。作者は運輸局の役人の頃からの路郎の門下で九十六歳、五人の子（四男一女）、十人の孫。それでいて今は老夫婦お二人の生活である。

これよりは古希の段あいつとめます　山本　義子

舞台の裾で文楽の黒子が口上を述べる。演題や演者を特有の節で披露する。それはこだわりのない淡々とした口跡なので、次の太の音色が一層壮重に聞こえる。古典の味の一つ。

山本義子大夫も古希になられたか。それでも山登りを楽しみ、川柳会の世話を惜しまずにされている。控え目ながら出来る人である。

食器棚伽藍伽藍と哭きにけり　桑原　道夫

神戸の震災以来、食器棚はガラガラガッチャンのイメージが濃くなった。寺の堂塔の守護神は伽藍堂に祀る。がらんどうになった食器棚、何か感覚的言語的ひらめきに通じる音声の口当り、リズムが私の感性をそそる。

高校の教師、十六歳から作句をはじめたが川柳塔だけの井の中の蛙ではない。

二千年はらりと落ちた歳月や　船渡　杏花

ミレニアムなどとハイカラな語で今世紀最後の年を呼称するが、うかうかと生きて来たのに突然そうなったまでのこと。千年紀などはらりと落ちた気分でしかない。それより、わが過ぎ来し方の険しい歳月の万感が下句に凝る。林はつ絵さんとは姉妹。電話の声の明るさと、この人の作るかぶらずしの味は、金沢の近江市場のより美味であるのが私の印象。

職引いた錨に消えぬ波の音　　黒田くに子

草臥れ切って砂浜に引き上げられた錨ではない。まだ沖を見詰め身内に波の音まで奏でているのである。人間とて同じ、長らく苦労した道の跡には未練がある。鹿野みか月川柳会に属し、中原汲香さん同様超ベテランだ。

お薬師の頬にやさしく浮く木目　　原　さよ子

何処のお寺の薬師如来であろうか。仏像の金箔が剝落して木目の浮くのは折々見かける。道明寺の十一面観音も頬に木目が見られたように思うが、私が一月に拝した渡岸寺の仏様は、太股の木目が鮮明で、纏うた天衣のさやぎのように感じられた。岸和田川柳会の創始者高橋操子さんの片腕として永らく活躍、皮細工を趣味とし、句柄同様人柄もやさしい。

黒髪のたゆとううなじ眠りこけ　　岡本　久峰

「お祈りをする黒髪の長さかな　春巣」の句と比べ時代の差を黒髪に見る。同じ長く美しい髪を持ちながら、現代は電車の中で眠る。時には寝た振りで居るのだ。赤ちゃんを抱いた人が前に立っても。この女性が子供を抱く頃には、どのような世になっているのか。

久峰さんは七十九歳、道修町で薬剤を営む。霊芝を栽培し根昆布を採り、天然自然の薬品にも力を入れる。いささか頑固、否相当頑固。

逃げるとき持って走れるバイオリン　　滝北　博史

すわ地震だ、というときバイオリンなら持って逃げられる。戦争へ持って行けるなら選ぶ一冊はと問われたとき、歳時記であったり「出家とその弟子」であったりした戦時を思い出させた。近来眼が不自由との事。この句も、その現実での心理の陰影によるのだろう。

母の住む町を通ってきた時雨　　野村　京子

晩秋初冬にかけて降る雨はうそ寒いものだ。「思い出し思い出し降る秋の雨」という俳句を読んだことがある。作者に時雨は故里の町を思わせた。母の温かい面影から、なつかしい雨と感じられたことだろう。

月原宵明さんとはほんのご近所、川柳だけでなく沢山のことを学ばれたに違いない。

出棺の時刻瞑想する居職　　津守　柳伸

訃報を聞いても職業柄お見送り出来ない時、心から瞑目合掌する。せめてもの別れである。

作者は居職に近い理容院の経営者、ずっと麻生路郎先生の御髪を整えておられた。

始まりに買い溜めありき二千年　石原　靖巳

ミレニアムのスタートのＹ２Ｋに関して、目立った混乱はなくて何よりであった。備えあればの成果である。結果から見ると一体何だったのだろうとなるが、「買い溜めありき」が端的に言ってすべてなのである。今少し早く川柳界に登場されていたらと思う紳士、私の身近な相談役のお一人である。

綿雲のひとつが残る古日記　小野　克枝

美空ひばりの歌う「花笠道中」に〝ぽっかり浮かんだ白い雲〟という詞があり、〝何やらさみしい旅の空〟と続く。この句にも〝いとし御殿のこころの中は〟というふうな哀愁を感じさせる。戦後満州から引き上げた苦労人、家庭的なやさしさに女丈夫の一面も兼ね備えた頼りになる人である。

好きなのは待つ時間だという土筆　石上　悦子

春の日永のうららかな日差しが実感出来る句である。土筆坊を据えた手柄であろう。

「しなびても土筆袴はつけて居た　一瓢」の句とは違って、一冊の文庫本を持った若若しい人物像も見える。川柳会梨花で活躍、物静かだが真面目なしっかり者、坂田和歌子さんと表裏一体の両輪で会は伸びている。

世話好きへ金の相談だけがない　岸本　宏章

小さな会の司会から葬儀委員長まで、あの人に任せたら大船に乗った気でいられるという人物はいるけれど、金銭に関わることは全く別なのである。鳥取県には川柳塔だけでなく好作家が犇いているので、おのずから句のレベルは高い。その環境での鴛鴦作家の存在は、ほんとうに羨ましく感じられる。

客用の茶碗息子の家で食べ　宮尾みのり

民主主義は寂しい。殊に年を取ると心理的にも近くに突っかい棒が欲しいものなのだ。

会社の転勤のように余儀ない事情もなく、核家族的別居の子を訪ねての感懐がストレートに伝わる。ふあうすと川柳社同人中野千秋さんの妹さんで、お二人ともに賢母型。とはいえ印象はふっくらとした容姿が温かい。

風花に百人一首透きとおる　高橋　夕花

「鬼灯は亡母よ亡母よと赤くなる」の句以来、感性豊かな作者の印象を持つが、この句も風花をちらつかせて和歌の抒情を透徹させたのは見事だと思う。「由良の門をわたる舟人かぢをたへ行くへも知らぬ恋のみちかな

曽根好忠」あたり、この句にふさわしかろう。

実家が画廊を営んでおられたと聞くと、感性のことにも納得のいく気がする。

水槽で鯛がにんまり笑ったよ　　澤田　千春

動物園の孔雀や水族館のスターたちには、見られているとの意識が育つのではなかろうか。鯛も悠々と泳いでいて、くるりと向きを変えるとき、ファッションモデルめいた笑顔を見せた気が作者には感じられた。同感だ。

千春さんの踊り好き、芝居上手に接してもう何年になるだろうか。今に童女のたたずまいであるが、芯があるので私には怖い姉上だ。

眠れぬ夜神話の山河点滅す　　堀江　正朗

「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに―」記紀歌謡の国の作者は、戦で失明するまでに接した簸川周辺の山河を慕う。健常者には推察の域を越えた絶唱と思える。昨年米寿の祝盃を挙げられたが、作品もなお鬚鑠としている。

正月の樹々新年の音がして　　中村ゆきを

「なにごとのおはしますかはしらねども」と西行法師は伊勢参宮にて詠んだが、新年の改まったこころはこの何事に近い気分である。

伊勢の老杉ならずとも松柏の風は新鮮な言葉で語り掛け、希望や誓いを聞いてくれる。

作者は北浜の商社を退職後、日本商工会議所の簿記一級検定審査委員として指導に忙しい日々を送っておられる。現役時代よく夜の北新地でお会いしたものだ。

除夜の鐘大地踏みしめ聴く家族　　出口セツ子

炬燵でぬくぬくとテレビからの除夜の鐘を聞く越年でなく、凛とした寒気の中で大地を踏まえての感懐は、身に染みて一年の終りにふさわしい。それも家族ぐるみである。仕合わせで健康な一家のたたずまいが分かる。

ご主人は弁理士、本社句会へ出席のセツ子さんの優しいアッシー君を勤められている。

働けど蟻の黒さに敵わない　　牛尾　緑良

不況の日本、昨年も労働者や小商人は懸命に働いたが収入は上がらない。蟻の働きぶりには及ばないだろうが、今年は何としても景気の浮上を期待したい。中句の描写の力強さ。

透析を続けるハンディキャップを負うての作者は自然や人生を見詰める目も厳しい。

天と地を結んで虹は縦に出来（イグアスの滝）

徳山みつこ

南北米大陸の旅の収穫だが、この句をはじめどの句も、その土地柄、歴史を踏まえて、鮮明な映像描写と心理把握が出来ている。イグアスの滝のスケールの大きさは、荒削りの虹で、滝そのものが七色の橋と納得出来るし、コルコバードの丘やその他私の未知の土地の印象をしっかり伝えてくれる。

新しい同人だが作句は登り坂、健闘を願う。

過去帳に似顔絵あれば楽しかろ　羽津川公乃

これを書いている今日は私の父の祥月命日で、高岳院潤誉徳風居士などとある過去帳より、私と違って頭髪を簾のように一本一本並べたカリカチュアの方が親しめる。

今年私が選を担当した全国的な大会にも、秀句に推されることの目立った作者である。岩美の石谷美恵子さんのグループの一人、すっきりと歯切れよい容姿の通りの句姿だ。

御病気を案ずるよりも逢いに行く　岩切　康子

「春に逢う庭の球根埋め直し」という句もある。作者は人にも花にもやさしいのである。

病人は肉親ではなく、目上の恩師であるようなたたずまいの句と言える。

川柳塔の催しには熊本から永田俊子さんの介添えのように来阪される。笑顔の人である。

吐息したロダンの像が立つ気配　神保坊太郎

ロダンの「考える人」が溜息ついて立ちそうだという。さて何処へ行くのだろうと想像するのも面白い。きっと腹が減ったのだろう。

作者は八十三歳、先代から古来の文芸に造詣深く、ご自身も俳句から転向された。

さればされば強い酒とはまた嬉し　森下　愛論

考える人が豹変したのではなかろう。若い時代には見られなかったのに、路郎の門下らしく最近酒の句が多い。雅号の愛論はアイロンの意、大病院に出入のクリーニング店を営む苦労人である。

Ⅵ

序文(1)～(7)

定本西尾栞句集序文

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

麻生路郎先生の指導で、昭和六年七月二十五日、天神祭の日に発足した阪大川柳会の、創立句会の席題「温泉」で、天位を獲得したのがこの句である。初心も初心、のっけから脚光を浴びたことでも、西尾栞先生（当時は佐野栞）の才能が分かる。先生二十二歳。

平成五年、香川県白鳥町にこの句碑が建てられた。

一歩出ずれば吾れ旅人となる心

芭蕉の「奥の細道」の行雲流水のこころとも言うべき羇旅の真髄に触れたこの句は、昭和五十五年、栞先生の川柳生活五十年を記念して、地元の八尾の聖徳太子ゆかりの大聖将軍寺門前に、句碑として建立された。

その句がその人により生を享け、あるいは剛直に、時に華奢に、また洒脱に、それぞれの感興を伝えるが、真実の句は、時代を超えていよいよ芳醇な味を深める。親子の絆と同じに、作者と句の間にも太い絆や曰く言い難い因縁を生ずる。そういう句を創れるのは栞先生が川柳を自然愛、人間愛の文芸と観じ、和顔愛語の精神を貫かれた賜と私は理解している。

和顔愛語元旦の心しる

栞先生は家族を大切にされた。人間として当然のことはいえ、これを全うするのは、並大抵の努力では適うものではない。

頭ほど光らぬ父でありにけり
張り替えた障子の中に母います
最後の最後の味方は妻なりき
意見する儂がまだまだ遊びたし
ようきいときやと妹ついでに叱られる

路郎先生が戦後間もなく栞先生を『川柳雑誌』の後継者として白羽の矢を立て、編集と経営のノウハウを叩き込もうとされたときがあった。栞先生は厳しい戦後の生活を理由にこれを断わられた。以来、路郎先生とは即かず離れずの距離で、川柳の遠い道のりを歩み続けられたのである。この事実が路郎先生の死後、ますます円満洒脱、融通無礙の西尾栞風を形成したと思える。その成果は、先の随筆集『水鶏庵こらむ散歩』となり、この句集に集大成された。

人恋し人煩わし波の音
二次会で土産の鹿の角がとれ
ハンドバック迷えるこころパチつかせ
オーロラに煉瓦の街は哀しかり
お互いに中毒ですなと酌ぎこぼし
半玉に男ざかりの手をひかれ
酢昆布の匂いで妻にささやかれ
牛の瞳に人間何をあわてとる
虞や虞や汝を如何せん四十八
風花に酒樽並ぶ町を行く
新幹線隣は何をする人ぞ

てっちりや路郎門下の生き残り

読者は一読再読、なおまた三読して、得難い栞先生の句境と共に遊んで頂きたい。

四十年のご厚誼を得た弟子が、序文の筆を執るありがたさに心からの感謝を捧げます。

平成八年三月六日

橘高　薫風

川上富湖　川上大輪　句集「二重奏」序文

新宮市には文化に貢献した人の名を刻んだ顕彰碑があり、高名な人たちに伍して、柳人大矢十郎の名が晴れがましくも並んでいる。

昭和四十六年から亡くなる平成七年まで、川柳誌『みかん』を主宰発行した。

おふくろは相手にもあり優勝戦
小切手を書く間ハイハイハイのハイ
体ごとドアにぶつけるのはドラマ

などは、もう二十五年以上も経つのに私の忘れ難い佳句になっている。

昭和四十八年には川柳塔の仲間三十名ほどの吟行の世話を引き受け、私たちに瀞峡の川下りをたのしませ、丹鶴城址にある旅宿での句会を取り仕切って下さった。

大矢十郎氏は川上富湖さんの父上で、母上のまさ子さんも十郎氏にならい、夫唱婦随的な句作りをなさっていた。また、弟喜一氏も川柳塔社の同人で、大矢家は川柳一家の趣があった。

このたび、川上大輪・富湖句集「二重奏（デュエット）」の上梓に当たり、十郎氏の柳縁から書きはじめたのは、文芸にたずさわる者には環境が大切で、作者の個性の形成に大いなる影響を与えることを言いたかったのである。

富湖さんの環境からの感受性が、これまた大輪さんに伝播することも大いにあり得る。

真新しい白さが怖い日記帳　　川上大輪
さりげなくさしのべられた手のぬくみ　　大矢富子

やはり四半世紀前の二句は、姓はまだ異なるが私のメモに微笑ましく並んでいる。

大輪・富湖それぞれ三百句の中から十五句ずつを抄出する。

大輪の句

僕の居るここが真ん中だと思う
人間に化けると元に戻れない
化粧しています面会謝絶です
スリッパの左右を決める評論家
葡萄ひと房ひとつちぎれば罪になる
睨めっこジャンケンポンで核を出す
仰向けに死ぬ虫けらの宿命か
インターネットまだ霊界と繋がらぬ
海も川も汚した罪で水を買う
人はみな生きてるだけで役に立ち
取り替えた言葉一つが温かい
座禅組みながらふつふつ涌く謀反
耐えてやる笑い話になる日まで
点滴もいっそ酒ならありがたい
天敵に妻という字を加えとく

富湖の句

素晴らしい友だ七色唐辛子
擽れば楷書も崩れ出すだろう
誘蛾灯の下にてお待ちしています
螺旋階段有頂天まであと少し
ちちははの汚点は私かも知れぬ
扁桃腺肥大真っ赤なプチトマト
ワレモノと家族写真に書いておく
クリンチで時々休む女坂
触れられて一気に咲いてしまいそう
芸をする猿の哀しい眼を見たか
子を抱けば女の中にマリア様
国会の椅子で眠っているオブジェ
井の中で蛙筋力つけはじめ
札束の声は低音だと思う
ばらばらにすれば案外いい目鼻

大輪さんの句は、そのお人柄が滲み出て温かだ。善意

とも言える。ひそかに白旗を用意していて妻を天敵呼ばわりする愛妻ぶりだ。

自分で面白がらにゃおもしろい句は出来ないというふうなところがある。

かつて体操選手としても一流だったスポーツマンとは思えぬ文芸への理解とセンスを持ち合わせ、物の見方も皮相なだけではない。

無味無臭それでも役に立っている

の句などは義父十郎氏のユーモアを越えたのではないか。父君はお喜びであろう。

富湖さんの句は、女らしい感性に富むばかりでなく抱擁力がある。客観的に物を見る眼、それはご自身にも向けられているのだが、現代性を備えている点でも大輪さんに劣らない。第三回オール川柳大賞を受けた実力のほどを自信にして、これからも進んでいただきたい。

私は川柳は極論して「穿ち」であると思っている。社会、生活、人情その他全般に亘り、感性までも根底にはうがちの精神を引く句でありたい。

あなた方お二人はお互いに格好のライバルとして競い合い、牽制し合い、楽しんで精進出来ることは、願ってもない環境であるのだから、句境の一層の充実は目に見えている。川柳塔のホープとして、川柳の現代性の開花結実を目指した研鑽をお願いする。

一生に一冊の句集という時代は過去のもので、次にまた一日も早い第二の「デュエット」の誕生を望み、心から、祝辞を申し上げる。

大輪さん、富湖さん、おめでとう。

平成十年十月

川柳塔社主幹

橘高　薫風

奥田みつ子句集「白い梅」序文

奥田みつ子さんが十八年の川柳作品を振り返り、これからのステップにしようと句集を出す決心をされた。

殊の外謙虚な方だから、あれこれ迷われた上のことらしいが、その快挙に双手を挙げて賛同する。

昭和五十六年、朝日カルチャーセンターの教室に見えてから、NHK文化センター、産経学園梅田第二、高島屋ローズカレッジ西宮と、教室は替わっても十五年間みっちり私の話を聞いて作句を楽しまれた。

パン捏ねるままならぬ身を打つごとく

パンを捏ねた経験は私にはないが、パンの捏ねられる姿を、まるで五体投地の身のように受けとる心象はすでに初心離れをしている。

行き止まり水菜畠を戻るなり

この句の焦点は戻りしなに水菜の畠だと気付いたことである。水菜畠という語など、写実であろうが老練の味を備える。

だから、

淑女かとみれば狐のシルエット

十二月月日に壁があるような

等の句に接して、

襟巻の狐の顔は別に在り

去年今年貫く棒の如きもの

という虚子の句の俳味に通じるところから、俳句の経験ありとお見受けしたこともあった。

みつ子さんのやさしさ温かさは、みつ子さんが傾倒されていた小出智子さんと同じに、ご家族を詠んだ句に佳

句が多いことでも分かる。

姑は日々仏の顔になっていく
幼子の如雨露に小さな虹が立つ
友達のめしも頼むと子の帰省
自信ある字になってきた子の手紙
文献のページ追う目よ男の眼
妻の意見いと小癪なり貴重なり
お母さんやはりあなたの娘です
鷺草咲いて美人家系にかわるかも

川柳作家に大切なのは、物を見る眼と自己を見る眼のしっかりしていることだ。

前者の句は

パリ帰りフランス人になれもせず
脱サラのうどん屋鉢に凝りすぎる
弱虫が王手王手とやかましい
幕降りたあとの芝居が面白い
幸せの身にも占うものがある
人形を抱いて避難所老いひとり

等々佳句は目白押しにある。最後の句は震災に際しての嘱目であろうが、みつ子さんの愛情がこの句を成さしめたものと思う。

また、後者の句は

果てしなく海に降る雪独りだな
影法師ときどき黒くなり過ぎる
真剣にジャンケンポンもしなくなり
月光に包まれ羽が生えてくる

などがあり、

正解は一つではない本閉じる
辞書を引くそうかそうかと言いながら

も、その範疇に入れることの出来るみつ子さんらしい句である。

女性に花の句の多いのは珍しくもないが、みつ子さんには梅の花を詠んだのが目につく。誕生日が一月のせいもあろうが、冬の凛烈とした大気に咲く花と同じに句もきっちり引きしまっている。媚はないが乾ききってもいない。

今どきはやりの情念句という生半可でない川柳塔の色である。

そして、まさにその川柳塔の編集長として多忙な中に細やかな心遣いで、雑誌の作成に励んでおられる。一見

関わりのないように見えるその日々の積み重ねが、川柳作品の深さ厳しさに繋がってくる。

みつ子さんのこのあと十年がたのしみだと申し上げて、お祝いの言葉と致します。

寝室にモンローという蘭の鉢
地球にはどこにも非常口がない

平成十年十一月

橘高　薫風

八木千代句集「椿守」序文

私の子供の頃、福知山線の汽車は冬になると客車の屋根に雪を載せて大阪へと走っていた。米子機関区に属する記号の米の字が、黒い機関車の腹に浮き、白い雪と三等車の赤い横線が目の前を流れた。私の米子への最初の印象はこのようであったが、それは雪だからといって冷え冷えとした感じのものでなく、民話の中の一齣の景色のように温かくなつかしい思いをさせた。

八木千代さんが川柳塔の仲間に加わり、便りをやりとりするようになって、米子市花園町と書き馴れてくると、なつかしい汽車の屋根の民話に花園が出現する。

やがてそこに四季の花が咲き、殊に沢山の花をつけた椿の木が見え隠れするようになる。

そして今、句集のタイトルが「椿守」というのを知り、千代さん自身が花園の精であったのだと気付く。

花の中で椿が好き、椿の中でも藪椿が一番ということで千代さんのお人柄が分かる。

またひとつ鉦へ落ちけり藪椿　　言水

藪椿は椿の原点、山寺などがふさわしいしずかなたた

ずまいの花だ。

千代さんは大正十三年一月二十九日のお生まれで、これは麻生路郎先生の『川柳雑誌』創刊と時を同じくする。一月十五日に創立句会を開催し、翌二月十五日に創刊号を発行されている。

千代さんが川柳塔の仲間として近作柳樽欄に登場したのは、昭和四十一年四月号からで、当時は、

病み姿見て欲しくない人を待つ
ともかくも子は大学にたどりつき

というふうな句柄であった。

昭和四十年頃に今の川柳塔きゃらぼくの前身のグループを結成、常に川柳塔の大きな、斬新な推進力になって下さっている。

木の机　鳥の匂いがしてならぬ

この世の因果はすべてこのようである。鳥に宿を貸した木にはなんとなく鳥の匂いが残る。

机になっても残る。それの分かる人は詩人だ。路郎先生の

鯛焼けば鯛の臭ひが残る也

も匂いの句で、双方生活の中からの取材でありながら、先生の生活の匂いと比べれば個性が判然とする。千代さんや私の句の先生に及ばないところはこの生活臭である。

二月十四日　椿に鳥が来ますよう

二月十四日はバレンタインデー。愛の日の偶感と評してよいであろうか。千代さんには、右の手には取材発想と推敲のペン、左手は祈りの形という句が多い。

椿は八千とせの春秋、二月の花と言われる。

水鶏院釈真諦と日に三度

切り取った絵に宇治寺の鐘の音

昭和五十八年一月十四日、これは故西尾栞先生主幹就任披露の会の前日であったが、西尾栞、東野大八、八木千代の三人と私とで宇治に遊んだ日である。

黄檗宗万福寺門前の白雲庵で普茶料理を頂いた。栞先生のおごりだった。白雲庵の庭にポツンポツンと紅い椿の咲いていたのを覚えている。

直原玉青画伯に紹介して頂いて拝見した宝蔵院の一切

經の桜の木の版木と、それを五十年間も刷り続ける摺師の姿に四人は圧倒された。次はその日の句である。

普茶料理大言壮語出来かねる　薫風
有縁の真ん中に椿が咲いてくれる　千代
のしかかる黒に版木の底の虫　大八
紅一点千代という名のめでたけれ　栞

後、平等院へ回り四人はそれぞれ鐘を撞いた。

鐘鳴らすいつも一つの願いごと

栞先生は平成八年この世を去られた。

桃の木の向うのひと世ふた世かな

私は自分の勝手な思いを並べて序文の紙数を費やしてしまったが、この世は夢まぼろしの世界だ。

桃の花と可憐な蕾の平和な桃源郷は、現世の苦を濾過したひと世ふた世であろう。

桃の字が思い出せずにおかしけれ　須崎豆秋

豆秋さんと千代さん、傾向は異なるがいずれも深い句境にある。

以下、千代作品十句

椿くわえて春を銜えて歩きたし
書きすぎぬように大事なひとに書く
夜明けまで山の向こうに行ってくる
若かりし日の母の手の匂いかな
笹に吊すあさきゆめみしゐひもすと
われは雁　月の真上を渡るなり
自らを傷つけて鳴る楽器たち
いざとなればうしろの藁に火をつける
枯野にも小さな弓は負うてゆく
椿もし振り袖着れば雪の紋

千代というと俳句の加賀千代が先ずわれわれの意識を過る。夫の死後、妙好人としての日日に明け暮れながら一流の俳人としての名を成した。千代さんは千代女に似ている。

千代さん、これからもきゃらぼくのお仲間と足並みを揃え、川柳塔へご尽力を頂きたい。私の片腕としてご支援を心からお願いする。

愛もまた紅白のあり椿守　薫風

平成十一年二月椿の日　川柳塔社主幹　橘高薫風

天の美祿

北畑金治先生がＮＨＫ文化センター大阪の川柳講座に見えたのは昭和六十二年四月のことでした。そして十年、八十歳になられた三月、現役を退いて隠居の身に返るのでと仰有って退会されたのですが、二ヶ月もせぬうちに再び教室に復帰されました。この一事で先生の川柳への執心がよく分かります。

以来、教室でのお顔はまことに柔和で、最近では子猫が母猫に接するようなたたずまいで、川柳を楽しんで下さっています。私は、北畑先生だけは特別に、銚子と猪口を前にして聞いて下さってもいいですよと言いたいほどの思いでいるのです。

先生の句はすべて自然体です。真実あるのみです。

大空に向い柏手年新た

こんな者にあなたの慈悲が多過ぎる

喜寿過ぎて延長戦のような日日

孝心が今日は寿命を延しけり

友情へ黒白つけず別れけり

走馬灯だんだん速く廻り出し

聴診器無情の風を先に知り

花街の老女未だに無邪気です

雨宿りでもするように入院す

大仏の思案の顔を拝みけり

友が死ぬあの世は遠くないところ

角がないのです。まろやかで温かいのです。大仏の句と、友が死ぬ句は先生の句の双璧だと思います。川柳が宗教にまで高められているようです。また私は

こんな者にあなたの慈悲が多過ぎる

の述懐は、神仏へではなく奥様に対してのものと感じら

れてなりません。

今はもう合せ鏡の老夫婦
何はさて顔見世だけは別の枠
おゝらかにおゝらかに妻愛したい

などをはじめ

泣き乍ら強がり言える女の子
遠目にもそれと分って孫が来る
息子から手紙貰ったことがない
この仕草憎みし筈の母ゆずり

などご家族との有り様も、誇張でなく足らざるとてなく、淡々とした八十四翁の存念に見えます。

また川柳らしい批判の句は

おそろしや煙も立てず原子力
もうすこし下手な答弁してほしい
八百よろず神の数より絵馬の数
紅一点均等法で色があせ
ギリチョコの甘さは人工甘味料

と気張らぬ叙法ながら内容は辛辣です。

こう書いて来て肝心なものを落としてはいけないと気付いたのが酒の句です。

屠蘇祝う年に一度の家長ぶり
コップ酒なみ〳〵と注ぐ手際良さ
剣豪も五勺の酒に酔う齢

こんなに数の少ないはずはないのですが、うかっとして養老の瀧に流されたのでしょう。

「酒は天の美禄」「酒蔵あれども餅蔵なし」と諺にもあります。

奥様にご心配をかけぬほどに親しまれて、益々ご加餐なされることを願います。

お正月だけでも国旗掲揚す

川柳も天の美禄です。私も旗を振る気分でお祝いの言葉を贈ります。

平成十三年七月

橘高　薫風

藤井正雄句集序文

「藤井正雄さんと掛けて義経の八艘跳びと解く。心は、朝日なにわ柳壇への目標」

「そら何のこっちゃ」

と言われそうだが、正雄さんのこの柳壇への執着を思うとき、私は義経の八艘跳びの快哉を想起する。

昭和六十二年の末から、片岡つとむ先生と私の選に投句をはじめられてからほぼ七年、入選句百句に至り、記念して「私の百句」パート(Ⅰ)を上梓されたが、今回のパートⅡまでにも同じ七年の月日が経過している。同じペースの入選であることがわかると、正雄さんの性格や句柄が着実型であることも推量出来る。

しかしながら、作品は格調あり、ユーモアあり、スタンダードの中に個性が出ている。

それに全体やさしく温かいのだ。

一般

迷わずに祖父には墨の奈良土産

柳の芽煉瓦作りの喫茶店

幸せの仕草は指で髪を巻く

鮫鰊鍋東京弁の水戸訛り

ここからの話は箸を置いて聞け

会社

遅れてるボスの時計に皆合わす

先輩に譲るホステスとの会話

定年日千秋楽にござります

家庭

球根に芽が出て母と子の会話

銀河仰ぐ父の両手が肩にくる

少し抱き少し歩かす孫の守り
動かない時計を孫に買う夜店
ユーモア
背番号トラなら全部知っている
競馬狂うどんに薬味振りつづけ
堅物の浮いた話にさもあらん
火が消えてから続々と消防車
老妻に酒断ち誓う通夜帰り

高杉鬼遊句集序文

高杉鬼遊、本名は久、これを音読みにして雅号にされた。温和な人柄なのに鬼の一字を取られたのは理由があってのことだろう。

そういえば頑固なところもあり、私には、「なるほど、なるほど」と受け答えして下さっていたが、それがワンパターンだったから、

そんなこと聞くか聞かぬか分らんぞと言った気分もあったらしい。

居酒屋へ入っても、関東煮にすじが無いと機嫌が悪く、独り言の愚痴が出る。食べ物にも頑固だった。

今回は酒にまつわる句はすくなかったが、正雄さんは句を褒めるとすぐお酒を飲んだように顔が赤くなられる。シャイなんである。

パート㈢への出発を励ます乾杯をして、いよいよ体調を整え句づくりに精進され、もう一三一艘跳んで頂きたく思っている。

正雄さん、ご出版おめでとうございます。

二〇〇一年十一月三日

橘高　薫風

昭和五十年代の半ばから平成になるまで、川柳塔の推進力になったのは、会計担当の鬼遊さんと編集の谷垣史好さん私の三人で、三日にあけず事務所へ詰めて仕事をこなし、西尾栞主幹を盛り立てた。川柳塔の鼎の三本足であった。

鬼遊さんは川柳だけでなく、詩も時折書いていたらしいが、次の二篇は鬼遊さんの川柳を理解する上でも参考になろうと思われるので引用する。

自転車　　高杉　久

向いのはるちゃんが自転車を買ってもらった
指をくわえてそれを見ていても
同じように買ってもらえないことを僕の眼は知っている
下町の散髪屋の五男坊に生まれ
八人もいる子供の着物や食い物の量は
銭勘定をする父の顔色からして
自転車を買ってくれとはとても言えない
ある日はるちゃんが自転車を貸してくれた
着物の前をまくってまたがった
はるちゃんがうしろを持ってくれた
力いっぱい踏んだ
自転車は思いもよらぬ勢いで動いた
握っているハンドルがぐらぐらゆれて
どうと倒れた
膝小僧の土が血を滲ませていた
泣いたらあかん
自転車を離したくない一心がもう一度乗った
今度は三回ほどペダルを踏んだ
やっぱり倒れた

夢の中で
すいすいと自転車に乗って
どこまでもどこまでも
風を切って走っていた

銀杏

高杉　久

父の顔があった
そばに母の顔があった
早く死んだ兄も　中の兄も　長兄も
顔を並べていた
その中に比島で戦死した弟の顔がない

かあちゃん　サトシはどうしたん
とうちゃん　サトシはどこへいったん

ふるさとの湿った墓の下で昔通りの団らん
が初まった
父も母も兄たちも喋っているが
わたしには何も聞こえない

地上でぎんなんの落ちる音がする
墓石にカチンとぎんなんが落ちた

これで鬼遊さんの句の庶民性と反戦的な理由が分かる。

そして、八尾から京都の伏見まで、二十年間往き復りの勤めを全うした人間性にユーモアが介在することとなる。それは

春雨へ女房と濡れるあほらしさ
桜なら堺刑務所今見頃

の川村好郎先生の手ほどきを受け、初心時代から須崎豆秋、菊沢小松園という立派なユーモア派の先輩に直に接して、句の研鑽を積まれた結果によるもので、麻生路郎先生を知らぬとはいえ、その血脈を受け継いでいる。

さくら散る四月は鬼の誕生日
八尾ナカタ鬼の館に蛙鳴く
生きのこる鬼に八月十五日
叙位叙勲遺骨を抱いた日がよぎり
地の底の母までとどく冬の雨
素うどんへ何ですかとは何ですか
ご愛顧に応え欠陥車を発表
富士の山だれが画いても富士になり
定期券いつから笑わなくなった

妻の風邪せめてみかんの缶を切る
如月や江下北川作江たち
連翹の黄につらなれる不幸者
政治家とにらめっこなら負けはせぬ
路郎忌だ史好よ酒を飲まないか
吉兆も飲み屋も同じ靴でゆく
冷めしと固いこうこが好きやねん
金平糖先祖は遠い海を越え
勲章をいっぱいつけている化石
警察の前で走らぬ方がよい
一政のバラ人生はゆたかなり

句集には千句前後が収録されるのであるが、優等生の句ばかりではない。平凡と思われる句にほっとさせられるものが多いのだ。それが句集散策のたのしい味なのだから、じっくり鑑賞の実をあげて頂きたい。

こんないい句集を上梓して下さったご遺族の皆さんに厚くお礼を申し上げます。

平成十三年十一月三日

橘高　薫風

Ⅶ

麻生路郎先生の思い出（講演録）

ご紹介頂きました川柳塔の橘高薫風でございます。爽介主幹から麻生路郎先生のことをお話して欲しいとのご依頼を受けましたので、今、川柳塔誌上に連載しております「大空のこころ」という題に因んで話を進めることに致します。

私は、麻生路郎と三条東洋樹先生の川柳界での生き方がよく似ていらっしゃる気がいたします。

路郎は番傘から離れて革新的思考を繰り返しながら、「川柳雑誌」を発行しましたし、東洋樹先生は、ふあうすとと袂を分かち「時の川柳」を発刊されました。与党の大きさに押さえられる野党の形ですから、量で負けるが質の向上でこそ勝負だという方向へ努力するとともにその作品傾向は情緒的な人情句より、批判的なものになるようでした。私は、結核の療養中に、路郎の句集「旅人」を読み、感激して病院を抜け出し、路郎先生にお会いしたのですが、その時、川柳の定義を一口で言うと、との無しつけな質問に、

「十七音字を基底としたリズムを持つ、批判詩である」と仰言いました。

俳句界に於ても、日野草城が昭和十一年に無季俳句を唱導、それを継ぐ伊丹三樹彦は、俳句は詩性さえあれば無季であってもよい、として人間諷詠、生活採集の方向へ進んでおられるので、まさに川柳の俳句との隔然とした純粋な領域は、この批判性のみにあるような気がします。路郎や東洋樹先生はそれを早くから見通しておられたように思えるのです。

路郎先生は明治三十七年大阪高等商業予科（後の大阪商大）に入学、その頃から読売新聞柳壇、田能村朴念仁（後に朴山人）へ投句をしたのが川柳への第一歩であったのですが、天才六厘坊と自他ともに称した小島六厘坊・川上七厘坊（後の日車）らと川柳活動を盛んにはじめました。六厘坊は明治三十八年五月、「新編柳樽」を発刊、翌年「葉柳」と改題したのですが、発行所は大阪西柳樽寺社と称しました。これは井上剣花坊の東の柳樽寺社に対抗するもので、いつまでも東京への依存では関西の主体性が確立できないとする先見の明があったからです。後に西田当百を中心とする関西川柳社から「番傘」が生まれ、その後に袂を分かった水府と路郎とのライバル的競合の激しさにより、関西の柳界は活気を帯び、大きく成長したのです。二十二歳で夭折の六厘坊と六十

年の長きに亘る水府・路郎両巨星は大阪の川柳界の今日ある恩人と言えます。

作家の藤沢桓夫先生は、水府と路郎を次のように、短いながら的確に、その人柄と句の特徴を指摘しておられます。

「明治以後の優れた川柳作家は数多く、関西が生んだその代表的作家として、『番傘』誌を育てた岸本水府、『川柳塔』誌を今日にあらしめた麻生路郎の巨人的な二人の作家の巨きな功績は、多少なりとも川柳に関心をもつ私たち後人には忘れがたいものがある。

この二人の偉大なる川柳作家が持つ作品の特徴は、世相風刺、人情風俗への切り込みにおいて、岸本水府にはどこかに柔道を思わせるやわらかさがあり、麻生路郎には剣道を思わせるきびしさがあったといえないだろうか。

熊野灘鯨がみえた母の背

大阪の恋人といわれた初代中村鴈治郎の舞台姿を写して、

頬冠りの中に日本一の顔

とうたった岸本水府のソフト・トーンに比べて麻生路郎の方は、

古くとも僕には仁義礼智信

と、どこか肩ひじ張って見得を切っている日本人の潔癖さが、風刺とはむしろ反対になにか暖かな人間の優しさを訴えてくる。そのところに麻生路郎の独自の持ち味があったともいえそうだ。」と。

私は二人の句で、やはりそれぞれの性格が出ている例として、ともに青春時代の

恋せよとうす桃色の花が咲く　水府

行末はどうあろうとも火の如し　路郎

を挙げることにしています。

「番傘」誌の発刊は大正二年一月で創刊号の巻頭吟は、

上燗屋ヘイヘイヘイと逆らはず

という西田当百の句でした。堀口塊人は、

「ヘイヘイヘイは、その接客態度の描写であるが、姿を写して心に至り、さらに店の雰囲気まで匂わせる表現力を持つ一句である。これが我々の大阪の川柳であり、〝番傘〟はこんな風に行くことを巻頭に表示した一句でもあった」と後に書いておられますが、番傘の本質をずばりと言っています。

創刊時、路郎は大阪に居ませんでした。年来の柳友、

浅井五葉や水府からも何の相談もなく、突然創刊号が届いたので、若い路郎の血はおだやかでなく、次のような手紙を発行所に送り、東京で島流しにあった寂しさを噛みしめています。そして次の句会には大阪の当百居に早々と馳せ参じているのです。

「番傘が何処からか舞い込む。お前のような人間には到底解りもすまいが、ちょっとみせびらかしてやるといった風に。詩人の私には番傘より　晩方　の方がどれ位感じがいいだろう――。今に梅雨が来れば番傘は破けてしまう。さっと破けてしまう。ドス黒い色になってさ。番傘の奴等俺を島流しに会わしたな。覚えていろ、覚えて居ろよ。今更あやまったって誰がきくものか。遅い遅い」

この手紙は番傘二号の楽屋落に載っています。

当百の家での句会に出た路郎は、その日出席していた河村芦村親娘に会います。これが翌大正三年四月、妻になる　よしの　とのはじめての出会いで、路郎は「番傘」の二号から同人に加わり、二号では七十五句、三号は百八句の掲載という猛烈な作句ぶりを示します。その頃の柳誌は月刊ではなく、三月に一度、半年に一度という発行で同人の数も少なかったのです。番傘の部数は二百部ほどで何号目かに誤植がみつかり、水府がそれを抱えて路郎の新居を訪れ、葭乃新夫人をまじえて訂正をし、発送期日に間に合わせたこともあったようです。

大正四年、路郎は番傘川柳社を離れ、川上日車と共に五ヶ月後に「雪」を刊行します。その顔ぶれは、伊藤観魚・小穴隆一・信時潔・塩谷鵜平・宮林菫哉・松村鬼史・藤原游魚・小出楢重・牧野虎雄・兼崎地橙孫・石浜潤太郎という、画家、俳人、歌人、作家、大学教授の一流学識者文化人であり、吉井勇や喜多村緑郎の寄稿もあって絶頂期を迎えます。「雪」の幹事は斎藤松窓・麻生路郎・川上日車。「雪」は各方面のエリートを選んだ同人綜合雑誌で、発表の作品も多彩多様だった上、注目すべきは路郎も日車も川柳という呼称を一切致さず、「新短歌」の字句をもってしたことです。

膝に足のせて一人の力なる　　日車
果太鼓今や鰻を裂んとす　　〃
葬ひの雑音街の底よりす　　路郎
微風の吹くまゝ光りに歩む　　〃

というふうな作品でしたから、既成の川柳界からは新傾

向派と呼ばれて敬遠されたといいます。

路郎の新短歌観は、「今後の自分はどこ迄も自己の作品の上には真と新との尺度を用い、自己の芸術と自己の生活に真摯でありたい。（中略）少くとも自分自己を欺く様な芸術に生きていこうとは思わない。この意味において、新短歌は要するに、自分の日常生活の呼吸そのものであり、更に自分の信仰が把握する処の祈祷である」というもので、これは子規の短歌革新の頃の主張を背景にしているようです。

後年、講演の題を、「われ川柳の子規たらん」と決めようとして蔑乃夫人にたしなめられたこともあるそうで、路郎の意識には子規の存在が大きかったと思われます。

「雪」は大正六年十九冊を出して、終焉、大正七年に「土団子」を出します。この時は、元の川柳の文字が正面切って登場するのです。

句は新傾向の趣を失っていませんが、翌年にはまたまた廃刊。直後の大正八年六月には、はや「後の葉柳」が、厚紙二つ折り四頁の一見ハガキを大きくしたような体裁で出版されますが同人は更に減って、路郎と日車と木村半文銭の三人でした。何かを闘い取ろうとする気魄が三人三様に感じられるものの、新奇な句風から、三つの貌の貧しさが作品の背後から浮かび上がると評されもしたのです。

水に逆らふとはせぬ船の親子ぞ　日車
親となる其日〳〵の手の脂　半文銭
天井の低さも知らず子はうまれ　路郎
一つ蚊帳にさかなのようにならぶ夜ぞ　路郎

路郎は、「次女の死、米騒動、百度に近い暑さが頭の中に渦巻く日々、こんな時、吾吾は川柳や俳句どころではないという頭上の圧迫を厳しく感じる。」と編集後記に書いています。

こうした同志を糾合しては解散を繰り返したあと、三人の結束はまたもやほぐれ、日車と半文銭が「小康」を出した大正十二年には路郎は参加しませんでした。

元旦――暮る　半文銭
錫鉛銀　日車

そして、川柳革新のパイオニアとして敗北者ではないかと指弾されながら、大正十三年一月に創立句会を開き、二月に雑誌創刊されたのが、「川柳雑誌」で、それからの経緯は川柳塔誌に私が書き続けている「大空のこころ」

なのです。

時間も少なくなりましたが、ここで路郎と葭乃夫妻の文章の一節を紹介したいと思います。

路郎の著書「川柳とは何か」の序文、

「（前略）私は川柳を人間陶冶の詩であるといっている。人間へ締め木をあてて絞るといろんな悪汁が流れ出て、そのあとには朗かな脱俗した人間が残るのではないかと思う。

その締め木の役を川柳が果たしてくれているように思えてならない。句はその人の心であり、十七音字はその人の姿であり、リズムはその人の呼吸であるからである。

人間は生まれながらにして、蹁躚（へんせん）くように出来ている。しかし、いくら蹁いても、どうにもならないことに気づかないようである。しかし私は川柳することによって体内の悪汁を排出することに成功している。だから私にとって川柳することは単なる趣味ではなくて、人生をいかに生きるかということを知るためである。拙句の、

寝転べば畳一じょうふさぐのみ

というのが川柳によって得た私の人生観なのである。更に私は、

人類は悲しからずや左派と右派

という句を詠んでいる。これが私の世界観である。私は常に川柳に生きることによって、平和な世界を生み出したい念願に燃えているものである。

本書を手にされる人達も又川柳によって、よりよき人生を生きぬいていただきたい。」

葭乃夫人は路郎の古稀に際して、「嵐を恐れぬ路郎」の一文を草されました。その一節。

「その後路郎は川柳の社会進出と質的向上を思うあまり、遂に本職を捨てて金にもならない川柳一本で立つことを決心した。一番読者の多い大衆雑誌でさえ、如何にすれば読者にアトラクティヴであるかを競うが如く、多種多様の雑誌は書店の店先で、濃厚な色彩によって、或は新鮮味なタッチによって購読者の眼を捕らえようとしている。この競争の烈しい中で、薄っぺらな短誌型専門誌の発行と、川柳に関連ある仕事などで安心の出来る所得のあろう筈はなかった。加うるに路郎にはその当時五人の子供があった。きまった職に就いていて、孜々として働いても、子沢山の渡世は決して楽ではなかったのだから、路郎のこの企ては、恰もコロンブスのアメリカ発

見に類するものであった。このアメリカ発見の舟は、みすぼらしい荒莫屋を敷いた和船なので、絶えず天候に気を配らねばならなかった。乗組は私達夫婦と、子供達である。勿論子供達は目当があって上船したのではない。父が乗ったから続いて乗ったのである。いつまでも浜で遊んでいたい子供もあったろうし、山手の住宅で残っていたい子供もあったであろう。

然し太陽を中心に廻っている星は軌道をはずす訳にはゆかなかった。行けども行けども、島は見えず、水や空、空や水なる真只中を、船は木の葉のように揺られて行った。子供達の一人は舵をとった。他の一人は櫓をこいだ。時化を喰ったら、皆んなで、かぶった水を船から外へ汲み出した。路郎は舳に立って動かなかった。バロメーターであり、パイロットでもあったからである。私はおとなしく両手を膝へのせて、舷にもたれていた。」

と述べ、更に、

「路郎は生きんがための職業と、川柳とを天秤にかけて、常に均衡を保っているが、どちらかを選べと云えば一も二もなく川柳と答えるであろう。」と断言しておられます。

私が今日のお話の題を「大空のこころ」と致しましたのは、

酒とろりとろり大空のこころかも

という路郎の句から借りたものです。路郎は李白の末裔を自認していて、ご夫婦でお酒をよくたしなまれました。編集室でも、

「三太郎君もよく飲んだものだ。大阪へ来て一緒に飲んでいても、僕が翌日の仕事にさしつかえると寝たあとも、葭乃と夜を徹して飲んでいた。彼と僕とが飲んだ酒やビールの壜を並べると東海道がつながってしまうだろう。」と仰言っていました。昭和四十年春、肝炎で入院されたときも、

「身体の色まで好きだった酒とおんなじ色になってしまった」

と述懐されたのですが、それが終の病になったのでした。大空のような存在感を持った先生でした。

ご清聴ありがとうございます。

Ⅷ

大空のこころ——麻生路郎の作品とその周辺(1)～(121)

麻生路郎の作品とその周辺

(1)

畏友寺尾俊平が言った。

「六大家の中でも、事作品に関する限りは、麻生路郎が第一等であると思う」と。

それでは、路郎作品の中でどの句が一番佳いと思うかと聞くと、

二階を降りてどこへ行く身ぞ

だと答えた。

川上三太郎の句もすばらしいのに、その門下生が第一等だと言う路郎の、そのまた一番の作品は、昭和二十八年十一月三十日発行の麻生路郎川柳句集『旅人』の巻頭句である。

路郎自身何万句と創った中で、一生に唯一冊の句集の巻頭に据えた理由は、路郎の川柳生活もまたこの一句のように始められたからに外ならぬ。二階の書斎は、路郎の拠点であり、あらゆる可能性を追求する出発点でもあり、青春性ともいえる詩人の孤独な魂の帰り着く処であった。私は昭和三十一年、掌にすっぽりと乗るほどの、小型ながらずっしりと重い『旅人』を開いてこの句に接したとき、石川啄木の次の一首を想起したのであった。

何となく汽車に乗りたく思ひしのみ
汽車を下りしに
ゆくところなし

路郎は、「どこへ行く身ぞ」と詠んだ同じ大正十五年に、

僕だけをおろして汽車は消えにけり

とも詠み、ずっと下った昭和二十八年には

啄木祭に

ああ僕も汽車を下りしにゆくところなし

の句が見える。路郎は夭逝の天才詩人啄木に大きく共鳴するものがあったのだろう。昭和四十年の喜寿金婚の華やかなるべき年に、

死はゆらぐ文楽人形に死はゆらぐ

死の影が紋十郎の背後から

と、一転して暗い影に覆われた悲劇的な最期は、今も私の脳裏に鮮やかで、それも、啄木の短い生涯のある部分に酷似している。

路郎の川柳作句活動、川柳社会化運動は、反骨精神で一貫していた。一般の川柳人には理解の域にない理想を持って行動し、自分自身や家族までをもさいなんだ。詩や短歌や俳句の後塵に甘んずることを潔しとせず、川柳界の微温的傾向に刃向い続けた。

雲の峯という手もありさらばさらばです

七月七日の夜にこの世を去った路郎の辞世の句は、まるで雲の天辺から手を振って別れを楽しんでいるような爽やかささえ感じられる。嶮しい道を歩き続けた人生行路の果てなればの満足感であろうか。

(2)

行末を案じるように鶴は立ち

大正13年1月19日、大阪南堀江の書林倶楽部で開催された川柳雑誌社創立川柳大会の兼題「鶴」での軸吟である。

本誌に掲載中の川柳群像にこのところ相次いで登場する吉川唖人、橋本緑雨（当時は二柳子）らの活躍していた大阪市電気局の川柳会　以交吟社（会員二百名）との大同団結は、少数のインテリ作家だけで川柳誌の発行を短期に繰り返していた路郎にとって、渡りに舟であったかも知れない。

しかし、片手間の仕事では大成しないと自覚した路郎は、ここで毎日新聞の経済主任の職をなげうっている。後年の職業川柳人宣言の下地がすでにうかがえるようで、この句の「案じる」の措辞は路郎の心情をそのまま浮き彫りにしたものだ。案じるには、心配するの意の外に工夫をする考えるの意味がある。この鶴は、川柳活動の節

目に立った路郎自身の姿ではなかろうか。

君見たまへ菠薐草が伸びてゐる

この句は川柳雑誌創刊後10ヶ月を経た頃のもので、ほうれん草の緑の葉のみずみずしさ赤い茎の逞しさと、路郎のバイタリティーが混然と同化している。路郎は当時、遅日荘（鳴尾村字寺ノ後44番地）に住んでいたので、編集に訪れた緑雨らに、事実、畑を前にして語りかけたこともあったろう。大正時代にこのような斬新な句をものした路郎は、並みの作家ではなかった。後後、水谷鮎美が、

君雲を話すこころになり給え

と詠んで路郎の影響を垣間見せている。

ほうれん草の句と並んで発表されたのが、

雑談の前にお布施がさらされる

である。命日にお寺さんに経を上げてもらったあと世間話にいっ時を過ごす。折りを見て院主さんはお布施を押し戴いて袂へ入れられる。あるいは手提げに入れる。そのタイミングのよろしさ、さすがはプロだなと感心させられるのだ。

川柳雑誌創刊号の編集一切は路郎がした。編集後記に、「本誌の主義とするところはなるべく通俗的で、世間に川柳を宣伝すること、いきおい初心者の指導ということに力を注ぐにあります。それがために幾分の玉石同架はまぬがれぬことを覚悟いたして居ります」。とある。川柳雑誌は、川柳の社会化（世間への浸透）、作品の質的向上（初心者の指導）に加えて、古句研究の三本柱を目的として発行されたこと、今日の川柳塔誌に引き継がれているのである。

今から見ると大正時代の句は生彩に欠けたものが多い。一般投句の巻頭は、「日の丸のやうに梅干飯へ染み」という句で、日の丸弁当の呼称のまだなかった頃なのかと錯覚する。巻頭がこれなのだから玉石同架と言わざるを得なかった路郎の気持ちが分かるのだ。後に路郎が斬新な内容とリズムの句を発表すると、門下生から「先生に従いて行けない」との声がすぐさま出たことを知る私には、路郎は終生、「行末を案じる鶴」であり続けたとの思いが強い。

(3)

山中温泉にて

だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと

路郎はこの年の七月三十一日、橋本二柳子と夜行で北陸の旅に出た。金沢で歓迎句会と歓迎宴があり、その後、山中温泉で二泊している。「山中の蚊は鳴尾の蚊より猛烈にて、蚊帳の中にて蚊遣りを焚くありさま、全て想像の外に候」と、八月号の巻頭に書いている。

この頃、第十二支部句会（函館・亀井花童子）、大十三支部句会（大阪市平野・松本助六）が発足したり、川柳雑誌社の支部増設と活性化に力を致していた。そういえば二月には第三支部主催で「金熊寺から砂川へ」の吟行をし、六月には「歩こう会」などと銘うって新和歌の浦へ吟行に出かけ、和歌山市在住の仲間を驚かせている。会員読者などの獲得には先ず動くことの肝心なのを路郎は当然のことながら、わきまえ実行した。現在、地方の会へ中央から大挙して出掛け支援を惜しまぬ他社の行動力を、私はこれでなければと常常、眺めている。

川柳雑誌の発刊されたこの大正13年の路郎作品で注目したいのを列記すると、

失職をしてから父の声でなし
昼の風呂泳ぐ気にさえなる父よ
子煩悩がったんがったんしてくらし
ある時は子をだんばしでくいとめる

という子煩悩ぶりを示す句で、九月号に掲載のものである。子供たちとのからみの句は、その後もまだまだ唸らせるようなのが出てくるが、大正時代にこのようにじょうじょうとしたまろやかさで子を詠んだのも路郎を嚆矢とするのではないか。初心時代の私は、路郎の句作りの要諦をこれらの作品あたりから教示されたようで、それに繋がる

その日ぐらしも軒に雀がこぼるるよ
子よ妻よばらばらになれば浄土なり

の佳作に強い感動を受けたのを思い出す。

ここで路郎の句の分かち書きについて触れておく。句集「旅人」には、

その日ぐらしも
軒に雀が

こぼるるよ

子よ
妻よ
　ばらばらになれば浄土なり

とあり、他の作品も一行と二行と三行にそれぞれの気息に合わせた形で分けられている。これも石川啄木ばりと言えそうだ。

十一月号の巻頭言は次の通り。

「次の句を読むとしんみりとさせられる。川柳が滑稽なものだとのみ思うている人達に一読を乞う。

　淋しいも秋おどろくも秋の空（柳樽）」

この示された一句に、私は秋を介して、不易流行こそ川柳の向上に大切なものだと教えられたように思う。川柳は時代とともに変らねばならぬ。また、変り過ぎてもならない。

(4)

花粉に塗みる、死が襲ひ来た

まあいいさ　まあいいさ　眠むる

待て　待て　待て　と白がいふ

大正14年1月3日作の路郎のこれらの句は暗い。句集『旅人』にも掲載されず、かつて誰も取り上げることのなかった句だが、私は注目したい。路郎は新年の巻頭で、創刊後の一年を顧みて、「過去一年は私にとって、いい意味の悪戦であり、苦闘でもあった。同人の多くは微力な私を援けて川柳雑誌の完成へと鞭撻をおしまなかったが、ある同人は創立当時の熱を加速度で失って、同人たるの責任さえも忘れたような顔をしていた。」に始まる一文で、経営の苦労を縷縷述べている。いつの時にも仲間でありながら、仲間を陰険な手で（「煽動」と表現）叩き落す人間はいるものだ。前年秋に健康を害したこともあって、新年早早こころ慰まなかったのであろう。

一方、朗報もあった。

　君見たまへ　菠薐草が伸びてゐる

が、俳句界の大家、永尾宋斤氏により絶大の評価を得たのである。ただ一句の鑑賞解説に川柳雑誌5頁近くが占められている。要旨は興味中心の川柳（そこに川柳としての面白さはあった）をあき足らぬとして、思想的に深

入りし、生活に直面してくる一面をこの句は持っている。つまり、創作としての川柳の向上が時代と共に進展する事実、作家としての意気を賞揚した文章なのである。これもまたいつの時も「作家の生命は作品にあり」を如実に示すもので、路郎も快哉を叫んだに違いない。

また、路郎にとって喜ばしいことは、先にいち早く新進気鋭の黒木莢豆が同人に参加していたが、堺の大浜潮湯の貴賓室で開催された忘年句会に林田馬行、井上刀三らの出席を得たことで、馬行は新年号の一般雑詠にも出句し、二月から同人に加わった。番傘を離脱して川上日車らと革新の境地を開拓し、雑誌『雪』や『土団子』『葉柳』などを刊行した実績が実を結びはじめたのである。

母親の顔を思はす日が続き　莢豆
はづかしいせいかもしれぬことであり　〃
ちちははにまだ打明けぬ酒の味　馬行
酔ざめと云へる淋しい顔を見せ　〃
酔ひしれて掴めば札の重からず　刀三
資本家にうつむく暇はなかりけり　〃

路郎は五月号で「句作と評論」と題し、大要次のように述べている。

「川柳に議論は要らぬ。黙って作れ。議論通りの句が作れていないじゃないか。こうした言葉が長い間繰り返されて来た。（中略）果して川柳に議論は要らぬものか。（略）私は否、否と叫ばざるを得ない。従来川柳に議論は要らぬと叫んでいた人達について考察するとすれば、彼等には議し論ずるだけの思想を持たなかった場合が多い（と言い、反論はあっても三行か五行の揚げ足取りに過ぎず、川柳の芸術運動に益することはなかったとして、次のように結んでいる）。黙って作り得ぬ作家は大いに筆陣を張り、黙って作り得る作家は、それらの批評によって自己の人生を凝視する上の解剖刀となし、又、柳誌経営の才ある人々は、それらの作家、評論家のために大いに尽さんか。将来の柳壇が如何に発達すべきかは期して待つことが出来よう。」

川柳塔誌も評論皆無と言うのはさびしい。

(5)

川柳雑誌は、この年の四月号から「川柳家の戸籍調

べ」なる項目のシリーズを設ける。

（一）姓名（二）雅号（三）別号（四）現住所（五）生年月日（六）職業（七）好きな句（八）好きなタイプの女（九）自信の句（一〇）川柳以外の趣味（一一）配偶者の有無（一二）きらいなもの（一三）川柳に手を初めた年月

というもので、路郎は次のように答えている。

（一）麻生幸二郎（二）路郎（三）約二百ほどあり遅日荘主人はその一つ（四）阪神沿線鳴尾（五）明治二十一年七月十日生（六）著述業（七）古人の句現代人の句小生の句等にかなりあります。一寸例にあげにくし（八）概して愛嬌のある女、痩せているより心もち太った女、あまりに理智でない女、嫉妬心のない女、僕と趣味の合致する女、僕の性質の足らぬ点を知らず知らず補っているような女、眼は大きい方鼻は余り高くなくても、こころよい感じを与える女、化粧は薄化粧、衣装はよくなくても色彩の調和配合の巧みな女、健康な女、この項言えば際限なし（九）最近では「父の死後転々として落ちてゆく」（一〇）囲碁、漫画、芝居、落語等等等（一一）有、妻の若き頃の句に「繋ぐ手のはずかしい程月が冴え」の句あり、又「ヘルメットかむれる君の年すこし老けて見ゆるも頼もしきかな」の短歌もありき、これ皆余程以前のこと故惚気にもあたるまじければ記しおく（一二）甘いもの、但し恋は別（一三）明治三十七年の晩春。

つぎに椙元紋太と岸本水府のを記す。

（一）椙元文之助（二）紋太（三）定まりたるものなけれど昌木二八を時折使う（四）神戸市花隈町四七八（五）明治二十三年十二月六日生（六）菓子商（七）だんだん数が多くなって特に一句を挙ぐる能わず、あたたかい心持の句明るい性格の句皆好きなり（八）例を早速挙げ難いが暖い心持明るい性格の女皆好きこんな女芸人に多し但し実際に私の本能（？）を惹きつける女は痩っぽちの眼の大きい余り人に好かれそうにない女に多いから嫌になる（九）今一寸見当らぬ（一〇）何にでも趣味を持つ事が出来る性質と自分では思うが扨特に言うものなし、人間味の多きものを最も喜ぶ、如何なる趣味も究極は川柳に還元する（一一）有（一二）鰌汁、あかえい、真実の喧嘩、人を呪う心（一三）明治四十五年春頃初めて句会に出た、その二年前に狂歌の心算で川柳を作って

いた事がある。

（一）岸本龍郎（たつお）（二）水府（三）傘下堂、雑然居、番太郎、水呑野狐（四）大阪市南区玉屋町一番地（五）明治二十五年二月二十九日生（六）福助足袋広告部（七）「三越で矢張り妾になるときめ」（八）毒婦型、但し気心は真面目（九）「売られたは三味線に手の届く頃」（一〇）浮世絵、明治趣味外二三の蒐集、食道楽、芝居、落語、日本物映画、旅、道ぶら（一一）有（一二）革新と称する川柳、番傘を呉れと言うハガキ、歌劇女優の細く剃った眉（一三）明治四十二年春。

この年の四月函館から第十二支部の幹事の亀井花童子が、九月には大連からの帰途に井上剣花坊が来阪、それぞれ歓迎句会を持つ。

十一月号巻頭に川柳の畑を耕す男の言葉、

柳友よ　一本の燐寸が燃えつくすまでに
寒さや空腹がせまって来る迄に　わたしたちは　一句を遺しておかねばならぬ。

(6)

善人が滅びつゝある寂しさに
炭ついで炭ついで女をうらむ

大正15年の年頭の句は、良きもの善き人が滅びの傾向にあるものを詩人の感受性が敏感にとらえたものだ。また、男が女をうらむ姿態の炭をつぎ足す所作は、錯倒の感の故に味が深まる。ほぼ一年後の大正天皇崩御に際して

草莽の臣かなしみの炭をつぐ

の句が見える。なお、「炭をつぐ」の句は、

学問のさびしさに堪え炭をつぐ

という俳句の山口誓子の有名なものがある。それで誓子に関する話を思い起したので一筆して置く。以下の話は、路郎先生から川柳雑誌社の編集室での雑談中に聞いたことであるが、大正10年頃、当時京大三高俳句会に在籍の若き誓子が、雑誌『雪』に参加を希望したのを拒否したとのことであった。俳句・川柳誌『雪』の権威を強調されてのお話だったと思うが、気鋭の俳句作家を拒んだの

は、雪同人たちの不明に因るものではないかと、私は感じたものである。誓子は明治34年の生まれで路郎と齢に十三の開きがあった。

さて、路郎は新年の論評には、「三十年計画」と題し、革新派の田中五呂八からの手紙の回答方式で一文を章している。

「ごぶさたしていることは僕も同様です。（中略）一度も逢った事のない友人が私には幾人あるか知れませんが、句を通じて、書いたものを通じて、或いは個人的な通信で逢ったと同じ程度の親しみを続ける事が出来ると思います。あなたにしたってそうではないでしょうか。あなたには是非逢いたいと思うけれども逢わずに死んでしまったからとて別段それがために親しみが薄くなったり厚くなったりするとも思えません。私にとって昔の人々や、異国の人々や書物の中の人物と同様に考えることが出来るからです。時代とか肉体とかいうものを超越して考えることが出来るからです。」と述べ、五呂八が雑誌『氷原』のために闘い、同志の詩集を出す努力には涙ぐましさを感じるものの、評論や創作には厳正な一批評家の立場でいると言い、ひるがえって『川柳雑誌』に対する批判や期待に対して次のように答えている。

「積極的とはどう解釈されたのか知れませぬが、私は年中積極的にやっている積りですし、一寸馬力をかけて見ては悲観したりするような態度は採りたくないと思っています。第二期の実質時代云々も、そう第二期だの第三期だのという程のけじめはありません。私は川柳雑誌を三十年計画でかかっているのです。（経済的確立、量的の発展、文壇への水平運動、質的完成というように考えています。）

だからまだまだほんの初期だと観て下されば間違いありません。しかし、あなたの言われる個色的な作家を自由に伸ばすということは、今更の問題ではないので微力の及ぶ範囲で力をつくしています。一体革新の名によって奮闘？　している人達は気短か過ぎる共通の欠点を持っていると思います。薄っぺらな雑誌すら出したり出なんだりで社会から川柳に対する従来の誤解を一掃しようなどとはあまりに虫のいい話だと思います。人間は自分で穴を掘ってそのところへ嵌まり込むと仲々動きがとれないものです。そこに伝統派の堕落があり、革新派の悩みがあるのではないでしょうか。私達はもう少し辛抱強

いことを心がけようではありませんか。」

(7)

俺に似よ俺に似るなと子を思い　　路郎

「この一句を生むために路郎は生まれてきた」とまで賞揚したのは後藤梅志氏である。この句は大正15年7月11日鳴尾の遅日荘（路郎居）で開かれた第五回柳談会で発表になった（私事ながら、この日の昼前に筆者は生まれた）。柳談会雑記を見ると、椙元紋太氏はじめ十五名ほどの出席者があり、林田馬行氏が、「植物染料」についての話をされた。

八点句

重荷下ろした父の死顔　　ひろし

五点句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ　　路郎

逢ふて戻って父母に手をつく　　松郎

四点句

欺しても欺しても男生きてる　　茨豆

の句が並び、以下三点二点一点の句が続く。

柳談会は、この年の二月に第一回が開かれている。メンバーの一人が専門的な話をしたあと、雑詠数句を課して相互に句の批判研究が行われた。記録に「夜に入ってから頗ぶる無遠慮な、しかも熱烈な句評を交換してお互いに得る所が多かった。」とある。従来の型を破った忌憚なき批評を交わしたので「多少でも遠慮をしたり、個人的に不愉快さをあとに残すような人々の間には不適当であると思った。十二時頃まで話し込んでいた。」

今でいう研究会のはしりで、路郎のことだから相当、峻厳な批評をしたに違いない。

「俺に似よ」の句は、京都の川柳人が間違って紹介したのか、「俺に似よ俺に似るなと子を育て」と記憶する人が沢山おられる。新京都社の堀豊次氏も私に次のように言われたことがあった。

「今は、子を思いになっているけれど、発表されたときは、子を育てだった。これは私がしっかり覚えているのです」。

しかし、これは豊次氏の思い違いで、川柳雑誌第三巻第八号（第三十一号）に、「子を思ひ」と掲載されている。

さて、路郎はこのようなことがあってか、文章に句を引用するのにも慎重で、編集部員にも常に厳格な指示を与えていた。必ず句集で確認すること、作者当人に訊くことを省略して記憶のままに書かぬこと、話さぬことだ。

近々私の気付いたのに、

菊活けてひととき慾を忘れたり（けり）　清水　白柳

父の日の父は木曽路の旅にあり（父の日に）　本多　柳志

揚っても揚っても雲雀に空がある（雲雀には）　小浜　牧人

などがあり、これら助詞・助動詞のたった一文字が大切なので、その一字に作者の個性が躍動している場合が多い。

他に大正15年の路郎の作品の目ぼしいのは、

二階を降りてどこへ行く身ぞ

すべりんこ親は涼しいとこで待ち

見渡すとユダのこころをみんな持ち

で、すべりんこの句は、路郎の第一句碑（木碑）となり、戦後中島小児科診療所庭内に建ったが老朽化して今はない。

第七回柳談会記録に、「黒木莢豆氏は、いかなる場合でも莢豆という署名によって句を鑑賞して貰いたいと鋭意強調せられていた」とある。路郎のいう作品の質的向上と個性派の輩出を願う指導が暫時浸透してゆく思いがする。

(8)

大正十五年の七月号の路郎巻頭言は「大空を求む」と題する一文。全文を左に記す。

病気というものは、いろんなことを考えさせる。そんなに偉くない人間でも、一寸乙なことを考えさせる。忙しい人よりも浪人が、いかにも偉そうなことを考え出すのも、この部類に属するらしい。

病気の中から一年有半が生れたり、子規の俳句が生れたりする。そのかわり一層死んでのけようかなどという無分別も起る。透谷や眉山も出る。しかし達者でも有島武郎のような詩的ぶらんこも出るから、あながち病気でなければ駄目だと病気を讃美している訳ではない。

僕は近年よく病気をやる。ぼちぼち偉くなる前兆だと諦めれば諦められぬこともないがただ病気だけは一人前にやっても、偉くなる方は半人前も進まないのではありがたくもない。まだまだ僕は準備時代なのであるから、今殺されても甚だ迷惑をする。もう少し待って貰いたいと思う。

文字を知るは苦のはじめなりで、僕はなまなかの文字を知ったために、その文字によって家族を養わなければならない。川柳を立派な芸術として天下に普及せしめなければならない。それは大それた考えかもしれないが、僕にとっては、大それた考えだとも思っていない。是が非でもやって見せる。それが青洞門を穿つことよりも幾層倍の難事業であろうとも、それは今の僕には問題ではない。ただこつこつと穿つのみである。どこでハタと突きあたろうとも、それは問題ではないのである。案外早く青い碧い大空が見えるかも知れない。いや僕自身の死の前にして必ず大空を発見するであろう。それを求むることのみによって生きる今の僕である。

編集後記では、「又私が寝た。それがために七月号の原稿がどうなるかと思っていたが案じるよりは生むが易いのたとえで、思ったよりも内容充実で、前号よりも前前号よりも頁数を増やさねばならぬ盛況を呈した。編集は僕の枕許で二柳子、松郎、馬行、刀三などが集ってやってくれた。」とあり、六月九日に病臥して二十二日にはまだ床の中で十三日に開いた柳談会の原稿を書かれた様子。それでも柳談会では、「川柳雑誌社の川柳観について」話をしたとの記事があるので、当時は斬新な川柳雑誌社系の作品に他社から、論議や批判があったらしいことが分かる。

病気は丁度梅雨期のこととて、風邪をこじらせたものだろうか。路郎先生は、呼吸器系よりも消化器系の器官がお弱かった。

☆　☆

これからは余談になるのだが、私は去る八月生駒の麻生アートさんご夫妻を訪ねてしばらく歓談をした。路郎先生か葭乃先生のご命日には度々お邪魔をし、アートさんも私の母の命日には豊中まで来て下さりいろんなご教示を得ている。路郎還暦の年に門下生が贈呈した寿像（胸像）があるのだが、個人で保管しているよりも有意義な所に移した方がよいのではないかのアートさんのご

意志により、本社事務所に頂くことにした。来年の路郎忌句会には会場に飾れるし、常任理事会なども寿像に逐一聞いて頂けることとて有難いことと思っている。

路郎先生の寿像は、現在の川柳界に青い碧い大空が見えると感じておられるだろうか。

(9)

川柳雑誌の大正15年七月号に小島六厘坊の十八回忌が5月26日午後7時から築港託児所に於て営まれ、路郎が故人の思い出を語ったと掲載されている。同じ号に木村半文銭が、「忘れ得ぬことども」、翌8月号に「六厘坊遺聞」を書いているので、六厘坊の特異な偉大さを路郎から聞いていた私は、ここで六厘坊について一筆触れておくことにする。

六厘坊は明治21年生まれ、路郎と同い年である。一年上には同じ市岡中学に通っていた後の川上日車の七厘坊がいた。七厘坊とは、中学時代から幸田露伴、島崎藤村、樋口一葉らの小説を話題にし、殊に露伴の「雁坂越」に感銘を深くしているのは、六厘坊が小説の主人公と同じ継子の境遇であったからしい。

六厘坊は心斎橋北詰で小島洋服陳列所を経営していて、絶えず何人かの川柳人が屯し、川柳談義に花を咲かせていた。雄弁と言えるほどに天晴れな話術を持前の大声で句の講釈をした。六厘坊が褒めて解釈すると誰しもが惹き込まれて思わず感嘆するが、仲々褒めることはなかった。六厘坊は同じ中学の七厘坊と句の上でよく言い争い、直ぐ絶交したが、二、三日のうち——早い時は翌日——七厘坊は姿を見せ、またしてももめて再び絶交することを繰り返した。

明治37年、日本新聞に「新題柳樽」を創設、新題山柳樽寺和尚剣花坊と称した井上剣花坊に投句、多作速吟、到る処吟懐を恣にし、大まかな作品の質を推賞された。日本柳壇の傾向に合致したこの天性を見込んで剣花坊は、別格本山西樽寺の名を与えたのであるが、六厘坊は、「そんなもの要りまへん」と応じず厚意は宙に浮いてしまった。六厘坊十代の生意気な所業であったが、これが後々関東柳壇に追従せぬ独自の関西川柳界進展への礎となった。六厘坊は明治39年頃には、都新聞の前身大阪新報に「新報柳壇」を開いていた。ライバル紙の大阪日報

の「日報柳壇」に割り込み、川柳の本体を説いて合併を強要する。その会合でも、威圧力と説得力で全ての人を惹きつけてしまう。そして御霊の東、五二館楼上で合併記念会を開催、以来、個々の関係は別として新報・日報両柳壇は言うまでもなく、日本新聞や読売への投句者までが、これを契機に団結、大阪の川柳界を形成していく。機関誌『やなぎだる』が『葉柳』に発展したのもこの時で、後『土団子』が発行される。

六厘坊の豪傑ぶりは情歌の宗匠田中芳哉園氏の会合で傍若無人ぶりを見せ、盃を打ちつけられて大立回りを演じ、多勢に無勢の六厘坊は、したたか鉄拳を受ける羽目となる。それも民謡や俗謡をいささか詩的な文芸と解していた六厘坊の所見開陳が、「この小僧生意気な」となったのである。六厘坊は、なおもこりずに初めて出席した短歌の会でも、「私が披講します」と、集められた作品を鷲掴みにして、委細おかまいなしに批評をし、質疑まで受ける高飛車な行動に出たらしい。余人には考えられぬことである。

才気横溢、自ら天才六厘坊と称した熱血児も病には勝てず、しばらく魚崎の方へ養生に出ていたが、明治の末期二十一歳で夭逝する。

六厘坊は明治中期に生まれ明治に死んだ川柳家だったが、関西柳界には大きな足跡を残した。その時、朝日新聞の社会面に、小さくはあったが「小島六厘坊逝く」と報じられた。

路郎が大きく影響を受けた一人であった。

(10)

小島六厘坊の人格や川柳での手腕は前号の通りだが、二十一歳で夭逝するだけあって、豪傑肌の反面、友達としての親しみが厚かった。征服欲は酷い人だったが、心の底に涙ぐましい共感を抱かせた人、理知と感情のほかに意志力の強い人で、その反発性は激情と共に柳界の誰彼を敵にして戦ったのは多くの人が知っていよう。とても現在の柳界では、あんな咆哮ぶりは見られない。それだけ大阪の川柳界も知的に磨きがかかったのであろうが、さりとて、あのような太い線を描く意力の人も無くなったのであろうと思う、と木村半文銭は言っている。

頭がでっかくて丸坊主、そして声が大きい。鬼若丸の

ようであったのだ。句会場の外から子供が真似て「六厘坊チョーダイ」などと笑わせたこともあったらしいが、そんな時は相好を崩して豪傑笑いをしたという。

筆者は、大阪川柳人クラブあたりで六厘坊の顕彰をしてはどうかと思っている。柳誌の『葉柳』や『土団子』その他から六厘坊句集を編み、足跡を記録しておくべきだ。

丸刈のむしろ露骨を嬉しがり　　刀三
五分刈りで一葉女史の事も言い　　五葉
丸刈で握ったぜにのあたたかさ　　路郎

これらは六厘坊忌に発表になった句である。この年の十月号で井上刀三は「殻を葬る」と題して書いている（以下一部転載）。

私は路郎氏の川柳を味わって始めて川柳の尊さを知った。川柳に一身を挺して一生を棒に振るの敢て徒爾でないばかりでなく、寧ろ痛快なことであると知った。路郎氏には本当に教えられ教えられつつある。氏の愛寵を一身に享けて私は勿体ない程恙なく培育されて来た。曽て私は大杉栄の自叙伝を熱読した。あの雄勁な筆致に感涙を禁じ得なかったと同時にすっかり大杉栄が好きになってしまった。

机上の卓論なりとして従来耳を籍さなかった社会主義まで共鳴してしまった。私は今、此処で路郎氏と彼とを比較しようとするのではない。けれども路郎氏の場合もこれと同じことである。路郎氏の風丰に接すると、ある敬虔ななつかしさがこみ上げて来る。

次は、「星は輝けり」黒木莢豆の一部。

詩人の魂は如何なる場合も健康でなければならない。想像によって解決してはならない。詩人は澄み渡った渕の如き静かな心眼をもってものの真をみきわめなければならない。詩人は春の百舌鳥の如くなやみに正直でなければならない。秋の雁の如く甘えない心を持たねばならない。己の生命を汲まなければならない。技巧と妥協して安価な混合香水を作ってはならない。染料で色揚げしてはならない。詩の言葉の一句一句にはかすかな吐息の如きものにも魂の真が宿らねばならない。詩はどこまでも真実でなければならない。真実を離れて詩はない。

次は、三好革郎（これも一部転載）

川柳は即身成仏である。寂も解脱もそんな面倒臭いことは言わない。南無阿弥陀仏といえばそれでよい。生活

の声がそのまま川柳である。月給が上った。斃首になった。女給に惚れた。女房に叱られた。友達と遊びに行った。借金取りに責められた。皆それが川柳の題材になる。それだけに川柳はプロレタリアの芸術である。被搾取階級の声である。俳句を保守的といえば、川柳は進歩的である。

以上のように若い作家の執筆が活発だった。

(11)

年改まり路郎数え年40歳の『川柳雑誌』は奥付に大正十六年一月一日発行とあるが昭和二年になったのだ。年号までが変ったのである。その年頭の路郎の筆「遊戯以上」には次のように真摯な内容のくだけた一文がある。

「芸術の道を踏み外すものが二つある。それは猥褻と技巧だ。そのうちでも技巧の方が一層悪い」。トルストイの日記にこのように書いてあるんだ。これを読んだ僕は一応は感心したが、川柳家として其の外にもう一つ増やして三つにしたいのだ。君は何を増やすと思う。それは「遊戯衝動」だ。解ったかね。これをよせて三つにするんだ。勿論川柳は僕にとって芸術なんだから「芸術の道を云々」の文字を「川柳の道を云々」に取り換えて言って見るとこうなる。

「川柳の道を踏み外すものが三つある。それは猥褻と技巧と遊戯衝動だ。そのうちでも遊戯衝動が一層悪い」。どうだ、面白いだろう。猥褻が川柳を毒することはいうまでもない話であって、今も昔も問題とするまでもなかろう。

次に技巧だが、これは大いに論ずるだけのものはあるが、これは他日詳しく話すとして至極簡単に話すに止めておこう。技巧は無技巧の技巧まで行かなければ駄目だ。意識してする程度の技巧は結局トルストイの惧れる技巧だ。初心者は技巧の練習ということさえ学ばねばならないのだから仕方ないさ。万葉と古今と新古今とを並べて見たって技巧が必ずしも芸術的価値を高めるというものではないということが理解出来るだろう。

いよいよ僕の言わんとする「遊戯衝動」だがね。僕の川柳は芸術であり遊戯以上なんだ。

だから芸術衝動によるものでなければならないという異見を持っている。これは僕の異見というよりも、当然

そうあるべきものだから深く説明するまでもなかろう。ところが、遊戯衝動によってのみ作句している作家の方が多数なんだから情けない話さ。そして彼等は自分達の句が遊戯衝動の句であるということすらも考えて見た事がないのだから頗ぶる滑稽な話なんだ。僕等が川柳は詩だと言えば彼等もまた同じように詩だと言っているんだが、右の始末だから、詩とは何ぞやと聞かれたら参ってしまう口なんだ。しかし、中には正直なのがいて、「私は芸術家ではありません。随って私達の作る川柳が芸術であるとは思っていません。けれども川柳が芸術とやら言うものだったら儲けものであります。」というのも真っ直すぎて滑稽さ。芸術衝動なくして生れる芸術があってたまるものですか。

そうではないかね、君。

僕が川柳を社会に認めさせるための『川柳雑誌』を出した時に、川柳の社会化なんてと嗤った連中じゃないか。世の中って妙なものさ。主義も主張もないと、賑やかそうな処へ首を突っ込んでゆくからね。もともと彼等も同じ川柳の流れを汲んでいるのだから、おかしな態度をしたからとて憎めない僕であるが、もっと遊戯気分を棄てて本真剣になって従いて来なくては駄目だ。

これで大体は解ったろう。解ったら君もへんてこな享楽派の句なんか止して、ほんとの川柳の道にいそしむことだ。芸術は何んと言っても精進あるのみだからね。

もう帰るのかね。じゃ又来たまえ。

(12)

昭和二年の『川柳雑誌』新年号は、前号で紹介した巻頭言「遊戯以上」のほか、岡本一平、岡田三面子、川村花菱、正岡蓉、木村半文銭、西原柳雨、蛭子省二といった各界の錚々たる権威が執筆、数頁の年賀広告はあるものの八十頁の充実した雑誌に成長する。題字は小出楢重、表紙画は柴谷柴舟である。

『文芸春秋』が発刊されて、よく似た文芸誌が簇出しては消えて行った時代を同じくして、『川柳雑誌』の月刊発行に刺激された川柳誌は、今までの兎糞的発行からようやく確実な月刊を守るものが多くなる。

「技巧と気韻」木村半文銭から一部抜粋。

川上日車君は当代の川柳界での新技巧派の一人である。

技巧派などということは日車君の正しい主張と合致しないようであるけれども私はそう睨んでいる。例えば最近の「氷原」誌上で発表した中から、

蜆の実臍に似ている人の臍に
赤い実が出る貧乏を真っ二つ

の如きは、もっとも優れた技巧であろうと思う。こうした作品を大阪の川柳家が手にかけると、

人間の臍に似ている蜆の実

などと窮屈なところへ押し込めてしまうであろうが、こうした表現上のユトリは技巧の秀れた人でないと能わぬところである。

次は、川村花菱の一文からの抜粋である。

川柳詩社が盛んであった頃、同人の句は各々その特色ははっきりしていたが、一様に伝統的川柳の本格にかなった作品が多いようであったが、その中でともすると私の句は主観的に流れ、時に同人の笑いを買ったものが多く、あるいは迷いあるいは行きづまり、足元の定まらない時に独り伊東夜叉郎だけが私の心境をじっと見つめてくれて、前途の光明をかかげてくれていた。忘れもしない、須田町の「ほかけ寿子」二階の句会で、

此夏は北海道に行く気なり

の句を吐いた事がある。私にはこの句は創作ではなく、むしろ石川啄木の歌、

新らしき背広など着て旅をせん
しかく今年も思ひすぎてき

の心持ちを川柳として表現したつもりで居たが、同人十余人誰一人認めてくれなかった中に、互選の結果夜叉郎だけはこの句を天位にとった。私は、その句をほめられたと言うのではない。少くとも夜叉郎には作者を理解する力があって、作者の傾向をはぐくみ育てて行こうとする態度があったと信じている。彼は私にとって師匠であり力であった。（中略）夜叉郎の言葉をかりて言えば、「広げるよりも深く掘りうがつべきである。そこに川柳の生命がある。画時代的作品の出現が、凡てのものの解決である。」

大正の時代に路郎や日車が、

君見たまへ菠薐草が伸びてゐる

蜆の実臍に似ている人の臍に

と詠み、昭和初期に笠原路生が、

六角堂幾何学的に暮れて行き

の句を為したところに先駆者の画時代的作品の偉大さがある。また、路郎の選としての卓抜さは、伊東夜叉郎が川村花菱を認めたように、須崎豆秋、奥村丹路をはじめ、後年、多くの門下生の豊かな個性を見抜き、伸ばして行ったところにあると思われる。

路郎先生は旧年の秋の半ばからこの二月にかけて屢々風邪のため病臥、呻吟されている。

(13)

凡聖一如元旦のこころ知る

元日を迎えて「明けましておめでとう」と言い交わす清々しい気分は、聖人も凡人も何ら変りがない。凡聖一如（ぼんしょういちにょ）という仏教語を用いて、引き締った格調高い句に仕立てている。私は路郎の正月を詠んだ句の中では、この句が一番好きなのだが、凡聖一如は果してそのような解釈でよいのだろうか。広辞苑を繰ると、「事相に違いはあっても、理性（りしょう）においては凡夫も聖者も同一・平等無差別であるということ」とあり、いささか難解である。事相（じそう）は、「生滅する有為法。↔理性」とある。有為法は現象界の存在。有為のこと。有為は、「さまざまの因縁によって生じた現象、また、その存在。絶えず生滅して無常なことを特色とする。↔無為」とある。理性は、万有の不変の本性。真如。法性。のことだそうで、仏教の専門語はややこしい。読者は各自に理解解釈されてよいのだが、この重たい上句を支えて中七下五が身じろぎもしない。

元日の卓上日記晴とだけ

メモを書き止める程度の卓上の日記に、晴の一字だけを書いて年賀に出かけた路郎である。余白の広さは元日を象徴する諸々の概念、それは清澄やのどけさに見事に繋がる。

昭和9年の正月は皇太子明仁を寿ぐ句で、

謹みて日の御子の御降誕を寿ぎ奉る（三句）

皇太子早くも春になし給い
御降誕朝からさけとなりにけり
日の御子に硯を洗い筆洗う

昭和11年のには、

寝転ぶ癖の僕に海上雲遠し

で、新年の宮中御歌合せの勅題が「海上雲遠」であって、

昭和天皇の御製は、

紀の国のしほのみさきにたちよりて
沖にたなひく雲をみるかな

であった。

路郎は昭和28年発刊の終生一冊の句集『旅人』のはしがきに次のように書いている。

☆私の句は私の生活からにじみ出た句であるが、その句のすべてが、事実を根元として創作されたものであるかと云えば、必ずしもそうではない。しかし、真実をつかむためには、及ぶかぎり心を砕いた。

☆私の句はどちらかと云えば淋しい句が多い。私の性格がそうであり、私の歩んだ道が嶮しかったからでもあろう。要するに私は川柳に人間愛を求めてやまなかった。

正月だって淋しい人はいる。淋しい句が出来る。しかし、路郎はさらっとしていてこだわらない。

貧しさのながながしくも四十一
雇われていれば叱られ初めもあり
煙突の横とは初日哀れなり

路郎は明治37年大阪高商の予科に入学したインテリだが、貧しい子沢山であり続けた。川柳なるものにかまけ過ぎたからだろうか。

まづしさをこどもの方が覚えて居
ボーナスで父の腕前疑うな
ひとりひとり雑誌をあたえ冬を越そ
木綿着でおごそかな父となりおおせ
箸紙を父おちついて書いてやる
光明のなかにひたって餅をやき

これらは昭和2年の新春号の作品で、路郎の言う生活感のにじみ出た句だが、貧しくともその子煩悩ぶりがまことによく窺える。そして二ヶ月後に驚天動地の痛恨事が出来する。

(14)

ロンドン君が亡くなった。

この年の川柳雑誌四月号には、「麻生ＬＯＮＤＯＮ君は本誌主幹麻生路郎先生の長男として大正八年八月九日、大阪市西成区三日路町に生まれられ、昭和二年三月一日零時四十五分、兵庫県武庫郡鳴尾に於て永眠されました。行年九歳」との記事が写真と共に掲載されている。

路郎は新春号の編集後記で、「小生の病気は十二月に入って軽快となり再び多忙裡の人となって居ります」と記しているが、その風邪が一月から二月にかけて家族全員に伝染り、次男のアートさんとリリさんは肺炎をおこし四十度の高熱が続く。他の軽い人たちの中のロンドンさんは二月九日から床に臥し、絶食状態となり、遂に三月一日ジフテリアでこの世を去る。その葬儀に続いてリリさんの入院手術、一家は最悪の事態を迎えた。

一年前の新春号には、

どの子もどの子も息災でお元日

という句を発表した路郎だが、その悲嘆は察するに余りある。先月号で少し触れたが路郎の子煩悩ぶりは多くの作品からも顕著である。

結界の中へうけとる子煩悩
子煩悩がったんがったんしてくらし
晝のふろ泳ぐ気にさえなる父よ
ある時は子をだんばしでくいとめる

告別式は三月二日鳴尾の自宅で営まれた。

病中の令息令嬢たちが抱かれたり、かかえられたりの焼香、受持訓導と学友の参列は涙を誘った。大朝、大毎をはじめとする新聞が筆を揃えて訃を伝えたとあるが、それはＬＯＮＤＯＮという名前の特異さによるもので、路郎は、ほぼ三ヶ月前に次のような内容の文章を書いている。

「ロンドンやアートの名が、今の世から見て変梃である事から、新聞雑誌が宣伝してくれたために、僕自身、ロンドンやアートの父として知られている」。

路郎先生は編集の合間の雑談で、私に、ロンドンの名は英国のキャピタルの意ではなく、狼の生態などに明るいアメリカの経済学者ジャック・ロンドンにあやかった名であること、また、出生届を出したときも、即座に受け付けてはもらえず、中央官庁へ問い合わしてからの許可で、日数がかかったことを話して下さった。そして、

「四女の奈那が生まれた頃は経済界に打撃のあった大正九年だったので、私の生活も亦最も険悪を呈していたから、

天井のひくさも知らず子は生れ

という句が、いまだにその当時を回想せしめている」と書く。これも、奈那は、この貧しい中に、〝いずくんぞ、いずくんぞ生まれ来しや〟の意味あいで命名したのだと

のお話であった。そう言えば、アート（次男）、リリ（五女）の音楽的な命名は、生活の安定に繋がった故とも推測出来る。

川柳仲間から、ロンちゃんの愛称で呼ばれた利発で小さきユーモリストの一周忌に発表された路郎の一連の作品は、句集『旅人』に収録されているが、路郎の魂はいまだ定まらず浮遊している風である。

お父さんはやはり川柳々々云ってるよ
お前がいたらと思い出すと煙草ばかり喫う
お父さんはネ覚束なくも生きている
お父さんの神経衰弱がわかるかい
湯ざめするまでお前と話そ夢に来よ

(15)

英語に堪能な葭乃夫人の薫陶で、英語の読み書き、会話をこなしていた九歳のロンドンさんとの別れに、何もかも錯倒の一家になお不幸が続く。川柳雑誌四月号には、哀傷篇と題し、路郎先生の次の句が掲載される。

おおきな事実子が死んでいる
まだ弟があるようにいう悔み聞き
だす入りの一つ缺けてもがたがたし
被人のない帽子があるに気がつまり

学校の横に住みて

子を死なし学校に子の多いこと

また、葭乃女史の悲唱は、

弟へ残す形見のかたボール
ロンちゃんのわるさの竹も捨てがたし
ロンちゃんと聞いた雲雀の空となり
ロンちゃんの徳を姉へも聞かして居
紺絣今はアートのために裁つ

であった。

告別式に寄せられた七十句に余る弔句の中から数句を紹介すると、

梯を名に立つ霧の隔つるよ　森　東魚

（ロンドンの名の由来を英国の首都と思い込んでおられるが……）

弟の君に淋しい日曜日　青砥不二綱
砂手本さぞ励むらん励むらん　関本　雅幽
器から器へ移す水の量　川上　日車

新仏母をこの世にのこしたり　　水谷　鮎美
ロンちゃんにみんな取残されたよう　塚崎　松郎

さてもさても、四月に入って九日、路郎は高熱のため大阪大学病院楠本内科に入院、腸チブスを診断された。月の半ばには治癒に向かうこととなったが、この時と先のリリさん手術等に尽力を得たのが長崎薬学博士で、四年後に同博士の肝煎りで阪大川柳会が結成、路郎が指導者として招聘されることになる。

五月八日に退院した路郎は、葭乃夫人と借家探しを始める。借家探しにも先生は、

「家主の思惑と店子の掣肘との差を思い知らされ、金もかけずに間数を無闇に作ろうとする家主の頭と、ほんとに力のない作家が相類似していると断じ、むやみにいいものに見せようとしても、その内容に於て力が足りなければ見る人が見れば、あわれなボロ家と何ら変らないからである」

と、常に川柳に引きつけて感想を述べる。

路郎一家は六月八日に大阪市西成区千本通五丁目七番地へ転居、従って川柳雑誌社も同所へ移転することになった。

筆者は前号で、「ロンドンの一周忌に」の句を挙げ、魂はいまだ定まらず浮遊していると書いたが、

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

の句も同年の作、次いで翌昭和四年には、

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

が発表になる。

葭乃奥さんが、路郎の句の中で私の一番好きな句というのが、「子よ妻よ」であり、路郎先生ご自身、多くの作品の中で一番の気に入りの句は、強いて言えば「寝転べば」であった。これも編集時の合間にお聞きしたことである。路郎先生が言うに言われぬ悲痛な出来事の当座にこの絶唱を残されたことに私は深い感銘を覚えるとともに、後年、「いのちある句を創れ」の語録を標榜して門下生の指針とされたことに大いなる意義を感ずる。次号にはそのことについて述べたい。

(16)

麻生路郎の門下生、不朽洞会員たちは「いのちある句を創れ」のいのちにそれぞれの思いを持って作句したに

違いない。私は記憶を辿ってみて、川柳雑誌を調べたら、昭和三十四年二月号に「作家の願いはただ一つ」、副タイトル――いのちある句へ挑む――と題した座談会をしている。メンバーは、清水白柳・福田妄夢・金井文秋・西川晃・橘高薫風子の五人である。その冒頭の部分を記す。

白柳「私が聞き役に回りますから晃さんから何かテーマを出してきっかけを作ってもらいましょう。」

晃「それでは先ず我々の作句の基本態度である〝いのちある句を創れ〟という川雑のスローガンを皆さんはどういう風に解釈していられるかと言うことから始めたいと思います。」

妄夢「いきなりむずかしい問題を持出しましたね。」

晃「例えばですね。過去から未来に通ずる永遠の一点に立って作句をすることだとか、或いはもっと具体的に遊びではなく文学的な自覚をもって作句することだとか〝いのち〟に対するそれぞれの解釈があるでしょう。薫風子さんは。」

薫風子「私はこの間京都のファン・ゴッホ展を見に行ったのですが、その展覧会で〝星の夜のカフェ〟という作品を見て以来というもの、ちょいちょい街の雑踏の中や満員電車の中でさえ、その画の中の鮮明な星の色が脳裡に浮んでくるのですよ。七十年以前のフランスの空の色と私の感覚にある空の色と、国境を超越して訴えるものがある。つまりゴッホの画いた星空の色が時空を超えて心打つものを持つ。そういう事が川柳にもある訳で、それがいのちだと思っています。」

晃「いのちとは何かと言うと、詩とは何かというのと同じでなかなか言い表せないのだが……。」

文秋「いのちと言うのはいつの時代にも変らないもの。つまり真実とか真心というものではないかと思う。単なる描写の句にはいのちがない。」

晃「そうすると句に主観を盛り込まねばいのちある句にならないと言うことですか。」

文秋「主観でも客観でもいいのですよ。一寸説明しにくいが、要するに作者の真実性の問題ですね。」

妄夢「いのちと言うものは作者の持っているものであって、その作者の生活の中から、その作者でなければ生めないものを創り出すのがいのちだと思っていますが。」

晃「そうするとオリジナルなものでなければならぬと

いう意味ですね。」

妄夢「そうです。そうでなければ作品として永久的ないのちを持つ事は出来ぬでしょう。」

晃「つまり芭蕉の言う不易流行の不易の面ですな。然し私は流行の面の中にも矢張りいのちはあると思うんですがね。」

妄夢「時代が経ってその作品が忘れられてもいのちがあると言うわけですか。」

晃「永久に残る作品を創ろうなどと言うのは意気込みとしては結構です。だがそんなことは今から判ることでありません。我々はその時のいのちを燃やして行けばいいのだと私は思います。」

文秋「時代を敏感に捉えた句の中にもいのちがありますよ。ハイティーンの句でも、ドライの句でも、箱入娘の句でも。」

晃「時代が変って後になってその句の意味が人に通じなくなったとしてもそれはそれでいのちを持ったと言えると思う。いつの世にでも判って貰おうとするような気持だと時代性を無視して先人のあとばかりを追う結果になりはしないだろうか。私が言いたいのは、世上に言いふらされた句が必ずしも名句ではないと言う事です。」

薫風子「そういう事も一面言えるかも知れないが、僕はどうも不満で、文学性の中には永遠なる要素が多分にあるものと思う。それを掘り出すのがいのちの探究なのだし、われわれの目標なのではないでしょうか。」

白柳「私はいのちのある句というものは、ある程度読む人の共感を呼ぶものでなければならないと思う。いくら自分がいのちを燃やした作品でも人に訴えるものがなければいのちは無いのではないか。」

晃「本当に心の底からつき出たものであれば、必ず多数の共感を得るべきものと私は信じています。」

白柳「作者の感動が燃焼されたとしても、必ずしも多数の共感を呼ぶ作品が出来るとは限らないと思う。独りよがりの句になり易いのではないか。」

晃「それでは鑑賞する者を念頭において作句せよと言う事になりますが、併し〝縁なき衆生〟まで共感を呼ぶ必要があるのでしょうか。」

文秋「〝頬にふれるは秋のてのひら　香林〟晃さんの話に関連するのですが、これはいい句だが必ずしも誰にでも共感を得る句とは思えません。句にいのちはあって

も共感と言うことになると一寸問題があると思います。」

白柳「晃さんの言われる体当りで詠んだ句には、瞬間的にいのちがあるが、二十年後には消えているというような短いいのちでは、いのちある句とは言えないのではないかと思う。」

晃「私は短い期間だけしかいのちを持っていない句であっても、それはそれでいいと思う。」

このような座談会での各自の発言を、今改めて読み返してみると、西川晃氏の発言こそ路郎の「いのちある句を創れ」の指針に適うように思える。路郎の作品は、一句たりともその生活環境や思想から発したいのちの発露以外のものではないのだから。最愛のロンドンさんを亡くした時も、みずからの死を迎える瀬戸際に至るまでの経緯にも、真底からのいのちの燃焼が句に移されている。

路郎の死から早三十年近くになり、路郎を知らず路郎の作品さえ多くは知らぬ人たちの増えた現在、路郎の精神を伝えるべき一人として、特に「いのちある句」の意味を噛みしめておきたい。

西川晃氏の発言の中に不易流行の言葉が出てくる。これは芭蕉の俳諧用語で、「不易は詩的生命の基本的永遠性を有する体。流行は詩における流転の相で、その時々の新風の体。

この二体は共に風雅の誠から出るものであるから、根元においては一に帰すべきものである」と広辞苑にある。川田順も、わが短歌作品は不易流行を旨とすることを言われた。

岸本水府の「川柳の第四運動」の第一に、川柳の内容革新、新興川柳運動を挙げ、本格川柳を叫んだことも流行に繋がる精神にほかならない。

路郎の作品で、「起きて半畳、寝て一畳」の諺を五・七・五にした川柳、「寝転べば畳一帖ふさぐのみ」や「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」は概念的な不易の句で、「われ老いしか千代紙を美しと見る」とか、「老人におもちゃなしバラの前に立つ」は流行を加えた句であろうと思う。そして、そのどちらもが、路郎の真実、「いのちある句」であること、万人の認めるところであろう。

われわれは、それに続きたいと思う。

(17)

昭和2年7月号、川柳雑誌発刊後三年半、川柳雑誌同人の酒井駒人氏は、「大阪に居た頃」と題して概ね次のように書いている。

私は今、平塚町の母の家に居ります。毎日ぶらぶらして居るので退屈のあまり、行李から川柳雑誌を取出し創刊号から今までの雑誌に目を通した時、その発展したのに驚きました。私がはじめて川柳雑誌社の例会へ出席したのは大正13年5月16日夜六厘坊忌を端の坊で営んだ時だという事が誌上で判りました。其後例会へは必ず出席していました。番傘へも、大大阪へも。其時分はまだ松郎、馬行、刀三の諸氏は大大阪川柳社の同人でした。よく渓花荘へも遊びに行きました。川柳の研究書を松郎氏から譲り受けたのも其当時でした。

氏が電話で柳書が見付かったから買っておいたとお知らせ下さった事もたびたびありました。渓花坊、松郎、刀三、光太楼の諸氏と十三橋納涼句会に行った帰りに、たしか都島終点付近だったと思いますが、あるカフエーに入り、松郎、刀三両氏が「今夜はここで呑み明かすのだ」と言ったので、驚いて時計を見たら一時少し前、皆とお別れして明方までに十三橋の句を六十句だか作って郵送したのも忘れられない一つです。

馬行氏の宅でお月見の句会を催した時出席して、倉吉の中山梢露氏にお目にかかり短冊を所望されて、無筆の私は困りました。今持って居る松郎、馬行、刀三三氏の短冊は其席上で戴いたものです。記念に馬行氏から貰った寄書の団扇を持って豊中駅で輪を作り、私が真中で八木節を唄い、駅員や乗客を笑わせたのも忘れる事が出来ません。もう二度とあんな呑気なまねはできないでしょう。

史風氏が千両箱を出し、小西白花氏が島の内を出したのも其当時だったと思います。千両箱は七部だか出し、島の内は三部だか出して廃刊となり、島の内の如きは半ヶ年分払い込んだので残金を請求したけれど、少しも要領を得なかった。

大阪川柳社創立句会で、川上日車氏が「娘」の選をした時、水府、渓花坊両氏の二句だけ抜いて、あとは全部没となし、軸吟を三句発表して出席者一同を喫驚させた

のも忘れることは出来ません。

創刊号当時の同人であった夜調、光太楼、耕塩、風人、露太楼、佳扇、剛山、飛水の諸氏は誌上でお名前さえ見かけませんが、いかがなされたのですか。

あまり退屈なので、ペンの動くにまかせて、こんなつまらない事を書いてしまいました。なんだかもう一度大阪へ行って懐かしい皆さんにお目にかかりいろいろお話をして、其当時の気分を味わいたいような気になってしまいました。

文章の一部を省略したものの、さして長くはないこの一文から、当時の川柳界と川柳雑誌の様子を興味深く推察することが出来る。

三年を経過した「川柳雑誌」の充実ぶり、当時の川柳人は結社に属していても未だ右往左往していた様子、句会のあとは仲間で痛飲、時には夜を徹したらしいこと、一夜に六十句と多作であり、短冊の交換も繁く行われ、短命の柳誌が泡の如く出現しては消えて行ったことなどが分かる。

川上日車氏の選者ぶりも型破りで、その時の五句は、かつて本田渓花坊氏からご教示を得たので後日書くことにする。

(18)

この年の七月九日の夜、路郎先生は橋本二柳子（後の緑雨）、庄萬よし、高橋かほるの三名と松江への川柳行脚へ立たれた。夜行の車中で電報を打つ頼信紙も、金を出そうとすると「切手があります」と取り出す二柳子の川柳雑誌への貢献度、路郎に対する献身振りは雑誌の至る所に偲ばれる。萬よし、かほるの両氏は宴席で一興行すべく芝居の科白の練習に余念がない。昼前、雨の大社駅に着く。『週刊朝日』の夏期特集号の川柳の路郎選で一等入選者の青年が、路郎の大社参詣の予定を新聞で知り駅頭に出迎える。人情濃やかな時代が偲ばれることだ。松江に引き返して、宿は大橋を渡った湖岸の「なにわ館」、嫁ヶ島を眺めて疲れを休め、句会場「みどり」へ出掛ける。九時になってようやく顔が揃うというのんびりの会で、大阪のように電車がなくなるからと帰途を急ぐ人もなく、しみじみと句境に浸る雰囲気であった。当夜の路郎はその句会のムードを楽しみ、

「湖の底にはまんまるい月が輝いていて、私のこころをそこへ引きずって行った。李白が酔興に月を捕えんとして溺れて死んだ陶酔境が羨ましかった」

と記録にとめている。そして、その夜の柳話の中に、川柳での、そうした三昧境を説かれたらしい。ラフカディオヘルンのことも思い出すまま語られたという。

翌日、青砥不二綱氏の案内で松陽新報社に新聞柳壇の選者米村あん馬氏を訪問し、小泉八雲旧居（根岸邸）へ。主人の根岸氏の言、

「この部屋が先生の居室で、書斎を退かれると、椽近く座を占められ、庭を眺めながら夫人とお話をされたり、来客に接しられたりしたお部屋です。この部屋ではいつも、日本のきざみ煙草を喫ふていられました。……」

旧居から奥谷町の真光寺へ。ここは島根柳壇の恩人村穂珍馬氏の墓所。本堂で故人の遺墨や全国川柳家の追悼句に接して故人を偲ぶ。

そしてまた夜行列車に揺られ帰阪された。

七月十日、天神「みどり」での歓迎川柳大会は三十余名の出席、席題「飛石」庄萬よし選、「玩具」青砥不二綱選、兼題「花道」麻生路郎選で行い、句会終了後は有志での宴会を持ち、午前四時白白明けの頃に散会したとある。当夜のめぼしい句を列挙する。

飛石をきれいにはいてまりをつき　孤呂一
飛石のとこまで落す梨の皮　路郎
父さんのせんすがあった玩具箱　かほる
一人子のどんな玩具も淋しくて　路郎
花道をもう這入ったに伸び上り　不二綱
花道は相合傘の巾に出来　かほる
花道の新派は客と間違える　路郎

松江旅吟　麻生路郎

松江の宿にて

和田見通ひ明るく聞いただけのこと
ヘルン旧居
根岸邸刻みをのんだこともきき　二柳子
蓮池へ今でも蔵のかげがさし　萬よし
蓮の葉が揺れるとこから妻をよび　かほる

松江旅吟

嫁ヶ島流れて来るのかと思い
気がつけば二人の前に出雲富士
丸髷で松江の宿に二日居る

和田見町には遊郭があり、

「松江大橋流れょが焼けょが
和田見通いは舟でする」

と民謡にもある。

(19)

本号からいよいよ従来の同人制度を廃して別項の如き新組織とすると同時に、紙質を変えて一大飛躍的増刷をなし、市内の各書店に配本を断行した。これは永い間の懸案であっただけに萬遺漏なく続けて行けるものと思っている。従来の同人組織を捨てたのは段々膨張してゆく社の事業の運行上に支障が多いからで、新制度は全く合名会社が株式会社になった形である。又社に対する全責任を自分が背負って立つ点から見れば個人商店の形である。此変態的新組織がどこまで続くかは疑問であるが、目下の処は尤もいいと信じて六月中旬に旧同人会議で合議の上決議したのである。旧同人は特別社友となり、賛助員及客員は本社の推薦によってお願いしたものである。

右は昭和2年8月号の路郎が書いた編集後記である。

それは組織の大改革といえるもので、創刊時から見れば、頁数は二倍以上、執筆陣の充実ぶりは、質量ともに数倍といえる程になったにもかかわらず、定価の一部三十銭は創刊当時からの据え置きだから、経済的負担は限界であったであろう。販売の促進とともに読者の義侠的援助への期待もあったと推測出来る。

賛助員は、池沢楽居・岡本一平・長崎柳秀・末広嚴太郎ら十三氏、客員には、西原柳雨・岡田三面子・川村花菱・吉岡烏平・武笠山椒・小出楢重・木村半文銭・柴谷柴舟・蛭子省二・森東魚ら十三氏で、特別社友の数は、新組織発表とともに新たに入社した人々と退社した人の均衡がとれて、元の同人数と略変化がなかった。辞めて行った人に、佐々木黙闇・塚崎松郎・石賀（のちの林田）馬行・黒木莢豆・井上刀三の五氏で、今年になってからも、

湯上りの母親の顔なつかしし　松　郎
元日からとは平凡な男かな　〃
薄情を一つ二つと指を繰り　〃
マリ投げをしている街を子と通り　〃

のような、センスあり温かみのあるやさしい句をものす

る創刊時からの同人塚崎松郎、そして、馬行・莢豆・刀三といえば、斬新な作品だけでなく、それぞれ一家言を持った論評を書き続けていて、若手三羽烏の趣があった三人だけに、まことに惜しまれてならない。

路郎は、作品において、また雑誌社の経営にも絶えず棘の道を歩き続けた。作品がいささかでも前衛化すると、「先生の句には従いて行けまへんな」との声がちらちらする。現在のように豊かで余裕のある時代ではなかったので、殊に地方では川柳誌一冊を売り捌く重みは大変なものであったのだ。私が昭和32年川柳雑誌社を訪ね、路郎先生に初めてお会いした当時は、「川柳は十七音字を基調とした批判詩である」との路郎と、「川柳は常識である」とする北川春巣との調和が均衡してスムーズな経営状態を呈していたようだ。後年、編集メンバーの事情で、河野春三を編集長に迎え、掲載内容が先鋭化した時期には、目に見えて経営は悪化した。今それを想起すれば、路郎は昭和2年の組織改更に際して、自分の指標とする斬新な詩性派と敢えて袂を分かち、常識派に歩み寄った気がする。後年の川柳職業人宣言の芽も此の頃からのものであったと思えるのだ。

この時期、きやり吟社主宰の村田鯛坊は周魚と改号する。剣花坊の川柳復興期以来多かった雅号の坊は、日車や周魚にならい姿を消して行ったのも時代の趨勢であったようだ。

(20)

発刊この方、川柳雑誌に毎号ではないが「川柳家の戸籍調べ」なる欄があり、(一)姓名 (二)雅号 (三)別号 (四)現住所 (五)生年月日 (六)職業 (七)好きな句 (八)好きなタイプの女 (九)自信のある句 (一〇)川柳以外の趣味 (一一)配偶者の有無 (一二)嫌いなもの (一三)川柳に手を染めた年月、などの項目を著名柳人がアンケート形式で回答している。百六十名を越した昭和三年新春特集号で石賀馬行氏が川柳家の年齢を整理発表しておられるので参考に記録しておく。

川柳家の年齢（昭和三年の数え年である）(六〇)久良岐 (五九)剣花坊 (五六)卯木 (五三)角恋坊 (五二)百樹、銀波楼、楓林 (五一)花蝶 (五〇)若蛙 (四九)春雨 (四八)濁水 (四七)五葉、突支坊（黙平）、

（四六）三休、〇丸（四五）虹衣、花菱、萬よし（四四）荷十、寛汀（四三）力好、兎絲子、利剣坊（四二）日車、省二、文銭（四一）路郎、義矢満、普天（四〇）半文銭、雅楽王、映絲、東魚、愚劣、半畳、光路（三九）紋太、渓花坊、美の作、濤明、悠々、京之助、丹三郎、輝翠、大夢子、左馬（三八）五花村、蚊象、余念坊、小阿弥、助六（三七）水府、久流美、一二、啞人、紫明、乾坤、山月、二柳子（緑雨）（三六）花童子、夢路、伍健、朝陽、葭乃（三五）松郎、彩霞、美江（三四）五呂八、志貴南、羊白、一休、鞍馬、古城山、子行（三三）廬穂、不二綱、飯山、夢遊、青葉冠、句三昧、ひろし、悟郎、秀花坊、史風、革郎（三二）右大臣、太郎丸、番翁、白蝶、佳鳴、雅幽、柳路、莢豆、叱咤郎、朱唇子（三一）かほる、屏三呂、眠声、駒人、博久、山雨楼、多聞（三〇）凡平、白鷗、光太楼、金鉄子（二九）夢二郎、眼隠子、長人、清公子、三笑、鮎美（二八）幸男、吐露楼、一閑子、憲翠、耕水、一路、柳人、彩秋、文絲、案山子、雪洞（二七）春三、刀三、町二、三三四、天花、十字路、露斗、双柳、千代二、馬行（二六）一文字、琴月、益男（二五）閑路、草木、冬青、天痴人（二四）霧太、枝呂、一吉、袈裟雄、椿薫（二三）東洋鬼（東洋樹）、波郎（二二）穂波、二南、随帖、しげる、ひで一、郊村（二一）静雲、一狂（竹二）（二〇）鎌月、手腕坊（一九）仙坊（一八）百々郎（一七）清宵。［今年は水府生誕百年］

右の名前の中で悟郎とあるは、川柳塔同人北山悟郎氏の父君、二南は現在復帰して活躍中の楊井二南氏である。このあと川上三太郎が百六十三番目に登場して、（一）川上三太郎（二）ナシ（三）ナシ（四）東京南品川四―四二（五）明治二十四年一月一日（六）ナシ（七）ナシ（八）ナシ（九）ナシ（一〇）ナシ（一一）有（一二）風景（一三）二十二三年前、とユニークな回答をしている。

本社新春句会は一月八日、日本橋倶楽部で開催、路郎、長崎柳秀博士、塚越迷亭氏ほか六十名の出席。新春号の編集後記は、

諒闇明け後の新春を賀し奉る。今年は辰の年で世間では景気がよくなると言っている。川柳雑誌も今年はウンと内容を充実し、我が主義主張を飽迄徹底せしむべく勇猛精進し、景気のよい話を諸君に聞かせたいと考えてい

ます。普通の一般雑誌でも廃刊休刊が続出する中に、我が川柳雑誌は大正十三年一月創刊以来満四ヶ年間一回の休刊も為さず云々

とあり、意気軒昂なる筆者は三好革郎氏。

表紙絵の「梅」は小出楢重画伯。

(21)

前号に続いて昭和三年の『川柳雑誌』新春号、路郎主幹は不朽洞雑筆を巻頭に書く。

〝近ごろ読んだもののなかで、アンリー・ファブルの「昆虫記」位私を感激させたものはない。電車の中でも、道を歩いていても、食事の合間でも私は呼吸をもつかずに読み耽った。スカラベサクレ（馬や牛や羊の糞を丸めて大きな弾丸をつくり、それを穴の中に運び、二週間も三週間もかかって食糧としている甲虫の一種）の生活そのものに驚かされたのは勿論であるが、その昆虫の異様な生活について研究を続けてゆくアンリー・ファブルの根強い態度には自ら頭が下がった。エドモン・ロスタンの言葉を籍りて言えば、「此の大科学者は哲学者のように考え、美術家のように見、そして詩人のように感じ且つ書いた」のである。――中略（路郎はファブルの苦労の事実を縷々述べた後）――私は最後に彼が、その著「昆虫記」の序文の冒頭に述べている言葉を紹介しなければならない。

「私は此の〝昆虫記〟の決定版を公にすることにきめなければならない。もう老衰して、力がなくなって目は弱り動くことも殆んど出来なくなって、何んの仕事の方法もなくなった私は、私の寿命がもっと長びくものと仮定したところで、今後此の書に更に何物かを付け加えることはとても出来ないと思う。」と言っている。彼は目も弱り、殆んど動くことの出来なくなるまで研究をつづけたのである。世界的博物学者のこの悲愴な言を読んだ時、川柳に精進する私は涙ぐまずにはいられなかった。〟

路郎の巻頭の文章のこのくだりを読むと、われわれはまるで路郎の終焉に酷似しているのを感じると共に、路郎の一冊の句集『旅人』の自序を思い起こさずにはいられない。

自序

エスペラントのために一生を捧げたザメンホフ博士は偉かった。ロシヤ文学の英訳に一生を捧げたマガレット夫人は偉らかった。くそ虫の研究に一生を捧げたアンリー・ファブルは偉らかった。何れも自分の夢を実現させた人達である。

そして川柳に一生を捧げた私は？　私は言うべき言葉を知らない。

川柳の社会化運動と、一冊のこの句集。

私にも多くの夢がある。私の一生はまだピリオドを打たれていない。せめてそれを力ぐさに、歩き続けよう。

一九五三年十一月三日

昭和三年から二十五年経過した年の自序であり、その後十二年を歩き続けた路郎はアンリー・ファブルのように、殆んど動くことの出来ぬまで川柳に身心を削ってこの世を去る。

私が川柳雑誌を購読しはじめたのは昭和三十年であるが、表紙に、

Pensoj flugas trans la land-limon という横文字が表示してあった。編集部へ入ったときにその意味を聞いたら、これはエスペラント語で、「芸術は国境を越えて飛ぶ」というのだと教えられた。ザメンホフ博士は偉かったと畏敬の念を抱いた路郎は、エスペラントにも造詣が深かったものと見える。私にも多くの夢があると自序に書いた路郎には私が聞いた、川柳雑誌社の東京進出だけではない、世界への飛翔を見据えて沸々と滾るものがあったに違いない。

(22)

路郎の新春の巻頭言は情熱で夢を追い続けた一生を垣間見せたが、この頃の『川柳雑誌』には古川柳研究、現代川柳の論評も多く、充実していた。中でも木村半文銭・椙元紋太・田中辰二氏らの筆に注目させられる。紋太の「雑詠目指して」の文章の結びは次の通り。

「そこで私はこう考える。私の句を完成せしめるまでは、圧搾も競技（この両者は題詠可とする句会主義）も嫌わない。私は不完全であるからあらゆる方法を以て私の句を磨き上げなくてはならない。それと同時に、自由な束縛のない自然を対象に、生きた世間の真っ只中にあ

るべき雑詠の世界に私の理想を描いて、真の私の生まれるべき処に一歩一歩進むべく努力を断たない。私の到達すべき処は真の雑詠の世界である。私がもし達し得た暁はもう句会もない、柳壇もない。いや句会も従いて来い。柳壇も随え、という事になるのだと考える。私は現在そう信じ切っているので此の頃の一歩一歩を確実に雑詠の世界を目指して進めているのである。」

私が椙元紋太の謦咳に接したのは昭和32年で、句会の数もこなされながら、「題詠の数を多く拵え、それを押し進めて行けば雑詠になるではないか」的な作句ぶりで融通無礙の境地であった。昭和37年病に倒れられた後も八年間の闘病であったが、作句は衰えず多作で私どもの小句報にも句を寄せられた。「雑詠目指して」を生涯通し続けられたわけで、雑詠、題詠一体の境地に至られたものである。

古川柳研究家田中辰二氏（柳号潮風）は、「川柳の本質」と題して、江戸の川柳を次のように捉えておられる。

「紫の花、紅の花が咲き匂うているところには紫の詩、紅の歌も流れよう。なごやかな天気の中に静かに息づくものに、いらだたしさ、悩ましさ、もどかしさは考えられない。明るい、けれども何処か軽い江戸の世界に、明るくしかも軽い川柳てう文学が数多い民衆の心から滲み出たことは考えようによっては当然すぎる程当然なことであった。」と書き出し、平安朝の貴族の生活、宗教、文学のありようと比較しながら、

「明るい軽い江戸の世界に生れた川柳が反逆的な芸術でないとしたら、その明るさ、軽さが川柳の大きな基調となっていることも考えられねばならぬ。明るさは光りの意ではなく暗さに対する明るさである。複雑さからシンプライズされ、幽鬱から救い出された平明さである。」

「此の淡さは川柳の上乗なものほどよく表れているが一つは江戸人の性情の反映である事を思わしめる。実際江戸人は一面に淡き心の所有者であってそれは少なくも禁欲の土台に築かれた武士道が、武士から遊女へ、遊女から町人へ流れたからでもあろう。通人とか粋人とかいった者ほど、ものに執着をもたなかった事はそうした径路を物語るような気がする。川柳は少なくともその傾向を代表する事が出来るほど淡い中に歌われているのである。」「川柳の軽さと前に述べたのは軽薄軽率の意味でなく、此の明るさの上に盛り上げられた軽快味の義である。

言わでは腹ふくるると思うことを率直にすっきり言い切ってしまって後に来る肩の凝らぬ快い感じである。」と。これは言葉遊びと韜晦な作品の増えて行く川柳界への今に新しい警告と受け取れるのだ。

(23)

路郎は昭和3年4月15日金沢川柳会主催の第5回川柳大会に出席する。同行は椙元紋太・庄萬よし・安井ひろし・川合舟々・赤城・橋本二柳子の諸氏。松任の聖興寺に千代女の墓を訪い、桜花の下の「月も見て我は此夜を可祝哉」の辞世の句碑に接する。兼六園の花吹雪と、桜の枝の短冊の句を風流人が持ち去るに任せるのを見ながら花見団子に舌鼓を打つ。大会では路郎は「作家の態度その他」と題して講演する。上手な句を作るよりも心のこもった句を心掛けることを強調、「一句を残せ」の名言は参会者に深い感銘を与えた。

懇親宴のあと、その夜は山中温泉へ。路郎・紋太・萬よし・二柳子の四人はよしのや旅館で男ばかりの家族風呂に浸り、湯の中でまで柳論を闘わす。しらじら明けまで酒と柳論のメートルを上げた。正午過ぎに朝昼兼用の食事を摂る。路郎は朝酒いや昼酒に陶然となりながら所望された画帳に一句を残す。

ししも打たずによしのやの昼

路郎は、この山中でこの句のほかに次の二句を成している。

湯もにごり話もにごる山中や

山にくや女にくやの昼深し

八月号の特集に「自信句と其の作句動機」というのがあり、川柳諸家40名が回答を寄せている。

現在の気持　松丘　町二

魂をぬくめる酒となりました

今までの私の句の多くはこしらえた句ばかりで、心から生れた句の少いのを恥じます。

自分の現在の気持のあるものを偽りなく言っている点で、強いて挙げればこの句でしょうか。

句の調子に苦心　渡辺桃太郎

石一つ落して亀は這い上り

句の調子に苦心する私として、自惚れているうちの一つです。写生吟であれば別に動機は言うまでもなし。

車中吟　岸本　水府

電柱は都へつゞくなつかしさ

名古屋から帰りの汽車中、関ケ原あたりで大阪を思い、ふと浮んだ句です。

足りない人　酒井　駒人

間もなく博多へ行く車中、篠山吟葉氏に句を乞われてそれを書きましたため、同氏のあるところへ発表された日記には、山陽線で作ったように見えています。

母だけが俺を人間らしくする

丁髷気分を愛す　堀口　塊人

一昨年の夏、柳路兄と共に剣花坊氏を訪問した時、「足りない人」という題が出たので作ったのです。別に動機はありません。

ひとり寝の枕の向きをかえてみる

暴君の出現　小林不浪人

自信というよりも好きな句に候。野生は古風なる人間にて、近代的刺激の強い句は作り得ず、丁髷気分を愛し居り候。

汽車の音蛙をみんな黙らせる

動機、若くして死んだ柳友今せい魚君の追悼句会の晩の事、蛙の声を聴きながら頬杖をついたままセンチメンタル不浪人になりすましていた折しも夜行列車が闇のすべてを圧して通る。蛙の音がハタと聞えなくなる。世の中には大抵の場合に此の夜汽車の如き暴君が出現して、すべてのものを圧迫し去るものあるを、つくづく考えているうち、又しても蛙の音が聞えて来た。

(24)

この号（昭和8年8月）の編集後記に「路郎主幹は晩春以来神経衰弱で弱って居られます。回春を祈って止みません。」とあり、9月号には「路郎先生は遂に神経衰弱が重くなられ、8月17日夜、月評会に出席されながら評をされず北海道に旅立たれてしまった。北海道の清涼な空気と暖かい人情は必ずや先生の病魔を退治して下さるものと期待している」とあるので、路郎の神経衰弱を追ってみた。

「半文銭君に与う」と題する三好革郎の文章の一節に、〝君は路郎君は「川柳雑誌の刊行と共に殆ど愚雑な連中を糾合した結果、経済的に妥協して遂に自分の芸術の

路を失うに到った」と書いているが、こんなことは友人として君の口からは世間に発表出来ることかどうかと思う。

路郎君は僕の見るところでは決して経済的に妥協もしていなければ芸術の路を失ってもいないと思う。川柳雑誌の本年1月号の「近作」に、

党のため海鼠になったおそろしさ
俺は彼を莫迦にしてやろう

同川柳雑誌3月号の「ロンドンの一周忌に」

お父さんはやはり川柳々々云ってるよ
お父さんの神経衰弱がわかるかい
信心をはじめたおッ母さんも可哀そうだ

などを読んでどこに経済的にも芸術的にも妥協した跡が見えるのか〃

とあるのは、経済と芸術とのジレンマである。

北海道の路郎は、函館の亀井花童子居に滞在して、札幌・小樽・函館を見物、石川啄木の碑に詣でたり、氷原社の柳人たちと交歓したりで、一時は病苦を忘れる。二十日には折から来函の川上三太郎・河柳雨吉の両氏に札幌の尾山夜半杖氏ともども渡島川柳社主催の歓迎会に臨み、

踏みならせば板に悲しみのみ残り　（板）
凡人のただ見れば泡がつぶやきぬ　（泡）
虫よ虫よ僕も一緒に鳴いてやろ　（虫）
虫をおそるる妻の美し　〃
半分は酒に消えたり君と僕　（半分）
奥様一人天井が鳴る　（天井）

などの句を残している。この時の出会いで、「静養中の僕の代りに何か書け」と依頼された三太郎が、「僕には到底路郎氏の代理をする資格はないが、留守番なら出来る」と、前田雀郎・河柳雨吉を誘って、水無瀬三吟ならぬ志保原三吟、連句を巻くなど、10月11月号の『川柳雑誌』へ原稿の応援をして友情の敦さを示す。路郎は、

「人間四十一、これからであると思っている僕も、去年はチブスで殆ど死にかかり、本年2月には大腸加答児で自ら起つあたわざるを思い、同志に川柳雑誌の将来について語る程の弱り方であったが、いつの程にか出勤が出来るまでになっていたが、亡きロンドンの一周忌頃から憂鬱性に陥り、遂に強度の神経衰弱となり、俗務の圧倒と過度の読書と自己の生存をさえ否定するまでの心境

に到達した。

たまたま花童子氏から来遊せずやとの手紙を入手し、何ら顧慮する余地なく漂然として旅に出てしまった。（中略）あこがれの北海の地で多くの柳友にいろいろとご迷惑をかけました。いずれ印象記をぼつぼつ書くつもりです。が、医者から筆を採ること、読書することを禁じられています。好きな酒や煙草にさえ遂々別れを告げました。（後略）」

と、その重症ぶりを書いている。

(25)

前号で紹介した志保原三吟は珍しいので記録しておく。発句から揚句まで川上三太郎が進行解説しているがそれは省略、無論のこと酒盃を手にしての興行である。

ギヤマンの切子に映る昼さがり　雨吉
ケレオソート（ママ）の匂うからたち　雀郎
古り住んで朝な夕なの溝の色　同
五月の庭の月を忘れる　同
遠出髷青葉に染まるこころもち　雨吉
亭主に似せる女房の筆　雀郎
或る時は音一つせぬ新世帯　同
除隊の靴の黴びる下駄箱　三太郎
常夏の花にも見える暮し向き　雀郎
水打つほどの日を余しけり　同
これやこの襟足で売る一ト盛り　三太郎
隅田の春のみんな風ひく　雀郎
河郎の夢も流れんおぼろ月　同
橋ばかりなる雨の深川　雨吉
お祭りが済むとそろそろ棚を吊り　雀郎
嵐の庭にこうろぎを聞く　同

久保田万太郎とも親交のあった雀郎らしく俳諧味を駆使して半ば以上をこなしている。

路郎も気力をふるい立て月評会に出ている。中でも紋太との対話、客観句と主観句に関しての発言が興味深い。

紋太――僕はいつも路郎氏の句を見て（僕もこういう気持で句を作りたいと願っているものであるが）それを強めて行くと、しらずしらずに俳趣味と同じ様な立場に外れて行くのではないかという感じがするのである。

路郎――僕自身では自分の句は決して俳趣味に動きつ

つあるとは思っていないんですが。

紋太――句に表れたそのものが俳趣味だと言うのではなく、句を作る態度に僕の思う俳趣味があると思う。川柳には何処となしに独りで物を感じたり、物を眺めたりするという感じが薄く、俳句の方では他の人間は居らずに、自分一人が存在している様な心持で物を感じたり、物を見たりする様な気持があると思う。それで僕は詳しくは知らぬが、とに角詩に近づくほど川柳が良くなるとは思うけれど、それに近づこうとすれば、勢い今言った孤立な心持に進まねばならぬ様な気持がして私の好きな川柳の味わいに遠のく様な気がしてそこに始終悩みを感じているのである。

路郎――今のお話はよく分りました。つまり紋太さんの御意見では従来の川柳が主として客観的に詠まれている。それにも拘わらず僕の句には主観的な句が多いという所からそうした御意見が生れたのであろうと思います。主観句や主観がかった句というものは、下手に作れば必ず自分にしか分らない句、所謂小主観の句又はそれに近い句に堕ち易い弊があるから、私も出来得る限りその弊に陥らない様に十分気をつけて主観の句や主観がかった句を発表しているのである。で自分の思想、自分の心の動き方、そういうものを詠んで、その中から第三者に共鳴して貰いたい。しかも、それには人生に深く触れるものがなければならないというのが私の句の行き方です。尤もそのために私が客観句を全然排しているのではないが、私の句には主観の句が多い。そして興味中心的な句が減ったために可成り作句数が減って来た。これも止むを得ない事だと思っている。拙吟を例に私の説を補いたい。今年の八月号に「生の疼き」と題し、

子よ妻よばらばらになれば浄土なり
戯れに死ねればこころやすからん
わがままを父特権と思いいず
俺の子というのがあっておそろしく

というように句の表面から見れば、甚だ平淡な句であるけれど自分の真情を川柳の形式によって表わした詩として、多少の深味を持っている句だと考えている。同時にそれらの句を読んだ第三者が直接又は間接に可成り親しみを持って、それらの句を批評して下さったことを考えると、決して第三者に自分が深く感じた事がそのまま伝わらないことは決してないという確信を持っている。人

生は誠に短いのでその間にあって、単に客観的な穿ち句や写生句ばかり詠んで自分の心の動き方や自分の思想というものが稀薄にしか伝えられないという事は、詩としてどうかと考えられる。それが為に私はこうした態度に歩み出しているので、決して第三者に強いる訳でないが、私と同じ様な感じを呼び起こされた方があるならば、私と同じ道を歩いて頂きたいと思うのである。紋太氏の主張されている客観句、殊に紋太氏の句に就いては常に敬服をして拝見して居りますが、私は先程から申しました様な意見の下に進んでいるのですから、その点をご諒解の上でご批判なり或いは鞭撻なりをして頂きたいと思います。

素人（岩本）――今のお話を聞いていて三つの事が思い浮かんで来ました。（第一）は紋太氏は詩に近づけば云々と言われたが、紋太氏は沢山な詩を作って居られる。紋太氏は詩を余りに狭義に解釈して居られるのではないかと思う。（第二）主観がかった句、客観がかった句はあるであろうが、主観を全然はなれて句は成り立たないと思う。句として相当なものであれば単なるスケッチと第三者から見えるものでも作者は可成りな興味を持って見ている場合が少なくないと思う。（第三）人間が詩を作るのは発表せんが為に作るのではなく、作った句を第三者に示すということは第二義的なことである。路郎氏が真剣なものは誰かが見てくれるということは事実であり、真理であろうが、誰かに見せる為に句を作るということはいけないと思う。第三者に理解せしめんが為に句を作るという態度は行き方が顛倒していると思う。

路郎――素人氏のいわれた（第一）は同感です。（第二）は言うまでもないことです。（第三）は素人氏の意見は少し極端に走っていて人間欲を無視した意見だと思う。純理論から行けばそうあるべきであるが、人間が死んで墓を残し、死に先立って葬式を出す人さえある世の中である。若し発表をしなくてもよいものならば、或は第三者の共鳴を得なくても良いものならば、我々が野に立って夕陽をリズミカルに嘆美し、或は大いなる詠嘆の裡に或る至情を礼賛すれば足ると思う。然しこれは人間の持つ欲望とは相容れないものである。そこに発表欲が生じて或は川柳となり或は他の詩型を借りて、その真情を吐露するのである。そう私は考えている。

右の月評会の路郎の発言から、雑詠と課題吟、主観句

と客観句の軽重を計る作家意識が、長男ロンドンさんの死に会って以来、「いのちある句」とはの命題が、雑詠と主観句にありと、いよいよ確信を得たように推察する。

この年の十一月五日夜、日本橋倶楽部で、川柳雑誌社各支部連合の御大典奉祝句会が催され、七十八名が参会、路郎は次の句を詠む。

病んでいる身にもかどまで出て祝い

十二月の編集後記に、「私は毎日遊んでいる。しかしいつまでも遊んでいられない。目下働くべく考えに耽っている。同時に雑誌の方へも新年号には是非何か書きたいと思っている。そうすることが僕を買うてくれる人々への第一の義務だと思う。」と書いた路郎は、新年号に「船出」と題して再出発を期す。

貧しさのながながしくも四十一
風すこしあれど船出の四十一

昭和四年の新春であった。

(26)

この号に「誌友制を設く」の広告あり。

〝川柳雑誌も満五年を迎え益々読者の増加してゆく事は欣快の至りです。今回誌友制を設け、川柳雑誌半ヶ年誌代前金壱円八十銭以上拂込読者を誌友となし、本社との関係をより密接に致したいと存じ、その芳名をここに掲載する事に致します。何卒新読者をこの際御勧誘下さる様お願い申します。〟

とあり、新誌友名に前田伍健氏はじめ十四名が発表になっている。

川柳塔（同人作品欄）への出句者34名。

きびだんごこれも生きとし生きる道　矢田　冷刀
シューマイの上に梅蘭芳の額　岩崎　柳路
笑わせて去んだ心を知らずして　川合　舟々
竹馬を屋根へ凭せて芋の味　住田　乱耽
外套を腕にかかえし反逆児　〃
よく動く眼を持っている賢夫人　松丘　町二
帰る日か見渡す限り青い空　長崎　柳秀

の句に注目する。近作柳樽（誌友作品欄）は百名近い投句者あり、緑之助・東洋鬼・豆秋・言也・太路・萬楽ら、後に高名の作者名あるも、感銘を与える句は少ない。

光耀抄（女性の作品欄）は8名の出句。

闇の中夜具のうつろを引っ被り　　井上　信子
アンテナをはずしつつましやかに住み　麻生　葭乃

の句がある。

路郎先生は、2月10日から道後二泊の旅をされた。松山支部発会記念句会に出席のためで、橋本二柳子・岩本素人両氏が随行する。句会も宴会も盛会裡に終り、三人は翌12日今治港から別府へ足を伸ばす。別府支部を表敬訪問のためである。

13日別府からの帰途、菫丸でアクシデントあり。先生一行に隣していた青年が大分港を出て間もなく投身自殺をする。岩本素人氏が「先生でなくてよかった」と言う。船内しばらくはその話題で持ちきりであったのは当然であろう。上陸近くなったところで二柳子氏の靴が変っているのに気付く。大きさも色もそっくりなのだが、靴紐の手触りで分かったのである。取調べたところ、自殺した青年の靴と変ったらしい。青年の靴は遺留品として今治警察署へ届けたという。それが二柳子氏の靴であるのだ。それで二柳子氏は家まで幽霊の靴を履いて帰られた。

松山・別府への旅での路郎先生の句は、

道後にて　二句

漱石に子規に道後の湯はあつし
丹前は坊っちゃん団子のぞきこみ
　緑丸にて別府に向う
船を忘れるほど人妻の帯赤く
　旅　愁
遠く来てあらしの窓に子を思い
　地獄廻り
亀の井はまたも楽土へ引きもどし
　松山支部句会での軸吟（年頃）
年頃は桜の咲いた様に生き
　別府支部句会での軸吟（嵐）
よく考えることにして寝る嵐の夜

この月、旅吟だけではなく左の二句を詠む路郎なのであった。

　ロンドンを懐う（二句）
三周忌今はつかわぬ硯石
ロンドンが帰って来るか身重也

逆縁の悲嘆は薄らぐこともないようで、親子の至情を引きずりながら路郎の旅は続く。

(27)

路郎は昭和4年1月号から三回に分けて、「前後左右」と題し所感を述べる。

〝若い時には若い女に、年を老っても若い女に魅力を感ずるのが、異性が異性を愛する常識かも知れないが、近頃の私はどんな女を見てもどっかに美しさを発見し、かつ感ずる。これはあながち年の加減でもなさそうだ。〟と、女性観察の子細に触れたあと、選者の要諦を次にように説く。

〝川柳の作家もそうである。その作家の句風を静かに見ていればどっかに長所を持っているものである。その長所をのばすことが選者のなすべきことのすべてでなければならぬ。それには随分と骨が折れる。眠っている作家は、先ずその眠りから覚ましてかからねばならぬ。模放作家には、その句が模放句であることを自ら悟るようにしむけなければならぬ。君の句は模放だから駄目だと頭からしりぞけてしまっては、その作家は永久に埒外に去ってしまう。先輩の句に憧憬するところに模放がはじまる。これは川柳を学ばんとするものにとって決して悪いことではないが、その模放から一歩抜け出る所にその作家の生死が決定されるのであるから一時的の模放が容さるべきことであるにしても、作家自身そうした点に思いをいたさなければならない。選者もまたそうした点に心してかからなければならない。これでいいのだという安心を作家に与えてはならない。若しそうした安心を作家に与える選者があるとすれば、その選者は作家を殺すことになる。又、巧い句を作ろうとして腐心した結果、文字そのもの、言葉そのものに支配されてしまって心の扱い方を忘れていたならば、決していい収穫があろう筈がない。作家の心すべき点もそこにあるが、選者の選句に定見がなく、作家の心を見るの明を欠くならば、勢い作家を混沌たる世界へと追いやってしまうものである。一句抜けた、嬉しい。二句抜けた、嬉しい。二句抜けるより三句抜ける方が更に愉快であるという、そうした投句家心理を私も知らぬではない。が、そうした選がいつまで作家自身の侮蔑を買わずにいるであろうかを思わざるを得ないのである。私自身は常にそう考えているのであるから血の気のない句が何句抜けたところで、それが

何のたしになるであろうということに、作家自身が、もう少し気付いてほしいのである。私自身はすべての女に美しさを発見、かつ感ずると同様にすべての作家に対して、その美点を発見することに努力を惜しまないのであるから、作家自身も、そうした真摯な態度で作句を続けてもらいたい。〟と。

また、川柳家は、芸術的進化を努めねばならぬことを強調する。

保守派のグループは、その作品において What to say ということについて単に変化のみをねらい、進化ということに頭を費やしていない。（中略、保守革新ともに、自己の作品に陶酔する人が多数で、それが悲しい存在であることに気付かずにいる）新しい川柳系に属する人も、What to say の問題に煩わされ、How to express の問題を全く忘れている作家がある。What to say と How to express ということは短詩人として最後まで悩みぬかねばならぬ問題である。この二つながらに円熟に近い所まで進展する作家が出現するとすればけだし天才であると言わなければならない。（筆者註、エクスプレスはエクスプレッション、表現、発想、措辞の意）

(28)

新春の大阪朝日に連載された坂田名人の将棋哲学の中にも、勝とう勝とうと思うと堅くなってしまって負けるが、勝敗を問題外において、瓢箪から出た駒のように心をフワリとさせて打てば天来の妙手が出る。これは坂田自身の考えではない。天から来る妙手であるということを述べていられたように思う。我等の川柳にしても、巧い句を作ってやろうのたれそれに負けないような句を作ってやろうのという時代はまだまだと言わねばならない。

坂田氏の言うフワリとした心で天来の妙句を詠出する心掛けが常になくてはならぬ。自分としての一句を遺し得る精進さえしていれば、それ以上のくだらぬことに頭を費やす必要は更にあるまいと思う。

仮想敵や目標を他の柳友に求めても誰よりも巧い句を作ろうの、誰よりも発表句数を多くしたいのと考えるようでは、真にすぐれた川柳家になれない。昔からほんとに偉い人はたった一人で立派な作品を残している。むしろ大自然の懐に抱かれて自己の芸術をはぐくんだ人が多

い。良寛上人のように、自然を友としたり、子どもを相手に邪心なき生活をしていて、その芸術生活を完成している。

「近作柳樽」や「光耀抄」や「川柳塔」をひろげて見ていると、どの作家にも個性がかなりよく出ていて、その作家と親しく膝を交えて語り合っているような気がする。なんと言っても体験から生れた句には力強さがある。生命がある。ハリがある。読んでいて、すがすがしいものをうけとることが出来る。頭でこねあげた句を見ていると、巧い句だ面白い句だと思いながらも、どこかにその作家の機智が顔を出して来るので、一時はひきつけられても繰り返して読んでいるとどっかに嫌味が浮き出して来て、もう沢山だという気になって投げ出してしまう。しかし尊い体験が生んだ句は光る。裏箔のように底で光るから再読三読しても飽きが来ない。単に飽きないだけではない。作家と同じ心境にまで私達の心をひきずってゆく。

路郎は以上のように、選者、指導者の心掛けるべきこと、作者としての作句の心得を述べる。これらは今に新しい。

ここで肩をほぐす意味で、路郎の書く編集後記を覗いてみる。

▼春だ踊だと世間は騒がしいが、僕にとってはなやましい春だ。仕事の洪水は二月から三月へ三月から四月へと氾濫を続けている。机上は議会のそれよりも混乱している。いつ片付くことか。

▼三日に金熊寺吟行があったが行楽を共にすることが出来なかった。四日は疲れて寝込んでしまい、五日の句会には出たが、その夜遅く帰るとお産騒ぎ、六日の朝に三男「一歩」が生れた。そして私は独身者のように、二階で埃りまみれになっている。

これは四月号の後記だから、一歩（愛称ボーちゃん）さんの誕生は三月六日である。

▼花が咲いた。花見電車が衝突した。花が散った。もうそろそろ新緑がいいなどと聞かされるばかり。これが此の頃の私。花といえば向いの庭にたった一本八重が咲いているのを、それも散る二三日前にふと気づいたに過ぎなかった。

▼春はなやましい。原稿紙の上をすべる万年筆の音さえなやましい。春よ早く逝け逝け。

これは五月号の編集後記である。

(29)

一行詩これが私の墓だとは

昭和三十七年八月号に掲載の作品である。路郎はこの年、七月二十日から二十七日まで東奥日報社主催の第十六回青森県川柳大会に出席、青森・仙台・東京各地の柳人と交歓、

十和田湖よみな酒になれ旅人へ

の旅吟を得、九月号に発表している。この十日間の旅には藤村メ女さんと私が随行した。

路郎先生が青森を経て函館へ渡られた最初は昭和三年で、翌年に「私の墓」と題する文章を書かれた。これを冒頭の句に結びつけると私は心が痛む。以下はその一節である。

「昨年の夏、函館に遊んだ時、花童子の案内で歌人石川啄木の碑を訪れた。碑は立待岬の共同墓地で、すぐ海に臨んだところにあったが、その碑が予想以上に立派であったのに驚かされた。東海の渡島ヶ磯で泣きながら蟹と戯れていた貧乏詩人の啄木の碑としては、頗るふさわしくないほどに、堂々とした碑であった。『私が死んだら』と私は花童子に言った。『私の碑は余り立派なものでなくていい。寧ろ墓は淋しい位がいいと思う。ただこの立待岬の尖端に建てられたら建ててほしい』と言った。『尤もこれは一つの空想に過ぎないが、人間の空想は時に実現せないものでもない。空想さえせぬことが実現することさえあるのだ。おそらく啄木もこんな立派な碑がこんなところに建つとは夢にすら見なかっただろうと思う』というようなことを話した。

花童子も『僕が出来たら建ててあげるよ』と慰め顔に言ってくれた。私は死んでからのいい落ちつき場所が出来たように思った。それは八月十九日の美しく輝いた日だった。啄木の碑は岬の尖端から二丁ばかりの手前にあったが、それから更に二丁ばかり手前に自然石の手ごろの墓があった。私はそれを指さして『墓はこの位でいいね。あまり堂々とした墓は、しんみりとしたものを持たないからいやだ。これ位な墓なら知らぬ人の墓でも何だか談しかけたいような気がする』と言うと、花童子は、その墓の碑面を眺めて、『これは若原鎮吉の墓だよ』と、

彼も不思議なところで不思議なものを見たように言った。『若原鎮吉というと？』『鎮吉は新聞記者で、川柳もやっていたが若くして死んだのだ』『そうかね。そういえば川柳家に鎮吉という名があったような気がする』ここで花童子と私とは暫くいろんなことを談し合った。」

このあと、若くして死んだ小島六厘坊の墓のないことは寂しく、何かの機会に何処かへ建ててやりたい、と述懐しておられる。ロンドンさんを亡くされたあとの神経衰弱症を癒しに海を渡った函館での路郎先生の心が手に取るように見える。そして、啄木は二つ三つ年上であるけれど、同じ明治を短詩型文学に生きた詩人として普通ではない親近感を抱いておられたようだ。（啄木は明治45年死去）

さて、路郎の墓であるが、尾道の福善寺に麻生家の墓を見付けた盲詩人藤村亜鈍氏と私の思い出も今に印象深いが、その後移転になった。墓の代りに先生の句碑をと、中島生々庵前主幹時代から、尾道市と屢々折衝を続けたが実現せず、句碑は西尾栞主幹の代になってから大阪の阿倍野神社に建った。

夕ざくらとんぼ返りがしてみたし

また、高野山霊園には、〝川柳塔〟なる立派な碑と、「川柳は人間陶冶の詩である」の碑文が刻まれてわれわれを見守っている。

(30)

路郎先生がたくさんの作品の中で、ご自身一番気に入っていると仰言っていた、

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

は、昭和4年8月号の掲載であったことは以前にも述べたが（当時は畳一でふと表記）、同じ号に発表の次の句、

何事も忘れようとて蠅たたく

も路郎の心情の深く表出された句と受け取れる。八月十日夕、四宮神社社務所で大正四年の夏、須磨浦海岸で溺死した藤村青明の忌が川柳雑誌社神戸支部主催で営まれて、神戸の椙元紋太・鈴木九葉・大山一狂（後の竹二）・三条東洋鬼（後の東洋樹）らの顔も揃い、故人を偲んだ。編集後記に、「十日に神戸支部主催で青明忌を修した。例によって多数の参会者があった。私も出かけた。本社からはひろし君が出掛けていた。紋太君が〝神

戸と青明〟という話をしてくれた。自分も〝青明の事ども〟という話をした。この日に私の近業である〝川柳漫談〟が世に出た。青明忌に私の著が出るというのも何かの因縁があるような気がした。名古屋へ出張するという山雨楼君が出席していたなどもうれしかった。」と路郎は書いている。

ここに出てくる麻生路郎著『川柳漫談』は私の手元にあるが、奥付には昭和四年八月一日発行とあり、発行所は弘文社で定価一円五十銭。週刊朝日や大阪日日新聞に掲載された随筆集で、川柳をふんだんに取り入れたもの。その一章を紹介したい。

指　切

「柳樽」の初篇の中に指切を詠んだ句が三句あるが、三句とも佳い句である。

　指の無い尼を笑へば笑ふのみ

というのがその一つである。

戸外はこがらしが吹きすさんでいる。比丘尼と二人火桶を圍んで、いろんな物語に耽っているうちに、ふと尼さんの指が一本短いことを知った。浄い生活、寂しい生活とのみ思っていたこの尼さんの過去にも華やかな夢があったことを知った。彼は微笑をふくんで尼さんの顔を見た。尼さんの頬には常ならぬ紅がさしのぼった。

けれども尼さんは、その過ぎ去った経緯については談そうとはしないで、眼で寂しく笑ったばかりである。彼の頭には指まで切って心中立したこの美しい尼さんのローマンスが渦を巻いた。吉原を出て尼の生活に入るまでの波瀾重畳は尼さんのみが知る神秘としてのこされるであろう。

　ゆびを切るも実は苦肉のはかりごと

　指を切るからは九品の浄土まで

が他の二つである。何れも表現の巧みなこと後人の範とするに足るであろう。

遊女を傾城とよんだところから、実は苦肉のはかりごとというような言葉が、ひとしお興味を唆るのであろうと思う。

「妾はあなたより外には決して情人はもたない」と、もたれかかっただけでは男の心をほんとに捉えることが出来ないので、色と欲との二ヶ道を満足させるためには苦肉の策として、指を切ってまで情人への歓心を買うことを諷したのである。勿論そうした遊女のなかには、欲

の一ト筋で突きすすんだもの、早く苦界を遁れ出たいための一策として指切を択んだ遊女もあったであろう。お軽が売られて行くとき、母親が「髪は切っても、必ず指など切ってたもんなや。」といましめるのも勘平という人があったからであろう。

「指を切るからは九品の浄土まで」からは上品な句振りを学ばなければならない。一本切るから九本だというような解釈は狂句的な観方で、この句をそういう目で観ては全く台なしである。

先年、照葉が情人乙宗さんのため指を切って一躍天下に名妓？　としての嬌名をはせたのも、これ等先輩の古智に学んだだけである。この照葉が宗右衛門町に出ていた頃は、遊二郎の養女だった。指を切ってハンカチに包んでいた照葉は、尼になろうともせず、最初の情人とも添わず、一人の男から他の男へ移って行った。昨年道頓堀でテルハ酒場（バー）を開いていたが、それも一時の夢にすぎなかった。

こうして昔も今も指を切るが、指を切って情人に心中立をすることは、いつの頃からはじまったものであるのか、今詳しいことを知るよしもないが、徳川時代の産物であることだけはこれ等の句によってもわかろう。

全体指を切るのは赤誠を示すための意思表示で、必ずしも遊女の専売ではない。大阪へ始めて貯蓄銀行を創設した外山修造も指を切った一人で、これは女を口説くための手段ではなく、東都遊学を両親がどうしてもゆるしてくれぬので、一夜ひそかに小指を切り血判の書置を遺して越後の一寒村、小貫村をあとにしたのであった。

この外、こどもなどが固い約束を誓う時、指切というのを行うが、これは別に血を見るわけではない。

少し長過ぎる引用ではあるが、古川柳の的確な鑑賞と、句にからませた現代の事実を興味深く展開させて一気に読ませる。他に「臍の緒」「蛙」「君も僕も死ぬ話」「鼠」「女の三十」等々、表題からも漫談的雰囲気が窺える。「一ト昔前の大阪見物」も面白く、

泳いでるように人形は這入る也

と文楽での写実の妙を見せられる。

路郎先生の8月以後その年後半の句、

みな呑んでるぞビールが散るぞ　夏

蚊帳の中で泳いで見せるお父さん

子等の浴衣のつんつるてんになれなれ

食うべくもないのに被てる絽の羽織
乳の出る機械に母はなっている
秋さらり銀の襖のものおもい

この句掲載は10月号で、編集後記に、

「秋が来た。句の秋が来た。思索の秋が来た。川柳詩人よ。大きく呼吸せよ。」とある。

思索をせよ、さすれば深い句が出来るであろう。大きく呼吸せよ、さすれば大らかな句が生れるだろう、と叱咤されているように感じられる。

嘘をまろめて書斎けうとし
その日ぐらしも軒に雀がこぼるるよ
A[2]のB[2]のと娘の子
肺であることなぜ隠したりするんです
泣きごとは止せ止せどうせ十二月

これらは雑詠であるが、句会の課題吟は、

人妻の襷を外すその早さ
證文は要らぬしっかりやりたまえ
戯れについても淋し鐘の巾
障子さえ聞きつらい程叱って居
鼻の偉大さ山脈を思わされ
淋しさは父の大きな鼻とねる

こうして路郎は『川柳雑誌』七歳の新春、昭和五年を迎えるのである。

(31)

昭和5年の『川柳雑誌新春特別号』は京阪神支部の連合句会が日本橋倶楽部で開かれ、百七名の出席者で賑わったことを報じている。

新春句会は東京の前田雀郎氏を迎え、雀郎は〝素〟と題し、水府と路郎はそれぞれ〝広告と川柳〟〝銀バスの如く〟の題で講演し好評だった。同人や一般投句者も増え、著名人の原稿も山積みして、路郎の書く編集後記は、

「発展から発展へのプロセスをひた押しに進んでいる。我等川柳人の熱と力が如何に旺盛であるかを見ることが出来て愉快この上なし」と意気軒昂だ。第七巻の春を迎えたことに因んで、社関係の四十三名から〝六七歳の頃の思い出〟を特集、路郎自ら〝島の子〟と題する小文を書く。

「私は広島県の尾道で生まれ、生まれて間もなく瀬戸

内海の周囲六七里の島にあずけられ、そこで大きくなったのでした。七つの時に生家に帰されましたが、どうしても帰るのがいやだと言って、泣いて泣き止みませんでした。今、萩の茶屋にいる兄が私を背負って海岸の夕べを歩き回っていましたが、どうしても泣き止みません。とうとう閉口して再び里へやられました。その後も小学校へやる関係上、帰すことに骨折ったらしいが、八歳の時に、島の小学校へ通いはじめました。そんなごてごてのために私は小学校で「アイウエオ」を習わず、「いろは」も「をわかよたれ」のところから習いはじめました。こうした行き方がその後の私の生活について回りました。

少年にかがやくは鯛か海の国」

路郎は句集『旅人』のはしがきで、

「私の句はどちらかと言えば淋しい句が多い。私の性格がそうであり、私の歩んだ道が嶮しかったからでもあろう。要するに私は川柳によって人間愛を求めてやまなかった。」

と言っているのも、生後間もなく母と死別した境遇によるものと思える。この句に接し、私は水府の有名な句、「熊野灘鯨が見える母の背」と相通じるものがあるように思える。

前田雀郎の新春句会での講演の要旨は、

「川柳とは何ぞや」という疑問を白紙から考えようと言うものだ。川柳の持つ風流は、川柳翁出現以前の「武玉川」をも疑いなく川柳として語っているのだから、前句付の向うにある俳諧から拠って来たものであると考える。

俳諧といえば直ちに芭蕉を思い、さびとか風雅でなければ俳諧でないように考えるようだが、芭蕉の風流以外にも、「まこと」を思想とする鬼貫や、「自由」を思想とする西鶴の風流が厳然と存在した。多くの俳人が芭蕉の模倣に明け暮れているところへ、個性的な一茶がひょっこりと素の風流を抱いて飛び出して来たまでのことと言えば、素の風流とはどのようなものか判断がつくのではないか。川柳人も川柳は江戸のものだからとか、皮肉なもの、通ぶったものだというので粋がったりしないで、もっと素にかえって句をつくろうではないか。これは川柳だとか、いや俳句だとかいうようなケジメを言わず、真面目の俳諧にかえり「素」の風流に遊びたい。そうすれば川柳は行き詰りなどを招かず、いつも新しく、その

世界はいよいよ開けて来ようと考える。（昭和5年1月5日）

この月、橋本二柳子は突然に緑雨と改号する。あまりに急なので、口癖になっている編集部の連中は呼ぶのに困り、二柳子の緑雨君と当分は弱らされたと。

(32)

あの眼の中で男討死
出は出たが一人はさびし松の内
ひとりいればひとりは限りなくさびし
名をすてて十七八の恋もせん
だらしなさにいっそ死のうかたれとしの（ママ）
愚かにも顔見にゆけば雪になる
人妻よ不惑とはかなしくもあるかな
撞球（たま）よころべこころを吸うてころびゆけ（ママ）
金は無くとも金は無くとも君と俺
資本家はキャラクターまで買いたがり
妾となって奪るも戦術
機械の一部それが人間なんだとさ
夕桜とんぼがえりがしてみたし
気違いじみた夫をまもり老けている
ちんぽこを出す子よママちゃんお留守なの
悪運つきず資本家の端
暴力はよしキリストも殺される

句会の題詠

獣人にあわただしきは春の雲
君の酒はいいと言われて松の内
その話酒になったで言い出さず
てにをはのあわぬ悔みとなりにけり
けふの父は聞いてくれそうにも思え
神経衰弱の死でないことを書いて置く
もう泣かぬことを手紙の端に書き
とは言うものの金に頭を下げた人
間違ってお世辞を言えばキョトンとし
しめきってする旅のそろばん
他人らしくしたというのがもめのもと
運を待つように此の頃働かず
女中ではございませんと言いたそう
女中には桜は咲いて散るばかり

凡人にいっちうれしい桜咲く
このごろはあっちにいると大きく出
青空に芸者を連れた莫迦らしさ

以上が路郎の六月号までの作品の抜粋だが四月号の編集後記の一部を拾うてみると、

◇前号の最終の校正の日（二月二十七日）印刷所へ行ったら、来られないというひろし君（安井）が顔を出していた。「妻君が悪いそうだがどうかね」と言ったら、「今朝は七度に下りました」「まあ早く帰ってくれたまえ、今日は僕が一日居るから」「誰も来ないかと思って来たんです」「まあお大事に」「エエありがとう」。こんな会話をしていた位だからまさか欣女が亡くなろうなどとは夢にも思わなかった。欣女は翌二十八日の午前四時に清らかな眠りについたのであった。電報によって私も飛んで行った。葭乃も出かけた。葬儀は三月一日にキリスト教会で行われた。

◇乱耽君が商大の高商部を出た。一人位後ろにいるかと思ったら二百五十七人の一番ビリでしたと語っていた。川柳詩人の天才もさっぱりワヤである。商算の試験だけ六遍受けました。先生の方が根負けされたらしいです。

◇愚陀君からも「この数日に落第のポシビリティが淡くなったり濃くなったりして忙しい様な気持がします」と言って来た。妻君から請求書をつきつけられて蒼くなるよりも、そんなことを言ってられる間が花だ。

月給は親父から奪るに限る。（路郎記）

伊東愚陀・住田乱耽の学生コンビは編集部で「重役」のニックネームを付けられていた。

編集の割当てられた仕事をそのまま他人に押しつけて、煙草をくゆらせながら柳談・雑談に花を咲かせるのが常だった。当時の編集部の様子の一端が垣間見られる。

(33)

前号に記した路郎先生の句

夕桜とんぼがえりがしてみたし

は『川柳雑誌』第七巻第五号に出ているが、この号から路郎は「柳壇の人々」を書き始める。第一回は蛭子省二氏のプロフィールである。次にその要点を抜粋する。

朝鮮の蛭子君から、「こんなに肥えていないんですが」と注意書きをした写真が届いた。なるほど蛭子君はこん

なに肥ってはいないが、この写真そっくりのふくよかさはある。見るからに君子という感じがする。所謂君子なるものは事にあたって多く熱を欠くの嫌いがあるが、蛭子君にはそれがない。君にはかなり根強い持続性の熱がある。君が短詩人であると同時に古句研究家の重鎮であり得る所以でもある。

その執筆するところのものは多く句に対する考証であり感想であるが、感想の多くが達意の名文であるのに比して、考証の難読渋滞の文であることは全く別人の観がある。これは博覧強記の君が、引用の多岐に亘るのと、つとめて原文を抜粋して誤りなからんことを期するために止むを得ない弊であろうとは思うが、その学究的態度から更に一歩を出でて今少しく嚙みくだいて発表されたならば、現時の柳壇を裨益する点が一層深められはしないかと思っている。

君は趣味として日課として柳友その他へ不断の通信をする。その通信文中には必ず君の人格の総和ともいうべき隣人愛の心が滲み出ている。光っている。

蛭子君の近ごろの句風を示すため本誌の新年号及び四月号の「粒々集」からの数句を抜く。

みなれぬ犬もいて落葉たく旗日
書斎中心の間どりかく妻はねそびれ
妻とならび元日をまつ背のび
橋の真ん中で春らしくなり
母の座布団をひきお仏飯を頂く

古句の研究家と言われる人々は殆んど作句から遠ざかっている。たまたま作句をしても平素研究に没頭している古句に災いされて、自然その創作には古調を帯び、詩想も又古句に立脚している観が多い。これは研究に熱心のあまり陥る弊であって万止むを得ないのではあろうが、蛭子君はその点全く例外の人と言っていい。君の句には、そうした古調もなければ詩想の立脚点からして異なっていて、古句研究に煩わされた黴臭い痕跡を何処にも止めない。寧ろ俳味を帯びた心境作家である。その調子を検するに、碧梧桐氏が始めて新傾向を称えた頃の句調に一脈の類似点を持っているように思う。僅かに抜いた上記の句に於てすら蛭子君の謙虚な心や、環境に生きる平静な真面目に接触することが出来る。

君は又大の愛犬家だそうで、君の句に犬を詠んだ句の多いのも故なきことではない。

君は目下は朝鮮の光州に住んでいられるが、生国は金の鯱鉾のある名古屋だそうで、本年四十四歳の男盛りだ。もともと石井姓であるが、いささか担いで蛭子姓を名乗っているんだそうである。君が川柳に指を染めたのは中学の二年頃だそうだが、明治三十九年早稲田時代に久良岐社に入って柳壇の人となったのである。後年、久良岐氏と主張を異にしたため、二、三年前遂に久良岐社を去り、自由な研究と創作に生きている。

奇しくもこの号に蛭子省二氏が父と仰ぐ古川柳研究家西原柳雨翁の死が報じられた。

(34)

柳壇の人々の第二回は川上三太郎である。

川上君はある意味に於て柳壇のツエッペリンであるかも知れない。思い出したように、飄然として旅に流れ出る。それでいて風景（ランドスコープ）は嫌いだという。とぼけた顔、人を食った態度が川上君の賢明さを包んでいるので、意外に近づき易いところがある。が、しかし與み し易しとして無闇に近づこうものなら、忽ちにして烏賊の磨墨にも比すべき皮肉の巨弾を投げつけられるだろう。

川上君は物ぐさ党としても人後に落ちない方であるが、その物ぐさに似ず「新川柳一萬句集」の編纂がある。その句集の広告文に編者川上君を名人として祭り上げてあったが、この敬称を単に広告文の賛辞だとして読過した人も多かろうが、自分などは寧ろうなずかされ、ほほえまされた一人である。

假りに「名人」という看板を持ち廻って川柳家の肩にのせて見て、据りもよく又持ちこたえ得る者を求めたとしたら、物ぐさで、しかも鬼才縦横、名作迸出の川上君の肩へ落ちつくのではなかろうか。

川上君の話術は、のべつ幕なしに飛び出す機智の舞踏である。従って多くの話題には、それぞれにある種の魅力を持っているが、単にそれだけでは、対手を感心させるに過ぎない。時にくたびれさせるに過ぎない。斯くいうことは川上君の話術を表通りから窺った素通り観に終らせることになる。

川上君は、あれでなかなかしみじみとした話をする。その話の底には友情が根を張っている。君の真実を観る

力は凝って機智となり皮肉となって湧出するが、その友情は、それらの機智や皮肉の外殻に災され、眩惑されて他人の知るところとならないのだ。

その句風を知るために柳詩「すずめ」の第四巻十二号からその二三を抜く。

冬の日を手紙一本なつかしや
十二月某日猫の歩くを見
鯛ちりや降る雨ながら晝ながら
友だちのうしろ姿の有難味

亡姪を想う——

死んだ子に貸した背中に羽織着て

川上君の句に動物を詠んだ句の多いということはかなり有名で、馬や犬や猫などを詠んだ句は殊に多い。しかしながらそれが単なる写生句に終っていないで川上君一流の鋭い観察がその句を透して流れていることを知らなければならぬ。動物の呼吸が人間の呼吸、動物の行動が人間の醜悪であることさえも味読させられる。それはジャック・ロンドンが狼や犬を藉りて社会主義を闡明したのにも類するだろう。川上君の句にそうした目的は無いにしても、その句からうける興趣は深い。

右に掲げた句には川上君のしみじみとした一面が遺憾なく出ていると同時に、君の尤も得意とする技巧を窮知することが出来よう。

（中略）

川上君が川柳に指を染めたのは明治四十年ごろではないかと思う。大倉商業の出身で天津の支那商館に勤めていたこともあった。近年新聞記者をやめてから著述と放送に其の日を過している。居は南品川にある。年は不惑、愛妻と差し向いの生活。

川上君がかつて柳樽寺派に属していた事と、酒の好きな事とは余りに知られているので省いた。

(35)

柳壇の人々は、このあと安川久流美と前田雀郎を書いただけで終っている。生きている人を書くむずかしさは、路郎の筆を以てしても困難だったのだろう。

現在、東野大八氏に川柳群像を本誌に執筆願っているが、皆故人に限っての紹介である。

生きている柳人からも、自薦他薦によらず編集部や筆

者に資料をどんと送り付けてくる向きもあるが、確認はとらねばならず、苦情が来るわで煩雑この上ないこと、想像に難くないのである。

路郎は、この年二度目の函館へ渡る。第二回海峡親善川柳大会に出席のためである。裏日本から函館へ。帰りには白河の大谷五花村を訪ねている。

「旅は私にとって詩であり夢である。」という文章にはじまる「旅のこころ」と題する旅日記がある。

5月15日（昭和5年）の午後までは、二階に駆け上って浮腰で、ある新聞社への原稿を書きながらも留守中の指図をしていた。旅装をいそいでいた。お湯に飛び込んだ。出がけに来た郵便物はすべてポケットに捩じ込んだ。その中には信子さんの第二句集もあった。

南海電車の車中で『川柳雑誌』への簡単な紹介を書いた。自動車が三越へ飛んだ。三時四十分には青森行の急行列車の中に私自身を発見した。私の詩は、私の夢はここからはじまる。（中略）

汽車はひた走りに走っている。私はポケットから『蒼空』（井上信子第二句集）を出して読み耽った。京都から三十四五の夫人が同車して私の横に腰を下ろした。『蒼空』は彦根へつくまでに読んでしまった。もう一度読み返すときの参考に、ところどころへ鉛筆でチェックをしたり、寸評を書き加えた。

彦根を過ぎてから簡単に夕食をした。雨町君からもらったジョニウォーカーを鞄からとり出した。

逃げて来たようにも見える一人旅

○

井上剣花坊の夫人、井上信子はこの年「川柳女性の会」を創設するとともに第二句集を出版した。

今、私の手元に新潮・10月臨時増刊号があり、井上信子を、「偉大なる先達」と紹介、「尊皇家であった剣花坊が、その才を愛したプロレタリア川柳作家鶴彬を『よし！』と、いう一言で庇護を決めると、夫亡き後も、跡を継いで主宰する柳誌『川柳人』に身の危険をかえりみず、鶴彬の作品を掲載し続け、またその生活をも支える。」と、時代に流されることなく生き抜いた、一人の女性を解説している。そして作品は（20句中10句転記）

何う坐り直して見てもわが姿

美しい日は美しい夜となり

とめどなく転がる石に似たこゝろ

墓石がすっくと立った地平線
淋しさが膳のひろさへ迫りくる
臨終へ近づく人のおもみかな
放埒なまゝにさらさら水流れ
擴げても握って見ても空しい手
寂び切った冬の眺めをもつ身なり
思ふまゝ笑へば空も丸う見え

と、背筋が通り、厳しく大きい。三句目の石の句に接して、私は息女大石鶴子さんの

転がったとこに住みつく石一つ

をゆくりなく思い出した。

(36)

昭和5年頃の『川柳雑誌』に加わり、主宰の麻生路郎を師と考えていた人達の気持ちを代弁するように、松丘町二氏が「灰色か」と題して一文を書いている。

灰色は悲しい。情熱なく品格なく、それは憂鬱の同意語でさえある。呪われてあれ、灰いろよ。（中略）

私はそれまで親しんでいた短歌と長詩の世界を捨て、暇にまかせて川柳を作句しだした。同時に古川柳を読み返した。古句に対する私の驚異は深かった。そして現代作家の句と読み比べては、更に古句に敬服した。畏怖さえした。併し私は馬車馬の如く句作を続けた。かくして三年。こうした型にはまった句をいくら詠み重ねたところで、恐らく古句の上に出ることは難かろう。伝統万能のマンネリズムに陥っていて、いくら現代的見方と力んだところで例えば吉原を待合や花街に、下女を女給に換えただけの相違ではあるまいか？　そして是らの川柳とは要するに作為や機智であって、面白そうなことを考え、面白そうに言いこなせばいいのであって、作者自身の生活から句作するなどということは思いもよらぬことである。——ここに私の川柳に対する悩みが崩した。個性のないことも勿論あきたらなかったが、何よりその格調の低さが気になって仕方がなかった。この頃から私の句は少しずつ転換を始めた。同時に一道の光明が私の進むべき道をはっきりと照らして呉れた。その光の色は、白ぼけた光りでもなく、強烈な赤さでもないが、断じて灰色ではなかった。その光とは！

いうまでもなく私が今、確たる主張を持つ川柳雑誌社

により、路郎師に導かれつつあることを言えば足りる。

芭蕉が俳句の正道を確立して俳壇を風靡するに至るまでには、深く苦しみもし、その作る所の句に依ってみても随分暗中模索をしたことが窺える。（中略）然も彼は彼等貞徳風と檀林風との外に、新しくて正しい俳諧の道があるということを確信していたのだ。俄然彼の句風は俳壇へ黎明の明るさを投じてきた。

「古池や」の句を一転機として、彼芭蕉の灰色は、輝かしくも白金色の光と変った。彼を目して灰色となした衆愚は、彼等の無智と色盲さ加減を暴露しないわけにはゆかなかった。

現柳壇の右翼にあきたらず、極左翼に同じかねる我らを、前述の意味で灰色と呼ぶならば、我らは灰色作家であることをむしろ誇りとしよう。

総ては時が審判し解決して呉れるだろうから。

戦後、川柳から専ら俳句に馴染まれた名作家町二氏の若さ横溢する文章は、感情の昂揚に見られるように純粋で、当時の『川柳雑誌社』に謂集した住田乱耽・伊藤愚陀をはじめとする若者たちの抱負の程も推察出来る。川柳の中道を往くという大方針、路郎が川柳界の芭蕉の存在であるという見方が、この時代から形を成して来て、路郎自身もまた、芭蕉の大きさを目標に、精神的な成長と技術的な研鑽を自覚しはじめたのではなかろうか。

谷脇素文畵伯が講談社から川柳漫画「いのちの洗濯」という快著を出されるそうで小生に口絵の賛を求められました。「そのころの女はいうがままになり」という句で畫面を汚しました。これは七月号の編集後記である。

(37)

よい春にされて松竹梅をうけ
きっちりと坐れば春の酔ごこち
ねまきから余所ゆきにするお元日
お元日女房の声に子等の声
飲みに来いと言い〳〵春を留守にする

昭和六年新春特集号の路郎の近作年頭吟である。その編集後記に、

☆明けましてお芽出度う。お蔭で本誌も八歳の春を迎えました。お互いに柳運長久を祈って乾杯いたしましょう。

☆本誌を創立して川柳の社会化を叫んでから既に満七箇

年の歳月が流れましたが、幸いにして柳人はもとより一般社会に於ても漸くよい意味の川柳とは如何なるものであるかというアウトラインだけでも知ってくれるようになって来たことです。当時反対していた柳誌までが今日では自己の声としてこれを叫んでおります。当初私が目指したのは大衆に向っての宣伝でありました。殊に宣伝の急先鋒にある操觚業者や教育者に向って誤まられた川柳観の打破運動を試みたのであります。他の柳誌の如きは当然ここに落着いて来ることを予想していたので、一切それ等の罵声反声などには耳を籍さなかったのですが、果して今日の情勢を招来している事を思うと非常な喜びを感じます。世俗的の漫罵や物質的の圧迫を物ともせず悪戦苦闘をつづけて来たのでありますから、少しは酬われてもいいだろうと思っています。私がかって発表した三十年計画の第一期は正に完了したと言ってもいいでしょう。が、これからがいよいよ骨です。更に手綱を弛めず一九三一年辛未柳壇への奮闘を期したいと思って居ります。相変らず御後援と御鞭撻を祈ってやみません。

と書き出している。ところが四月号の後記は橋本緑雨氏で、「主幹路郎先生が病気で入院されていられます。一日も早く全快を祈ります」とあり、翌五月号巻頭言には、

▽私は何事に対しても常に熱と力をもって、ひたすらにすすむ。従って私はよく病臥する。

そして私の病臥の原因が肉体の酷使にあるということを痛感しているのであるが、病臥するところまで邁進しなければ些の休養をも思わない。

▽ここに於て私の病気は私の肉体を保持する安全弁だと思っている。だから一旦病臥したとなると、今度は病魔追放のために全力をあげる。私の性格はそんなところへも極端である。常に病気を忘れている私は病臥して、はじめて病気を発見するのである。

▽そして私は私の病気に対して感謝する。私が病気を発見して、私の熱と力を一時病気追討に転向することが出来ないとすれば、私は既に已に現世を離れていた筈である。この意味に於て私は私自身の病魔を祝福する。

▽しかしながら私の周囲に対しては、私の病気は一つの罪悪であることを常に痛感させられているものである。私の病臥は私の周囲に対して多くの支障を来たし、尠からざる迷惑を及ぼしていることを思うと、病魔を呪咀することも又人一倍ならざるを得ない。かかる時、私は

私の妻子の、私の知己の寛恕を乞わざるを得ない。

とある。まあなんとよく病気入院する路郎先生ではないか。

川柳雑誌社では、「阪大川柳会」と「神豊川柳会」が医者、「御旅支部」が歯科医で、「川柳早々会」が薬剤師、コレはウカウカ死ねぬと路郎が書いたのはその当時で、この年の七月二十五日に阪大川柳会が発足した。

▽長崎博士、笠原博士、丸島氏らの肝煎で、天神祭の夕、四時過ぎから大阪帝国大学の記念館楼上で教授連、事務官等によって組織された阪大川柳会が産声をあげた。兼題「父」の句評並に作句に就て四時間余り駄弁を弄した。多年の懸案が実現されたので非常な盛会だった。散会後大学病院のバルコニーで天神祭の渡御を拝観した。

これは八月号の後記。九月号の各地柳壇欄の阪大川柳会発会の項には、丸島利生報で、

予ねて身持ちであった阪大川柳会が七月二十五日天神祭の夕、路郎主幹に産役を煩わしとうとう呱々の声をあげた。集まる面々二十余人、路郎主幹を驚かす程、左様に熱心に作句に関する質問の矢を放った。何がさて口八丁の猛者連とて今後の例会が思いやられて頼母敷限りにこそ。

兼題「父」　路郎選

愛の巣は親父に背き師に叛き　与一郎
兒につれて父母思う日の多く　柳秀
父の威をかりて便宜を頼みに来　芳一
減俸のパパとは知らずブラ下り　路生
飯をくう真面目な父を稀に見る　〃
段々に父に似て来る母の愚痴　正義
広告をかついで歩く父もある　勇三
下戸の父言う程までに金ためず　寿一郎
重荷をば背負って父は眠りこけ　義郎
頭程光らぬ父でありにけり　百酒
友愛といっている間にパパとなり　〃
（人）聡明な親仁この頃耳遠く　義郎
（地）出る朝とかえる夕べが父らしう　勇三
（天）父親の帰るを信じ母は老け　利生

この中の百酒の雅号の作者が西尾栞主幹で明治四十二年生まれの一白水星酉年ゆえの命名であった。この兼題「父」の他に出された「温泉」で、天位を獲得されたのが、昨夏、香川県白鳥町に句碑となった

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

の句である。丸四年後の天神祭に発刊になった合同句集『大川端』には、佐野栞（後年、西尾家の養子となられる）の名で出ている。評価の高い句集なので佳句を紹介して置く。

金魚屋に舞妓たもとを教えられ　柳秀
とぎ汁の一筋白く船世帯　〃
六角堂幾何学的に暮れて行き　路生
三の糸切れて久しくなりにけり　〃
謹厳の彼も人の子プラスなり　筑川
酒酒酒秀才の影何処へやら　〃
伯林の夜を君黙々と歩く気か　湧三
尋ね人浴衣のままと書いてある　〃
今日からはお前というぞ俺という　洗塵
笑うという事を忘れて金を貯め　〃
蚤にも喰わせず天下もとらず　青一路
筍は竹になるとは知らなんだ　〃
お婿さんと名をぬきにして呼ばれてい　氷炭
大阪は金の鎖も目につかず　方正
逆境に居て褒められる耳の相　たけを
二階借生駒の山も一寸見え　〃
先生の癖は書生のものになり　千秋
枕もとさぐるは金でなかりけり　正甫
上役のその上役の方針だ　〃
大望は春の雲だけ知ってくれ　貞三
金を蔑すみ金にあこがれ二十才過ぎ　〃
はい〳〵と言うてはいるが自尊心　利生
使われに行く身電車ですましこみ　〃
一本の外はどうでも良いテープ　橙舎
アルバムの妻も仲よしみな美人　〃
舌も足も縺れて酒の楽しけれ　芳一
あの晩の風邪よと女嬉しそう　栞
染め直し昔の生地を褒められる　〃
のう〳〵と山の湯槽で雪をきく　山彦

大阪帝国大学の勅任官の教授連を交えた句会で、路郎先生と長崎柳秀博士のお二人にはお酒が出たそうで、当時学生の北川春巣氏は入会を断られたという。

(38)

記事は前後するが、昭和5年12月号で、

父河盛彦三郎（蘆村）葬儀の際は御多用中御会葬下さいましてありがとうございました

あつく御礼申し上げます

昭和五年十一月

大阪市西成区千本通五丁目七番地

嗣子　河盛　純子

親戚　河盛　益太郎

総代　麻生　幸二郎

の広告あり、編集後記には路郎の筆で、

▼十四日午前零時に岳父蘆村翁（河盛彦三郎）が亡くなり十五日に告別をしたので、翌十六日の編集へは出席出来なかった。川柳家としての蘆村翁に就ては他日私が書いて見たいと思っている。翁は亡くなった渡辺霞亭門下で小説を書いた時代もあった。殆んど一生を通じて教育界のために尽くした。行年六十五歳。

とあり、昭和6年新春号に路郎は、

蘆村を懐う（三句）

その子等は一に一足すこと知らず

鉛筆はみな削られて岳父は亡矣

乃木さんに似たる姿も今更に

と故人を悼んでいる。

その上、年末にやはり編集後記で

▼小出楢重氏は目下神経痛で悩んで居られるそうだが一日も早く回復せられるよう祈る。と書いた旧友の死が三月号で報じられる。

楢重を悼む　麻生　路郎

本社客員　小出楢重画伯、二月十三日午後三時遖焉として逝く。享年四十五歳。

回顧するに大正四年以来「雪」「土団子」「後の葉柳」「川柳雑誌」の前後十有七年間に亘り表紙画、挿絵、随筆等々、真に犠牲的に我等の事業を援けられし氏の霊前に捧ぐ。

裸婦かたづけてあるじ弔う

楢重の訃に光るガラス絵

置きざりの妻と子にはや一七日

このように悲報の続く中にも欣喜すべき事も出来する。

次は9月号の編集後記である。

▼八月三日、大阪朝日新聞は、わが『川柳雑誌』のために天声人語欄の全部を割愛されている。天声人語子のこの大胆な挙に好感と感謝の辞を惜しまないとともに、わが川柳の前途に洋々たるものが横たわっていることを思わせられて愉快である。

天声人語　右と左が真っ正面に対峙する息苦しさが笑いの爆発、沈痛な刺激を要求する▼居候や下女を置去りにして川柳の発展みるべきゆえん、大阪の『川柳雑誌』近刊を拾い読む▼「資本家の貌してタンク聳えたち」阪神魚崎はアナクロの氏神祈願に心血を涸らす▼「社長と闘士へ煙突そびえたち」セメントの棒に時代の表情が十分あふれ▼「検束を遠巻きにして鳴く蛙」みるべし蛙は古池にばかり跼蹐せぬ「写真班もめて来るのを待っている」気早の警官に撲られることがあり、通信の任務痛からざるに非ず▼「唯命に是従うて首が無事」「包丁をもった手へ鶏商われ」労働力を金にかえる連中はみなこれ▼「貨車の牛神戸をさして急ぐなり」行手の墓場であることは、われらと牛に変りがない（中略）▼「断髪に細いズボンを見下され」羞かしい間が「角帽にまだ憧憬のもてる歳」だ▼こんなのがマルサスの人口論、ロシヤのクロパトキンを云々するで物騒になる▼「芋虫にきけば主義など要らぬげな」みんな芋虫になること、なること▼「これでもか、これでもかと川柳子暑げなり」。

(39)

この頃、女流川柳人も増えて十数名が葭乃選の「光耀抄」に投句、三句から七句ほどずつが掲載されている。松山・武子、魚崎・吟女、大阪・寿枝女、大阪・勝女、松山・柳女、大阪・房子、岐阜・誼女、愛媛・愛女、大阪・スエノ、松山・白梅女、大阪・よし江、大阪・縫子、竜田・はつ女、といった名が列なる。

大阪　葭乃

元日の風は真白に地をすべり
きり〳〵きり〳〵と姉の羽根
争闘を忘れず卓を囲む子等

亡き父に（五句）

ウォッチも動かなくなったが父も死んだ
父はあらず壁ばかりなる父の部屋

死出の旅にも日本酒位あるか知ら
今ぞ知るかたくなな父慈悲の父
交々に孫がしかえる巻線香
母の三十三回忌に父逝く
父と母同じはちすを疑わず

昭和七年の新春特集号は二百頁。「日本柳壇（百人撰）」と「私と〇」の特集が出る。

「私と〇」　世界は「私と〇」で出来上っている。その〇が何であるかが問題である。そこで同人社友にその〇の解放を求めた。

私と本　　麻生　路郎

私が本に二千円の保険をつけてから、もう十幾年になる。焼けたら二千円は愚か一萬円でも買えない本もあるのに、一体これはどうしたことかと考えるとおかしくなる。命にさえ保険をつけていないくせに。

私と川柳雑誌　　橋本　緑雨

川柳雑誌の仕事は、本職で月給貰ってる方よりもずっと仕事は多い。私に不向な通信は日に十数本書かねばならぬし、訃弁と外交のヘタな私が交渉にも行かねばならぬ。編集、校正、会計等との仕事はどれもみな不向な事ばかりを黙って引受けてるが、これは路郎先生と本誌を思うからです。尚、物質援助や編集校正その他の雑務を喜んでやって頂く同人社友諸君の努力を思うと、奮起せずには居られませぬ。（このアンケート46人が書く）

日本柳壇百人撰　１９３１年の収穫　　大阪　麻生　路郎

恋の罠あの眼だろうか眼だろうか
なあちろりこれから秋に親しもう
酒とろりとろり大空のこころかも　　大阪　岸本　水府

大阪は号外配る旅戻り
妓一せいに鮎の骨をぬき
いさかいのまだひと言は午前二時　　東京　川上三太郎

友だちのうしろ姿の有難味
嬉しやな子供を抱いて陽を探し
赤ん坊の正月は只陽が当り　　東京　前田　雀郎

転寝の夜あたたかき松の内（喪中迎春）
熱の子にみんな居るよと云いきかせ

手の筋も淋しい時の足しになり（貧愈々酷）
東京　村田　周魚

家に居て飲んでればいい星まわり
叱られても雪やこん〳〵子の素足
硝子戸のくもりピアノも冬の音
神戸　椙元　紋太

神様へ親子五人と申し上げ
借金を思い出したり忘れたり
ストップに出過ぎた線へ立すくみ

他に阪井久良岐、井上剣花坊ら94名掲載。

(40)

同号に当時気鋭の松丘町二氏が「郷土作家かほる」と題して、小編ながら作家論を掲載している。麻生路郎の周辺で、後の須崎豆秋と双璧をなすような個性的な柳人高橋かほるを、ここで紹介しておきたい。

松江は嫁ヶ島の見える、湖に乗り出して架けられた料亭の座敷での句会、路郎選の兼題「花道」の地位に選ばれたのは、

花道は相合傘の巾に出来

であった。理屈抜きの芝居好き、観るだけでは承知が出来ず、眉を引き髷をかぶり自ら舞台に立たねば気が済まぬほどで、しかも女形の役柄をこなす。今も現役の楊井二南氏が立役をつとめ、味のあるコンビであったらしい。

八千代座へ十月に来て蚊に喰われ
唄本を口に蛇の目はひろげられ
菊の露口三味線にとけてゆく

など芝居や芸事の句が多く詠まれている。それというのも、かほるさんは芸能人の居住者が多かった島の内のぼんちであったから、その環境や境遇が大きく影響したに違いない。

町二も、

「かほるさんがおっとりした古典的な味わいと渋い色気に洗練された都会的色調の佳き調和をたたえた周囲と、生活に後顧の憂いのない境遇とが、かほるさんの詩魂に影響するがままに影響した」としている。

大阪は轢かれかけてもよい所
蔵の戸を開けて母親せきをする
掛茶屋の猫今月はみもちなり

おちょやんはあっちを向いて銭を出し
囲われて本家のおかず聞いて見る
逢戻りおこぜの骨がのどに立ち
三味線の皮の白きも春らしく

「囲われて」や「逢戻り」は大正時代の句であるが、後者は後の豆秋の有名な句、

骨立てたまま二次会へついて行き

の原形のようにも受け取れる。

ポプラの樹わさびに見えて冬になり
うどん屋で子持は遂に坐らされ
失恋の影がピアノにまざまざと
辻うらが出そうに思うもなかなり
踊から出て自動車の黒い色

これらの句も大正時代のものであり、町二氏も「かほるさんの句の一つ一つについての説明は、たとえばヴァイオリンにしっくり合わせてヴァイオリンの箱を造るようなものですから、ここでは述べませぬ」と全面的に容認理解しておられる。

桜の宮うるしに負けた人に会う
身二つになっておならをよく落し
キューピーの頭と枇杷とまちがわれ
上敷の鋲を押してる病み上り
貧乏の姿子供に子をおわせ
子の寝顔酒の肴になってくれ
春の海マッチをすれば消ゆるなり
新聞は今日の日づけの酒の粕
花電車牛が引いたら動きそう

町二氏は「若し人人が『変幻極りなき現在の熱烈な新への動向を考える時、これらの作品は余り長閑すぎる』とでも言いますならばかほるさんは答えて『川柳は私の顔です』と申しましょう。『顔の造作は神様でも変え得ない』と。」結ぶ。

路郎先生は戦後出版した門下生の合同句集『私達』に物故者かほるの句を掲載された。

月見草地球は丸いものらしく
待ち合せ帽子の型を折り直し

(41)

昭和7年3月号から川柳雑誌社は西成区玉出本通3の

36に移転した。そこは同じ西成区でも、それまでの千本通5の7の玉出住宅と異なり、霧のかかる葱畑や柘榴の花のほろほろと散る路は踏まれず、バスの通る十五間道路から数歩入った玉出町でも最も繁華な通りの裏側であった。巻頭言は路郎先生の小文。

新居より

こどものために働いているKENちゃんが新居を訪ねてくれた。彼は私の机上の古鐘をたたいてみて「朝鮮ですね」という。そして「Fの音が出るから」とつけ加えた。KENちゃんは更に日本の釣鐘はCの音、支那の釣鐘はGの音が出ますと言う。KENちゃんに世の常の骨董眼はないが音に対する耳がある。一を知ることは十を知ることだと思った。

曽て画家のS君も此の古鐘の簡単な図案を見て「これは朝鮮ですね」と言った。これは眼である。

川柳詩人の第六感は一足飛びに飛びかかって、朝鮮の古鐘を曽て松山に遊んだときに手に入れたのであった。

この時期、五月号が創刊百号を迎えるので特集号の編集をはじめ、祝賀と宣伝の催し物「川柳の夕」の企画、百号記念大会などの準備に誰も多忙であったが、路郎先生はたまたま健康すぐれず、葭乃先生が編集後記を書かれる。（緑雨氏も盲腸炎で病臥中）

▼本社新春句会の講演で隅々私が路郎は癇癪持ちであると言うような事を洩らしたところ早速それを利用して社会へ悪宣伝をしていた人があるが、あれは私のアイロニーで、癇癪持ちと言っても路郎の癇癪は単に気まぐれからくる感情の発作ではない。路郎の癇癪は、正義を正義として押し通さんがための情熱の発露である。いかに熱烈な弁論を以ってしても、相手の頭脳不明晰にして、正義を受け入れる事の出来ない場合は、鉄拳を飛ばしても相手を打ち倒さねば置かぬという猛烈さを持っている。然しこの情熱あって路郎あり、路郎あってこの情熱ありである。「なまぬるき湯は口より吐き出さる」の聖句がちゃんと吾等がとるべき態度を教えているではないか。

▼二月四日夜、カナメ喫茶店の階上で本社同人、社友句会が開かれた。当夜は句会後百号記念の編集の方針とそれに関する催物についての協議会が開かれた。其夜、某々川柳家が二階へ顔を現し「私も一寸聞かしてもらいます」と言ったところ、路郎は立ち所に「今日は社の同人、社友会なんだから、階下へ遠慮してくれ給え」と断

わったそうな。彼は勝手な憶測を下して、ある雑誌へ、我ら同人社友は神戸支部の件で協議会を開いたと書いている。

▼「カナメ喫茶店で川柳雑誌社の同人社友会が開かれるそうな。特種があるから行って見ぬか」とさる柳人の間に往復された書簡を手に入れた。そんな五月蝿い小新聞記者のような仕事がしたければ勤め先はいくらでもある。ご希望ならば履歴書を一通送られたし。

右のように、大らかな精神の持ち主である葭乃先生にしては珍しく神経を尖らせた文章だが、この年の1月16日、路郎は神戸支部で「爆弾を抱えて来る」と題する講演をした。ふあうすと川柳社の創立により、川雑神戸支部解体の憂き目を見ることになったからで、百号を目前にしてのアクシデントであった。

路郎三十五歳、川柳雑誌の経営に常に火の玉の姿勢であった事を窺わせる。

(42)

4月号は99号で編集後記「編輯の窓」は路郎の筆、その一部を紹介する。

▼本誌の五月号は創刊壱百号に相当するので記念特集号として素晴らしいものを刊行したいと編集委員ここもと大車輪である。その内容についてはお楽しみということにしておく。

▼同時に祝賀と宣伝を兼ねて、五月四日の夜、朝日会館で「川柳の夕」を開催し、ここに大衆の視聴を集めて、本社が多年主張して来た川柳の社会化をより具体化させることにした。先ず講演の方では井上剣花坊氏（東京）川上三太郎氏（東京）等が来援されることになっている。本社側で庄萬よし君や私などが熱弁をふるうことになっているその他交渉中の人々もあるので素晴らしい「川柳の夕」が開催されることは今から想像に難くない。なお会館では余興に多くの時間を割き、長唄（東都の杵家弥七師並にその社中）、こども舞踊（山根舞踊研究所）、川柳劇（川柳座）等が公演されることになっている。新たに組織される川柳座は拙句「恋の罠あの眼だろうか眼だろうか」を演出することになっている。これらの催物じゃ一川柳社の仕事としては荷が勝ちすぎているかも知れないが、天下にやってやれない事はないという意気で立

ちあがったのであるから、川柳の愛好者は来たり会して出来得る限りのご援助を惜しまれないよう特にお願いする。

▼又各地の同人及び社友で会館に於ける祝賀記念を好機として来阪される人々も多い。松本市の石曽根民郎君、松本市の三好計加君、滋賀県の平井蒼太君等からは既に来阪の報に接している。京阪神の同人社友は何れも委員として活躍しつつある。

▼三月の月は同人社友会をカナメ喫茶店で九日と十七日と二回開いた。九日の会合は百号記念及び記念祝賀催物に関する委員選定の件。十七日の会合は祝賀委員及び編集委員の具体案に関する協議並びに決議であった。

路郎先生の宿痾は余程軽快になったらしいが、葭乃先生をはじめ家族が感冒にかかって高熱病臥に巻き込まれる。百号に関する準備の会合だけでなく、関東川柳家の関西訪問団の来阪も近づいたことで、受け入れの会合には、特に緑雨・山雨楼・琴人諸氏が路郎先生を助け大車輪の活躍をする。そのような中で楽しい出来事もあり、編集後記は続く。

▼三月二十八日から葭乃の経営で小さな喫茶店が開店される運びになっている。私は勢い家主であり資本家である。里十九君にそのことを話すと、「二階に住んでる家主がおますかいな、アハハハハ」と景気よく笑う。そんな家主があるかないかの議論はサロン・キングでお茶でも啜りながらやって下さいと葭乃が早速商売気を出す。そうそう「千客萬来みな来ると困る也」でボツボツ来て、ボツボツ儲けさせて貰うに限ると、僕が資本家らしい本音を吐く。

ここで関東川柳団歓迎句会の様子を記すと、日時　四月三日午後一時、会場　南区中寺町芳雲寺、挨拶　麻生路郎　岸本水府　村田周魚、講演　阪井久良岐、兼題と選者　雑沓　酒　海苔　訛　橋　馴染　川上三太郎　前田雀郎　西島〇丸　椙元紋太　藤本福造　木村小太郎、歓迎晩餐会　午後六時から清水町の「北むら」にて、会費　二円　とある。

次号は輝く川柳雑誌百号記念特集号だ。

(43)

川柳雑誌の一〇〇号記念特集号は昭和七年五月一日発

行。表紙の絵は柴谷宰二郎。マンガチックなタッチで父子が風呂に入り、手拭でタコをつくり「ヒャアーク」と数んで温もっている微笑ましいものである。巻頭は麻生路郎の「灰皿」と題する一文で、

「我等も世の常の人々が祝賀する百という数字に対して敬意を表し、至極軽いこころもちで喜びたい」と書く。これは創刊時代の数多の同人の消息が多く不明であるにかかわらず社業は益々発展している現状に鑑み、十年一日組の尽力に重ねて敬意を寄せたものに違いない。そして創刊時の同人の名を忘れることの出来ぬ私は、喜んでいいのか悲しんでいいのか、私の眼の底には熱い熱い涙があるのみだ、と続いて、「雑誌を出しているうちに誰でも陥る圧力を私はおそれる。惰力で書く原稿、それも私は恐れる。今、柳界にとって一番おそろしいことはこの惰力であらねばならない。」と書く。惰力で書かぬ路郎の原稿はよくよく渋滞を来たす。大の大人がいらいらして泣き出したくなり、散髪や風呂で落ち着こうとして更に癇癪玉を寝床で破裂させる。作品や文章の執筆の内容や表現に悩み抜くものだから、折折の病臥もそのせいであろうかと思わせる。しかし路郎は、心から支持してくれる多くの知己友人や、路郎のために衣食を割いて不平を言わぬ妻子、また、苦り切っても敢えて甘受してくれる同人社友を持つことに、「私は恵まれた男である」と信じ、感謝する。この年の一月十六日、路郎は神戸支部で「爆弾を抱えて来る」という演題下に、川柳は今や危機に臨んでいると述べた。

というのは、今日川柳が漸く社会に認められて来たものの、下手をするとそこに一頓挫をきたすのは火を見るよりあきらかで、今こそ真に自重すべき時であり、より一層練磨すべき時である。にもかかわらず川柳人の多くが現在に陶酔して何等深き省察をしなかったならば、川柳は永久に我等の手から離れていくに違いない。私は外部の圧迫よりも内部からくる腐敗をより以上惧れると、病軀をおして悲痛の叫びをなしたが、私の心を知らぬ一部の人々は、川柳外の話をしたと称し、見当違いの解釈から罵詈讒謀をあびせかけられ煮湯をのまされた。私は魂で生きる。これは常に私の口にするところである。わたしの主義主張を援けるために多くの同志は躓き斃れている。それらの人々を犬死させぬためにも私はその主義とするところを貫徹しなければ止まぬ。（中略）私は川

柳を愛するが故に、やむにやまれぬ心の跳躍のために私は動きつつあるのだ。私は近く一転機するだろう。深い考察の下にそれは行わるべきであるから、今此処へは具体的に書かない。（註・職業川柳人宣言のことか）しかし、私達川柳人の一人一人が、日本の芭蕉、日本の一茶、日本の川柳にならなければならない。伊賀の芭蕉、信濃の一茶、松山の子規、江戸の川柳に蹂躙したくないしさせたくもない。誰も彼も永生の句へと突込んで行くべきだ。爆弾を抱えて飛び込む瞬間的努力の尊さよりも、私は苦難を抱いて果てしらぬ幾歳月を悩み抜く勇士たらんとするものである。

百号が何処まで続くか私も知らない。私が第一の叛逆者となるか、それも知らない。が、ただ私の後継者の肩へ絶大の重荷がかかることだけは想像し得られる。

(44)

川柳雑誌社は記念事業として百号記念特集号の刊行、祝賀と宣伝の催し「川柳の夕」の開催、百号句会の三つを矢継ぎ早に挙行した。

川柳の夕　五月四日午後七時
於　朝日会館

司会　高尾　亮雄
挨拶　庄　萬よし

川柳を語る
女性は躍る　川上三太郎
川柳にあらわれたる家庭　岸本　水府
人間苦の芸術　麻生　路郎

長　唄
新曲浦島　唄　杵家　七代
　　絃　杵家　弥七
　　絃　杵家　七幸

――休　憩――

こども舞踊　山根舞踊研究所
兎のダンス　小高　房子
絵日傘　小高　澄江
エジプト　橋本　千里
水兵さん　坂口　京子
　　山根　寿子
全　員

喜劇　恋の罠あの眼だろうか眼だろうか

壱幕　川柳座

次は路郎の「人間苦の芸術」の概要である。

世の中の仕事には派手なものと地味なものとがある。地味な方は少しも楽でなく、いつも底を匍っているようで損の様に思われるが必ずしもそうでない。私のやっていることもその地味な方に属する。灘でお酒を造るのを見ていると袋の中へ入れて絞り出しているが、それと同じように私達も生活からくる人間苦を川柳として絞り出すのである。しかし、その絞り出された汁も段々古くなって行くから、次から次へと更に絞って行く。

古川柳は文化文政以後の頽廃期から本質を誤り伝えられてしまったので、優れた古句へ引き戻し、もっと進んだ質のものにしたいと思い、その努力の一端として「川柳雑誌」の刊行を行い、今や百号に達したのである。こうした地味な仕事には、軍人が戦争に行く時の様に、麻生万歳！　とも何とも言って貰えないし、途中で倒れても号外一つ出しては貰えない。幸に今「川柳雑誌」が百号を重ね得て、それは甚だ遙かにではあるが、万歳の声が聞こえて来たわけで、自分としてもうれしく思っている。

私の家庭には八人の子供があった。四女に奈那というのがあるが、その名前の出た理由は「なんぞなんぞ生まれきしや」という所から来たのである。大正九年の経済界の恐慌のときに生まれたからで、その当時の私の句に、

天井の低さも知らず子は生まれ

がある。それほど私の家は貧乏なのである。が、しかし川柳をやれば貧乏するのかと思われたら困る。学校を出て二十年を金儲けに終始している人達さえ儲からぬ金ではないか。私は貧乏ではあるが貧乏に屈しないで生きてきた。これも川柳に徹したおかげだと思う。

俺に似よ俺に似るなと子を思い

これは私の句である。私は至って子煩悩であるからこんな句が出来るのである。一句を永く後世に残しておきたいと思われる方は作句に精進して戴きたい。そうでないかたは川柳を読んで自分の人生の滋味として戴きたい。

路郎先生の講演は、芸術の殿堂朝日会館を埋めた千余人の聴衆に深い感銘を与えた。

(45)

川柳雑誌創刊百号記念句会は五月二十日夜ちとせ倶楽部で開催、出席は九十八名。庄萬よし氏の講演「満蒙の川柳を語る」、路郎は「底力」と題する講演で相も変わらず硬い。出席者には合本一冊と路郎染筆の手拭い、小林ライオン商会から歯磨十打、春元商店より旅行用石鹸十打の寄贈あり、とある。本社句会にて賞品を出す仕来りは路郎の死まで続く。

兼題「裸婦」麻生路郎選と「鶴」岸本水府選の三才と軸吟を抜粋する。創立句会のときは「鶴」を路郎が選をしたことを想起する。

(人)裸婦と仔猫と春の夜の壁　小柳子
(地)電燈と一緒に消えた窓の裸婦　さだを
(天)神様を信じて裸婦は寝そべりぬ　鮎美
(軸)裸婦の圧力彼の死を悼む　路郎
(人)失業の辛さ鶴にも見附けられ　白峯
(地)パラソルの色に驚く春の鶴　明珠
(天)父の影子の影鶴の影もよし　鮎美
(軸)売立の鶴燦然と売のこり　水府

この一ヶ月半ほど前の関東川柳団歓迎川柳大会の開催を、本欄六月号で触れたが、肝心の東京側の氏名を記さなかったので補記する。

(東京)迷亭、〇丸、千寿郎、茶六、杜若、花川洞、夢一仏、玄六、比侶志、盈光、鞍馬、愚仏、寿山、雀郎、桃太郎、周魚、久良岐、栄二、三太郎、玉兎朗、しげを(横浜)懐窓(静岡)柳葉女、柳多良(長野)柳児(福島)五花村、らまことに豪華な顔ぶれであった。

川柳雑誌百一号の表紙は、路郎の句を路郎が墨でさらりと書いている。

待ったなしの歩にさされたる犬養毅

これは、首相逝くの前書きのある五・一五事件を詠んだ有名な句だ。

大日本帝国が歪な歴史を辿り始めるのと時を同じくするように百一号が発行される。

その編集後記は路郎の筆で、病み上がりとは見えず軽快に走る。

▼玻璃越しに初夏の光が流れる。テーブルクロースの埃が眼につく。昨日はこの机の横に緑雨君と鶴峯君が来て

坐った。入れ代わりに山雨楼君が坐った。夜に入って素人君が坐った。山雨楼君は夜の三時過ぎまで談し込んで私の横でアートのベッドにもぐり込んだ。私が眼をさましてこの机の前に坐った時にはもう山雨楼君は出勤していなかった。

▼バットの煙に親しみながら過ぐる一ヶ月を振り返ると、創刊百号記念事業のために日日奔命に疲れていた同人や社友やその他の人々の顔が眼に浮かんで来る。特集号の刊行、「川柳の夕」の公演、記念句会の開催を次から次へと釣瓶落しに断行したのであるから実際その衝に当たったものでなければ想像も及ばぬ苦労があった。

▼私などは顔を洗うひまがなくて、二日続けて顔を洗わない日さえあった。朝食を机辺に運んでくれても箸を取り上げるのが、電燈の点く前だったりした。文字通りに寝食を忘れた形であった。そんなにしていて、特集号は遅刊の止むなき状態で四日の午後に至ってようやく出来上がった始末。（中略）

▼五月四日「川柳の夕」の当日である。私は漸く五時に朝日会館へ着いた。楽屋は戦場のありさまで緑雨、艸楽を中心に各委員は大車輪で活躍した。開会の一時間前にまだ十数氏は数萬のパンフレットを抱えて街頭宣伝に出掛けるという物凄い活躍ぶりであった。

かくて、既定時間を十五分遅らして開会した「川柳の夕」は未曾有の大盛会となった。

(46)

川柳雑誌百号記念号は好評であったし、付随する行事も成功裡に終えた喜びと反省で、ほっと一息ついた余韻の中で、路郎先生だけは変わらぬ忙しさ、五月七日夜行で簸川支部五周年大会のため出雲今市へ。

出席の通知もされずに突然緑之助君を訪ねられたので同君の喜びは異常なものであったそうです。大会は緑之助君の孤立の立場にありながら地方としては稀に見る盛会だった事は同君の労が如何に大であったかを思い、感謝に耐えません。と緑雨氏の西之町ＭＥＭＯにあり、続いて、

本誌の選者として左記の諸君を推薦することになりました。従来、共選選者の朝田新水、中島鉄州、関本雅幽、尼緑之助、水谷鮎美、木村晃卓、中見光路、住田乱耽の

諸君は個人選の選者に、新たに西田艸楽、須崎豆秋、桜井円角、阿形一杉、生田翠夢、西村明珠、福田鶴峰の諸君を共選選者に推薦することになりました。とある。

これで見ると、川柳雑誌は、この頃すでに選者の推薦制が行われていたのである。先ず共選選者の資格を得て、その後、個人選の選者に推される。筆者が川柳雑誌の編集部に加わった昭和三十三年頃にも選者の推薦制度は残っていて、私も程なく認定書のようなのを頂戴したのを覚えているが、その頃には共選選者というのはなかった。

朝日会館で「川柳の夕」が開催されたすぐ後の五月十五日、大阪朝日新聞社楼上で週刊朝日十周年記念川柳大会を開催されたので、本社から水車、夕鐘、豆秋、柳秀諸君ほかが参加、約二百名の出席があった。とあり、当時の新聞社の肩入れの傾向が分かる。

六月四日の夜、川柳雑誌社京都支部の加茂川句会が昭和図書館で開催され、八十名からの出席者が作句三昧に浸った。これも百号記念の延長で、散会後、路郎は緑雨、琴人、鶴峰、変人らと京の街で飲み、花見小路でアトモスフェアを楽しみ、翌朝、平野家で再び洋杯を手にして帰阪する。と相変わらずの多忙ぶりだが、様子は一転して、六月十日橋本緑雨君阪大病院の岩永外科へ入院、十四日に盲腸炎の手術を受ける、とある。十一日の本社句会は緑雨君は入院中だし、路郎も健康を害していたので欠席、山雨楼君が「川柳イデオロギー」を談したと、これは百号記念のエベントの疲れのうかがえる七月号編集後記である。路郎のペンで、なお次のように続く。

かほる君、里十九君、二南君、華水君等は明けても暮れても髷物がやりたくてたまらず、近く句会の余興として上演するそうである。

剣道四段、二刀流の使い手である二南君が剣劇に出演するのであるから、ヒヤヒヤするだけでも納涼劇の価値は充分だろう。目下二南君が脚本執筆中である。かほる君は天性の女形。里十九君は多年浄瑠璃で鍛えた名せりふで一座を圧するだろうし、華水君は二枚目役者としての実力を発揮するだろう。社会劇なら出てもいいという色気のあるのが葭乃、杏三、柳秀、素人に、かくいう路郎である。と続いた緊張感のあとの心のほぐれが窺がえる。

また、七月三日に青函親善川柳大会の第三回が函館で開催されることになっているが、第一回に招かれた路郎

も、「この会が親善と共に研究方面へも伸展せんことを切望する」と盛会を祈るのみで出席は見合わせる。

以上、今回は百号の催しの余波を記録した。

(47)

川柳について

河盛　純子

父の子として

私は川柳を作る才がありませんので、川柳を作りません。作りはいたしませんが川柳とはどんなものかということ位は朧気ながらわかって居ります。曽て私の父が短詩或は新短歌の名称で川柳革新に没頭いたしましたため、従来の川柳家たちから異端者呼ばわりをされていた事がありますが、今日それ等の句は立派に川柳として専門家の間に迎えられるようになっています。然るに、或る教科書を見ますと、川柳を説くことが単に古川柳のみにとどまり、其後の経路について何等の知識も与えていません。のみならず、川柳家の最も忌避する狂句なども時には例句として混合羅列しているのを見ますと、今も猶三十年計画のもとに、新川柳社会進出のために家族の衣食を削り、自分の作句熱さえも犠牲に供して奮闘努力を続けている父の子として、川柳普及のあまりにも遅々としているありさまを慨嘆せずにはいられません。

私は今、事新らしく川柳の起源を述べようとするのではありません。伝統的な殻を破って自己の心境を詠うようになった近代川柳の姿に一瞥を投じて頂きたい抱負を以って淀みながらも語ろうと思っています。

古川柳の真髄（この項は概略のみ　薫風記）

この項では古句三句を例に挙げ、『川柳雑誌』に書かれた路郎の評釈を紹介し、古句の多くは客観的描写によって、人情の機微を穿ち、当時の風俗習慣を披瀝するのに、滑稽、諷刺、洒脱を忘れなかったことを述べる。

模倣時代より改革への曙光

明治年間の作句者は此等の古句を典型として句作三昧に耽っていました。所詮模倣時代でありましたが、大正に移ってから句風は改革を加えられようとする曙光が見えて来ました。穿ち味は軽妙に、滑稽、諷刺は漸く原色を脱して間色の淡白さに変わろうとする傾向がありました。或は穿ちを除外した純感じの句や純写生句さえ見るようになりました。

大仏の鐘杉をぬけ杉をぬけ　　五　葉
　蟬の声右も左も石畳　　〃

などの句は

松原の茶屋は煙るが景になり

の古句に比べると、同じく自然をあつかっているのではありますが、前者は感じの叙情句であり、後者は作句者の理知にうったえた穿ちの句であります。叙景川柳はよほど気をつけなければ月並み俳句となり、純写生句はややもすると「そうですか川柳」となる惧れがあると父は言っております。

異端視された新傾向

果太鼓今や鰻を裂かんとす　　日　車
髭剃ると言えば事々しき水よ　　〃

信濃路にて

うれしくも町の半鐘が見ゆるかな　　〃
宵は酒浅間の煙今朝見たり　　〃
妻や待たん靴音を高めんか　　路　郎
素肌素足眼が熱うなる桜　　〃
遅桜汽車の音ばかりきこゆ　　〃
鰹節に男のちからかるゝ　　〃

右に揚げた句は大正四―六年の頃尖端を切っていた月刊誌『雪』に発表された句であります。父は既に明治四十二年頃より句の革新を志し、柳誌『轍』『矢車』によって句の向上を計ろうと努めていました。勿論この当時でも多くの作家は依然として古句の足跡を辿っていたのでありますが、此等の二三の人々によって投げられた覚醒の石は、大きな波紋を描いて柳界へ響いて行きました。異端者扱いをされたのはこの『雪』時代が最も激しかったそうですが、文壇殊に俳壇の先覚者からは驚異の眼を以って迎えられていたそうです。

『雪』が廃刊になってから『土団子』を出し、続いて『後の葉柳』を発刊しましたが号数僅かにして倒れました。

川柳の社会進出

此時父は考えました。川柳の文芸的地位さえ疑われている今日に、柳壇的に川柳の革新を叫ぶのみでは到底その主義主張を徹底させることが出来ない。それには先ず第一に川柳の真髄を広く社会に知らしめる事であると、父は日夜東奔西走して、教育者に、操觚者に或は青年団に今日の誤れる川柳観を説き、余暇を作っては、本島は

申すに及ばず、北海道、四国、九州までも足を延ばして其使命を果していました。私達兄弟は殆ど父と顔を合わすことのない程忙しい体でありました。今、住吉区平野西之町へ川柳雑誌社の事務所を置いて発行を続けている『川柳雑誌』は川柳の社会進出と初心者指導の目的で大正十三年に阪神の鳴尾からその創刊号を出したものであります。その頃、私は鳴尾の小学校に通っていましたが私の家では朝から晩まで毎日川柳家の方が訪ねて来られて泊まって行く人さえ珍しくありませんでした。『川柳雑誌』の発刊と同時に父は尖端的な鉾先をおさめて『週間朝日』『キング』『講談倶楽部』などの大衆向きの誌上へも依頼されるがままに句を送ってきました。それは従来の父としては心苦しい点が少なくなかったようではありますが、ひとたび意を決した第一計画の完成を急ぐためには一時忍ばねばならぬ事であったと思われます。

新川柳の句境

川柳はいつまでも遊戯であってはいけない。少くとも自己の生活を基準としなければ嘘であると考えるようになりましてから、つとめて自己の心境を詠むようになりました。川柳はもう社会のあらさがしではなくなって来たのです。滑稽、諷刺、皮肉は川柳が必ずしも具備しなければならない条件ではなくなって来たのです。勢い女学生には女学生の川柳が生まれ少年少女には童心の現れた句を見るようになりました。次に『川柳雑誌』から父やその他の人々の句を抜萃して句風の一端を示すことにいたします。これらの句は現代の川柳として最も新らしい傾向のものであります。

君見たまえ菠薐草が伸びている　路郎
くびきりにまがうかたなき父の御名　〃
　大正天皇を悼み奉る
草莽の臣かなしみの炭をつぐ　〃
子よ妻よばらばらになれば浄土なり　〃
ふと眼をやれば煙突に煙なし　〃
寝転べば畳一帖ふさぐのみ　〃
秋さらり銀のふすまのものおもい　〃
その日ぐらしも軒に雀がこぼるるよ　〃
秋風にすゝきもわれもさからわず　緑雨
冬の抒情詩のポプラやポプラ　町二
雲よ散れちれうちも隣も赤ン坊　山雨楼
飛行機は流れるせなの子は達者　葭乃

への字くの字るの字の子等の中へ寝る　〃
人と鰯鰯は油したたれり　平八
貨車の牛神戸をさして急ぐなり　新水
瀬戸火鉢想いはめぐりめぐり消え　雅幽
蛙ふくれるな埋めてかえすよ　石竹

以上は川柳変遷の概略でありますが、一日も早く父が主張する新らしい川柳の境地を、世上一般の人々に味わって頂きたいと思っております。（昭和七年二月稿）

河盛純子さんは路郎先生の長女。この原稿は学校の教科書で川柳に接したとき、たまたま父が川柳人であるところから川柳について所見をもとめられかかれたものである。

(48)

前号の文章の筆者河盛純子さんは、河盛家の一人娘の葭乃先生が嫁がれたため、養女となって後を継がれた。文章は葭乃先生の手も入っている気配はするが、女学生として実に堂々としている。両親の血を沸沸と感じる。

この年の路郎先生の句は、先に五・一五事件の「待ったなしの歩にさされたる犬養毅」を紹介したが他には次のような収穫があった。

雑詠

新町与太呂にて

河豚だ酒だ男ざかりのうれしけれ
女十八アダリンの夢
むっとしたが子どもの頭撫でておく
操など考えていず脂ぎり

一子を儲けた久流美氏に

原稿紙へ平二とこそは書かれたり

悼　五葉

薬湯の隅にひとりの君なりし

二男アート危篤

汝の父はロック氏液をささげ立つ

詠題

とりまきをいっそ淋しいものに見る
家出と追手道頓堀で別に呑み
許婚女に見える頃になり
いつしかに母とおんなじ美顔水
思いきり惚れて毒婦と知らず死に

思い出し思い出し弾く母の三味
爪弾の晋作油断せぬ構え
爪弾に明日は仇討とも見えず
幻の中に時計が鳴っている
無くなると知ってもさらの傘を貸し

路郎の句は雑詠も題詠も渾然としてその区別をつけかねるように感じられる。そして、前書のある句が実に佳い。

「待ったなしの歩にささされたる犬養毅」の句にも「首相逝く」の前書がある。安川久流美氏への祝吟も、浅井五葉氏への悼句も、その特徴と個色を深く把握する。二男アート危篤の句の父親の心情は、誠に切々、読む者をしてその場にある思いをさせる絶唱だ。

芭蕉にしろ虚子にしろ、前書のある句は堂に入っている。私は以前、奥の細道の美しい文章は長い前書だと、何処かに書いたことがある。そして究極の一句を据える。前書のある句のてだれは、この道の名人に多い。

葭乃先生の主な雑詠

鶏も猫も来よ来よ子等の膳の下
うどん屋の酒は足から醒めそうな
夜ふかしも朝寝も父にまけじとす
苺は毒婦処女の桜ン坊
金の奴隷の奴隷となって御寮人

主観と客観、抒情と批判、その両面をこなして感性の高さを示す。

十二月号には翌昭和八年に迎える『川柳雑誌』創刊十周年の記念事業の予告を掲載する。

○記念特集号の発行
○祝賀川柳大会――新春の佳日を選んで華々しく開催の予定
○記念出版物刊行
①川柳雑誌第一句集
②川柳パイロット　初心者の指針となる座右必須の参考書
③路郎雑筆　川柳に関する評論、雑筆随想をレヴューしたもの

かくて百号を発行し、朝日会館を埋めるイベント「川柳の夕べ」を開催した年は暮れ、路郎先生をはじめとする社の関係者と同人は充実感を抱いて創刊十年の新春を

迎える。

(49)

昭和八年の『川柳雑誌』新春号は創刊十周年記念特集号として発行される。表紙絵は田村孝之介画伯。葉脈を逞しく強調した葉牡丹の絵。昭和三十五年九月号の四百号の表紙も同画伯の絵で飾られた。路郎先生の死去の際、川柳雑誌社の編集部にいた私は最終号の表紙を田村孝之介画伯の絵で締めくくりたく、画伯に書信を送り、路郎先生の死去を告げて表紙絵の依頼をしたのを想起する。

巻頭には路郎葭乃両先生の別々の写真がそれぞれ一頁大に掲載、十年前の主幹夫妻と説明が添えてある。路郎の鳴尾海岸の写真に、

勅題

ここも君　太平洋につづく海　　路　郎

の句あり、調べてみると昭和八年の勅題は、「朝海」であった。

巻頭の論評は麻生路郎の「一転機」で、回顧は老人のすることで、回顧というのを私は好まないと平素言い続けた先生の十年の回顧の文章である。わが愛子『川柳雑誌』が十歳になったのを自他ともに欣賀するためには、回顧せざるを得なかったのである。注目すべき新しい内容は書かれていない。

「私の十年前」と題する短文が川上三太郎はじめ五十七人によって特集されている。

柴谷宰二郎、大島涛明、大谷五花村、石曽根民郎、蛭子省二、前田伍健、尼緑之助ら。

川上三太郎の「疣」が面白い。

「十年前の僕は何うだったろうな」と女房に聞いたら女房は「貴郎のエボはその時分右についていましたよ」と言った。僕は愕然とした。というのは現在の僕の疣は左の耳についているからである。「何日左へ移ったろうか」と又訊いてみたら今度は「そんな馬鹿々々しい事は知りませんね」と刎ねつけられた。

僕はスゴスゴ書斎へ戻って頬杖をついたが、果たしてこれは馬鹿々々しい事かしらん、と考えた。そうしてフト階下へ怒鳴った事である。

「オイ子供の足袋が屋根へ落ちてるぞ」

十年後の今日、こんな日本語を使おうとは僕は思わな

かった、十年前の僕であった。

日本柳壇百人撰（一九三二年の収穫）の自選句三句、ＡＢＣ順に掲載されている。　大阪　麻生　路郎

吹込みのあれも仕事かさびしき世
勘定高い人に軽蔑されている
二男アート危篤
汝の父はロック氏液をささげ立つ

大阪　麻生　葭乃

夜更かしも朝寝も父にまけじとす
改札を出るも先駆者たらんとす
風鈴の正体ガラスとは淋し　（以下略）

福田山雨楼の書く編集後記に次の様にある。

▼文芸春秋新年特別号に古今川柳百名吟が出ている。和歌短歌百首選、俳句百句選と共に揚げられたことは愉快だ。その中で現代川柳は路郎先生の「俺に似よ俺に似るなと子を思い」の外に日車、信子、盈光氏の句が三句あるのみ。これは余りに少な過ぎる。先生の句の上五が「俺に似て」、下五が「子を育て」と誤植されているのは遺憾に堪えない。

先生は私の編集修行の際にも、作品や文章の引用は句集を精査するなり、作者に確認を取るなり正確にしないと、孫引きされたときに多大の迷惑を掛けると、この実例を挙げ、また、詩人、歌人、俳人名などの間違いの多いこと、川柳人は知らなさ過ぎると厳しく申されていたが、これは今に改まっていない。

(50)

先号に書いた文芸春秋（昭和八年新年特別号）には思い出がある。私は構造社発行の川柳全集「麻生路郎」を担当したときその文芸春秋を探して中之島の府立図書館へ行った。そこには無くて奈良県の天理図書館にあるのを知り、天理まで出かけて閲覧したことがある。現代の川柳は四句だけで、あとは古川柳ばかり、それも佳句とも思えぬ句が多かったので大いに失望した印象を今に覚えている。

昭和初期の川柳への認識を考えさせられたものだ。それに関連があるようなので、その頃気鋭の若手、松丘町二氏が「心のふるさと」と題して書いておられる一文を紹介する。

（前略）

こころのふるさとがないさみしさです

かつてこう歌った私は、いまもなおこころのふるさとのない淋しさに生きている。柳樽は川柳作家としての私の心のふるさとではない。これは私にとって悲しいことだ。恐らく歌人には萬葉集が心のふるさとであろう。俳人には芭蕉が心のふるさとに住むだろう。それらの人々は自然へ人生へ探求の眼を向けて心を歌い、生活を歌いつつ、歌につかれたとき、そして心の泉の涸渇を覚えたとき、萬葉の名歌が、芭蕉の精神がなつかしく浮かび上がってくるだろう。彼らはこの心のふるさとに帰ることによって、魂を慰め力を得て、再び心の泉にこんこんと詩情の水を湛えるだろう。

彼らは正に幸福である。

川柳作家の心に荒涼たる風が吹き、柳樽の古句は徒に言葉の面白味を面白がって、皮肉り、くすぐり、警句を吐いて心の飢には見向きもしてくれない。——少なくとも私ひとりの、拗ねた魂には——淋しさに堪えつつ、湧き上がる情熱のみを唯一の頼みとして、歌いつつ苦しみ、苦しみつつ歌う。これは確かに幸福なことではなかろうか。強靭な川柳詩精神はこれを不幸としてのみ悲しんでいてよいだろうか。私は決してそうは思わぬ。思いたくない。心のふるさとのないことは自分で心のふるさとを拓いてゆかねばならぬことを意味するのだ。詩人の本懐ではないか。

町二氏は当時三十二歳、その年の「日本柳壇百人撰」一九三二年の収穫自選三句集には

月夜の壁に我が魂を展げける

木の葉ひそかに寝返れり池の底

明るい皮膚と暗い心に住む私

を提示しておられ、戦後俳句界（「青玄」）で活躍した作家である。当時の革新派と称せられる日車、半文銭、五呂八をはじめ、路郎や三太郎も含め、このような思いでいたのだろうか。若さゆえの厳しさだろうか。

それに引きかえ私の場合、川柳の出発早々句集「旅人」に出会いこれがふるさとだと詩魂に大きな支えと拠りどころを得たのだった。

川柳雑誌社十周年祝賀記念大会は一月十五日正午から道頓堀倶楽部で開催、出席者百二十三名。路郎主幹染筆の「君見たまえ菠薐草が伸びている」の手拭いが記念品

に贈られた。

司会は西田艸楽、講演「三笠附による流人」藤里好古、題は初雪・襦袢・女・喜び・松過ぎ、選者は松丘町二、高橋かほる、松盛琴人、関本雅幽、庄萬よし（路郎の代選）の諸氏であった。

大会後は市内の松虫花壇で祝宴、数時間に及ぶ芸達者ぶりは酒席を取り持つ紅裙連を唖然たらしめ午後十時過ぎに散会とあるが路郎主幹の病臥の淋しさは深刻だったに違いない。

(51)

川柳雑誌十周年に因み福田山雨楼の調べで「十を因める」として〝物故十大巨石〟などの三項が示されている。山雨楼は後に川柳雑誌社の副主幹になった路郎の心酔者で、希有の論客であった。

十違い十組

（五五）長崎　柳秀　（四五）矢野　錦浪
（五〇）庄　萬よし　（四〇）永田里十九
（四九）齋藤　松窓　（三九）田中五呂八
（四七）蛭子　省二　（三七）塩路　吉丁
（四六）麻生　路郎　（三六）福田山雨楼
（四三）大谷五花村　（三三）布部　幸男
（四二）安川久流美　（三二）松丘　町二
（四〇）西田　艸楽　（三〇）尼　緑之助
（三七）前田　雀郎　（二七）楊井　二南
（三四）水谷　鮎美　（二四）山本　丹路

同じ歳十対

木村半文銭（四五）森　東魚
本田渓花坊（四四）椙元　紋太
岸本　水府（四二）橋本　緑雨
前田　五健（四一）小田　夢路
亀井花童子（四一）麻生　葭乃
安井ひろし（三八）北山　悟郎
関本　雅幽（三七）岩崎　柳路
高橋かほる（三六）西村　明珠
日野　華水（二九）河野　夜王
三条東洋鬼（二八）中野　裸人

物故　十大巨石

児島六厘坊　明治四二・五・一六

藤村　青明　大正四・八・二
松村柳珍堂　同　八・九・一四
今井　卯木　昭和三・二・三
窪田而笑子　同　三・一〇・二七
武笠　山椒　同　四・三・一八
西原　柳雨　同　五・四・二七
河盛　芦村　同　五・一一・一四
杉村　蚊象　同　五・一二・二四
浅井　五葉　同　七・七・六

川柳雑誌社には当時学生だった伊藤愚陀・住田乱耽のコンビがいた。愚陀は昭和七年暮れの二十七日、腸チブスで急逝する。行年二十四。乱耽は涙ながらに僚友との二人句集を出版する。麻生路郎の「潮騒」の序――。

愚陀は一見寂しい男であったが、うちにはいつもとろとろと燃えるものを持っていた。（略）彼の顔からうける感じはどことなく子どもらしいところがあったが、態度からうけとる感じは父親くさかった。（略）

彼の感覚は新らしかった。そして鋭かった。それは彼の川柳を見れば判るが、彼は空想と現実を巧みに織り交ぜて漂渺とした句を創上げている。私は彼の将来に多くの望みをつなげていた。彼が学業を終えたら『川柳雑誌』の編集を彼の手に委ねたいと心ひそかに期待していた。しかし、彼の川柳が彼の墓標として永遠に光放つであろうことを思う時、多少の慰めとならぬこともない。

（略）

河童同志愛（ママ）の言葉は泡になり
近代美鋭く迫る唇よ
逢ふ日（ママ）もやはりバットなりけり
手と足から女の線を拾ひ（ママ）集めて
母子して朝餉に茄子のつやゝけき
腕　足　胴　ばらばらに病院をくゞる
死ねばよいと思ひ（ママ）ながら電車道越えた
止まる時計へ金平糖を入れておけ
猫が窓へ来て女の顔してた
なあに日向で棺桶を考へ（ママ）てるのさ

(52)

三月号の松丘町二執筆の後記に「何よりも先ず本号の遅刊をお詫びします。編集上の組織一部変更などのため

延刊今日に及び、読者の諸氏にご迷惑をかけ申し訳ありません」とある。

創刊以来はじめての遅刊であった。

十周年記念大会の直後の二月号には、その反響の私信も多かったが、この月の「飛燕往来」の一部を転記しておく。飛燕往来は路郎や編集部へ送られてきた私信の紹介欄で『川柳雑誌』終刊まで同じスタイルを通したところも、路郎の性格が出ている。当時は今よりも地方との通信も繁々と交わされていた。

▼蛭子省二君（朝鮮）謹啓、御端書と短冊入手、私去四日夕刻より発熱、其儘倒れて今日に及び居り、喘息併発のため苦悶二倍。いつもながら、ヒドイ目に会ふ事に候。下熱して喘息のみ残る当分褥中者に候。全快致し衰弱回復仕りなば、直に揮毫して御一笑を買ふ事に候。

昨日信州の柳風会より電報を頂き、飴ン坊君御永眠と知り申候。お気の毒に候。病状も仄聞致し居りし故、再起は不可能ならむと察し居り申候。

ある人が私を凡骨そっくりだと評し、申候。喘息持のところ、痩せたところ、猫背のところ——その凡骨君も死去せしが、私はタッタ一度会ったのみに候。曾て桂雨君とナゴヤ東鮨本店離座敷に閑談し居る処へ、突然凡骨君がやって参り候。当時は関東震災にて逃出し大阪千里山に卜居。どうも土地に合わぬから機会をみて東京に帰りたいと申し居り候。

（中略——凡骨氏喘息に関する愉快な話あり）

新陳代謝は原則にして、古きより代わるは当然なれど、遺されたる病弱者には一沫の寂莫を覚え申候。食欲を缺したため衰弱してペンが執りにくし。かく認め疲労致し候。頓首

二月十四日正午（緑雨宛）

▼木村半文銭君（大阪）川柳雑誌感謝。今度の表紙はいい。味がある。君の「僕は今」を読んだ。無理を愛するのもいいが少し自重して非無理を愛したら何うだ？　と言って、君に無理をするなと注告する事は僕に酒をやめろと注告してくれるのと同じ矛盾さは認めるがお互に年齢と相談せにや可けん。併しもう起きているのか未だ寝てゐるのか。ウンと養生するがいい。お互いに仕事は是からだから身体を大切にせんと困るぜ。といふ僕も痔で困ってゐる。起きても寝ても痛いのでコイツには降参する。愚陀といふ作家は異色ありと嘱目してゐたが若くし

て死んだが――君の片腕になる男だったがネ――ツマラヌ奴は永生きするし、君や僕には金がないし、世の中はあはれに脚色しとる。自重々々。（路郎宛）

▼小林不浪人君（青森）その後はずゐぶん久しく御無沙汰してました。今年青森に開催することになってゐる第五回海峡親善川柳大会のことに就いて亀井花童子君と打合せのため、今、海峡を越えてゐるのであります。いづれまた書きます。二月十日（路郎宛）

▼前田五健君（松山）お手拭頂きまして有難う御礼申上げます。スッキリしたもので感心してゐます。何やら彼やら恩を被るのみで酬ひられぬを恥ぢて居ます。路郎師によろしくお伝え下さい。松山の正宗寺子規の遺物も灰になりました。惜しい寺を焼いたものです。五健は其の炎の中で涙が出ました。煙のためではありません。淋しい大銀杏も半焼け、春の芽が果たして出るでせうか。（緑雨宛）

(53)

この時代の『川柳雑誌』は益々隆盛期に向っているようで、柳論、随想、古川柳研究その他の寄稿も多く充実しているものの、路郎先生の執筆が影をひそめていて物足りない。松盛琴人の「作為という事に就いて」は作句の基本となるものだから転載する。

作句上に作為という言葉がある。若しこの言葉を作品の上に投げかけられると、それは作品の致命傷になる。即ち其句は「つまらないもの」だと没にされる惧れがあるからだ。何故つまらないのであるかと言えば、大抵の答えは真実の力に乏しいため、形の上に作為が働き、つまり「作りもの」という臭味が残るからだと。それは空虚、偽物、不自然等々の言葉でも代言される。

併しベテランの、作句に注意深い作者ならそれは無かろうが、未だ川柳に日の浅い人はよくそれで失敗する。然も簡単にそう言い切られただけでは概念は解った様でも「作為」とはどんな臭味が、今一つ詳細に其正体が摑めない。そこで理窟を付けて考える。例えば如何なる川柳でも「作らない」所に川柳は生れない。それにも不拘「作ったのでは」不可と言うは訳が解らぬ。必然的な意味から川柳はまさしく「作った」もので「自然」そのままではないではないかと。全く其通り作品は作ったもの

に相違ないが、それは一を知って二のあることに考え及ばさぬからで、川柳に日が浅い故の迷いなのである。

そこで手取早く、どうすれば作ったものが「作為」の臭味を除去する事が出来るかと言う問題に触れながら、少しく作為の実相を、手近の句を拾って例句として語って見る。

傘借りて濡れずに済んだ春の雨　路郎
非常時も祭は祭盆は盆　山雨楼
足の豆びっこを曳いて痛いなり　半文銭

といった調子のもの、これ等は所謂「そうですか川柳」燃焼不足、或は川柳の形だけが出来ている拙い作り物でしかない。併し次の如きは実に立派な川柳らしくて作為歴然、

畳屋は馴れた手付の肘でしめ　日車
頂上と裾野を富士は雲で分け
歓迎の名士へ駅のこんでいる

等々、こうした句は如何にも川柳らしい川柳で、然も中味はカラッポの句で、数も多い。之等は作為の失敗に関心を持たず不知不識のうちに作句するからで、年数を経た作家でも折々この失敗を繰り返す。次に優れた川柳とは

君見たまえ菠薐草が伸びている　路郎
赤松のみどりが僕を生んだ村　山雨楼
四畳半　三畳　父と子の冬を分つ　半文銭
凡人となれ一つすて二つすて　日車

新作旧作が混じっているが、とに角是等の句と一方の句を比較すれば、その優秀は判断が出来るであろう。一方は同じ作り物でも「つまらないもの」か「拵えもの」という感じが濃厚で、川柳をやる人なら決して上等とは思うまい。後の句にはそうした臭味もなく、一寸詠み下しただけでも心の琴線に触れる何ものかがある。この相違点が直ちに句の詩価値を定める分岐点でもあり「作為」の有無の実相である。よく「作られたもの」は「作り物」という臭味を残さず、内部より生れた純粋自然な感じが句の上に躍動するからであると言い得る。作為が充分に必然であるので魂と形とが一句内に溶合しきるため、作為が目に止らず、渾然とした自然美、「美」の形だけが光輝を発散させるからである。

(54)

火山のように常に爆発を続ける路郎先生が長期に病臥されていても、社内外の助っ人による寄稿は多彩で、後進の我々にも教えられることが多い。今回は中休みの意味で十号に亘って掲載された梅本塵山氏の「肱枕艸紙」を少し引用してみる。七十余歳の筆者の体験に基づく人情風俗の変遷が興味深い。

☆相撲の横綱は多く有れども、明治年間の常陸山を第一に推すべし。梅ヶ谷は彼の好敵手にて、その体格技量に甲乙なく、両人が場に登る時は竜虎の闘争もかくやと思われたり。太刀山は有名なれども、その立合きたなくして看客を顰蹙せしむる癖ありし。

☆万歳を三唱するという事は、天皇の御即位式などに古く行なわれたが、江戸時代には一般に行なわれたる事無かりし也。然るに明治二十二年二月十一日帝国憲法が発布されて、翌十二日、上野公園に於て東京市民の大祝賀会を行うこととなり、式場に天皇皇后両陛下の臨御を仰ぎたるが、その数日前に市内の各区役所より当日車駕を奉迎する者は万歳を三唱すべしと口達されたり。この口達を受けたる市民等は、万歳を三唱するとは如何なることをなすものかと、有志者を区役所に遣りて訊問させしに、吏員は先ず音頭取が「天皇皇后陛下」と発声する後につきて、一同が「万歳々々万々歳」と高唱する也と誨えたるを、立帰りて一同に通達したるが、万一その場に臨みて万歳を三唱する時、不都合ありては恐れ多しとて、数回発声の練習をなし、当日いよいよ上野公園の大仏前に一同整列して、両陛下御同列の御馬車の通御を拝し、予て練習せる如く万歳を三唱したれど、孰れも心臆して大声を御し得ず、不体裁を極めたり。これが近く万歳を三唱する事の始めなりし也。

☆明治六年の夏なりしが、ある日大驟雨中に東京の北方にあたりて遠雷の如き大音響聞えたるが、これは道灌山の東面の断崖の崩壊したるにて、世人は法螺貝の抜出したりと噂し、その翌日、法螺貝の黒雲に乗りて飛び去る図を瓦版に印刷して、市中を売り歩きたり。これより後は、新聞の多く発行されしによりて瓦版の読売と言うものは全く廃れたるが如し。おそらくこれが瓦版の最後なりしならん。

☆江戸時代には、市内各家の糞尿を近村の農家と特約して売買されたるもの也。これは予め一家に居住する人員を計え、一人の一年間の糞尿代金若干と定め、毎年年末に明年分の代金を前納したり。この糞尿代は大屋の所得となるものなれば、多数の貸家を差配する大屋は、その所得莫大に及ぶなり。明治初年には一人一ヶ年の糞尿代およそ金一朱なりしが同三十四五年頃には金一円四五十銭となれり。然るに大正の初年頃より、東京付近の農家にては糞尿を買取らざる故に、各家にて料金を出し、而して汲み取らする事となれり。

右の項目は短いものの中から選んだのだが江戸末期の消防、風呂屋の混浴、正月風景など百七項目もあり、明治を生きた人間の幅をうかがわせる。そして「世の人情風俗は如何に変遷するとも、四恩のみは一日も忘る可からざるものと念う」とあるのが筆者の感懐か。

この年、八月号にはじめて「不朽洞句稿」の路郎先生の作品が掲載になる。休火山路郎の復活近しと感じられることだ。

有限もよしとおもへり米の嵩
人並に女房も持った子も持った
そろばんの三桁四桁の人生か

(55)

先に川柳の翻訳に就て、と題するエッセイで宮森麻太郎氏の英訳川柳に触れ、原句の味わいを破壊した訳し方であって、主観が力強く出る川柳の英訳は俳句以上に困難であると述べられたのは、阪大川柳会の笠原路生教授（本名道夫）であった。再び川柳の飜訳に就てと、今度は独逸語訳について書かれる。

『近頃のことであった。阪大川柳会の雑吟に私は次のような句を投句したことがあった。

かも鹿の嬌羞に逃げる君

その時分私は動物の句を多くつくっていたので右の句もその一つであった。余りいい句とも思っていないが、実を言えば右の拙句はハイネの詩の一句を飜訳したのであって、川柳の飜訳を論ずる上に於いて揚げたのである。

ハイネの「新しき詩（ノイエ・ゲディヒテ）」中の一句

Sie floh vor mir wie'n Reh so scheu.
(彼女は鹿のように左様な内気に私から逃げた)

を翻訳したものである。「かも鹿の…」句は巧拙は兎に角、独逸詩人の詩の一句の川柳化した飜訳として私は相当の自信をもっている。

独逸詩の一句から川柳が生れ得るならば、川柳の独逸語訳も或はある程度までは可能であるかも知れぬと思うている。

川柳の英語訳の困難であることは、いつか私は本誌に書いたことがある。川柳を外国語で飜訳してその持ち味を風俗習慣のちがった外国人に会得せしむるには、先づ句を選ぶことが必要であって、どの川柳も飜訳し得ると言う訳にはいかぬ。併しある句では、わりあいにその飜訳が楽である場合もあるように考えられる。川柳句であればどれでも飜訳し得ることの困難であることを例を挙げて述べて見たい。

恋の罠あの眼だろうか眼だろうか

この句はご承知のように路郎先生の句であって私の好きな一つである。この句を独逸語でもってどう飜訳しても原句のよさは出ないのである。「…あの眼だろうか眼だろうか」という畳語法のもつ川柳詩の味わいは到底外国語の説話法では表現できないのである。原句を最も平凡に飜訳して見ると

Oh wohl die Schönheit der Augen Könnt' sein eine Fessel der Liebe?

（眼の美しさが恐らく恋の罠であろう）

と飜訳して見ると、原句の意味だけは恐らく理解されるが、よさは決して表現されていない。第一「眼の美しさ」(Der Schönheit der Augen) がいけない。原句の言うところの「あの眼」には単に美しいと言うだけではない。魅惑のある、人を悩殺する眼でなければならない。モナ・リザの美しいが併し冷たい眼であってはいけない。

原句を次のように変えてみる。

sind nicht verlockende Augen reizende Fessel der Leibe?

（人を誘惑するようなあの眼は恋のうれしい罠でもあろうか）

前よりいくらか原句の味はでているが、まだ原句に及ばざること遠く、「…あの眼だろうか眼だろうか」という気持ちは飜訳句には出ていない。前の飜訳句より後の飜訳句が幾分か原作の味をもつならば、私は尚筆を投ずるには早く、暫く努力してせめて原句のよさに飜訳をし

て見ようと思うている』。

以上のように川柳の外国語への飜訳は時代と筆者が移っても誌上に屢々試みられている。

(56)

梅田の高層ビルの上階レストランで眺める大阪は年毎に変貌を遂げ、今や大阪城も視界には入れることが出来なくなっている。大阪城の天守閣の完成は昭和六年十一月だから、この昭和八年には四囲を睥睨していた。市民の服装もまだ和服が多かっただろうし、大阪は水の都、煙の都として繁栄の極にあった。

日本名所名物川柳（大阪の巻）が麻生路郎選、大西長三郎画のシリーズで特選連載されているので、以下数句ずつ抜粋してみる。

(一) 道頓堀

塗下駄で通る道頓堀の雨　葉光
行先を言わず道頓堀へ出る　いわを
働かぬ指が道頓堀でもて　雨少
ついて来いと道頓堀の暗いとこ　豆秋
道頓堀通り抜ければ元の吾　冬光
老境をしみじみ道頓堀に知り　夢裡

(二) 大阪の夏祭

算盤へ指落付かぬ夏祭　紫石
末っ子は寝冷えしている夏祭　柳次
そない押しないなと渡御を橋で待ち　山雨楼
御渡御の去年もここで雨になり　冬光
御渡りの神主ビルをふと見上げ　えいを
夏祭大阪城が浮いて見え　鮎美
カフエーとは別なあかりの夏祭　三汀

(三) 四天王寺

経木書き筆で参詣者を招き　俊翠
社会鍋四天王寺を見逃がさず　白峯
銭の無い顔が天王寺の鳩と　小柳子
犬つれて四天王寺を通りぬけ　豆秋
天王寺松鶴を連れて来たいなり　白柳子
絵にすれば雲を浮べる天王寺　波濤
天王寺妻の願いは尊かり　青踏

(四) ダム

角帯にダムの階段高すぎる　いわを

切れ話ダムを兎も角降りるなり　山雨楼
紅涙もあろう道頓堀のダムの水　翠夢
水都祭ダムへ大きく寄りかかり　夢裡
大阪のダムに蚊ばしらたっている　鮎美
大阪をたずねあぐんでダムの風　八歩

(五)　築　港

あこがれし瞳へうつる澪(みおつくし)　一笑
築港で聴くサイレンはうごくなり　鵜足
築港の記憶は二階附電車　春光
築港は女が派手に泣けるとこ　雀踊子
築港に軍馬の目玉動きたり　鮎美
天保山悲しい人もかえるなり　三汀
築港でそれぞれ主家にひきとられ　機見女
築港の土へ置かれたバスケット　素月

(六)　新　世　界

通天閣子供のよめる字がともり　葉平
新世界家とは違う方へ折れ　紫石
新世界大辻司郎出て来そう　かほる
新世界親に叛いた顔になり　乱耽
新世界短気な奴の足を踏み　かほる
白粉焼けの女追い越す新世界　山雨楼
チャンバラと鰯掬いの新世界　
新世界誤植の多いプログラム　
新世界変態的な人と呑み　
はこずしはよんべの色の新世界　
新世界冬が間近かなアーク燈　

拾い読みしていると大阪人として興味のあるテーマなので際限なく書き取れる。岩おこしや十日戎など、これ以上は省略するが、なつかしい『川柳雑誌』の好作家の活躍、後年親しく謦咳に接した人の若い日の句に深く頷かされる。

(57)

片言と言いながら世の中にはちゃんとした論理を述べる人もいる。五月号に掲載の阿部閑生の「かた言」を以下に抜粋してみる。

▼十年前と今日とを比べると、わが川柳も質に於て際立った進歩を示し、量に於ては更に著しく増加している事は慥かである。されば川柳に携わる我等はこの現状を謳

歌すべきかと言うに率直に答えて否である。進歩した句を示す人は極めて少数者で、多数の追随者は依然として旧態を脱せず、議論や批判は微に入り細を穿っても、句を作る態度句を扱う態度が是に伴わず、現状を通観して口と手との距離幾千尺なるを知らぬ恨みがある。

▼一、川柳の世界は何故にかく狭隘なのか。

二、大津絵や浮世絵のように川柳は一時期に於ける時代趣味の産物に過ぎないのか。三、古い伝統を遵守し過ぎるためか。四、或は川柳の本格から離反し去った故か。五、指導の宜しきを缺くのか。六、作者が粗野に過ぐるのか。七、現代の句に冠するに川柳の名称がそぐわないのか。八、川柳結社に何故秀才が集らないか、等々々。

▼感情の異常な躍動を現すために字音の制限に拘らず同語を重複して用い、重厚味を加えるため五、七の音数を六、八と増し、または四、六とこれを減じ、或は句調の安定せぬままを愛し、内容に応じて変化ある作句を試ることは、一句の長さが二十音以上になっても十四以下になっても、ある程度まで調が乱れても、それは吾人が日常作句の範囲内のもので、定型に即する特別の場合に外ならぬ。

▼ここに言う非定型句とは従来の句の平凡さを嫌い、休止型では生きた句が作れないとし、常態の句では腕の振いどころがないとし、自由なる感情を現すに自由なる形式を採ろうとする者である。定型を非とする以上、感情の発露、想の構え、表現様式など出発点から行き方を異にするもので、理論では併立しても実作では対立すべきものであり、同一人が定型句と非定型句を同時に、または交互に作って効果を挙げようとすることは、不可能でない迄も至難な事であるほど、両者の間には溝渠のあるものである。

▼一句の内容は表現によって定まり、表現は作者の性格により異り、性格はもとより千差万別であるから旧来の型を破って新しい型が完成するか、乃至新しい型など成立しないと決定する迄、非定型を標榜する筋の太い人違によってスクラムを組む一団の存在があってもいいと思う。そして両者刺激し合って行く事は過渡の道程を華美にする事と思うが、それにしても一つは刺激を受けるには大部分沈滞し過ぎており、一つは刺激どころか注意を惹くにさえ余りに粗野であり、水澱めども淵をなさず、風騒げども枝を鳴らさずといった現状をどう揺り覚ます

か。

▼句修業の道場は言う迄もなく句会であり、句会の旺盛は毎月の会報欄に現れているが興味を主とするためか失継早な出題で短時間に多数の作句をする。その方法の是非はさて措き、こうして作句の習慣が養われてゆくものとすれば、今にして一考する必要があり、川柳の伝統にしてもし改革すべきものありとすれば、むつかしい議論の方面より先ずこの辺から手を下しては何うか。即興軽妙の句、捨て難い句、一癖ある句、真実の句、考えさす句から更に含蓄妙諦の句へ。奥行を深めれば間口は随って広められて行く。

(58)

昭和八年八月は特集号でこの月から巻頭二頁に「柳壇画報」(写真版)を掲載、これも柳誌として先端を行く企画であった。

九月号には川柳雑誌社主催の東京句会開催が発表される。創立十周年記念事業の一環である。要項を左記すると、

日時・十月十五日（日）午後五時から九時三十分まで
会場・並木倶楽部（東京浅草雷門前）
兼題・「大空」（三句）　麻生路郎選
締切十月十日　官製はがき住所氏名明記
会費・金七十銭
路郎賞・兼題三光天位句に拾円（債券）
三光の地・人位と席題三光の句に呈賞
記念品・路郎筆記念手拭、『川柳雑誌』一年間の合本、句会発表誌

当時の句会の様子が推見出来そうである。

十一月号は東京句会記念号で、七頁に亙り記事を掲載、タイトルからして社を挙げての意気込みがしのばれる。

本社創立十周年記念東京句会
路郎主幹病軀を挺して
中央柳壇より全国に叫ぶ
柳壇画期的の一大壮挙
オールジャパン川柳大会

とある。『川柳雑誌』が川柳社会化を主唱して十星霜、幾多の難関困苦を突破排除して邁進して来たので、この

運動は柳壇の指導精神をリードし着々成果を収めている。路郎主幹の提唱した柳壇三十年計画の第一期、川柳の量的発展が略完成の域に達し、本誌も創刊十周年を迎えたので、遙々東上して句会を開催、努力を続けて来た経過の報告と将来に対する本誌の使命と抱負を声明するのが目的だとする。大阪からは路郎以下十四名の同人社友、遠くは晨修（函館）不浪人（青森）五花村（白河）民郎（松本）、地元在住の岡田三面子、井上剣花坊、阪井久良伎をはじめ、三太郎、雀郎、花川洞、茶六、鞍馬、〇丸、夢一仏、佐保蘭、懐窓、雨垂の諸氏ら百四十名、計百五十名を越す盛会であった。

路郎主幹の講演は、前掲の川柳雑誌社創設の目的と十年の経緯を語り、最後に「今後の川柳界の動向は三十年計画の第二期、即ち川柳の質的向上に専ら主力をそそいで、協力邁進することだ」と獅子吼して反響を呼んだ。

兼題「大空」の秀句は

（天）人を焼く煙余りに空青し　長崎　林一
（地）搾取の空に大空なかりけり　大阪　水車
（人）大空を見る病人の手が乾き　横浜　夫柳子

席題の課題と選者は「青年」住田乱耽選、「礎」寺井紅太郎選「一人旅」高須啞三味選、「宮城」村田周魚選「金屏風」三浦太郎丸選、「久しぶり」塚越迷亭選であった。

この号の編集後記は福田山雨楼が書く。

▼柳壇待望の「東京句会」が関東川柳家諸方の圧倒的な声援と賛助によって、非常なる盛会裡に開かれたことは、忘るることの出来ない感謝であった。

▼東都川柳家、各地柳友諸兄から沢山の賛辞と反響の言葉を頂き、主幹をはじめ社中一同嬉し涙を禁ずることが出来なかった。この厚意と同情に応えるべく、今後益々誌面の刷新と充実に努力して邁進することを期している。

東京句会の司会を担当したのは、この福田山雨楼であったが、戦後、川柳雑誌社の東京支部長として多大の貢献をされたのである。

(59)

この年の秋の頃『川柳雑誌』では麻生路郎の「五七五の翻訳」、福田山雨楼の「柳俳無差別論を排す」など、各時代に幾度も論じられたエッセーが掲載され読者を啓

発してくれるが、山本丹路の「危惧一つ」と題する一文の要旨を取り上げてみる。丹路は、

「作品の批評を方法論から見て、大ざっぱに印象批評と科学的批評とに分かつ時、今日の川柳界に最も易々と行われているのは印象批評で、評者自身からは純粋なる印象批評でなく、潜在する科学批評に立脚する印象批評なのであろうが、科学的批評が「潜在」する限り、科学的批評の本質から、左様な言葉は適用しないのである。私がここに提出した所以は、かかる印象批評が、批評される者に、或は第三者としての読者に何となく物足りないという余りに自然発生的な不満と疑問に出発する。」

と言い、いささか難解な表現で論を進める。論旨を分かりやすく書くと、

「柳誌に並んだ句を評者が批評をするのは己が個性、己が主観をそれぞれの句の作者の個性をかりて表白することに止まり、批評と言うより感想に近い。批評家側の「感じ方」「立場」「主観」が如何にあるか、に興味が転換集注してしまう。これは正当か」と言い、更に「しばしば句の持つ素材、技巧、形式等々の相互作用の分析、検討をおろそかにして、一足とびに批評の対象を、「句が放散する空気」に求めがちになる。私たち新しい正当な川柳詩を標榜しながら、相変らず同じ処をうろついていやしないか、詩に似て詩に非ざるものを製造していやしないか、という不安を一掃するためにも、この印象批評ではあきたらない。「句が放散する空気」には、必ずや選択された素材があり、素材にふさわしい主観的な技巧、緊密な形式と韻律がある。

これらが如何に構成されているかを検討するとき、始めて正当な批評を生み、発展向上への指針が与えられる」と述べて、最後に、

――人は建築の足場なんかに用のないことをよく知っている。それなのに僕たち建築家は足場なしに何も作れない　北園克衛

との言葉で締めくくっている。つまりは句評というものは評者の好悪の感情による印象批評では進歩はなく、科学的批評、冷静で客観的批評に発展の大道を求めていると思え、一つの見識を感じる。

一月に創刊十周年記念特集号の出た年であったが、路郎は記念大会にも出席出来ず病臥の身であった。小句会には出席出句の報が出ているものの少ない。七月十二日

木村半文銭句集発刊句会があった。席上での路郎の句。

裸の外にうらやまれるものを持たず　木村半文銭選

膳に左して子の頭子の頭　川上　日車選

その他の句会題詠作。

伊達巻の汚れ年子が二三人

笑わぬ父に恩給がつき

奥さんと女将肝胆相照らし

天才か癇癪持ちと思いしに

光頭会創立句会というのが目につく。今年の最後を明るくという意味で引用する。

禿げ頭つるりと撫でて偕てと言い　禿　山

若禿と言われて金を貯めている　白柳子

禿げている方がはるかにもてている　里十九

禿げ具合だけは金持らしく見え　豆　秋

兼題は永久に「禿」という会も珍しい。

(60)

謹みて　日の御子の御降誕を寿ぎ奉る（三句）

皇太子早くも春になし給い

御降誕朝からさけとなりにけり

日の御子に硯を洗い筆洗う

昭和九年新春特集号に久しぶりに見た路郎先生の作品は今上陛下誕生を寿ぐものである。表紙の絵は田村孝之介画伯で朝日と鶴と松、花札一月の現代風アレンジ。路郎先生は巻頭に「新春雑事」を書かれる。尊称・賀状・例証の項目あるも前者は長いので省略する。

賀　状

近ごろ、年賀状を年末に出したことがない。

いつでも春になってからボツボツ出すことにしている。

一時は年賀状に凝った時代もあったが、あれは若さがさせた業である。一種の遊びにすぎぬ。近ごろはスッキリした賀状に敬虔さを感ずるようになった。

政治家や実業家の代筆賀状位ありがたくないものはなかったが、これも止むを得ないものとして宥すようになった。それだけ人に対する熱を失って行くのかも知れぬ。世の中が判るということは灰色の悲劇に生きることだ。赤い悲劇、青い悲劇、そんな時代からだんだん遠ざかって行くことを思わされる。

例　証

壺そっくりに、円円と太った顔の持主でおる私のムスメが、どうしたら痩せられるかについて腐心している。勢い、それが火鉢を囲んでの話題の一つになる。

S氏が「肉を食べたら痩せられるよ」と言う。

「でも、丸鉄のおっさん、あんなに太ってるわよ」とムスメがすぐに反証をあげた。なるほど丸鉄のおっさんのビール樽のような姿が私の眼に浮んだ。しかし、S氏もなかなかスッ込んではいない。「岸源のおっさんを見給え」とこれに応酬した。なるほど又も僕はうなずいた。そして岸源の大将の頬の痩せこけた顔が目に映った。

川柳家の議論を読んでいると、両方で都合のいい例証を挙げて力んでいること、ムスメの丸鉄説、S氏の岸源説に類する場合が多い。

人間の肺腑を貫く名句は時間を超越するところまで行くもので、古句が現代句より古いとは言えない。お話にならぬ拙い句を創っていながら、本格だの、自由律だのと力んでいるのを見ると、滑稽に類する。古いといえば拙劣で、新しいといえば優れていると思うのは謬説だ。殊に形式論に囚われて真の川柳の影すら踏んだことのない人々を気の毒に思う。

路郎先生の健康が順調に上向いて来たらしく、鋭い舌峰が甦りつつあるようだ。

他に「妻の顔」というエッセイあり、十四人が書いておられるが、次はその中の一篇。

植木鉢の花　　前田　五健

毎日見飽いてる顔だが、さてと聞かれると困る。エート鼻、眼、口、耳、揃っている。揃ってはいるが、その揃い方、つまり配置についてはどうも感心しない。鼻は無防禦的、眼は細過ぎてあるにはあるという程度。口は相当なもの。それを鼻は花なり、眼は芽なり、耳は実なり、歯は葉なりの草木にすると、あんまりいい花ではない。まあ植木鉢に似合のものであろう。然し初春の丸髷にでもなると、ソレ古川柳の「松の内我が女房に……」座五が気に食わぬので目下考え中。

新春のお笑草として愛妻の顔の批評をお願いしました。

（編集局）とあるが、流石は野球拳の創始者、洒脱に流しておられる。

(61)

二月号に路郎先生は「女性川柳について」と題して書く。

一昨年亡くなった近藤飴ン坊君が曾て「女性川柳一万句」という四六判横綴の句集を刊行したことがあった。書名から考えると、女性が詠んだ川柳を一万句蒐めたようにうけとれるが、事実は女性を詠んだ句を蒐めたものであった。本の名をつけることもなかなか難しいことだと思った。

女性を詠んだ川柳も蒐めて見れば面白いに違いないが、私は女性の詠んだ川柳の方に、より多く興味をもっているので、私にも少し時間の余裕が与えられるならば、女性の詠んだ川柳名選のようなものをつくって見たいと思っている。(中略)

姑の日なたぼっこは内をむき　古句
数珠さら〳〵とおしもんで小言なり
糸巻の向ふに亭主踊ってる
亭主が死んで賑かな家になり

というような句を詠めば、なるほどどんなにお人よしの姑さんでも御機嫌のよかりそうな筈がないから、世の婦人達の考え方も一応はうなずけないことはない。

が、こうした婦人方にも一度静かに川柳を見直して欲しいのである。

川柳家は決してツラ当てに川柳を創っているのではない。不平不満の塊を川柳の形式を藉りて爆発させているのではない。川柳家はこっそり皮肉ったり、諷刺したりするほど、それほど弱い人間ばかりではない。川柳家はもっと大きな心で川柳を詠んでいる。たまたまモデル問題を惹起しそうな諷刺や皮肉な句を詠んだからとて、それ事態が目的でないことは昔の落首のように匿名でないところから見ても想像は出来よう。川柳家は大局から物を観ようとする。高所から、或は側面から観ようとする。従って自己省察でも明透である。

冷徹である第三者の立場から物を観る訓練に熟達するために、時に人間的に冷たく感じられることがある。しかし、これは人間性を深く摑もうとすれば自然の帰趨と言えよう。

私は、ずっと以前に、

果敢さは車掌の恋の刹那主義

という句を詠んだことがある。この句を読んで車掌を侮蔑したものだと言われては助からない。私の知人にも車掌をしているものはあるが、それらの人達から、路郎は怪しからんと、ネジ込まれた覚えのないところをみると、彼等はこの句が自分達を侮蔑しているとは思っていないのだ。

キリストは目で視て、いい女だと思っただけでも既に女を姦していると言ったそうだが目姦は人間の持つ大きな弱点かも知れない。私はそこを詠んだものである。そこに自己省察が行われる。人間性の陶冶が行われる。又一面には止むに止まれぬユダの反逆性も見られるのである。川柳を味わって興趣の深いのも、そこにあると言わねばならない。

私達は人情の機微を穿った川柳から更に温かい情熱を誘導せしめられる。自然を詠んだ美しい情景からは人の世の汚濁を漉返えすことが出来るのだ。

だからと私は言う。世の婦人方は惧れず憶せず、川柳を創られたらいいだろう。

路郎がこれを書いた昭和九年とは比ぶべくもない多数の女性が川柳をたのしんでいる現在だが、婦人方ではない若い世代の「女性川柳」が男性を刮目させる日が早く来てほしい。

(62)

落語や浄瑠璃は目で読むより耳で聴く方が遥かに面白い。それと反対に小説や随筆は人に読んで貰うより自分で読む方が確かに楽しみなものである。

詩歌の世界に於てもそうである。諸君は百人一首朗詠の妙は、しばしば味得されるところであろう。或は啄木集に於て黙読、徒らに頁を繰らるるよりも自ら声を発してその無限に迫る寂寥のリズムを貪られたことはないか。

之に反して最近勃興せる所謂新傾向俳句の如きはどうしても目を通して玩味せねばならぬ部類に属するであろう。

植木屋の梯子の下へ子が帰り　明珠
肩書が役にも立たぬ十二月　路郎
戎橋月を眺むるとこでなし　濁水

これらの川柳から受ける感興即ち川柳味はその目を通じての場合と耳を通じての場合とに於て、何等の差異を発見されぬであろう。換言すれば、これらの活字が構成する迫力とこれらの字音が包含する迫力に強弱の差を認めないというのである。無論この場合の朗詠は、明朗な発声と正確なアクセントを以てなされなければならぬ。畢竟これらの句は読む川柳であり、又聴く川柳でもあり得る。

右の文は明治四十年生まれ、八十九歳で今なお本社句会をはじめ川柳活動を活発に続けておられる楊井二南氏の三十歳のもの、氏に敬意を表する意味も込めて引用させて頂く。題は「読む川柳と聴く川柳」である。氏はこのあと、読む川柳の例を、特殊の活字技巧を弄した句と、音声のみでは難解の文字を含む句の二つを挙げる。前者の例句

君・君・憂鬱を配ってあるくのは止せよ　路郎
病ゐんへ行ってなみだの天と地　英彦
せんりゅうはかなしわたしのかけらをひろふ静　太

句のコンマがどんな役割を演じているか。

そこに作者の何らかの故意が働いていること。「病ゐん」を病院とせず「なみだ」を涙としない用意のよさは奥村丹路氏が本誌の月評で褒めたこと。仮名ばかりの句も、氏が漢字を知らない訳でもなく常に仮名ばかりの句でもないのに、この句の場合漢字を一字も使わなかったところに、此の句の独自性があるのではないかと説明する。そして、耳に聴いても意味はわかるものの、作者が期待している句の特殊性、独自性を認識することは、おそらくインポシブルと叫びたい、と書く。後者音声だけでは曖昧な文字を含む句の例に

腹立てて来た一団の匂いなり　大門
完全な愚夫愚婦となり汽車を待ち　乱耽
心耳漂渺光の走る音聴けり　町二

何の苦もなくこれらの句を読過することが出来、意味も理解されるが、最初から耳に聴かされたとすればどうであろう、と結ぶ。

次に「聴く川柳」、読む川柳が能動的なのに比べ、受身で味わう句を指すとして

一、会話体とそれを含む句

君見たまえ菠薐草が伸びている　路郎
生活の為なら煙草も吸いますわ　莞郎

一、強調の語を含む句

五六人どうにもならぬ顔を寄せ　閑生

酔ってからハッキリ知った彼の恋　みつる

一、滑稽・感傷の句

散歩なら財布を置いて行きなはれ　素人

粉薬をさみしくなりて吹いている　静太

紙数が尽きたので補足解説は省略する。

(63)

活発なエッセイや句評にまじり岡田某人が川柳昆虫標本箱を書いている。啓蟄から四月へ、うごめき出した虫を観察して一息入れることにする。氏は芥川賞候補にもノミネートされた『川柳雑誌』での異色作家だった。

①**天道虫**―街のピエロ、洋服特価大売出しのビラ配り、その癖一寸瞑想家なんだ。

哲学者斜に天道虫歩き

②**水すまし**―一度は歌舞伎座のリンクへ行きましょう。

家出した影とは知らず水すまし

③**かねたたき**―細々と、しかも耳に沁み入るあの音は遠いのか近いのか、きっとこいつは青銅製、スイス出来かも知れない。

かねたゝきはなしとぎれてふたりいる

④**蝶**―むしろ秋の、ヒラヒラあるかなきかがよろしい。勿論白いのね。模様入りは、なんだか捺染工場を連想していけない。

前身は知らず女の薄化粧

⑤**蛍**―死んだら灯を消すもんだよ。いやらしい。いや、もしかしたらこいつ時々消してみせるのが芸当だったのかも知れない。

はかなさは蛍の腹の死のあかり

⑥**蝗**―君も同感だろうが、神様の方があきれてなさる。兎に角、つけ焼とは考えたもんだ。

蝗取り畦に草履が二足あり

⑦**蜻蛉**―一体どうして眠る気なんだろう。

子がねらう蜻蛉の上に天主閣

⑧**蜂**―戦国時代、高踏派、耽美主義、ごろつき。蜜蜂か、あれはこそこそと貯めて町人だ。

蜂一つ座敷を空にしてかえり

⑨**兜虫**―はりこんだのはいいが、ちと重すぎて困る。だ

がどうだこの前立。われこそは鳶の巣文珠山の陣に…か。

仰向けになり兜虫親しまれ

⑩**かまきり**—このバネ仕掛め。

かまきりのこちらへいのるおそろしさ

⑪**虻**—牛曰く、うるさいね。何処まで従いて来る気なんだい。脚より先に、俺は尻尾が疲れちゃった。

二里来たと知らず虻舞う牛の背

⑫**蟬**—坊主はきっとこいつからお経のうなり方を習ったに違いない。そのためにお寺にはあんなに沢山木が植えてあるんだよ。

死ぬことが恐くなくなる蟬の声

⑬**蚊**—縞のパッチの梯子酒。のみてえなあ、熱燗で。恋をしてる奴のか。あれは駄目だ、毒になる。

帰省して壁に去年の蚊の血を見

⑭**油虫**—近頃の家庭には長火鉢というあの結構な奴が少ない。一種の住宅難なんだね。

油虫ここの世帯を知った色

⑮**浮塵子**（うんか）—それっ切り込め！　わあー。だから、あんまり大きな口をあけて唄なんか歌うなといったんだ。

阪神に乗って浮塵子の梅田入り

⑯**黄金虫**—E・A・ポーなんて大嘘つきだ。このお人好しに、あんな気の利いた役が勤まろうとは思えない。そうではないか、カタマリ氏よ。

子が一つゆずって呉れる黄金虫

⑰**蠅**—冬　硝子の一隅　ビビと鳴った翅音もいまはあわれなひとあがき。罪業深き身のあきらめきった現世ではある。なむあみだぶつ。

蠅じっと冬の陽ざしへ拝むなり

以下略。須崎豆秋は小動物を見詰めて佳吟をほしいままにした。作句へのヒントになる。

(64)

麻生路郎先生は、昭和九年三月九日午前九時四十六分大阪発列車で川柳行脚に旅立たれる。三月二十五日朝十時うすりい丸で大連の波止場を離れるまで約十七日の鮮満への旅で『川柳雑誌』五月号六月号の三十頁に亘る旅行記「鮮満ところどころ」は、当時の朝鮮・満州の表向きの表情、柳人の消息、旅行吟など、挿入された写真と

ともに興味深い。

以下大略を転記する。

連絡船徳寿丸で三月十日午前七時半釜山着。八時上陸、直ちに東萊温泉へ

湯槽で蛙のように両足を投げ出した私は、落人に似た軽い溜息をした。玻璃戸越しに眼に迫るもの、蒼い空と白い雲。

東萊は一時預けで来てる客

とあるは、芭蕉の奥の細道の「片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず」の思いと重なるか。

午後釜山見物―夜行で京城へ

思ったほどに寒くはない。昭和公園をよこぎって、ま昼の緑町をのぞく。

釜山釜山君も九州訛りなり

緑町泣いて来たのもいるだろう

（註・緑町は色街であろうか）

十一日午前八時二十五分京城着、言也、麗月冠、大口坊諸君の出迎えをうけ、朝鮮ホテルに入る。柳建寺、言也両君の案内で新聞社歴訪、市中見物

京城の街の屋根看板の文字は巧拙一様の懸隔があまりに甚だしい。巧いのは莫迦に巧くて拙いのは莫迦に拙い。巧いのは鮮人の筆になり、拙いのは内地人の筆になるものらしい。

朝鮮ホテルで落合う約の春元紀太君が奉天よりの帰途、午後九時二十五分で来城

妓生を見せてやるという紀太君と一緒に雨具もなし雨の街へ出た。妓生を断念して雨に濡れた外套の背をカフェーのストーブに向けた。

十二日の午後、紀太君と朝鮮料理の明月館へ

料理は十五六種一度に出たが、朝鮮独特の味の物はホンの僅かしかない。刺身が一鉢あったが、これなどは料理が内地人向きに転向しつつあることを示すものであろう。曾て仁川の故矢田冷刀君が柳誌の名にしていた神仙爐なるものも出た。

（註・ここでは金月色、姜花仙という清楚端麗の二人の妓生が侍る）

昼の明月館に続き、歓迎句会が駅前の共立無尽の楼上で四温吟社主催、朝鮮新聞社後援会で開かれた。そして花月での歓迎招宴となる。

李王家を偲びて

昌慶苑桜もすぐに散るものよ

妓　生

内地歌よりうれしきは君が立膝

十三日午前八時京城発平壌に向う

車窓から見る外は雪で真白だ。天気は非常にいい。とあり、金春澤という平壌座興行主と話に花を咲かせ、大阪新世界で見た金亀子の日満提携喜劇や赤玉での娘々祭を談す。

午後二時五十二分平壌着、野田錦魚諸君等の出迎えをうけ牡丹台や市中見物

朝鮮の京都と言われ、飲むにいいところと言われる平壌での夜の歓迎句宴、若い人より老人側の熱が高いとある。

大同江あんなところに煙突が

大同江濯ぐ女が景になり

いよいよ十四日の朝、鴨緑江を渡り、対岸の安東へと満州入りをされるのである。

(65)

十四日午前七時安東着、濱屋旅館に入り窓外に高脚踊を観る

無理解な警察人になやまされながら列車は鴨緑江を渡る。流す筏の情緒も何もあったものでない。次は税関吏に煩わされた。

宿でも不快をかこつていると珍らしい高脚（たかし）踊が囃子と窓外階下を通る。こんな宿屋に連れこまれていたばかりに、うまく高脚踊が見られたとは何が幸福か、世の中のことは凡俗の予測をゆるさないわけだ。

苓草君の案内で市中見物、阿片小売所や××書館へ

馬車に乗せられ寒い風を肌に感じながら、阿片窟へといそいだ。いうまでもなくそこは支那街だった。

路郎先生は、陰惨な感じがしたと表現する部屋で勇敢に阿片の吸引を試みられたが、羽化登仙の気分を避けて、若くて美しい女から早早に遁れる。そして××書館へ。書館とは内地の××楼にあたる娼家のことで、阿片窟も書館も、部屋のたたずまいや仕来りを可成り詳しく紹介

しておられる。

夕刻から歓迎句宴、十二三人の会合は川柳より会食に利用される観があった。夜奉天へ。

安東で時計すられた事を知り
阿片窟身の振り方を頼むやう

十五日午前六時奉天着、夜行の十一時四十分で新京へ

早く着き過ぎたので奉天の朝は雪にふかぶかと眠っていた。煉瓦造の洋館が押し並んでいる駅の中央の大通りが千代田通りだと判ったので歩いて見た。雪が珍らしかったのだ。

大阪弁の江戸みつる君の案内で、鉄路総局、満鉄用度、消費組合、大毎支局やヤマトホテルを歴訪、ホテルで大連の大島涛明君と会う。夜は権兵衛という関東煮屋へ案内されたが、大阪あたりといささか趣が違っていた。

路郎先生は関東煮屋ですき焼が食べたいと言いたいことを言われる。女将の部屋を片付けてくれ、すき焼で互いの健康を祝福し合ったが、すき焼以上のご馳走は、女将さんが先生の句「子沢山僕の枕は何処へいた」の句をほめてくれたのはうれしかったとある。

うれしく飲んで鉄路新京へ。

みつる君に
君既に箸の長さになれしころ

十六日午前七時新京着、満洲屋旅館へ

新京は満洲国の首都で中部満洲の最大農産市場であり、付属地その他を合わせて人口十五万、うち内地人が二万とある。そこへ国都建設局が出来て、人口五十万を入れる市街地をでっちあげることになり、広っぱという広っぱへべらぼうに大きな建造物を目白押しに押し並べる設計が出来上っている。既にその三分通りは実現したといっていい。

路郎先生は建設局の処長を訪ねた時、銃剣を手にした衛兵が敬礼をして受付まで案内してくれたこと、局の天井の高いこと驚くべきものがあるなど、あけっぱなしの満洲を奇異と批判の眼で眺められる。

満洲協和会の人たちに会い、支那街の張氏二号邸跡も見て、満人の風俗習慣、迷信などについて得るところ多かったようだ。

翌十七日の朝、先生は宿舎満洲屋の玄関で中野柳陽氏と記念撮影をし、食事を共にして八時四十分のハルピン

行の列車に投じられる。

車中の寝台で虫を拾う

南京虫よこゝが新京いうところ

(66)

午後二特十分ハルピン着、旅館鶴屋に投じ市中見物、夜は立井登美坊君とその二令弟との案内で夜のハルピンを観る

新京、ハルピン間の汽車賃はベラ棒に高い。これが問題の東支鉄道だ。満洲国へ高く売りつけようとしているので現在はとれる限り高くとるんだそうな。

ハルピンに着いた。切符は乗車した時既に渡しているので改札の必要もない。従って収札口もなければ改札口もない。駅はあるが列車へは自由に乗れる。内地では見られない図で実に羨ましい制度だ。

路郎先生は支那街とその平康里（遊廓のこと）、ロシヤ人街、日本人街とりどりの匂い、松花江の春待つ姿に旅人らしい哀愁を感じられる。国際都市の異国情緒豊かな夜は、猶太系露人経営の百貨店や大衆レストラン、映画も見てキャバレーへ。露人は明け方まで踊り抜くのだそうだ。一時頃にロシヤ人の娼家へ出掛け、七八人の女性のウインクを受け、

売れ残りげに十目の見るところ　古川柳を思い浮べたとある。

酔っぱらって大きな声を出すのはロシヤ人と日本人で、支那人は酔っても決して高声を発しないそうだ。ハルピンを去る。

亡命に似て哈爾賓へこころざし

支那街のあれで金持とは見えず

スンガリー郷国を忘れた恋もする

三月十八日午前九時四十分ハルピン発、午後十時三十分奉天着、松代さん来奉

一夜泊りのハルピンが私に何を教えたかと二等寝台の上に寝転んでスピヤをくゆらしながら自問自答した。

私のこの二つの眼が見たハルピン、それは一つの事実であろうが、真実そのものであるかどうか。私は美しい虹を見て来たのではなかろうか。そんなことを考えさされる程、一瞥のハルピンは異色異香の都会であった。

車中の路郎先生は議員視察団一行の言行を批判的に、

兵士の二三人には同情的に観察し、前の席のロシヤ人と『週刊朝日』とハルピンの露語新聞を取り替え、文字の拾い読みをする。他国語には難渋することから、自国語と世界語の二つさえ知っていればいい時代が一日も早く来ればいいと思われる。後にエスペラントに関心の深かったのは、この辺りの語り口で推量されることだ。

奉天では往路と同じ江戸みつる氏の出迎えを受けたが、熱河在住の岩崎柳路氏夫人松代さんの顔もあったので、信じられぬほどに驚き眼頭を熱くする。「魂と魂との抱擁があった」との最大の表現は異国での切実な出会を感じさせる。奉天第一の娼家艶楽書館へ。

十九日奉天見物―奉天句会

観光は先ず清朝第二代太宗文皇帝の陵墓、北陵からはじまる。詳細な描写があるが要するに北陵の碧甍黄甍を支える朱塗りの柱や石門石階石欄壁間に施された彫彩は佇立久しうせしめるものばかりで、これをてっとり早く紹介すると鯛や平目が泳いでいない龍宮そっくりである。次いで喇嘛塔や奇怪な男女交歓の天地仏のある法輪寺、満洲事変戦跡の北大営、小盗児市場（五階下のゴミ市的存在）へ。夜の歓迎句会は石原青龍刀氏ほか十名余。

馬車（マーチョー）に我が人生を托しゆく
夕陽あかあか汽車は直線
北陵に来て良心を疑えり
戸外は雪がちらちらしはじめる。

(67)

二十日撫順炭坑露天掘見物、阿喜良、仙涙、矢車君等の案内

撫順への汽車に乗る。昨夜ロシア人と満洲人が殺されていたという渾河の鉄橋を渡る。

撫順では満鉄地方事務所で昼食、屋上から街の輪郭を知る。炭坑専用の電気機関車に便乗、露天掘の状況を視る。雪で真っ白の中を幾里走ったか知らないといわれる程に露天掘は広大らしい。あちこちで自然発火による煙が立っているので、路郎先生は小便をかけられたら煙が一層盛んに立ったので、「昨夜のアルコール分の燃焼だろう」と洒落たものの小屋に燃え移りそうで安心してもいられない。

句会は日本式旗亭の格式ある日の出館。

一同記念写真に並び、写真屋がシャッターを切ろうとした瞬間、熱河から岩崎柳路氏が汽車、飛行機、汽車と乗り継いで到着し、劇的な再会となる。句会後、終列車で奉天へ。

此処で死ぬつもりはないが採炭所
旅行先あんなところに陽が落ちる

二十一日奉天を去る。同日午前十時五十六分鞍山着、昭和製鋼所見物

製鋼所全工場の作業期には日本人二千人、満洲人八千人の従業員が活躍する。

午後一時から天祐居で句宴あり、前夜雑貨商を襲うた匪賊射殺事件が話題の中心となる。

生甲斐に韮葫の国に来る
馬賊には馬賊の仁義死んでゆく

同日夕べ鞍山発湯岡子着、對翠閣温泉に入浴、同夜十一時二十六分で大連へ

二十二日午前七時大連着、涛明君らに出迎えられナニワホテルに投宿、午後市中見物

満洲の大玄関大連を、私は朝鮮から北満へと逆コースをとったために一番最後に踏んだ。

大島涛明氏らの出迎えを受ける。この日、満洲日報の函館大火の号外を見て、亀井晟修君等の身辺が気づかわれ、すぐ打電する。

市街見物は、三泰油房の身に一糸も纏わぬ裸作業、ロシア町、波止場、小崗子の露天市場、連鎖街など。夜は満洲土建協会の楼上での歓迎句会に臨む。参会は二十五名、「満洲と川柳」の題で五十分、例を列席の岩崎柳路夫妻に藉り、人間陶冶を内容として熱く語る。

翌二十三日は柳路夫妻と三人で旅順に遊ぶ。水師営へも行く。夕べ旗亭湖月に招かれる。興尽きてダンスホールペケロやカイラクへ。

柳路氏の奨めで宿を海の香の高い老虎灘の千勝舘へ移す。街の中央館で映画「愛の出船」を見る。後、ミス・ダイレン、カフェーワカナの二階へ押し上った。

翌二十四日は雪が降っている。私たちの家が真っ白だと先生は書かれる。朝から酒にする。相手がなくて淋しいだろうと松代さんが千代鶴という女を大連から招んでくれた。十七だと言っていたが色気なしの妓だ。

夜、商店街へ出て、支那緞子屋や宝石屋、それからそれと見て歩く。満洲人経営の銭湯ものぞいた。旅なれば

こそである。

僕未だ五十を過ぎず老虎灘
惚れられず惚れずに帰る老虎灘

朝の十時のうすりい丸に出船を知らす銅羅が鳴った。大連波止場はテープの波、やがて一筋の煙を残して消えてゆく黒点。私は高く帽子を振った。柳路夫妻の顔、三幅君の顔、涛明君の顔、その他の人々の顔、顔、顔が見送りの顔、顔、顔の中に消えた。

甲板の風よ大連よいところ
わたしひとり内地の春へ帰る船

(68)

路郎先生鮮満川柳行脚での歓迎句会は記録では七ヶ所で持たれた。題と選者と至極限られた句のみを掲げ、当時の鮮満の柳人と句の傾向の一端を止めておきたい。(原句のまま)

京城句会　「旅」路郎選「喜び」正木柳建寺選「ホテル」橋本言也選

四五日は己が天下で居れる旅　翠人
また友に逢ふて旅路が狂ふなり　麗月冠
旅なればいっそ淋しく寝てみたし　可宵
喜びの夫人神戸へ出迎へる　喜笑
喜びが一月早く慌てさせ　笑門
インチキのホテルとは後で知ったこと　紀太
温泉で会った女に逢ふホテル　翠嵐
暫くはホテルで暮す新婦朝　文丸
人力車ホテルを長い列で出る　水味

平壌句会　「雨」路郎選「恋」路郎選「最合傘」可敷選「持寄」春魁選

猛烈な応援団も雨を逃げ　楽文
自動車で行く土砂降の面白し　夢月
駈落といふ風でなしモボとモガ　錦魚
恋といふか歯痒い其の日〳〵なり　京平
最合傘雨はそんなに降ってない　秋外
急用の女房の傘に久し振り　柳也
持寄りは人の物から箸をつけ　可敷
持寄って刀剣の座の静なり　夢也

安東句会　「見送リ」路郎選

袂別の夜眞実を聞かされる　銀波

見送りが済めば着物の話なり　荷草
見送ってしまへば用のないお方　仙峰
見送りもせずに呑んでる横着さ　すみ子

奉天句会　「馬車（マーチョー）」路郎選

「満洲」青龍刀選
馬車に一人で乗った手のやり場　青龍刀
満洲語二つ三つ吊り籠の鳥　圓平
北浜を出て満洲に居る噂　木耳

撫順句会　「旅」路郎選「便箋」天弓選

「客」柳路選
妻や子を夕日へ思ふ旅にゐる　天弓
旅日記いつも寂しい時に出し　喜代次
皆無事か自分も無事と旅の父　岸柳
便箋の罫を無視した忠告文　矢車
達筆を持ち便箋の物足らず　仙涙
来客にもう恥しい女の子　松代

鞍山句会　「生」路郎選「急」路郎選

カンテラの光に重い日を生きる　可鳴
障子張り替へ生花も取り換る　柳路
五十年生きて天秤だけ残り　路晃

急行で去る師心に影を置き　水呼坊
急いでる訳は話さず逢ひに行く　みつる

大連句会　「笑」井上麟二選「崩」宮武如蛙選

「熱愛」大島涛明選「心」路郎選
笑ふにもゲーペーウーがはゞかられ　宗嗣
血を吸ひこむ大地の微笑　雨明
朗らかに笑ってそれが渡世です　磊笑
笑ってるにしては淋しい笑顔です　満山
笑ったまゝ死んでゐる　雅堂
萌え出づる春様々な世が映り　青海
春耕資金論議なかばに草萌える　凹一
父の無い子へ母の愛過ぎるなり　三碧
熱愛の二人になると黙り込み　蝶古
熱愛へ女将笑へぬ事を聞き　水母
熱愛のさめてはむごい人となり　阿喜良
生活苦やさしい心すり減らし　佛心
安心をさせるに借りた金を積み　草明
心中も出来ない程に年をとり　一徹
妾宅で妻子の事も思ふと云ふ　清子

(69)

三月下句、朝鮮満洲の川柳行脚を終えた路郎先生は四月五日には上京して「きやり十五周年記念句会」に出席、二十二日には川柳雑誌社四国支部連合会主催の「四国川柳大会」へ。その間に観桜句会と相変らず精力的だ。

夜桜と動物句会

天王寺動物園が拡張されて東洋一の偉容を誇っています。夜桜の鑑賞旁々御出席下さい

日時　四月十四日（土）午後六時半
場所　天王寺動物園
講演　「川柳と動物」　林　園長
兼題　「リタ嬢」三句　麻生　路郎選
「夜桜」三句　福田山雨楼選
会費　金参　拾　銭（入場券進呈）
（幹事）　鶴峰、里十九、夕鐘、冬光
主催　川柳雑誌社

右の項が桝組に広告されている。

朝日会館での「川柳の夕」をはじめ、若草山の山焼きに協賛しての川柳と花火大会、あやめ池遊園地での園遊会的催しなど、川柳の社会化のため種々の試みに挑戦するのが常であった。これらの催しのあと雑誌の面には、前田雀郎捌「袂の塵」脇起歌仙という珍しい記事、林佐市動物園長の「リタ嬢について」また岡田某人の「川柳動物園」など前後に関連記事を掲載、読物としても興味深い雑誌への尽力を借しまない。執筆者も豊富、編集人も橋本緑雨、福田山雨楼、麻生葭乃、楊井二南、住田乱耽の諸氏で充実していた。

夜桜と動物の句の一部を記す。

桜散るキリンの首へ二三片　小松園
仲のよいキリン揃えの寝巻着て　禿　山
アドバルンキリンに遠くのどかなり　司　郎
ネクタイが欲しい姿でキリン立ち　路　郎
夜桜の子供一枝ほしいなり　雀踊子
夜桜へ救世軍は嫌われる　春　光
夜桜の灯へ立って国の事　言　人
夜桜へ一丁先のキネマ街　乱　耽
夜桜へ親子三人紙を布き　黙　平
夜桜も更けて大学生の唄　四呂平

夜桜を二階から見るハーモニカ　豆秋
夜桜に愛人の足棒になり　山雨楼
リタ嬢に安心をして帰る嫁　白柳子
リタ嬢は不良少女と云うかたち　夕鐘
リタ嬢はいくら稼いだかは知らず　渓々

路郎先生の席題「キリン」の軸吟が一番概念的であるのがおかしい。それは「うがち」の大切さを無言で教示されているような気がしてならない。路郎先生の秀句にはこの概念的な内容を盛り込んだものが多い。「俺に似よ」も「寝転べば」も「酒とろり」もそうだ。表現力の卓抜さ、リズム感の高揚が凡庸から救っているのだと思う。概念こそ大切だ。

路郎先生の近作、二月号からのを並記する。

日の御子御降誕にあやかりて

伏屋にも一月廿日男の子
子沢山僕の枕は何処へいた
止むを得ずした孝行をもてはやし
庭の広さが老境をおもわせる
春の寺香具師見ただけで通り抜け
パンとミルク株が上った顔になり
酒か欠伸か人生の悠久さ
慰藉料で養子をもらうことになり
一升提げて邪魔をしにゆく

悼　緑雨夫人

時計がとまった淋しさですよ僕等にも

後年出版の句集『旅人』には、この句の下句は「僕にも」と推敲、掲載されている。

(70)

川柳は不易流行、世の移りや人情の変りようにつれて変化して行くもの、変らねばならないものと思う。しかし、識者の見るところ最近の作品より戦前戦後にかけた時代の句柄の方が、川柳としての味、感銘度が深いと言われると考えてしまう。

これは心ある川柳人ならいつの時代にも抱いている想いで、過去を懐かしみながら現状には満足出来ずに、齟齬考え迷うのである。

次は昭和九年五月五日と日付けまで記されている手軽なエッセーだが、あの洒脱無礙な食満南北が「面白かっ

た其頃」と題して書いたものである。

☆物を食べてもヴイタミンAのBのと言わなければならない今日では、うっかりカラスミで一パイものめない。

☆無論私等には解らないむつかしい議論をなさる今日の柳界には、とてもうっかり川柳なんか作れない。

☆そう言うと昔は面白かった。もっとのびのびしていた。ソリャ私も若かった。路郎君と五条へ行って講演をした時なんど、

「オッサンはよやめて活動写真うつしてや」

なんて言われて手をうって喜んだ時代。芝居道で流行るいろはたとえのような道斎というのを一晩ブッ通して半文銭君が見物していた頃。ワッショイワッショイと私のうちへお医者、芸者、新聞記者、長唄の師匠、そうして川柳家が押寄せて来た頃。

☆川柳十夜だと言っては水府君の家へ寄り。京都の会だと言っては祇園で居つづけをしたり。田植の会だと言っては新町の楠瀬君の楼上から植女に声をかけたり、扇雀君までが川柳の会に来たものだ。

☆若久という芸者の屋形で会があったり、すまんだという阿弥陀池の名物蕎麦やゆばじきなどでのみながら作ったり。

☆私はそれでいいと思っていたのだが世の中はもっとむつかしくなって来たのだ。イヤむつかしがると言う方が当っているかもしれない。何にしても古いとか、新しいとか、まわりの肴屋の鯛をつかまえて叱言を言うような事を言わなければならなくなって来たのだ。

☆勘し付焼刃でそんな事も言うて見ようと考えて、現代常識辞典や、川柳作句辞典なども取寄せてボツボツ読んで見たが駄目だ。私には解らない。言えない。論じられない。

☆やっぱり柳樽の北斉ばりの絵の描いた、娘を口説いてはねられてあたまを掻いている方がピンと来る。つまり古いのだ。

☆そうした柳樽は自然に亡びて行くのであろう。しかし、それは淋しい。和布の神事という芝居や、ダンタラとか柿木金助のようなクラシックな芝居がもう一度道頓堀で見られないだろうか。

☆五十年追善になった初代延若のような奥行のある役者はもう出ないだろうか。

☆しかし若しも内容ある新らしさに出っくわしたら、ど

んな古い男でも無条件で受入れられるのではなかろうか。

☆あむないあむない、議論なんかするのではなかった。

☆面白かった其頃を思い起こして何だかハカないような気になってとうとうこんなものを描いてしまった。

「面白かった其頃」の川柳界の様子も面白いが、最後に「内容ある新しさに出くわしたら」とあるのに、深く心をそそられる。

(71)

この年、川上三太郎は「蒼々亭閑談」と題する一文を書く。その一部分を抄出する。

この頃句語という言葉が諸方の柳誌に散見するが、あの言葉をこしらえたのは僕である。ところが僕の言う句語という言葉の内容と近頃用いられる内容とは少々相違しているようだ。一般に柳界で用いられている内容は、四畳半、長煙管、フト、恙なし—というような川柳家が好んで用いる言葉、若しくは川柳的に或る約束を持った言葉—たとえば四畳半といえば特にことわらなくても男と女の差向いと解するのが、常識になっているように—そうしたものを呼ぶ時に句語という言葉を用いている。然し僕の言う句語はそうではない。

一句中絶対に動かすべからざる言葉—それが僕の言う句語である。僕の句を例にすれば

物干で日本を見てる居候

の場合「日本」が句語なのである。これは「東京」でも「大阪」でも「京都」でもいけない。絶対に日本でなければいけない。然し

大日本天気晴朗無一文

の場合の日本は句語でない。句語は無一文だ。

十二月某日猫の歩くを見
友だちのうしろ姿の有難味
天皇旗九千万のぼんのくぼ

以上拙句圏点の付いている言葉が句語である。話は別になるが、川柳にはこの句語が絶対に必要かというとそんな事はない。句語なんかなくったって佳唱がある。

肺をやむことをかくしてどうする気　静　太
面影の君は余りに気高くて　遊　舟
人間にこんな嬉しい時がある　小　松

然しこうした句は或は全部が句語であるとも言える。

僕の句語はこうした意味に使うのである。だから一寸面白い言葉だと思う。

○

関西の川柳家はよく地名を詠み込む。東京の川柳家もかなりやるが関西の人には敵わない。これもピタリと行った時には好いが、そうでないと捕手邪飛みたいなバカを見る。僕の句にも地名を詠み込んだのがある。

深川へ半分消える稲光
蛤鍋に東京湾は雪ばかり

だが誰だか句主を忘れて申し訳ないが

子を抱いて堺を見たか京見たか

という句を読んだ時、僕は思わず手を叩いた。これだこれだ赤ン坊を抱いてアッチを向かせたりコッチを向かせたりしている男親の瓢軽さもさる事ながら、そうやられている赤ン坊の顔が僕にはチラつくのだ。「堺を見たか京見たか」は全く好い。

夏になると僕は義矢満君の

雷は河内へ落ちた冷やっこ

の句を思い出す。これも地名が実にピタリと来ている。僕は河内という国を知らない。だが地図で見る近畿の諸国の中で、河内という字は懐かしい。雷、河内、豆腐——こう考えただけでも僕は無類の爽快さと万斛の冷味を覚えるのである。

○

この間ボレロの十二吋型を買って来てそいつをかけながら、コップへ冷酒をついでゴクリと三杯ばかり飲んだが、好いレコードはバーや何かと違った味のある酔いかたをするので愉快だった。レイシュというのも去年あたりから東京では流行りだした。然しこればかりは関西にはかなわない。

(72)

この頃の編集部の顔触れを見ると雑誌の充実した成果も頷ける。それで今一篇川村花菱「人と芸術」（川柳と俳句についての一考察）なるエッセイを転載する。

つくづく口惜いと思う事、しみじみ残念だと思うことがある。茲に一言おうとする事は、柳樽にも武玉川にも句主の名前がないことだ。

何故そんな事を考えるか、それについていさゝか自分

の考えを申し上げて見たいと思う。

古池や蛙飛び込む水の音

とだけあって、もしこの作句者の名が無かったら此の句を禅味なりとし、あるいは平凡なものであるとして、甲乙互に論じ合うことがあるだろうか。

一つずつ蛙を仕舞う水の音

柳樽にこの句があるが、これこそ、芭蕉の古池やの句を川柳式に表現したもので、パロデーとしての興味だけは感じるが、それ以外にこの句独白の価値について論ずるものは一人もないと言う事も出来る。

芭蕉の句、一茶の句、蕪村の句、そこに名句もあろうが駄句もある。然しそれぞれの俳人が詠み来った数千数万の句を一とまとめにして考える時に、批評家は必らずその俳人と俳句とを同時に考えているのである。作者を離れてその句だけを考えることをしない所に俳聖芭蕉の評論があり、一茶蕪村の評価が出来るのである。俳人そのものの人物、性行、逸話、即ちその人それぞれの生活全体を考えて見るところに、単なる十七字詩がその背景の力に由って、更に多くのねうちをもって考えられ十七字のよさ、うまさが、引いてその俳人の人格をも引上げたところもある。人と芸術の問題が俳句ほど密接に考えられ論じられるものは尠い。俳人が行脚する場合、その句とその俳人の性行人物にあくがれるものは、さながら名僧の来たようにこれをむかえ、これに会い、これと語ることを精神生活の上にどれだけ多くの歓びを感ずるか分らないのであるが、句だけ残して名を残さなかった川柳詩人―柳樽の投句者が行脚したとすれば、恐らく一市井の皮肉屋が来た位に考えて、これに慕い寄るものがはたして幾人あったであろうか。

柳樽の句主、武玉川の句主には、必ず幾多の俳人に優るべき人々があったにちがいない。

何故柳樽の句主、武玉川の句主は自己の名を表わす事をさけたのかと私は残念に思うものである。が、そこに又川柳詩人の心境をもうかがいつくす所もある。川柳詩人が一つの洒落者であった所にも、自分の名を売ろうとする事を避けたのであろう。あまりに平俗な詩形は、素人にも川柳が詠め、いやになればすぐ止めるという江戸者の独特な気軽さが、遂に川柳を心のなぐさみにした点もあろう。ねばり強さ、やりとげなければ止さないという辛抱強さの欠乏が俳句に比べて川柳の弱さであるとも

考えられる。無責任な放言に等しい人生批評に対して、特に名を秘したという心持ちもあったのかも知れない。いずれにしても川柳が、人と芸術の問題から離れて残ったという所に、作品そのものの価値が非常に低く考えられるうらみがある。

「伝湯浅又兵衛」と言うよりも明かに作者が知れている画の方が、大衆には安心され信仰されるように、あの人の句か、あの句をよんだ人はあの人かと、作と人を並べ考える所にその句が更に味わわれ、その人が更にしたわれる事は事実である。柳樽に連なる多くの句の中には、あるいは此の句は此の句を作った人の句ではあるまいかと考えられるものがある。人生に対する見方、考え方、そこに同じ態度と同じ焦点とをねらっているものを見出す事がある。一つの名句に対する作者への信頼は、他の平凡な句に対しても一つの信頼と親切とを持って研究しようとする。此の句のよめる人ならと、更に同じ句主の句を探したずねる心持ちもある。川柳が人と芸術を離れて考えられなかったとしたら、今日まで幾多の川柳詩人の評伝が残り、そこに人生批評家としての詩人の生命は永久に生きて行かれたろう。

詩か人か、人か芸術かを考える時に、私は先ず作品よりもその人を多く考え深くながめようとする。芸術はその作者の人の問題だと考える。作品のみ残されて、その人の知れないという事が、川柳を一般から軽く見すごされた所以である。

作者に対する信頼は、その作者の試みに対して吾々は厚意と親切とを以て対して行く。無名の作者が同じ試みをなした場合、吾々はそれを何と考えるか。

画に落款があってはじめてそれが完成した作品であるように、俳句の下に句主の名があってはじめてその句が独立する。川柳に句主があったら、柳樽、武玉川に対する信頼は実に百倍の力があったろうと思われる。

よき句を作れ、しかして作家は自己の名を公表する点に於て充分の責任を持ち、更に深く、更に大きく、自己の人間をきづき上げなければならないと考える。川柳愛好者は人を見、作を味わい、更に一層の信仰をそこに持つ事が出来るだろう。

かりそめに歌い残した端唄小唄のそれのように、川柳をよみ捨てたという所に川柳詩人そのものの意義があるのかも知れないが、反対に、そこに又川柳が俳句と同列

の品格を保って、後世に残らなかったうらみもある。

はたしていづれが川柳として正しい道であったであろうか。私はこれをもっと考えて見たいと思う。

明治大正を通って、川柳は最早や研究時代を過ぎて作品の時代に来ているのではないか。過渡期はすぎて現代川柳の完成に近づくべき秋に来ているのではあるまいか。

川柳の水平運動は、幾多の人々によってしばしば考えられ企てられた事であるが、作と人との問題について、川柳と俳句を並び考えられたものはないような心持ちがする。

私は昔の柳樽、武玉川を読む事だけ知っていて、これを研究する道を知らない。その道の先輩が、もし柳樽武玉川からその句主をたずねさがす事をしてくれたら、幾多の川柳詩人は、茲にはじめてよみがえり川柳に対する一般の信仰は改めて大きなものになるだろう。

此間、武玉川八篇の中から、十七字の川柳をさがして評釈して見ろと三太郎に言われ、私は又武玉川を読んだ。

野慕と云う字が今よめて夢枕

という句にぶつかって私は胸をうたれた。涙が出て来た。何と言う奥床しい静かな境地だろう。何と言う悟り切った心、澄み渡った人、であろうと考えた。

此の句に句主の名があったら、私はこの句主の名を更にたずねて、もっともっと教えを乞う様になったろう。

一つの作品に打たれた私は同じ作家の作品を更に更に読みあさって、もっともっと深くその人の心を知ろうとするだろう。柳樽の句、武玉川の句、打たれても、驚いても、私は再びこの作者の胸にふれる道がないのを悲しむ。

現代の川柳詩人も、人と芸術の意義をもっと考えて、よき句を詠み、その句から吾々がその人をたずねさがすような心持ちにしてくれたら、川柳はもっとよくなって行くのではあるまいか。

(73)

春雪食思　　正岡蓉

――ことしの晩春の日記をみる。――曰く、『沈丁花咲き、素袍桜も庭ざくらも山吹も飴桃も源平桃も、小庵の樹々はればれ蕾も含らませているのに、けさは雪』

春の雪は消ぬがに降るべき風情なのを、けふのは霏々と小止みなくふる。――正に萬延元年元巳以来……とい

ふやつである。こんな日にはさしづめ鍋ものが好ましく、貧しい厨にも青葱があるから、一と皿なにがしのあらでも購い求めて、ごく、さつかけなく、ぐづぐづ煮てみやうかとかんがへてゐる。

　配するに寒さを凌ぐ茶碗酒……もよいけれど、このごろ自分は、余り我が家では親しい友だちでも来ないとのみ度いとおもはない。

　……昔、細長い都々一の本を持ってゐた。開板年月が誌されてゐなかったが、弘化辺りのものらしく、その口絵に雪だるまのわきに丁稚がゐて、だるまの上には鰒と葱がおかれてあった。その絵の鰒への食欲を、さればいまも忘れかねて雪がふるとつくづくおもふ。——こういう構図はどうしても江戸らしいが、而し、この本、版元は浪華だ。最も例の四月に鰒をくらって死ぬ『らくだ』が、もともと大阪噺であることをおもへば、何も雪だから、鰒だからとて、木場辺りのしょうさい風景に独専しちまふ手はないであらう。それには

　〽橋の下には鷗が来やる、木津や難波の橋の下……と旧い、哀しいお、さかの子守唄は、こうして江戸と同じく並蔵の多い河岸のしじまをもおしへてくれるのだから——。

　——序にたべもののことは余談になるが、

　〽拙者　この土に用事はないが
　　お顔みたさにまかり越す

というのがあった。——いかにも故しん生の『棒だら』や、桂圓枝の『口合茶屋』へでさうな勤番侍の口吻がうかがへておかしい。

（中略）

　——所で、自分なぞことしからまた高座と文筆の二足わらぢだから、成可、時間を有効につかって、あそぶときは大いに近郊の旅へでて、英気をやしなひ度い所存だ。

　片桐千春とでもまた武州飯能の春にあそんで、東雲亭で、暮春の野のもの、山のものに親しみたい。たんぽゝの花のおひたしに——名栗川の鰻も、これからは美味しくならう。鰍のあぢも、飯能はぼくをこよなき楽しみにさそってくれる。——さて春の雪は未だ熄まない。

『抱きしめて逢う夜は雪のつもりけリ』

という憎い句がたしか泉鏡花にあったが、あんな境地もしみじみ恋しい。ぼくにも、雪ふれば鰒のやう、切々とおもふ女優くづれの、酒場をんなの人妻がひとり丈けは

あることをかゝせてもらって筆をすてやう。

雪は――春の雪は、未だ熄まないできれぎれにふる。

今夜はよほど、つもるであらう。

――さて、どうして季はづれのゲンコーをあへてかいたか。六月朔日は、古川柳に

御献上富士さへ蒼くみえるころ

とある。即ち、加賀さまから冬ぢう貯へた氷をば公方さまへ献上、のこりは加賀鳶の手でちかくの町人たちへ配られた。

それをおもひ、これをおもへば、九夏三伏、あへて、たゆたな春の雪をしるした、これの小片も、一服清涼のたつきとなるであろうかと、あへて爾云。（旧仮名遣い原文のまま）

雑誌の編集はかくありたきもの。有名人による硬軟こもごもの原稿は興味が尽きない。

(74)

川柳怪異想誌

――うら門のひとりでにあく日永かな　一茶――

岡田某人

◇金の番とろ〳〵としてうなされる　初篇

およそ怪異と名付けられるものの本体は、如何なるものであろうか。枯尾花に幽霊を見、月光に鬼哭を聞く、何によって来るのであろうか。ただし茲に言うのは「怪異」であるが故に、お盆興行的な幽霊乃至は見せ物めいたお化けの類は扱われなく、しかも現世的見方感じ方に終始する川柳の世界に、普通期待される怪談なるものを探すのが無理というべく、一読過した柳多留初編より八編までに僅に十指を屈するに足らず、辛うじて得たそのものが、一として超現実なものでないことも見逃し得ないことであろう。

転居の紙をなぶる五月雨　初篇

◇鶏の何か言ひたい足づかひ

したがって私が茲に怪異として取り上げたものも、一見何の妖しさもなく、素材に於ては何処までも一個の動かぬ現実であり、数千百の他の句と同じ世界を見ているに過ぎないものなのである。其処には何らお芝居めいた因果もなく、伝説もない。お膳の上に置かれた茶碗のようにあたりまえの現象なのである。にもかかわらず私は、私たちはその短い十七音の中に、ある種のおののきを覚

えるのだ。

寝息静にもれるあばら家　二編

◯狐火の折々野路をほころばし

別に其処に山気があるわけではなく、こしらえもののあやふさ、どぎつさが微塵もない。あるものは只、十七音字中に移された美しい物の見方、感じ方のみであり、幽玄な第三世界からの微光ばかりである。

裾のみじかい友の白膸　四篇

◯新尼のわれをいやがるかげぼうし

すべて予期せざるもの、知識以上のものらを怪異とするは、初歩の意味に於ては肯けもしようが、それらもろもろの不可思議は、ここに扱われた怪異にはやや遠く、科学的努力によっていずれは解明され、いつかは常識にまで落ちぶれる運命にあり、真の怪異とは名付けがたいものである。しからば真の怪異とは…。

凄い音して落ちる八ッ手葉

――（二句二章省略）

◯ひとりでに釣べの下る物すごさ　五篇

茲に到って、怪異もまた極まれりと言うべきであろう。理窟も議論も理性もない。徳川の昔、丁髷を備えた頭の中に慄然たるものを与えたこの一現象は、昭和の今、コンクリートと金属に囲まれて暮すロイド眼鏡にも、一読慄然たらしむる力を蔵しているではないか。

それが些も懸引のない実在であるが故に、われらの神経が衝撃される力は減じない。この恐ろしき十七字の前には、わが畏敬するラフカディオ・ヘルンこと小泉八雲のKAIDANも、実は少年少女の読みものに過ぎないとの感が深いのである。

ひる寝の汗がおのが身の丈

岡田某人という才人には時折り感じ入る。柳多留は一篇平均四十丁から四十三丁、一丁十八句が掲載されている。八篇までだと概算して六千句、怪異川柳の中に「鶏の何か言ひたい」やここには省いたが「おさへればすゝき」の句を入れているのも独自の解釈があるからだ。

一寸異なるが、四国霊場巡りをした時期、見えぬ光、聞こえぬ音を聞こうとしたのを思い出し、子供の頃のおそれおののく心情をもってもう一度川柳に対して見たいと感じた。

(75)

この年の九月十一日井上剣花坊が死去、路郎先生はその夜の川柳雑誌社主催の柳翁忌句会（実際の忌日は二十三日）で故人の追憶談をされる。たまたま東京から高須啞三味、品川陣居、山川花恋坊の三氏が臨席されていた。

十月号には「剣花坊逝く」と題して告別式の様子が次のように書かれている。

我が社の柳翁忌句会で井上剣花坊氏の訃を知った。十三日の午後二時から告別式が終焉の地である鎌倉の建長寺内正統院で営まれるとのことだったので多年の交誼を想い、最後の告別式に臨むため十二日の夜行で鎌倉へ向けて発った。私は十三日朝鎌倉へ着すると直ぐ様建長寺に向った。

涙の信子夫人、令息令嬢等に久しぶりに遇った。信子夫人は淋しそうに剣花坊氏の近時の心境を語られた。私も同情の涙をのんだ。

告別式は壮厳に執り行われた。阪井久良伎翁の弔詞に亜いで故人が主宰した「川柳人」の編集局中島国夫君の悼辞があった。久良伎翁は霊前に起って猶且つ故人の対立者としての柳論かを滔々として陳べ、遺族席をして色をなさしめた。故人は黙して語らず参列の柳人をして啞然たらしめた。久良伎氏は何処までも詩人たるの態度を保持せられたのかは知らぬが社会常識上故人の霊に対する非礼の罪の大なることを想わねばならぬ。氏が常に説くが如く川柳が社会人の共楽の詩であるとすれば猶更のことである。この点門下中島国夫君が恩師に対し切々たる衷情を披瀝した弔詞に至って、はじめてホッと溜息を洩らし、思わず涙を催したのは遺族席ばかりではなかった。次いで悼句、弔電の朗読があって式は閉じられた。私は「川柳人」の岡本嘘夢君の悼句「先生と呼べば坐布団だけすわり」に胸をうたれた。葬儀が終ると参列者は型の如くに散って行った。私も遺族の方々に挨拶を交わし、嘘夢君に送られて門外に出でバスの来るのを待合わしながらこんなことを考えていた。

式は壮厳だったが、これが明治、大正、昭和の柳壇に多くの犠牲を払いつゝも奮闘努力を惜しまなかった剣花坊氏の告別式かと思うと何だか物足りなかった。なるほど東都柳人の姿こそは見かけたが葬儀は単なる井上家の

告別式に過ぎなかった。そこが私の物足らないところだろうと思った。生前の主義主張はとも角、川柳を明治に復興せしめるに與って力ある剣花坊氏の死に対して東都柳人は何故柳壇葬の礼を以てしなかったのか。東都柳人人無しと言えぬのに何故先輩諸君は挙って葬儀委員たらざりしか。剣花坊氏に徳がなかったのであると言われれば何をか言わんやであるが近藤飴ン坊氏の訃に一掬の涙を濺いで建碑の労を惜しまなかった柳人諸君ではなかったか。この点余りにも感情的だと言われても遁辞に苦しむだろう。

又私は思った。

東西柳人の交歓が日に月に旺んになっている今日、日本全国の新聞紙が挙って報道したこの柳豪の訃に接し、関西より（私を除いて）一人の会葬者を見ることが出来なかったのは甚だ遺憾であると。

今や剣花坊亡し。かかる愚感の何等益するなきを思い私は愴惶として鎌倉をあとにしたのである。

以上が路郎先生の告別式所感である。阪井久良伎、井上剣花坊、次いで岸本水府、麻生路郎の対立したカリスマ性は既に絶えた。

(76)

路郎先生は十月十五日橋本緑雨氏から川柳雑誌社の事務所を引き取ってくれとの書信に接する。緑雨氏は、その年の四月二十六日に夫人外喜さん（行年三十四歳）を失くされた痛手に加えて、ご自身の手術後の体調も思わしくなかったのが理由であった。

先生はこれ以上無理を強いることは出来ぬと、事務所を天王寺区上汐町一丁目に移す決心をされる。同人増井汀柳、山本雨迷両氏を編集同人に推し、雨迷氏が緑雨氏の後を継いで総務の椅子に就くことになる。それ故雨迷氏主宰の『玉むし』は十一月号（八十一冊）を以て終刊となった。

上汐町の事務所は堂々たる洋館で、階上の洋室が編集室と柳談室に区画され、囲碁、将棋、卓球などの娯楽設備も揃っていたので、川柳会館、川柳倶楽部の観があった。屋上のバルコニーからは眼下に道頓堀の歓楽街の灯が見え、川柳から盛り場の夜へ歩を運ぶにもさして遠くはないところにあった。

昭和九年、川柳界に於ては井上剣花坊師の死去、川柳雑誌社では事務所移転の年、路郎先生個人は朝鮮満洲川柳行脚が特筆される。

この年の川柳界有名人の一句を記す。

子沢山僕の枕は何処へいた　大阪　麻生　路郎
すき髪のナチュラリズムを讃美せむ　大阪　麻生　葭乃
軍犬へ顔をそむけて村の犬　奉天　石原青龍刀
秋風立ち初めて釦探すなり（亡妻の一周忌に）　東京　藤島　茶六
咲く花があり散る花の忘れ勝ち　青森　後藤蝶五郎
嘘をつく心に少し余裕あり　大阪　堀口　塊人
無抵抗神か白痴か美しさ　東京　井上　信子
啄木は亡し故郷の山はあり　大阪　岸本　水府
わが上に屋根のある幸雨の音　東京　川上三太郎
正月は遊ぼういういそがしさ　御影　食満　南北
しらじらと雑魚寝の夜は明けかゝり　青森　小林不浪人
秋の風大工一人の鉋屑　東京　三浦太郎丸
一人居て一人楽しむ三下り　東京　村田　周魚
手伝えて蚊帳を畳めば鐶が鳴り　大阪　塚越　正光
白湯のんで悟った顔も秋によし　舞鶴　安川久流美
春もやゝ苦きもの置く舌の上　東京　前田　雀郎
時に磨かれた色なる奥の院　横浜　中野　懐窓
笑ってるように日の丸風に揺れ　大連　大島　濤明
気疲れて家族制度の国に住む　大阪　近江　砂人
大毎も止まり豆腐屋も止まり（風水害）　大阪　須崎　豆秋
海を見ず港の街の幾日や　神戸　椙元　紋太
親からの稼業がいつか世に遅れ　神戸　三条東洋鬼

(77)

凡聖一如元旦のこころ知る

昭和十年新年号の巻頭には三号活字で一頁に一句、この句が三行に分かち書きされている。句集『旅人』には

寝転べば畳一帖ふさぐのみ（一行）
君見たまへ／菠薐草（ママ）が伸びてゐる（ママ）（二行）
凡聖一如／元旦の／こころ知る（三行）

のように分かち書きで一頁に一句または二句掲載になっていること周知の通りで、路郎は句のリズム感を大切に扱った。

元旦に誰とも等しく交わす「明けましておめでとう」の清清しい気持ちは、新しい事務所からの出発もあって、路郎先生にはこころ更なるものを感じられての一句であったろう。

新年号特集は有名川柳人十七名からのエッセー「父と母を語る」、以下三名だけ抜粋。

父は幕臣　　阪井久良伎

貴問を伝統を尊重する日本の川柳家として敬意を払い升。父は幕臣にしてペルリ来船の際下田奉行配下と成り、後転じて金川奉行配下となり、横浜港地形整理に従い、後横浜税関副長となり大蔵省官吏に終る。漢詩に長じ川柳を作る。年六十一。母は山澤検校―胡弓日本一―の三女、江戸久松町に生まる。父に嫁し二男七女あり、久良伎其二男、年八十三。

俳人眉山　　岸本　水府

私の父は眉山といって俳句を一寸やっていました。父の持っていた短冊に「迎へけりまづ初としの朝熊山」というのがあったり、父が国を出る時友人から貰ったという「この里の味も忘れなあさり汁」、また私の生れた時友人が贈ってくれたという「行末は艦も浮べむ春の水」など今の私として父の友だちの句ばかり覚えていますが、父の句は一句も知りません。

父と砂糖　　麻生　葭乃

母は私の六才の歳に亡くなりました。私と二人きりになった父は三百六十五日粗末な机の上で、A＋Bはの鉛筆を走らせる外に時々私を連れて芝居や寄席や、川柳会へ行く事を楽しみにしていました。父は人に対して赤裸々な意志表示をせなかったので、唯無口な人変屈な人で通っていました。当然何とか返答をせなければならない筈の場合に、何のアンサーも無い時の父は、必ず憤慨していました。然し其憤怒の奈辺にあるかは凡そこちらで察しなければならなかったのでした。

「彦はんは変があるよってに」とは親類の人達が異口同音に父を評価する言葉でした。

或る日、父は私の母の里を訪ねるために鶴屋の生菓子を持って行きました。父は大阪一流の生菓子を堺の人達に宣伝するためと、又一つには里の人々をねぎらう意味

とで得意満々としていたのでしたが、父の嫂にあたる人が「こんな上等なお菓子は貰っても直ぐムシャムシャ食べて終うよって勿体ないなあ。其段お砂糖が一番重宝や」とうっかり口を辷らしました。

それを聞いて帰った父は、以来里へは中元も砂糖、歳暮も砂糖、手土産も砂糖で、父の一生をつっぱりました。

他に、涛明、南北、周魚、信子、不浪人、柳秀、三太郎、五花村、久流美、紋太、雀郎、五健、正光、路郎の諸氏、川柳人評伝の資料ともなる好読物である。

(78)

昭和十年二月号の路郎先生の巻頭言は

「何れにしても、人間の魂に点火する川柳でなければ、十七音字工作がいかに巧みにほどこされてあろうとも、それは沙上に描かれた閑文字に過ぎない」と結ばれている。また、編集長福田山雨楼は「川柳時評」と題し、柳壇の流れを次のように書く。

▽「きやり」の柳壇展望で花川洞曰く、「流行作家は枝葉の問題である。東京の雀郎、周魚、三太郎、大阪の水府、路郎の現役五頭目がシッカリ手をつないで呉れれば当分わが柳界は万々歳である」はどうかと思う。

▽手をつなぐと言えば聞こえはいい様であるが、それは無理な注文である。早い話が右の東京三頭目についてもそれぞれ吟社を擁しているではないか。寧ろ川柳の進歩からは各独立し相闘争する方がいいのだ。只ひとつ、文壇への押出しを図ることにおいて、その精神において結合すれば足りる。

▽路郎と水府にしても、この二人に握手を求むるのは認識不足だ。第一性格の相違がこれを許さない。路郎は詩人肌、水府は商売人肌、到底水と油である。次に句の傾向が違う。水府は甘い句、穿ちの句を嗜くし、路郎は寂しい句、主観句を好む。

▽三太郎は「文壇進出は却って大阪のように文壇のないところの方がやりよい」と言うが逆だ。日本の外交が国際連盟という本舞台へ斬込んだればこそ世界が日本を馬鹿にしないのだ。東京にいる川柳家は、束になって文壇へ挑むべし。

▽この前番傘の塊人が雀郎の説を反駁して、川柳家が川

柳家の悪口を言うよりも、川柳のよさを文壇に示せと叫んだことがあるが、それは一面観であった。雀郎は都新聞に「俳諧、厄払い」を執筆して俳人に一太刀酬いている。この論歩も必要であるが、併せて現代の川柳についても、名吟を示して迫ることを望む。

▽近来「川柳名句集」と称する出版が簇出する。結構であるが問題でもある。それは句主或は購読者への歓心に迎える、算盤玉の関係もあることながら、余りに名句に乏しく、然らざるものの多きことだ。「川柳の名句とはこんなものだ」と威張れるような句集が一つや二つなくてはならぬ。昔、川柳新星会から出した「一九二四集」など手本にしていい。

▽「手」で町二が「僕の川柳論」をものしている。そして川柳味を棄てて自由律たるべし、と叫んでいる。これは大分井泉水あたりにかぶれているが——よき意味において——斯くの如くにして川柳圏内へ後足で砂を蹴ることは淋しい。且つ苦々しい。

　夢路の言葉ではないが「川柳を愛し得る素質」が歪んで来たのではないかと思う。

▽井泉水の文章は読みよく、著書も多いので我田引水的理論にはつい引き付けられるが、これによって俳句を誤るものは尠くない。

（以下一章略）

▽概して柳壇が平穏である。覇気に乏しい。今年あたりからもう少しお互いに闘いたいものだ。互いに競い争い練り合うことが必要だ。

▽東西の交歓も結構だが、真の川柳の友達は浮いた心のときより、悲しみ合い助け合ったときの方が胸を搏つ。

　柳友の遊戯的社交と、吟社の籠城主義——これは川柳を毒する。

　右は現在の川柳界に通じるものが多々ある上に編集者のスケール意気込みを偲ばせる。

(79)

　その福田山雨楼の「編集の窓」を読むと

▽本号は意外の延刊となった。主幹の病気と編集に携っているわれわれが旅行その他の止むなき用務のため事を欠いたのである。

▽陶泓居松竹梅のつどいは乱耽記の通り、大変なごやか

な風流たっぷりなものであったが僕は年末からの風邪で欠席、正に千歳一遇の機を逸した。

などとあるので、今回は小さな記事にまで目を通すことにした。当時の柳界の様子が窺えるので後世に役立つ記事は書き止めて置くのは肝要事だ。

「誹風松竹梅のつどい」は一月七日陶弘居（芦屋の食満南北居）で開かれ、灘の松竹梅を飲みながらの作句と隠し芸の披露で、庵主を入れて十名の参加、病の路郎先生も出席、「松竹梅」の選をしておられる。

よせ書のこれで松竹梅になり　東魚
松竹梅はたきが派手に使われず　艸楽
松竹梅におい夫人もまた匂い　乱耽
貧しくも松竹梅は床にあり　汀柳

もう一つの席題「上戸」は庵主南北の選。

女にももてて上戸のよく語り　緑雨
陶弘居下戸は入るなと書いてなし　正光
靴のひも結ばせ上戸まだ行く気　路郎
鰭酒を半分残す泣上戸　正光
ことしこそ死ぬと上戸の面白さ　南北

一月十七日に「橋本緑雨氏祝賀の夕」なる功労章授与式が川柳雑誌社倶楽部で催された。川柳雑誌の第二巻八号より事務所を引き受けて雑誌発行に尽力された貢献による。また「上汐町から」の欄には各地からの便りが簡潔に紹介されている。次に一部を抄出。

▽京都の子鬼、甫三、司郎、黄子朗、治一郎、陸平の諸君は一月三日城崎温泉に行かれた寄書を頂きました。
▽名古屋三香会の可香、呂香、世香の三君は一月三日本社事務所、路郎主幹宅へ来訪。
▽村田周魚氏は三日伊勢大廟へ参拝されました。
▽富士野鞍馬氏は一月五日東京を出立、二十日頃まで北海道へ旅行されました。

一人旅冬のビールに味があり　鞍馬

▽白柳子居新年小集十日に催され寄書を頂きました。
▽小川百雷君は山村夏子嬢と岸本水府氏夫妻の媒酌で華燭の典を挙げられ、そのお祝の会は十二月心交社食堂で催されました。
▽橋本緑雨夫妻は一月十八日紀州白浜温泉に遊ばれました。

温泉へ二人で来るは始めなり　美那子
白浜は松原続きに湯の匂い　緑雨

▽岸本水府氏は十九日ＢＫより「八百八橋」を放送されました。
▽阪井久良伎翁六十七回誕辰祝賀会は二十五日、東京王子扇屋に於て催されました。
▽本社八束支部のある島根県津田村が松江市と合併されたため支部も松江支部と合流されました。尚同支部は本年五周年を迎えるため目下記念大会の計画が着々進捗しています。
▽剣花坊句碑建立の基金募集を発表されました。建立期日は昭和十年秋の予定、場所及び代表句の選定は未定、募集基金一口金五十銭としメ切は五月末日、柳樽寺川柳会宛。
▽福田山雨楼君は一月下旬松阪、和歌山へ出張されました。
社告の欄に「岡田某人君は本社同人として入社され社章78を交附しました」とある。

(80)

昭和十年五月号の路郎先生の巻頭言「川柳祭提唱」は次のように述べる。
柳翁忌とは別に川柳祭をやりたいと思う。全国各吟社が一斉に挙行するのもいいし、京浜連合、京阪神連合といったやり方もいい。
兎に角、川柳の正しい認識を社会へ植付ける運動としてやりたい。具体案はここでは縷述しないが、今よりも一層川柳を殷盛に誘導する精神の下に大々的に川柳祭が行われることはのぞましいことである。
川柳の社会化の常に先頭に立つ路郎先生らしい提言だが、後にこの夢が実現する。
同じ号に福田山雨楼記として、
「高知県安芸郡の川柳村」が紹介される。
高知県安芸郡川柳村で郵便が配達されるという羨ましい話題の村は、高知市と室戸岬との間の片田含の村だが、富田幸次郎氏や黒岩涙香氏を生んだ村で文筆風流に富んだ土地。
それが県下に流行の川柳熱に共鳴して朗らかな川柳村出現となったのは、十年前に高知の中澤濁水氏（同人、後に不朽洞会員）から手ほどきを受けたのがことの起りで、四百戸の村民は川柳の心得なくば交際も出来ぬとい

う。川柳会の中心は中川星水氏、名物のつぶを売る菓子屋で「川柳つぶ」の大看板には、「頬張って出る門口へ五つ紋」と広告に利用、出合頭の挨拶も川柳で交わす。氏はまた自句「故郷へ女房をつれて久しぶり」などをユーモラスに脚色し、川柳仲間を引具して川柳劇も上演する。昭和八年には村の入口、松栄山弘法大師堂境内へ高さ一丈五尺の「川柳追偲の碑――川柳村」を建立、除幕式、記念川柳大会を開催した。句会は毎月三回星水居で催し二十数名がたのしんでいるが近隣の町村からの仲間で六十名ぐらいの日もあり、川柳村の大旗を押し立てて歓送迎するという。

星水氏の言

「本当の平和、円満は川柳にあるという信念のもとに私は村を川柳化する決心でいます。

川柳村即ちこの世のユートピアです。どんな労苦も川柳気分でかかればたちまち解消されます。それで川柳同人はとても勤勉で仕事に精一ぱいですぞ。村長も村会も川柳党に引入れて、きっと名実ともに川柳理想郷を創造してみますよ。」とある。

現在日本一の川柳の町と自他共に認める岡山県の久米南町は、昭和二十五年九月に路郎先生の第三句碑が建立されて始動した。

それより二十年以上も前に川柳村を目指した村が高知県にあったのである。この記事を見て私は興味を抱き、川竹松風氏に電話をして川柳村の現状を聞いた。

松風おんちゃんの声は生き生きとしていた。

「高知県川柳村で郵便の着くのは川北村と言うて、わしの産まれた村でな」と安芸郡までがすっ飛んでしまっている。惜しくも昭和十二年の戦時色の高まりから下火となって行く。現在、川柳会だけは立派に続いていて、毎月松風氏が指導に行っておられる由、星水氏の娘さん中川和（本名和子）さんも会員の一人であると知らされた。

編集の窓の一項に、本社の川柳マッチは本社句会の出席者のみに呈上しているが、これを毎月揃えれば大変有意義なものであるとの好評を博している。出席者以外には絶対に配布せぬ川柳マッチを揃える意味にも句会に出席を、とあり、これも興味をそそるが、古老に聞いても詳しい様子は不明である。

(81)

路郎先生は数え切れぬほどに職業を変えられた。古本屋を営まれたこともあり、古書から得た知識も豊富であった。

「書斎にて」と題する文章には、橘守部系の歌人で明治初期に活躍した辨玉という僧籍の人の長歌集「瑯々室(ゆらむろ)集」(二巻、明治十二年刊、長歌二百十余篇を収む)から二篇を取り上げ、川柳作句への考察をなされている。辨玉には「由良牟呂集拾遺」と名付けた短歌集もある。その長歌二例。(元文のまま)

過横濱異人館歌

武蔵の海横濱の津は　まゐなぬる異国人の　わけてすむ町も八十町　やちまたにつゞく高屋の　庭ひろき厨を見れば　ゐの子は垣つに放ち　牛は杭打つなぎ　庭鳥はふせじにかへり　生膚をたちて烹らゆか　逆剝にはぎて焼かゆか　朝なのあへ夕けのまけに　しが親をとらくを知らに　しが子をとらくを知らに　遊ばひをるよ　鳥もけものも

(皮肉な風俗画を見る思いがするではないか)

看蒸汽車走鐵道偶爾作歌

久堅の空のどけきを　鳴神かいづれおちくる　龍神かいまきのぼれる　かきくらし雲ぞ起れる　鳴り響き音ぞとどろく　其雲はたく火の煙　其音は車の響　立ちとまり見るまもあらず　連れるやかたのうちに　ここばくの人つどへ乗せ　敷渡す黒がねの道走りて過ぎぬ

(一篇、文明の機関に対する驚異と賛嘆の情が愉快に現されているではないか)

以上の辨玉の長歌を読んで、なる程歌った材料は新しいが古い言葉であらわしただけにまことに悠長な表現でしかないと貶し得る人が幾人あるであろうか。それにしては後者の如きはあまりに生々として蒸汽車なるものが眼に見えるようではあるまいか。

今日の川柳が徒らに陳い材料を新らしい言葉や奇を好んだ叙法によって表現して、なお右長歌だけの力を充分に発揮し得ないとすれば、そこに考えなければならない問題が確かに横たわっているのではあるまいか。

まだまだ従来の十七音字形式で、しかもありきたりの言葉によってさえ相当力強い句が創作し得べきではなか

ろうか。

新らしい言葉、新らしい材料、新らしい表現法に拠って独創的な句を得ることは、まことにのぞましいことではあるが、必ずしも、新らしい言葉、新らしい材料、新らしい表現法が独創的な名吟佳句を生むとは限らないことにも思い及ぶべきではなかろうか。

古来、平談俗事によって創られ、平言俗語によって綴られた一片の川柳ではないか。

私は試みに『川柳雑誌』の中から二三の例句を抜いて吟味してみたい。

猿の顔子猿のくせに老けている　春秋

人間と思われている邪魔くささ　同

えらい人の朝日一本だけもらい　豆秋

これらの句は何れも佳句として推奨するに足ると思うが、特に新らしい言葉や新らしい形式を踏んでいる訳でもない。けれども、子猿に対する観察の凡手でないことには何人も異論なかろう。平言俗語によって綴られてあるからして独創的新味を忘れてもいいと言わない。むしろ独創的新味があってこそ、その句が光るのであることは辨玉の長歌を見ても頷くことが出来よう。（以上）

右の二篇のほか、写真鏡、伝信機、瓦斯燈など特異な万葉風を以て詠い上げた長歌「瑯々室集」は国学大系に入っているという。

(82)

一年ほど前に発足した「川柳二十日会」は路郎先生を中心に不朽洞（キング喫茶店）で催されるトークの会で次はその雰囲気である。

「コーヒ、コーヒ」と心の中でくりかえしてキングに飛び込む。灯のともるに早い五時すぎ、いま史呂（青木）さんが帰られたとの事。奥さん（葭乃先生）が百合の花束をかかえて帰られた。花を見ながら奥さんとコーヒをすする。何時の間にか灯がついていた。

まず結婚されたばかりの與三郎（平井）さんと節子さんのスイートホームを想像する。お次は夕鐘（姫田）さん、あの方は食事の時はマダムが三味線でサービスされるそうだからまだまだ見える筈がない。水車（吉田）さんは名古屋、山雨楼（福田）さんは東京で、お顔の揃わぬのが歯の抜けたさみしさだ。

緑雨（橋本）さんは非番でないのかしらと考えている中に見えたのは汀柳（増位）さん。見れば水薬を持っておられる。こう申し上げては失礼だが、これは私の好きなタイプ、体つきが私の長兄そっくりなのもなつかしい。

奈那（路郎先生の次女）ちゃんが私の前に来て、啄木の「東海の小島の磯の白砂に…」が好きだと句箋に乙女の感傷を追うている。

艸楽（西田）さんが足をいたわりながら御入来。今日は皆少しずつ工合が悪い日らしい。

少しして禿山（奥野）さんが出席、どうやら頭数も揃うて来たようだが皆ひどく真面目なのはアルコール不足のせいか。**（機見女）**

足を痛め少々歩行困難あるを押して出かける。汀柳、機見女（竹内）、葭乃夫人鼎座して私の噂の中へ飛び込んだと見える。早速、相撲吟の籤を引くと「少年」とある。冷コーヒを一杯よばれ、清々しい初夏の夕べ、喋りたい事を喋り、好きなフルーツを食べ、社内の話から世間話をとりとめもなく聞いていると、いつか何の憂苦もない至極平和な雰囲気に包まれた幸福感に浸れる。これが二十日会だ。そこへ笑いの国の使者のように禿山君が入ってくる。直ぐに籤を引かされている。君ナニヤ？口笛やエヘヘ、「禿山は何時も酔うてる顔を出し」今夜は至って神妙だ。そこへヤアと主幹のお戻り。一寸どこかで一献きこしめした顔付き。昼間には史呂君が来たそうである。キングの楽書帳に二十日会皆勤者と大きく幅をとっている男だ。その相棒の與三郎君がシンガリを承ってのっこり顔を出す。

今日の二十日会は、史呂、與三郎の棒組が後先を担いだ形だ。みんな句が出来たら出してや。**（艸楽）**

路郎選

口　笛

口笛に答えありそな朧月　　禿　山

○口笛を吹けど口笛までふるえ　　汀　柳

夏の宵

○夕顔へ話しかければ露がおち　　機見女

打水の宵へ硝子の皿が出る　　艸　楽

少　年

少年の域を脱せずバット喫う　　葭　乃

○用事だけ伝え少年どこへ行た　　艸　楽

悪　運

悪運が尽きた所で幕になり　史呂
○悪運と言われてもよい懐手　汀柳
◆翌六月にも光耀会（女性の会）と合同開催
鐘ちょっと撞いて帰ったハイキング　史呂
いたずらの石凡鐘は小さく鳴り　久流美
お茶の日の菓子が重たい絽の袂　葭乃
六月の単衣が寒い天主閣　禿山

(83)

昭和十年といえば、天皇機関説問題、梅津・何応欽協定、土肥原・秦徳純協定、相沢事件など内地に満洲・北支に騒擾の気配が濃く立ち込めた年であった。また満洲国皇帝を迎えた年でもある。その年の日も同じくした四月七日夜、日本橋倶楽部では熱河の岩崎柳路氏夫妻歓迎句会が開かれていた。次は柳路氏の談話の珍しい個所の抜粋である。

▼熱河では総て素足を出すことを甚しき非礼として大変嫌う。僕が夏季某ホテルに宿泊したとき浴衣がけで素足のまま廊下を歩いているのをとがめられ、その習慣に気付いた。特に女は素足を見せぬことを第一の貞操と信じ信仰的な誓約としているので自分の夫にも見せず、風呂に入るのにも足袋を脱がない。

▼風呂といえば熱河の土着人はめったに入浴しない。一年に僅か二度か三度、正月と夏の娘々祭（内地の盆踊りのようなもの）位で、その時は二里も三里も奥の方から出て来る。

▼見渡す限り木が一本もない禿山ばかりなので、夏の大雨には一時に大水が出る。川も平素は水が流れていないので大水が出ると臨時の川が出来、さっと流れてしまう。雨も降ってないのに「さあ大水がくる」と逃げ回っているので半信半疑でいると、瞬く間にどっと大水が襲ってくる始末。昨年も軍隊のトラックが数台川に埋もれてしまい遂に見付からなかったという嘘のような話もある。

▼井戸水が一帯に悪い。奥地へ行った兵隊も往々これにあたって咽喉を痛めると、まるで豚の首みたいに腫れて一生癒らないそうだ。それを予防するのにしきりに海草類を食べる。

▼珍しい貝類の化石が沢山出る。いくらでも採れるので送料を負担願えれば送ります。

▼満人が此頃しきりに日本語を習っている。五十六十の老爺たちまで若者に交じって、アイウエオと大きな口をあけて熱心なのを見ると感激させられる。

教導班というものがあって憲兵と警察を兼ねたような巡察員がいる。うっかり満人に対し支那人と言えば頭からお叱りを受ける。

▼匪賊はもう殆ど出ない。山奥に這入れば時々僅かに姿を現わすくらいなもの。

▼ラマ教の宗教には恐ろしい迷信があって、たとい鉄砲の玉に当っても必ず生き返ると信じているのだから、大和魂よりも強い。

▼ラマ寺にはエロ怪仏が沢山ある。人獣交〇の像を表わしたもので、これを信仰するのだから愈々怪奇を極める。エロ仏の出来た由来伝説があって、何でも大昔の飢饉のあった時、神のお告げにより村の美しい処女を人身供養に上げるならば飢饉から救われるというのでその人柱を出したところ、処女は勿論死んでしまったが幸い飢饉をまぬがれたというので、之を仏像にしたのだと言う。

▼私が以前、鉄道敷設班の仕事に従事していた当時は、鉄道を敷き延ばしつつ奥地を転々とし、ジプシーのような生活をして来た。しかし現在では大分鉄道が普及し、将来は約束されている。

凌源は人口二万人だが日本人は僅か五百人、鉄道あたりの人は中々高給で豪勢なものだ。

▼私が奉天在住当時泊っていた宿屋は現満洲国皇帝陛下御亡命中の隠れ場所だったことを最近知った。目下皇帝陛下御来訪のみぎりなので、当時を回想して甚だ畏れ多く思い感慨無量なものがある。

（文責編集局）とあり時代相を窺える。

(84)

凡聖一如元旦のこころ知る

麻生路郎のこの一句から昭和十年の『川柳雑誌』が始まったことは「大空のこころ(77)」で紹介した。今回は久しぶりに路郎先生の作品を多く並記する。総てこの年の作である。

誹風松竹梅の会にて

酒なんか呑んでいられぬ酒を呑む

悼　鴎治郎

君の訃に炬燵の穴もさびしまれ
千畳敷にて
新婚が太平洋をバックにし
湯崎白浜遊覧バスの霞むとこ
子が病んで帆の動かぬもさびしうて
育て親のなげき酸素にけつまずき
四男洋逝く
母の輪血も空しく春の息をひき
三男一歩尋一に入る
百貨店子の入学を見逃がさず
折鞄麦酒を飲むに放さない
薬忘れて机の埃り見ていたり
置電燈—只一冊の聖書あり
消すにしのびぬ娘の夢の華やかさ
君の顔で僕の顔でと呑みにゆく
長靴がある玄関のみじめなり
忘れ難きキスとなれ夏の夜の青さ
愛は濃まやかサンドキッチを運ぶ
父と子のダブルベッドをのぞかれる
一銭の瓦斯もうれしい父と子よ
諦めた暮らしママちゃんアッパッパ
老眼と知りそめし日を宮仕え
葉鶏頭昼の枕を胸へあて
赤心一票やりどころなし
人妻となって卑怯な眼をつかい
字をくずす稽古もしてる老博士

先生としては句の収穫では不本意な年であったらしい。雑詠では、句集「旅人」に掲載されたのは凡聖一如をふくめ五句しかない。

私の目からして、鴈治郎の句や「子が病んで」「折鞄」「父と子の」「老眼と」「葉鶏頭」などは句集の句に遜色はないと思う。

置電燈の句は後に「旅人」に掲載の
聖書一冊菊一輪の二階也
に定着し、諦めたの句は市場没食子氏の句
アッパッパ恋の勝利者とは見えず
を触発したように思える。

四男洋逝く、三男一歩の尋一に入る、など個人的に愛情措くあたわずと思える句も篩に掛けられて厳しい自選をされている。

次に句会の題詠のうちめぼしい句を記す。

チョコレート春の日永を思わされ
西部戦線わが童貞に異状なし
子沢山女湯へ又忘れもの
そろそろとすき焼になる松の内
何んと云われても新婚はもう帰り
今日も亦先を越されて留守をする
金借りに来たのも連れて松竹座
国境を出て君が代に涙する
浪人をしても支店へだけは寄り
さびしさは洋傘の影老いの影
剃刀の一挺持って旅に病み
職人と見えぬマントへ身を包み
貧しくともおしっこをする庭があり
晩酌は虫が鳴こうが鳴くまいが
虫を聴きに来いと新築見せたがり
虫なんか聴く顔でなし実業家

課題吟は一様に軽いタッチで通しておられるが、焦点の決まっていてご自身のリズム感のあること、これが晩年まで続くのである。

(85)

生まれた家を語る

（八月号から一部抜粋）

麻生　路郎

私はホントは何処で生まれたのか知らないが七八つの頃ここがあんたの生まれた家だと教えられたのは尾道市の十四日町（ジウシンニチチョウ）の北側の家であった。本町に続いた町で尾道のメインストリートである。私の生れた頃はここで陶器商をやっていたらしい。

朝田　新水

僕の膳の緒に明治三十三年九月六日午後十時四十五分男子出生とある。今でも男だ！

大阪内本町一丁目二十七番地、現在の谷三交叉点より半丁西入北側本町湯のある所だ。

幼稚園に通う頃は日露戦争の最中でとても多忙な業務で、毎日師団司令部や連隊へ大八車で納品を仲仕が運ぶ車に乗せて貰って馬場へ行った。今の大手町公園である。あんな立派な射的場とてない当時、野戦病院のバラック

に傷病兵の白衣に馴染んでよく遊んだものだ。時には濠はまり首つり、それが大部分兵隊だったことを知った。

その頃町内で電気の街燈までつけてあるのが僕の家と二軒しかなくランプの家が多かったため往来は真っ暗である。明治も終る頃電車道路となり、町巾四間が十二間となり今日の繁華となるまで、生れて二十年此処で育った。今でも電車で通る度になつかしい。

尼　緑之助

お寺の屋根が昔の月を慕ってる

願楽寺――地方切っての大きな寺、その藤に包まれた家が私の生家です。

口笛口笛夏の川越えて

清流神戸川の夏、川辺から聞え来る夜の口笛、私にも懐しき青春時代はあったのです。

且つて絵にもなき月の小川なる

遠蛙思い出してはならぬ恋

川面に浮ぶ月、遠蛙、半生の歴史は此処で織ったものです。

実家に帰ればあゝ蛙鳴き牛が鳴き

懐旧…なんて、今は私も他家の人間になっちまったです。こんな風に書くとスバラシイ家に見えましょうが、農する草家です。

生田　翠夢

京は木屋町、松原を上る今と同じ席貸の多い艶めかしい雰囲気で、前に高瀬川が今よりもずんと奇麗で水も豊富に汀を洗うていた。

汀は大小の石で道端からすぐ河水を掬う事も洗濯をすることも出来た。川端には柳がずらりと並んでよく金魚売りが休んでいた。

夏ともなれば川を逆のぼる高瀬舟を曳く船頭たちの「ホイ〳〵」という間のびした掛声が如何にも睡気を誘う様に聞えて、その中を日本最古の電車が単線でがたりごとりと走る。

となりの席貸の女将にとても可愛がられたもので、五六才の頃都踊りから帰ってきた団扇片手に「都踊りはヨイヤサー」といとも品よく踊ったことをかすかに覚えている。

姫田　夕鐘

臍の緒を切ったのは徳島市大道三丁目の古色に艶のおびた現在の家なのですが、なにしろ町内で三番目の古顔

なのです。今年で丁度いつむかしの五十年になるのです。
家の前には美しい眉山が緑を滴らしていてつい近くにいた葡萄牙の文豪モラエンさんは第一印象を、身体に沁み入るような緑ともいい、恵みの緑とさえ呼んだ。

(86)

明治以後の川柳年表（柳誌柳書）

西島　〇丸

（書名・誌名）　（発行年月日）　（発行所その他）

柳の庭　全一冊　明治4年3月
辛未歳旦会出版、中本和紙狂句、六代目川柳序及選

柳廼栄　全三冊　同末冬
東京錦耕堂版、五世川柳追福会、中本和紙狂句

柳風狂句家内喜樽　全一冊　明治5年7月
六世川柳評、和紙中本、蘭渓の序あり

新選川柳点絵草紙　全一冊　明治6年
小信画、時雨堂閑人序、大阪版

團團珍聞　第一号　明治10年3月24日
東京神田雉子町團團社発行、毎土曜発行、川柳欄を置く
（当時は未だ狂句の時代、表題で内容が推測出来る。以下に時代相の著しいのを記す）

月とスッポンチ　第一号　明治11年10月
東京神田興聚社発行、月二回、狂句

開花柳多留　全二冊　明治12年3月1日
池田保編、豆本

柳亭種彦評古今二葉柳　全一冊　M13年2月
東京日本橋石井虎吉出版、中本和紙

我楽多珍報　第九十四号　M15 1月6日
京都下京区浮西京絵社発行、毎金曜、狂句欄にやなぎだるとす

へその宿替　全一冊　M15年6月
横浜辨天通小出留五郎版、川柳の部というのを先に置く

大日本全国風雅の友　全一冊　M19年7月
東京神田花田町耕文社発行、前島和橋元祖川柳の図を描く

花たら誌　ひと枝　M21年6月30日
東京、京橋中橋和泉町文友舎発行、狂句、毎月一回、

後いろは新誌となる

吾嬬布里　第一　M23年11月15日
東京神田連雀町紫紅会発行、菊版、川柳云々の文字多し

古今川柳一萬集（東洋文芸全書）　M24年
東京日本橋博文館発行、骨皮道人編

しなさだめ　全一冊　M27年12月22日
東京神田鍋町井口松之助発行、菊版八十頁、日清戦争の狂句

へなづち集　全一冊　M34年12月13日
東京神田新声社発行、阪井久良岐著

川柳梗概　全一冊　M36年9月22日
東京日本橋区金港堂発行、阪井久良岐著

電報新聞川柳欄創設　M37年4月29日
選者阪井久良岐、新柳樽と命名

日本新聞川柳欄創設　M37年7月3日
選者井上剣花坊、新題柳樽という

読売新聞川柳欄創設　M37年
選者朴山人田能村梅士

新編柳樽　第一号　M38年4月
大阪小島六厘坊発行、『矢車』第三号に斎藤松窓記す、末調

新風俗詩五月鯉　第一号　M38年5月5日
東京麹町川柳久良岐社発行、四十四年三の五で終り

川柳　第一号　M38年11月3日
東京神田駿河台柳樽寺川柳会発行、四十年十月廿三号で終、大正六年大正川柳を出す

葉柳　第一号　M39年6月
大阪西柳樽寺発行、新編柳樽の改題、四十二年五月号にて終

(87)

この項は前月号の西島〇丸の労作「明治以後の川柳年表（柳誌・柳書）」の抄出の続きで、大正十年までに発行された四百七十五種に亘る項目のうち、路郎に関係の深いものと柳界での歴史的史料に価する事項を列記する。

（書名・誌名）　（発行年月日）　（発行所その他）

読売新聞川柳欄　明治40年3月20日

選者朴山人退き、窪田而笑子之に代る

土団子　第一号　M41年7月1日
大阪江戸堀大阪川柳社発行　麻生路郎編集、菊廿四頁、八号以下未調休刊期不明

十世川柳家集　全一冊　M41年秋、月日不明
四六横綴、和紙十一葉

俳句と川柳　全一冊　M42年2月5日
編者川原閑舟、選者西田当百

白日　全一冊　M43年8月20日
大阪市西区九条町短詩社発行、川柳は一部

川柳上巻（近世文芸叢書第八）　全一冊
M44年3月30日　東京京橋図書刊行会発行、初篇―三十篇

川柳下巻（近世文芸叢書第九）　全一冊
M44年6月30日　三十一篇――六十篇

轍（わだち）　第一号
M44年7月1日
大阪市西区九条町短詩社発行、八月第二号を出して廃刊、菊版

川柳江戸砂子　全一冊　M45年
1月5日　岐阜市西濃印刷会社岐阜出版部発行、今井卯木著、昭和五年十一月に東京春陽堂より増補して上巻発行

ツバメ　第一号　M45年6月1日
神戸市相生町四―三二五　乙鳥会

大正川柳　第一号　大正元年8月20日
東京芝高輪柳樽寺川柳会、菊版三十二頁昭和2年1月15日の百七十二号より「川柳人」と改題

番傘　第一号　大正2年1月15日
大阪番傘川柳社、昭和8年1月より菊版

雪　第一号　大正4年8月1日
大阪市北区上福島一―一二麻生路郎編集発行、半年で一巻、大正5年11月25日第三巻第五号で休刊

川柳吉原志　全一冊　T5年6月28日
東京牛込白銀町育英書院、佐々醒雪西原柳雨共著、四六横綴二八〇頁、昭和2年春陽堂より訂増補再刊

絵日傘　第一号　T6年8月15日
大阪島の内錦屋町絵日傘川柳会、渓花坊創作句集、二枚折、五号より旧大大阪型となり公開、T8年10月1日第三巻第五号を出し休刊

柳太刀　壹　　T6年10月1日

兵庫県西須磨下今池前田青岸方神戸川柳ツバメ会、四六倍判四頁、この柳太刀は翌七年四月第七号を以て休憩、五月より四六版にして改めて第一号を名乗る。つまり一号が二つある訳

娘々廟（にゃんにゃんみょう）　第一号

T9年1月1日　大連市磐城町九三大連川柳会発行、半紙版廿頁、T11年8月の第九号で休刊、漣、幼稚園、紅柳と改題したものの後身

川柳きやり　第一号　T9年4月25日

東京浅草区南元町川柳きやり吟社発行、三つ折、現在菊判にて続刊

川柳漫画懐手　全一冊　T9年10月25日

大阪及び東京の奎文堂発行、麻生路郎著菊半二〇二頁、T13年6月5日川柳ふところ手として大阪田村書店より再版

(88)

『川柳雑誌』昭和十年七月号の編集の窓には「上汐町から」の欄を廃し「柳界展望」を新設した、この欄で川柳界の総ゆる消息が一日で判るようにしたいと思っている、細大洩らさず御通信をお願いする、と記されている。「柳界展望」は昭和四十年の終刊号まで、名称も変らずに続くわけだが、翌八月号の同欄に、句集「大川端」刊行の記事が載っている。

阪大川柳会五周年を記念して七月二十五日の発行、会員十七人と指導者麻生路郎先生の五年間の課題吟の集大成である。先生の序に

山を登り切るまでには幾度か足をとどめて、歩み続けて来た道を振り返るものである。

瞰下に白く光った一筋の帯のような流れへ無限の情趣をよびかけるのもこの時である。

そうした感懐と意図の下に刊行される句集「大川端」が川柳愛好の士の渇を医するに足ることはいうまでもなかろう。（以下略）とあるが、昭和初期の知識人（医学部教授、助教授、講師、事務担当者）の豊かな人間性と知的な批判性が相均衡して、高度な質の句集となって得難い光彩を放っている。

長崎　柳秀（会長）

金魚屋に舞妓たもとを教えられ
この家にして酒があり松の内
笠原　路生
六角堂幾何学的に暮れて行き
三の糸切れて久しくなりにけり
布施　筑川
酒　酒　酒　秀才の影何処へやら
井上　湧三
伯林の夜を君黙々と歩く気か
この暑さ儲かりまっかどころかい
石崎　洗塵
今日からはお前というぞ俺という
西尾　青一路
蚤にも喰わせず天下もとらず
筍は竹になるとは知らなんだ
西田　氷炭
お婿さんと名をぬきにして呼ばれてゐ
気短かになる病気だと聞いてくる
尾崎　方正
萬巻に通じて恋はうぶなりき
昇任へ父聞きまさば母あらば
押谷　たけを
逆境に居て褒められる耳の相
信心で来れば生駒は花盛り
吉田　千秋
先生の癖は書生のものになり
浦田　正甫
枕もとさぐるは金でなかりけり
歌麿の書いたようなる蚊帳の中
内海　貞三
大望は春の雲だけ知ってくれ
丸島　利生
はい〳〵と言うてはいるが自尊心
小林　橙舎
一本の外はどうでも良いテープ
転落の石の姿で無常来る
坂口　芳一
黙祷へ日本海の波の音（東郷大将国葬の日）
佐野　栞
温泉や座り羅漢に寝る羅漢

人生四十染直しよく似合い
関根　山彦

のう〳〵と山の湯槽で雪をきく
麻生　路郎（指導）

腰が立てばまだ富田屋の一の客

(89)

四月十八日（土）午前十一時過ぎＡＫから放送の川柳選評が大木俊秀氏の爽やかな声ではじまった。課題は「みどり」、快調な出発に私は感慨を深くした。

麻生路郎、中島生々庵、川村好郎、私と担当し、二年前に河内天笑氏に託した伝統のラジオ番組である。

昭和十年九月二十二日、柳翁忌の夜七時三十分からの番組は、講演「川柳翁について」阪井久良伎「川柳の笑いと涙」麻生路郎、募集吟「秋雑吟」の選評を阪井久良伎、岸本水府、岡田三面子、前田雀郎、岡本映絲の諸氏が担当した。

麻生路郎はこの「川柳の夕」の放送について次のように書いている。

ＢＫから放送を頼まれた。ＢＫ案で生れた放送だけにＡＫ・ＢＫ・ＣＫの人選についても相談にあずかった。水府君と僕とで人選をした。二人の意見が合致したので、それが大体に於て実現すると考えていたが、ＢＫ案はＡＫで美事に打ち毀された。計画に携わったＢＫの人を憂鬱にさせた位に歪められてしまった。最初の案がその儘通過したのは私一人だった。他は持場を変えられたり、オミットされたりした。水府君の役割も選句披講の予定であったが、それもアナウンサーの披講となってしまった。課題も「秋雑」であった。もっと川柳らしい題を選ぶ必要が無いかと案じていたが果して結果は面白くなかった。それは兎に角として人選の仕方が殆どなっていなかった。全く柳界の消息を知らぬ人の選び方で、内科医が外科医の仕事をさせられているような、危なっかしいものだった。選ばれた人々の多くは筆者の親しい人であり誰がいいとか悪いとか言っているのではないが、医者でさえあれば学究であろうと臨床家であろうと見境なく手を握らせているようでは滑稽でしかないと思う。この点放送当局のためにも日本柳壇のためにも折角の催しを台なしにしてしまった憾みがないでもない。

九月の柳翁忌に際して「川柳の夕」を企てられたことには満腔の敬意を表す私ではあるが、今後のプロ編成を思うて東京の放送局に次の苦言を呈して置きたい。

人選は官僚的であってはいけない。それに誰に何をやらせるかを第一に考えなければならない。あるものを放送する場合には、その道の人についてよく聴く度量が欲しい。放送委員は神様ではない。知ったかぶりをしてはいけない。今回の放送に際しても、東京三、大阪二、名古屋一、所謂五、三、一の比率で人選をしているが、軍縮でもあるまいし、冗談ではない。真に名古屋に人があれば二にしても三にしてもいいであろうし、適才がなければ無理に一を選ぶ必要はなかろう。

これも各放送局の加入者数の比率に據るとの弁護が出るかも知れぬが、それは全くいわれのない事である。

森中恵美子さんと私が川柳選評を引き継いだのは昭和五十六年であった。放送開始五十年の記念には、露の五郎師匠と対談、大いに助けて頂いた。テレビの「詠めやうたえや川柳天国」も正月とお盆の番組として続けられ川柳熱を煽った。多くのアナウンサー、アシスタントの皆様を思い出しながら、聞き終わったのである。

大木俊秀、竹本瓢太郎両氏のご奮闘と番組の弥栄を心から願うばかりだ。

(90)

須崎豆秋論は戦後高鷲亜鈍の書いたのが名高いが、これは昭和10年の小論、福田山雨楼筆を抜粋する。

豆秋君は三十六歳から川柳に手を染めている。割に晩学の方である。若くして名を挙げた天才作家が、三十になるかならずで川柳を止めてしまう例は沢山ある。そこへゆくと晩学の方は仲々止めっこない。若者のように潑剌とし詩才の閃きを見せなくとも世間を知った堅実さで粘り強く続ける。晩学の強味である。しかも豆秋君は川柳を始める前に仲々苦しんでいる。この生きた人間修行がどれだけ彼の川柳の底辺を広くしていることか。

直角に質屋の中へ折れ込んだ
植木屋に貧乏寺と見られたり

などにその確かな観点を窺う事が出来、その底に一抹のユーモアが流動している事も見逃せない。これは彼が生れながらの川柳家であり、稟質的に恵まれていることを

物語る。彼の何れの句を見ても川柳の本流のユーモアが根を卸しているのである。

手ぶらでは鹿も相手にして呉れず
たゞのよな鉢へ毎朝水をやり

などは微苦笑を湛えたものであり、明朗な彼の肉体からこみ上げる滑稽感である。更に

更生へ馬も早から起される
唖の子の話術ペロリと舌を出し

の瓢逸、洒脱ぶりに至っては、俳人一茶の風格をすら偲ばすものがある。

本誌から彼の句を根気よく拾い集めて見たが、そして割に多作でない事に気がついたのであるが、ユーモアは随所に転がっていた。

昼の月なんば新地で引っぱられ
貧しさを猫の顔して笑ろて見た

などいくらでもある。とりわけ女性を詠った句に彼の俊敏な川柳眼が沢山向けられている。

取り立てにゆく後家の紺足袋
エスカレーター旦那のあとを追っかける

豆秋君には金の句も亦多い。そして又秀れた句が多い。「生活即川柳」を唱える彼は、

懐にお金があってよくしゃべり
こうもりよ又ボーナスが無さそうだ
金が欲しい欲しいと聴診器へひゞき

プロの味方になって詠い続けている。

一昨年の秋、豆秋君は名句

秋風の中で乞食に拝まれる

をものした。当時この句について僕は賞賛を惜しまなかったが、秋になれば自ずと口に出るほど感銘が深い。更に昨年の秋の風水害、

大毎も止り豆腐屋も止り

その他五句をものして之れ又驚ろかした。

いつも句会に出て来て、佳吟を吐くのも彼の熱心と技巧が益々円熟を示す所以で、句会で彼の顔を見て胸がすっとするのは僕一人ではあるまい。（　）内は課題

幻へ春の蚊一つ横ぎれり　（幻）
出勤へヒヨコが少しついて来る　（出勤）
夜桜へ下の方から月が出る　（夜桜）
中之島身の振方へ蟹が匐う　（中之島）
買初の子の物は子に提げさせる　（買初）

さて結論を急ぐ。前述のように豆秋君は川柳には晩学であるが、全く川柳に生れついている。磨けば磨くほど光る地金をもっている。彼は彼の句作態度をしっかり把握して、自己の命ずる進路にかじをゆるめなかったら、彼のユーモアは今後完成の域に達するだろう。

この頃から山雨楼に川柳の一茶と謳われた豆秋は、後にユーモアの権化と称される。

(91)

昭和十年十二月号の路郎先生の雑詠に

小町静太七つの鐘が七つ鳴り　(悼)

というのが目に止まった。また平井春光の筆で「静太の死」の悼文が掲載されている。

「ひるすぎ、与三郎が〝兄さん、けさの静太の記事見たか。あの片山津の心中事件だよ〟〝えっ、あの記事が〟と唾をごくり、今更見直す彼の驚くべき思い切った死の場面。あの静太が、とも思い、静太だから、とも思いつつ熱くなった僕の瞼の裏には、つい五日前の彼の姿が目にちらつくのだ。」というのに続き、その春に結婚した春光氏へ

ふたりわらって　ふたりの家です

という祝吟をくれたこと、十年もの結核での療養後施療患者であった刀根山病院を退院し、約一ヶ月間四国巡礼の旅にいたこと、帰阪し十一月八日の道頓堀支部句会へ馳せつけ、七句入選、その夜日本橋の袂で別れたことなどを述べ、三日後に

「いで湯の宿の白い障子が斜陽に染まる空気の中で、ひとりの少女を道連れに赤い血を流して冷たくなってしまった。

僕等の本棚へ静太句集を遺して置いて昭和の柳界へ鮮やかな銀線を長く引いて――」と結んでいる。

私自身、『川柳雑誌』を毎月号調べていて各地柳壇欄に掲載の川柳雑誌蛍ヶ池支部句会の石森静太の句の、独自の彩に注目していたのであるが、そういえば五月号の同欄の兼題「川」平井与三郎選、席題「雲」縷紅選に

申譯御座無候川に浮き

片恋のバットを川へすてるなり

雲の峰きれいに目高のぼって来

などの句が入選し、半年後の成行きを思えばすこぶる暗

示に富む。
胸の病に苦しんだ末、二十七年の短い生涯を閉じた柳人は次のような遺言を残した。
「自決します。病を恐れてではなく、恋のためでもなく、汗を流して働ける躰に生れ更って来ると確心してます。冷静です…」
死の前の一ヶ月ほどの四国巡礼記は、当時の自由律川柳雑誌「視野」の編集発行人枝松規堂に宛てたもので、次はその大略である。
生きて帰った私は冷たい雨に打たれた旅のことを、こころのさまよいであったことを、一度柳界からさよならした今、書けることでもないのに自分を嗤いながらペンをとります。
波こえてゆく波ばかり寂しいぞ
というところから始まる。胸を病み、あきらめた生活の死にもせで、一人の人間を忘れるため、否、その人間を通じて感じる絶望的な社会へのあきらめのために
せんりゅうをやめてあなたをわすれるの
と四国巡礼の旅に出る。
二十七回の誕生日の大阪天保山は、朝からの雨の中、見送る老いた父母、ある少女たちへ港の灯は美しく五色のテープと見まがうばかり、生まれかわろうとした静太だった。
暗い激しい雨の音の船中でのもだえ、
別れきた母おもい鳴戸すぐる
四国への上陸も雨の中、第一番札所への四里もずぶ濡れで、規堂氏からの情けの地図を胸にぶら下げ、水害で橋の流れた川を膝まで没して、杖を頼りに二度まで渡る。
水害のはげしい村のわたしは　りんりん歩いてゆく
雨中、胃をいためて吐き、一日十里、水を呑んでも吐く旅がつづく。

(92)

落ばした木にわたしをおもうなり
肉体を苦しめあえぐことで心の苦しみを忘れようとする
私に与えられたたった一つの道。
ひとりごとしてあきらめましょうか
よるの日記に死のとかきます
わたくしに白き花あり死をしいる

白い花は愛する乙女への幻想か。若い看護婦さんらしい。冒頭の路郎の句の小町だろう。

その激情をおさめてくれるのは晴れた美しい朝の空である。

指きりをした日をちらりおもうなり

断崖へ足を掛けるが、足はふるえるだけ、嗤いながら波を聞いている私への自嘲。

だまって梨くう旅をつづける

あきらめて臥ているへ　遍路のりんなって行きます

秋ふかくまた痩せましたとかくのです

痰ばかり出てひとりの旅の霧ふかく

高知にたどり着き、帆傘の人たちが歓迎の宴をして下さる。酒の強さを言われながら胃をいためた私へ箸けんの威勢の良さ。

ひとり宿へ帰ってくるとポンポン花火の音。

きみを忘れる巡礼の旅です

巡礼の静太に花火みえません

日めくりばかりが秋の風にめくられてゆき、いよいよ秋も深まってくる。

巡礼に桑畑のむこう柿うれて

巡礼の果てに見た夕日に映える鈴なりの柿の実は、静太には寂光土ではなかったか。

さて、ここでまとめとして、昭和十年一月一日発行の「静太句集」に触れておく。

序文は麻生路郎

「静太句集の序文を書くためにバットを幾ら喫ったかしらない。病を抱いて句の中に生きる生活にも、十二月の風はさぞつめたいだろうと思うと、ペンの運びもにぶりがちである。（後略）」と十行ほどで、かつて革新を目指した路郎先生も『川柳雑誌』を軌道に乗せて十数年、十ヶ年計画の安定を見た時期なれば自由律には厳しい処し方であったか、また一年後の死など予期されなかったろう。

「静太句集」抄（新仮名遣い）

さびしさに万年筆を持っている

死ぬまぼろしはいやですいやです

真昼月僕は施療患者です

とかげが美しい僕の恋です

なおってみせるぞあきのそらはすむ

好きな看護婦さんの靴がちびてる

なおりたくおもう朝刊のにおいする
咳すれば夢は流れてしまうなり
ひるのなみだは　うちわであおいでいるのです
死にはしませぬははの写真をみています
あきのあめきみはぼすとのほうにゆく
ふるさとの夢ばかりなり落葉する
自嘲する中に自分の鼻があり
蟬が啼いていますね　お母さんくすりのみます
恋すてた静太へ雨がふっている
　句集出版後の句
あおのけのわたしに春が徂くのです
ことわられしに
　おじゃまいたしましたというてでる
秋の汽車きいてひとりの恋にしておきます
（一〇・一一・二）

各地で追悼句会あり、柳人悼句を捧げる中で私が一番感銘したのは長野文庫の作である。

生命を一句一句にわけたるか

(93)

福田山雨楼は、この年しばらく「川柳パイロット欄」なる初心者向け批評を試みていたが、東京へ転勤となったので、その後を受けて川上三太郎が「川柳指導講座」を引き受け、わが子、わが親、わが生活、わが友達のテーマの応募句の句評を担当する。

第三回の講評時「葭乃さんへ送る」と題した文章のプロローグは三太郎色横溢し、かつての六大家の親密ぶりが推測出来て興味深い。

葭乃さん——。

御無沙汰してます。いや本当は御無沙汰をしちゃいないんです。毎年大阪へ行ってるんですから。今年だって行きました。ところがそっちへ行くと何時も市内で友だちに引懸っちまって——その中に大概麻生君もいます。そうして酔いしれた午前二時頃あなたに電話をかけます。

「何うも遅くなって——御無沙汰致しました皆さんおたっしゃですか、有難う」（一寸も文句になっとらん）

「え、有難う。御愉快らしいんですね。そこがお倦き

になったら家へいらっしゃい」（こんな新聞小説の返事みたいなんじゃない、もっと純粋の大阪弁で、たとえば花王パートみたいにするすると出て来るのである）

然し結局は矢張り御無沙汰です。大体電話で声だけで物を言ったり答えたりするのは、会話じゃない。顔のない会話なんてものはジョセフィンベーカーの居ない黒ん坊みたいなものである。

「三太郎はんはお酒飲まんと実に詰らんアホみたいな人や――」

と平生あなたは仰言ってるそうですが、素面の僕でさえ「詰らんアホ」である、況や顔のない電話の胴間声だけに於ておや――で。

下らない事を長々と述べたようですが、これが今月の課題「わが生活」の前奏曲になるんです。要するに「電話」では僕の生活がありません。今月の「わが生活」の集句中、僕の「顔のない会話」のような句がありはしないでしょうか。いま恰度十九日の午前二時です。十八日の僕の句会から帰りに一寸一杯飲って帰宅、風呂に入って机に向ったんです。静かな夜で電燈が蠟燭みたいにジーッと音を立てて更けてゆくようです。

厚顔なる僕は更に麻生夫人に対して、あなたは川柳のおばさんであると言いたい。そしてまたあなた位「わが生活」を句にしている人はありません、と言いたい。

飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ

浴槽へずらり立ったは皆わが子

生活がこの位句になる事、その幾つかの苦業の層が重なった迫力、それを今月の「わが生活」の投句者に伝えたかったので、これを書き始めたのです。但し更に

客に合わずレベルピアノのキイ（ママ）のごと

こんなコワイみたいなおばさんでもある事もついでに教えたいために。（句評省略）

こおろぎよ私も蚊帳で起きている

と川柳のおばさんが言ってる通り、僕も亦諸君の句を見るために午前三時に近き深夜、虫声を耳に膝を揃えて独りペンを握っているのです。

駑馬に鞭ち子を学校へやる

麻生君のこの句を見た時、僕はここに生活を眞向から川柳している人間に、麻生君が居たと沁々感じた事です。

川柳のおばさん――また電話をかけます。

(94)

三都柳壇の今昔

（東都・京都・大阪の川柳界今昔を数氏ずつが執筆、これはその抜粋）

明治新川柳勃興時代　　高木角繻坊

明治三十六年日露戦争始まらんとする時代に旧派の狂句に呆れ果てた明治青年の企てがその七月日本新聞紙上に新題柳樽を井上剣花坊が担当して始めたるが新川柳のスタートなり　其見本（此当時の句には面白いものがある）

なきにしもあらず高徳贈位なり　　剣花坊
相撲好き先づ飼猫をとって投げ
忍ぶれど色に出にけり女学生
魚仲間死ぬると蛸をよんで来る
午後三時永田町から花が降り　　久良岐
花の雪此鉢巻の御不審か
哥薩克は曲馬の一手やって逃げ
雪隠で唄をうたって叱られる　　駄六
福音の帰りサア下駄がない〳〵　　三面子
令夫人乳母に来られて愚にかへり
おへんことおへんと仲居腹を立て
放ち鳥鎌倉河岸の空を向き　　飴ン坊
清盛を嵯峨野の奥で悪く云ひ　　角繻坊

近頃の東京柳界　　高須啞三味

近頃の東京柳界に新人の殖えたことは驚くばかりである。僕などの観察では、東京柳界空前のことであると思う。句会に集る人数では、或いは近頃より多い句会が昔にもあったことはある。併し、それが大半新人であるなぞということは、昔には考えても見られないことであった。これを言葉を替えて言えば、昔の柳界は縁故者ばかりであったのが、今の柳界は他人同士であると言えよう。それだけ今の柳界は大衆的になったわけなのだが、それが却って古い川柳家を悲しませ寂しがらせているのは面白い現象と思う。従って近頃の句会は昔の句会のように、参会者を予定することが出来ないのは、句会当事者のひとしく口にしている所で、それが柳界の大衆的になった何よりの証拠と僕は考えている。

福田山雨楼

○選者の披講振りが技巧的に洗練されている。

例えば先ず最初に「前抜、十秀、五客、三才」と段階を示し、「代って十秀」「続いて五客」と間の手を入れ、「五の一、五の止め」という風にはっきり止めを指す。

そして仲々名披講が多い。周魚氏などスローモーションではあるが一寸その比類がない。

○選者の披講ははっきりしているが、句主の名乗りは不明瞭なこと夥しい。聞いていてわかるのは周囲にいる人々だけ、と言うようなのもある。第一声が小さく、不活潑である。或いは一々賞品が届くのだからそんなに大きな声をしなくてもわかると言うつもりかも知れぬが。

○賞品には石鹸とか、鉛筆とか、又は台所用品等家庭でよろこばれるものが多い。中には風呂敷で大きく包んで帰るものもある。

斎藤　松窓

明治大正時代の京都柳界に就て

明治末の京都柳界は藤本蘭華君、石田静波君などを中心に、時として当百君などを迎えて句会を催し、時に一二の雑誌をも発行されたる事ありしも、殆んど京都川柳社に依て統一されたるかの感ありて、無事太平を謳歌せしものの如し。詳くは僕の知る所に非ず。

大正七年に至り偶々剣花坊氏の入洛するありと、僕も共に京都川柳会に出席するの事あり、これを機会に柳舟、六好、孤山其他の諸君と相知るを得て『紙衣』を発行す。其句風や当時にありて新傾向と目され、これより京都柳界も七分八裂するの動機となり擬宝珠其他の新人続々として出現、『紅椿』其他の新興勢力抬頭の因を為し、幾多の新団体の起伏するありて、最早、昔の如き統一を許さず今日に到る。今後の京都柳界もまた新興と古典的柳人の対照を暫らくは続くものなるべし。

山川　紫明

近頃の京都柳界

○京都が全国に誇り得る川柳聯盟では立派な過去帳も出来上って今年も又九月二十三日に盛大な川柳忌が催されるのは心強い事です。

○京都川柳社では今秋の二十五周年記念大会を目前に控えて目覚しい活躍を始めています。

○自分等の川柳街が廃刊されても知らぬ顔でいた無冠王氏が、今度同人社を創立して同人誘致に夢中になってい

る外は到って無風情態で、若柳を御所車と改題した良之祐氏の一派も力強い新作家をどんどん増やしているので意義あるものになって来ました。

○其他に健全な川柳ビルがあります。

○個人として川柳聯盟の為に日夜努力をされている佐一郎氏の労を特筆したいと思います。

大島無冠王

数年前の京都柳界、或は十年前の京都柳壇に比較して、近頃の京都柳界は質に於ては向上し、量に於ては全く沈滞期にあるようである。近頃句会を見ても通例三四十名を算す程度の減り方、併も私達以上の先輩の出席は又三四名に過ぎないという始末、大家先輩連果してどうしたことか、殆ど私達級の選者のみとすれば、果して京都柳界これでいいのか。現在選者級の力不足というのではないが、いい先輩の奮起こそ柳壇を新進作家を善導し活気を与え、以て往年の殷盛を再び為さしむるものだと私は信じている。此度、私達が川柳同人社を興したのも一つは斯ような処にも発している。現在の京都柳界に対し何の不満もないが、大家先輩諸賢の奮起を甚だ僭越ながら要望したいと思う。

木村半文銭

明治大正時代の大阪柳界

明治—と言っても先ず三十六年頃が最初で、六厘坊、七厘坊の抬頭時代である。これは申す迄もなく狂句時代で、真に川柳に目覚めて狂句と分離したのは明治三十八年頃である。

狂句時代——明治三十六七年頃

川柳時代——同三十八年以降

と見て大差はない。然し厳密に言えば三十七年と八年初期とは川柳狂句混沌時代たるを免れぬ。その意味で狂句から川柳を文学的に認識しかけた明治三十八年度は大阪川柳界にとって祝福すべき紀元にあたる。この川柳時代を続けて来たが大正十二年に新興川柳が出現して、川柳の中からまた別個の新しい文学的視野を開拓した。だから大阪に於ける明治、大正年間は川柳界にとっては波瀾に富んだ歴史であった。第一は狂句より川柳を分離し、第二には川柳の既成意識より新興意識を分離したのである。

岸本水府

大阪にも沢山の柳誌はあるが、その中に先ず、熱の川柳雑誌、働く昭和川柳、研究の三味線草、勉強の番傘、この四つが川柳の重き使命の下にそれぞれの分をつくして働いている事が何よりの力強さであろう。

涼み床几の四人男、おのおの違った方を向いていても、浴衣の柄はよう似た姿、話せば大阪訛でしょう。

神戸の消息は無いが、昭和十年の三都の柳界事情のあらましが推測出来る。

(95)

この年の路郎先生の雑詠は先に紹介したが、ここで句会での課題吟を抄出する。

先生の作句の上の個性が垣間見られると思うのである。

止むを得ず遊んでいるに十二月
裏口でしっかり借りた五十銭
呑まされている訳知らぬ善人さ
猪はお地蔵さんで道を変え
牡蠣船でさっきのつりをあらためる
牡蠣船でそれとなく聞く蔵のこと
あの巡査焚火仲間にされている
死の間際までジャンケンをしていた子
父が出す金と知ったで言いそびれ
手後れへ博士すげのう立ち上り
手後れと言わずやんぬるかなといい
茶屋の拂いこれも不渡りかと思い
二階のに聞かされている河豚の味
禁酒して名所も寒いとこにされ
足並を乱す一人に社長の子
自動車でおちょやんひとり戻って来
チョコレート春の日永を思わされ
西部戦線わが童貞に異状なし
酔醒の又忠孝を説く身なり
花婿へほこりたたきの音もよし
金借りに来たのも連れて松竹座
僕等ばかりの送別会と又誘い
長襦袢廊下の端の端へ消え
染直しして女房の紋になり

浪人をしても支店へだけは寄り　須崎　豆秋
支店とは名のみ丁稚と二人きり　〃
さびしさは洋傘の影老いの影　〃
職人の吹く尺八の天の川　山本　丹路
職人と見えぬマントへ身を包み　〃
晩酌は虫が鳴こうが鳴くまいが　〃

次いで路郎選による川柳塔欄の句、この時代は作品の最も充実した頃と思っていたが、案外に低調で一月号からの半年間でやっと三十句、期待外れであった。（新仮名遣いに改める）

昼の月なんば新地で引っぱられ　須崎　豆秋
直角に質屋の中へ折れ込んだ　〃
ドロドロと貧民窟へ陽が落ちる　〃
挙手の礼道頓堀はどちらです　〃
なにゆえとなき淋しさの本を閉ず　山本　丹路
かかる夜の雪女さえしたわしく　〃
御ン歳は三十がらみ観世音　〃
大濱で呑んで蛤の籠寒し　西田　艸楽
ちと変にあまえる夜なり松の内　〃
昼よりは夜を恋う身なり哀れなり　増位　汀柳
人待てば待つ人に似た人多し　〃
姑は揃え直して履くのなり　喜多　春秋
帽子の名川村太郎という子だな　〃
野猪の如くにと日記に書きしかな　尼　緑之助
二人切りになったその時鳩時計　日野　華水
金言の額が裸体にかわってた　大鶴　喜由
宿下駄のまんま祭の人となる　明石　柳次
腹の皮のばして冬を歩き見ん　福田山雨楼
名人の名刺も出さず帰るなり　西　いわを
春団治さっぱりわやになりにける　吉田　水車
電燈を上げたり下げたりする暮し　江戸みつる
威厳とやらに関する如く笑わない　市場没食子
静物の一つ老僧歩めども　関本　雅幽
飯は子に炊かせ国防婦人会　後藤　青児
一天の曇りなき日の朝戻り　朝田　新水
あやまちがあやまちですむいい若さ　荒井英賀夫
脳病院窓から菜種見えるとこ　曽我部宵明
伯耆から出雲へ入る風にあい　三鴨　美笑
鉄瓶が沸いて来るのもしず心　安川久流美
君の青私の青と違う也　麻生　葭乃

(96)

昭和十一年の新春特集号の巻頭には、路郎先生の

　寝転ぶ癖の僕に海上雲遠し

の一句が据えられ、川柳雑誌社屋上に於ける先生の近影が別の一頁に向き合って掲載されている。この年の宮中の新春御歌会始めでの勅題が「海上雲遠」で、昭和天皇は

　紀の国のしほのみさきにたちよりて
　　沖にたなひく雲を見るかな

と詠じられている。

エッセイは石崎柳石の「枕草子と川柳味」、平安朝女流作家の清紫二女の比較や清女の一般論はさし措き、本論のみ紹介する。

春は曙。やうやう白くなり行く山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜、月の頃は更なり。闇もなほ蛍のおほくとびちがひたる。雨などの降るさへをかし。

秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山の端いと近くなりたるに、烏のねどこへ行くとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて、雁などのつらねたるがいとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、いとあはれなり。

冬は朝。雪の降りたるは言ふべきにもあらず。霜などのいと白き、又さらでもいと寒き。火など急ぎおこして、炭もて渡るもいとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもて行けば、炭櫃火桶の火も白き灰がちになりぬるはわろし。

全文を通読する時、何という歯切れのよい無駄のない文であろう。何という自然観照の確実なる把握だろう。すっぱりと切込んでくる冒頭の句、―春は曙、夏は夜、秋は夕暮、冬は朝―川柳は、寸鉄詩と謂われる。その懐に跳込んで肉をえぐる程の鋭利さと、これは又一脈通ずるものがある。金子元臣氏曰く、長歌は大薙刀、短歌は太刀、俳句は九寸五分、川柳は剃刀と。大きいものよりは小さいもの、巧緻精密さを喜ぶ日本人が、又敏捷、淡白を好んだ江戸っ児が、短い詩型十七文字を生んで、その中に人事人情社会の観察をこめて詠じた川柳が生れるのも、遠く溯ればその淵源は、時代の子としての清女の

一面に求められはしないか。小さい精巧なるものを愛するのは、わけて女性には顕著である。この一章の中でその現れを拾い上げてくると、「すこし、細く、蛍、三つ四つ二つ、ちいさく、虫」等が挙げられる。

全文の表現を貫く單明さは、複雑を殺して多くを言うまい、言うまいとして終に精選の魂の篩を通して後表現された、所謂金玉の文字なのである。そこに一語一句が、味わえば味わう程、広く深い匂いがひそみ、余韻余情の響が伝わって来るのだ。冬の段に於て「言うべきにもあらず」と言う辺り、言うべきに非ずして言うべく語を用いる所、清女の胸中がまた偲べるではないか。如何に言うべきか、言うべきものへの価値を探求して筆を執るところに、表現への一語千金が生まれてくる。

通読すれば全文はさらりと描かれているが、筆づかいの裡に作者の複雑な魂の動きがひそめられて居るのである。その複雑な高潮する感情の現れを、章中の「いと」語に汲み取りたい。それは七つも用いられ「さへ」が二つ。そこにも亦多く述べたい心を殺した清女の息遣いが、感情の高鳴りが窺われる。

万象観照と表現への一苦心、ここにも現代柳人の作句上深く味わうべき点がありそうだ。

(97)

一九三五年の金字塔（自選一句）

日本柳壇百人撰

以下著名柳人の作品を抜粋する

凡聖一如元旦のこころ知る　麻生　路郎
住吉の馬と生れず馬力曳く　麻生　葭乃
デーばかり多くつかれた五月の陽　尼　緑之助
鼠の子殺すに惜しい瞳が二つ　榎田珍竹林
楽しみを先んぜられた嘘をし　藤本　福造
桜の下の前後不覚を羨まれ　福田山雨楼
凡人の焼香いつか済んで居る　古谷　盈光
軍艦旗皇威を見せて揺れている　冨士野鞍馬
大の字に寝て満足な胃が一つ　後藤蝶五郎
金の力を否定してみたものの　堀口　塊人
村の子を美しく見る秋の空　橋本　緑雨
酔うという弱き心にならんかな　岩崎　蟬古
これが生活かと今日の疲労を黙る　磯部天邪鬼

おいらにはかかわりのない一機飛ぶ　磯部　孔雀
悪友のその男気を忘れかね　池田　可宵
水引きの冷たい姿暮を行く　井上　信子
ちろり並べて立春大吉　生田　翠夢
さかづきはかわくともせず世をうつし　石曽根民郎
枕ひえびえあかつきの白さより　金井有為郎
散髪の時に気づいた金儲　岸本　水府
順々に子が寝てもとの春の雨　紀　二山
松の花陽は屋根からも刎ね返り　川上三太郎
自動車の扉の音一つ雪に更け　河柳　雨吉
サフランは二月と知ってぽちり咲き　小林不浪人
秋風は小波立てて遡り　三浦太郎丸
一も二も追われ勝ちなる松が立ち　村田　周魚
喉佛酒には別なコックリコ　正木柳建寺
国宝の城松山の臍あたり　前田　五健
うとましく可笑しく吾が子声変り　森　東魚
銀屏風二月は古き家の中　前田　雀郎
何になる何にしようと子等を見る　中島紫痴郎
かさかさと木の葉明日の音で散る　中野　懐窓
魂に染む春雨の夢ごころ　中澤　濁水

宿命を人に教えて桐一葉　大谷五花村
眞っ直ぐな線路に立ちて身繕い　大島　涛明
我智恵の思い直せば皆若し　小田　夢路
昼の床虹を見るとはおもしろし　近江　砂人
妻病む日物質主義にならんとす　小川　百雷
風景に枯木と石とあるばかり　関本　雅幽
老夫婦お経の文句行きづまり　須崎　豆秋
金欲しいなど人相に出て呉れな　椙元　紋太
戴いて借りる姿が俺なのか　三条東洋鬼
叱られた子供の手から梅が落ち　鈴木　可香
世の中のことは淋しや雨の空　斎藤　松窓
華奢な脚女人一生を支うるや　品川　陣居
渡舟花屋は蝶をつれてのり　高木角繼坊
夢の中母と父とがいて嬉し　高須啞三味
金の世を嗤って淋しさにひたり　高峰　柳児
白い眼を向けた世間に敗かされる　塚越　正光
合の手をおしえてやって眉を引き　高橋かほる
大陸を踏んで色彩など忘れ　安川久流美
若き日の雄図おかしく鼻毛ぬく　八十島杜若
ドンキホーテの傾向がある朝をゆく　山本　丹路

(98)

この連載の標題「大空のこころ」も路郎先生の一句

酒とろりとろり大空のこころかも

による。李白の末裔と自称の先生にとって私は不肖の弟子で

下戸の酌間ということを考えず

と、いつも不興を買っていた。

今回は柳界に関係ある名士の新年酒談義のほんの匂いだけを紹介する。題して「酒と私」

盃を相手に　京都帝大　頴原　退蔵

酒は好きな方ではあるが、昨年病気して以来会などでは最初からことわって、あまり飲まないことにしている。うちでは過ごすおそれが無いから多少はやる。酒中の眞の趣はやはり微醺に得られるであろう。そしてそれが分って来るのは、やはり年の功を経ねばならぬものらしい。この頃いくらか人を相手にせず盃そのものを相手にして飲む妙味が解せられるような気がする。肴は濃厚なものでさえなければ何でも宜い。

書斎で独酌　法学博士　岡田三面子

毎晩七時半頃から独酌、眞に独酌、傍に何人も置かず、チビリチビリとやりながら、或は堅いもの、或は和かいものを読むか、書くかして、九時半の時報を聞き就眠、量は二合半か三合。

生命安全法　庭球家　鳥山　一歩

妻が御影のある漢流医の処へ僕を連れて行って診察させると「君は毎日三合五勺は酒を飲んだがいい」と老先生がご宣託された。僕の酒は一部老医から承った生命安全法である。

医学博士片瀬淡先生と或る夜痛飲したことがある。酒はマグネシュームで僕は之れを類脂肪と称っている。これを多くやると類脂肪が蓄積して老人性変化を起すからいけない。

しかし、スポーツをやるとマグネシュームが排除されて、カルシュームが残るから、身体は達者になる。少し位飲んだところで運動すればよいが、晩酌を余りやったらいけない。

淡先生かくは口述しながら茶碗でぐいぐいやる。その時或る卓球人が「先生、講演は結構ですが、そんなに飲

んでは…」と抗議を申込むと、先生すかさず「酒は人生観で別じゃ」と更にぐいと飲み干した。僕大いに快哉を叫んだことであった。

曰く、私の酒は老の命に従い、医博の人生観に生く。また無理有ること無し、…だ。

チョッピリ酒　　医学博士　長谷川一徹

酒ほど味のよい好ましき飲物はない。しかしながら二十一貫余の体重をようやく支えて居る私の心臓に酒を灌ぐと直ぐ持ち耐えられなくなって派手な苦しみ方を初めるので、下戸と言うことになり、周囲も飲まさない。

酔心と言うお酒があるようですから、このお正月にはそれを買いましょうと言っているから一年一度のチョッピリ酒で、一年中の酔い心を持たせるつもりらしい。

罰盃も受け　　伊予電鉄　前田　五健

「あんたは、呑まん呑まんと言うが、綺麗なのが居ると呑む、ケシカラン」

「そういう訳ではないが、そうかも知れん」

「一体酒は好きか嫌いか」

「困る、そらあった方がイイが、無くても差支えない。酒のエー悪い位は判る」

「つまり酒と添え物の花が」

「降参ッ、要するに陽気なのが好きだ」

「それ見い、罰盃だ」

黙ってうける…此の程度です。

(99)

去る日、川柳塔創刊75周年記念川柳大会を開催したところ、四百名を越す参加者を得てすこぶる付きの盛会にして頂いた。

創始者の麻生路郎先生をはじめ、多くの先達へも面目が立ったものと、日川協の役員各位、近隣他社ご参加の皆様方をはじめ、本社の役員、同人、誌友の諸氏に対し、心からの御礼を申します。

今日のこの欄には、75年の歴史を通して、戦時の雑誌統制による発刊中断という余儀ない事情以外で、最大の危機感を抱かれたであろう時期、それは路郎先生の「川柳職業人宣言」に現われたのであるが、昭和11年7月の川柳雑誌社改革に触れようと思う。

『川柳雑誌』この号の後記、不朽洞より

▽遅刊やら不行届やらで毎号お詫びばかりしている位、気の利かぬ話はありませぬ。それで7月号は、こんな「募る集」とでも名づけるべき涼しいものを出し、社の改組更生ぶりにつきお知らせやら倍旧のご声援やらをお願いすることにいたしました。従って誌代は8月号共30銭になりますからお含み下さい。と。

川柳雑誌社組織変更に就て

△最近川柳雑誌の刊行が遅れたり事務が渋滞したり、句会を休んだり皆様に少なからず御迷惑をかけました点は重々お詫び申上げますが所謂雨降って地かたまるという諺通り『川柳雑誌』の今後は一層輝かしいものとなりますからご安心願います。

△七月二日の同人会の決議によりまして『川柳雑誌』は麻生路郎先生の個人経営として刊行を続けていただくことになりました。別に強固な不朽洞会が出来て先生を極力支持して行くことになっています。

△柳壇に三十有三年の体験を有し、新聞雑誌の経営には造詣の深い先生が終生の事業として立たれ、先生ご一家が挙って力を合わされ、心から先生に心服せる不朽洞会員が全的支持をされますので、柳界に嘗つて見ざる麗わしい力強い雑誌社となる訳ですから、吾社の発展は期して待つべきものがあると確信しています。一層のご好評とご愛読を賜り度、お願い致します。

△尚お編集と事務を担当されていた増位汀柳君は同人会に先立ち6月30日限り同人を辞退されましたからお知らせいたします。

川柳雑誌社

川柳人協会の創立と正会員の募集が麻生路郎の名で為され、川柳人協会々則（第一章総則、第二章会員、第三章役員）が提示される。

川柳職業人宣言

麻生　路郎

◇私はいよいよ川柳で飯を食うことにした。イヤ喰べさせて貰うことにした。この問題についてはかなり以前から考えていた。曽てそのことを鳥山一歩君に談したこともあったが、その当時の川柳家の誤解を避けるためか私がプロフェッショナルな川柳人になることを同意されなかった。しかしこれは時期の問題で、いつかはそうなるものだと思っていた。ところが川柳雑誌社のお家騒動が、はしなくも私を職業川柳人にしてしまった。

◇と言ったところで今のところすぐそれが実現するもの

とは思っていない。今日の米代が直ちに私の川柳から生れるとすれば、それは奇蹟に近い。しかし、世の中のことは能はざるに非ず、為さざるなりである。非職業人としての私の苦闘はあまりに長かった。

◇私が「職業川柳人として起つことの発表を見てオヤあの人は職業川柳人ではなかったのか」と事の意外に今更のように驚くのは世間の人で、「そんなことが出来るものですか、私たちは川柳を楽しみに創りさえすればいいので、川柳で飯を食おうなどとは思っていない」と変な眼使いをするのが所謂川柳家ではあるまいか。

◇私が『川柳雑誌』を出して間もない話だが西宮税務署が雑誌発行による所得税を課して来た。私は彼等の認識不足をひそかに笑って釈明これつとめたが遂に容れられなかったことを記憶している。私は日本で唯一人の趣味の課税を甘受した。私はある種の人たちからある種の用件を依頼された。別に謝礼をすべきである場合にもその人達が私の営業であると信じている『川柳雑誌』の購読を以て謝礼に代えた。私は有難いようなくすぐったいようなことに度々ぶつかったが釈明はしなかった。しかし私を知る多くの人達は私が川柳雑誌の刊行で衣食しているという誤った認識の下に、私に最適の仕事があっても私に与えようとしなくなったので、私の職業戦線は日に月に縮小された。そして私は生活に窮すると首を売るのを常とした。折角伸びようとする『川柳雑誌』のためにみすみす不利益であると知ってもそれは止むを得なかった。

◇私に恒産がない限り『川柳雑誌』の刊行と私の家庭生活とは不可分の難行苦行を続けねばならなかった。

社業を伸展させようとすれば、家庭生活は極度に圧迫され、家庭生活の補充を画策すれば社業は微々として奮わない。又しても孝ならんとすれば忠ならずの苦楚を嘗めざるを得なかったのである。

◇私はこの矛盾を指摘して、経済的確立を基礎とした社業発展策を同人諸子に図ったことは一再にして止まらなかったが、もともと非営利的事業の事ジンゼン今日に及んだのであった。非営利的柳誌経営を棄てて、私と私の家族を中心とした生活、そこへ行こうとするならば、今の私は絶好のチャンスと言わねばならないが、それを敢えてしないのは私によって川柳を呼吸している多くの人達のあることを想うからである。

私は万難を排して『川柳雑誌』の箇人経営を応諾し、茲に断然職業川柳人として起つに到ったのである。しかも前述の如くこれによって口に糊することはあまりに薄いのであるから、例え職業人を標榜するとも其の完成を遂ぐるまでは著述業者としての麻生路郎をもお忘れなく御後援を仰ぎたいのである。

◇本誌7月号で『川柳雑誌』を今後麻生路郎の箇人経営とする旨を発表したところ、二三の柳誌では路郎氏の箇人雑誌になったと報道されていたが、『川柳雑誌』は決して路郎の箇人雑誌になった訳ではなく箇人経営になったのであるから誤解のなきようお願いしたい。

◇しかし今更、月並宗匠の轍を踏んで「この句もあの句も誠に結構でヘイ」とツルリと額を撫でる芸当は出来そうもないので、選句に執筆については今迄と何ら変らないから、その点は御心配御無用である。ただ選句に講演に、出張に際して特に御高配が願えれば小生のからだのあいている限りはお使い下さっていいということを御承知ありたいのである。

川柳人協会名誉会員芳名録

（千葉）久良伎、（東京）三太郎、周魚、雀郎、三面子、正光、天民子、（福島）五花村、（青森）不浪人、（函館）晟修、（金沢）久流美、（静岡）珍竹林、（長野）紫痴郎、（松山）五健、（大連）涛明、（朝鮮）可宵、省二、（兵庫）南北、（神戸）紋太、（京都）福造、（大阪）東魚、渓花坊、鶏牛子、塊人。

▼後記▲本誌は改組と同時に三段跳びの勇躍を開始した。それにつけても御高配を賜った方の好意には感泣している。と書き出す。

(100)

仏蘭西俳諧の鑑賞と題して鈴木小寒郎氏のエッセーが二ヶ月に亘り掲載されている。

フランスで我国の俳諧精神を輸入して、三行詩に構成し相当なる流行を挙げた一時代があった事は、つい最近の事であり、俳諧の特殊研究をされた方にはすでに御承知の事であろう。との文章に始まり、日仏の文化交流の歴史の概要に触れ、多分後藤末雄氏訳のフランス俳諧詩が提示鑑賞されている。以下その作品に簡単な鑑賞文を添えて列記する。

片手で洗濯物を叩きながら
ほかの手で
額の上の髪をなであげる

これには、はっきりと川柳的感情が躍っている。髪の美しさをもてあましている。

塹壕、夜
敵の大軍を前にして
ふたりの兵士　（ジュール・スガン）

ふたりの兵士何を語るか。軽いペーソスを織り込んだ戦場の一点景として生かしてある。塹壕の夜はかかる悲壮美を包含して更ける。

蒲団の上の白い肉体は
綺麗な白い泌点だった
あゝ、ほんとになつかしい　（モーブラン）

俳諧という名にふさわしからぬ、いわば近代的新感覚派の俳句の表現で鮮明な感覚詩。

呼起せよ、暗示せよ、三行のうちに
その冷然たる顔つきを
されどその下の苦しみを、余すなく　（ヴォーカンス）

この詩俳諧道の真理を喝破しているのは素晴しい。「暗示せよ」という精神は根本的に欧米の詩と趣を異にするものだから。

寝台の足もと、鏡付の箪笥
断頭台に昇る心地
我々二人の罪深い顔が映っている　（ヤコブ）

言いすぎの嫌い、点景の道具立が過ぎる。性描写は仏文学の粋だが俳諧では失敗作だ。

こゝもかしこも
紙だらけ
おや、うちの人が帰ってた　（ブルトン）

ひょんな穿ちが見えるではないか。

あの恋文が
二つに畳まれて
宮のありかを探してる　（ルナール）

私達におなじみの「にんじん」のルナールで、これはいかにもフランス自由詩という味。

シャボン玉の中へは
庭は這入れません
まわりをくる〳〵廻っています

これも私達には、その作品に接する事の多い、なんでもござれで有名な詩人ジャン・コクトオの作。彼の東洋趣味は有名である。これは堀口大学氏の訳。

堆積された白い岩
この雲の登山者
気球　（ジャコブ）

これは北川冬彦氏訳。マックス・ジャコブは立体派の感覚で自然を解体して見せた詩人。

次に少しジャン・コクトオの二行詩に触れ、

耳
私の耳は貝のから
海の響きをなつかしむ　（堀口大学氏訳）

私はより俳句的と思い荻原井泉水のと比較して見ると仲々興味がある、と記している。

「おーい」と淋しい人
「おーい」と淋しい山　（井泉水）

(101)

この欄も大台の百回を過ぎ、今回は百一回となる。それも麻生路郎先生を中心として月々に出る『川柳雑誌』は如何に広範な執筆者が担当し、如何にバラエティーに富んだ内容を掲載して川柳人に裨益したかを提示せんがためで、今の雑誌に比べその多彩さには舌を巻く。常に金銭との均衡を計りながらの苦労が偲ばれて先人の奮闘ぶりに頭が下がる。

「春は春らしくフレッシュな感触のセンリュウ・マガジンをつくる。そんな事を考えぬでもなかったがふかふかとしたクッションに葉巻でもくわえ、マニキュアの身だしなみを誇るような時代でも来ない限り『川柳雑誌』らしくもないことだと思い、せめては来るべき丙子柳壇への我が社の抱負だけでも書きたいと思っていたが、これも雑用に追いまくられ、発表を見合わせてしまった。発表は見合わせたが実行には移るつもりである。

この「金色蝙蝠」は自他の事を手当り次第に書いて行く頁として拵えてもらった。私が何か言っていることも必要であると思っている方は是非この頁の愛読者になって欲しい」

このような書き出しで始まり、順序がなく時には世間のことを、また時には人間のこと、身辺雑話や柳友につ

いて、勿論のこと川柳論の片鱗も認められていてこれが半年間続く。

最初に昭和十年の主な回顧。三月に四男の洋さんの発病と死、それに幾年ぶりかにサラリーマン生活に戻ったことを記し、十二月もキリキリ舞で暮らしたが、アートのヴァイオリンも本格的な勉強をはじめているので、先輩や友人の好意の中に包まれて越年する今の私は有難い境涯だといえる、と述懐する。

旧冬、南北翁が阪大病院に入院した。早速見舞に行ったら涼しい顔でベッドの上に起き直って、「昨夜入院したんや、病人がピンピンしてるので、一体どなたが悪うまんネと看護婦が迂路々々してんネ。面白かったで」とまるで宿屋にでも着いたようなはしゃぎ方で、とても愉快そうである。

「それでもな、夜になったらここが痛んでなかなか寝られへんネ」と頸筋を押さえて見せる。「昼にはこうしてキョロンとして何でもないのや。これが反対やったら散財に行くのんに」と如何にも残念そうである。

二度目に見舞った時には、まるで死んだようになって、痛ァーい、いたァーいと言う外の言葉はなかった。人一倍大きな男が見栄も外聞もなく、まるでこどものように痛がって奥さんに散々駄々をこねていた。あらゆる虚飾の中に生きて、くらげのような生活をしている偉大な凡人南北翁の赤裸々な姿を遺憾なく発揮している。「先生、せーんせい」と同時に見舞に来られた長崎柳秀博士に呼びかけて、「せーんせい、手を握ってくださーい」とうるんだ眼をこちらへ向けて手を差し出す。

「女でなけりゃつまらんやろが」

「男でもエヽ」と手が手を追う。

「わしの方がいかんのや」と博士は更に応じようともしない。

痩せても普通人より大きな体格の持ち主の病人と、達者でも普通人より小柄で痩せている博士との対照は病室らしからぬユーモラスな空気が漂う。

一時南北翁の容態は私たちを心配させたが今日ではもう退院の日を待つばかりである。

路郎先生のペンはのっけから快調である。

(102)

★春霞立つ中空へ、う・わ・あ・んと黄鐘調の旋律を撒き広げて十八日から四天王寺はお彼岸の幕をあけた。中日に一寸のぞいて見たが境内はいま仁王門の工事中で、あちらこちらに巨材が積まれ空地が少なくなっているため名物の見世物もおおきなものは少いが、それでも船木嘉吉老人の蛸々踊、娘サーカス、大蛇、七不思議、のぞきなど童心にほほ笑みかける興行物や、竹独楽、野菜きざみ、八つ目鰻、もぐさなどの露天商約三百が線香の煙りにかすんでならんでいる。

私は人に押されながらも数年前、故人になった其象の竹独楽の音も春らし天王寺

の句を思い浮べていた。肺を病んで刀根山の療病院にいた其象が退院後、句会に来て、私が演壇に立つと、すぐ眼の下にいて熱心に私の柳話に耳を傾けていたあの丸刈頭を思わされた。

★三月号で正岡芸陽を容君の父だと書いたら「小生の父とあるのは嘘です」と容君から抗議があったから取消すことにした。アレは幽蘭女史の直話をウッカリそのまま書いてしまったので軽率の罪をお容しありたい。「去年は子規の息とある所で書かれて恐縮しました」とある。単に同姓だというので勝手に他人の息にしたがるのもおかしな癖だと思う。子規ほどの息子にされることは満更腹も立つまいが肺病の系統視されてお嫁さんの来手がないと、ソレも困りものだ。

★三月下旬大阪帝国大学の記念会館で川柳動物慰霊句会を開いた。尤も兼題は「動物一切」である。その時の句を二三紹介して見る。

追うなればわれ走らんと蛇鳥いる　（利生）
握りずし蝦の長さに出来て居り　（柳秀）
逢引を見付けたように鹿が来る　（たけを）

★森半畳君が赤倉ホテルから、橋本緑雨君が長野の藤長屋ホテルから、福田山雨楼君は松島から、西田艸楽君は吉野路から石崎柳石君は広島から等々、春はホテルからといった風に頻り旅の便りがつく。せめて学校の休みにこども等を引き連れてそこらの若草を踏みたいと思っていたが、其の機会さえ与えられない私にとっては羨ましい限りである。

耳がクシャツク、机上の鏡を覗くとピンと白髪が突っ立っている。それがギラギラ光っているので、小さな西洋ハサミでチョンと切った。晩春初夏は悩ましい。

★　あや美句抄

人生の凡てを恋になげ出して
気儘さを異性へだけはかくしてる
未来など忘れ女のあたたかみ
馬鹿にする中に親身を見せてくれ
彼女だけ愛し消極的に居る
失恋へ我が名をかえんなぞ思い
小康の眼先へペルシァ猫が来る

★月末に野口雨情氏を土佐堀の京家に訪ねた。幾年ぶりに会った雨情氏の謹厳な態度に変りはないが、頭髪が薄く白くなっていることは私のこころをさみしくさせた。一盃献じたいと思って南へ誘ったが、播州の高砂から迎えに来る人を待っているので出掛けられないとのこと。それに近頃はリューマチで弱っているので飲めないのですよと言いながらも、私のためにビールを命じようとされた。恰度そこへ高砂からのヴィジターがあったので再会を約して引揚げた。

(103)

福田山雨楼の随筆〝保土ヶ谷より〟から。

初代川柳の墓碑

川柳始祖の墓碑が大震災の損害も受けず東京浅草龍宝寺内に現存していることは悦ばしいことであるが、碑面の法号は『契壽院川柳勇縁信士』となっており、同寺の過去帳及び祖翁に関した著述「元祖二世三世川柳墓参法莚会」―九世川柳著―にある法号『契壽院川柳勇緑信士』とは一字違っているのである。

祖翁の幼名は勇之助、俳号を緑亭と称していたのだから「勇緑」の方が授けられた法号に相違なく、墓碑のは誤字を刻んだものと言われている。けれども苟しくも墓碑を刻むからには、そう軽々しく間違うものではあるまいと考えられ、碑面が正当なのではないかと言う気もするのである。これは何人かの努力によって確証を得ての誤りなら、誤りであるとはっきりして貰いたいものである。

次に句碑「木枯しや跡で芽をふけ川柳」であるが、従

来大破しているのを今般全国川柳人の支援と「きやり吟社」の斡旋とによって再建の計画が運ばれつつあることは同慶の至りに堪えない。しかるにこの辞世は柳多留にも其他の印刷物にも載せられていないらしく、菩提寺龍宝寺内に五代目川柳が、祖翁の五十周忌の追善に建立した「木枯し」の碑を信ずるからに過ぎない有様だ。この辞世についても何か他に厳とした文献明証が望ましい。

川柳翁の史実

初代川柳の偉業を追慕讃仰するわれ等川柳家にとって、翁の全貌はおろかその片鱗だも正確なことはわからぬと言う状態は甚だ遺憾千万な次第で、芭蕉翁が俳聖と尊崇され、その一挙一動に至る迄審かにされた文献資料があるのと比較すれば、実に大変な相違である。

しかも川柳翁の史実探求はこの上究めようたってもう既に絶望の渕に立っているのであるかも知れない。諦めの一手より他に残されていない訳だ。しかし只諦めただけではいけない。万句合を通じ柳多留を通じて、翁が残した不朽の精神をさえ受け継いでおくならば、よしこの上の史実探求が徒労に終ろうともわれ等の詩川柳は益々確固たる根を張り花を咲かせゆくことが出来ると思う。

今日までの史実では柄井八右ヱ門翁の歩んだ道は、当時の町人の生活以上に出てこない。

俗人として俗社会の雑踏にもまれたのに過ぎない。しかも、その生活の中から民衆詩川柳を拾いあげたのである。われわれは川柳をその草創の期にあってよく育ててくれた祖翁の偉業に満腔の敬意を表するものであるが、彼もまた一個の市井人に過ぎなかったという点において、寧ろ百万の味方を得たようなよろこびに浸り得るのである。祖翁の史実が審にされていない不満を打消して、猶余りあるよろこび（誇りですらある）を抱いている。

長野県の川柳村

長野県更級郡に川柳村という村がある。その読み方も正しく「せんりゅうむら」でわれらが詩川柳と何等か機縁があるのではと……

友人に調べて貰うと、川柳村は「川中島の古戦場」に近い寒村だが、「将軍塚」という古墳のある所、そして村名の由来は、往年のこと「石川」という字と「二ツ柳」という字を合併して出来た村に「川」と「柳」と合わせ命名したらしく、いわれを聞けば失笑を禁じ得ないが、それでも何となく懐かしく機会があれば一度訪ねて

見たいと思う。

(104)

日本名所名物川柳

このタイトルで諸国の名高い観光地巡りが始まったとき少し紹介したが、これが長く続いて興趣を覚えるので今回はそれを抄出する。

〔四国の巻〕　前田五健選

松山城

天守閣石鎚山は晴れている　彩泡
お城から見れば道後は花の町　一枝
松山はお城の東から暮れる　一枝
築城の由縁ナモシで聞かされる　九紫

金毘羅

絵馬堂で目立つ海軍士官なり　輝親
かんざしの如く花さく象頭山　五健
颱風の中に金毘羅さん忙し　五健

室戸岬

陽があんなところにあった室戸岬　暁童
波々の果雲遠し室戸岬　五健
室戸岬同行二人の笠で見る　宵明

道後温泉

土産屋の何所も喋べらぬ伊予道後　美弥
参籠の垢を道後へ持って来る　帆哉

鳴門

大鳴門小鳴門トンボ飛んでくる　水客
写真では鳴門の凄さ見えぬなり　文庫
満月を鳴門の渦が乱したり　夕鐘
大鳴門通り過ぎたら春の海　葉光
海神は鳴門の底と思召せ　虻の麿

屋島

何気なく開いた窓に月屋島　廉夫
談古嶺具足をつけた気で覗き　暁童
蟹の目に屋島の浪と春の月　葉光
ケーブルの客に買われた平家蟹　宵明
朝日より夕日が心ひく屋島　世間音

阿波踊

阿波踊恋を語ろう暇はなし　芳花
阿波踊輪を出て乳を呑ませてい　勝

寝つかれず宿を亦出る阿波踊　葉光
酔うてない足のもつれの阿波踊　夕鐘

遍路

華奢な手へ長閑にうけるお摂待　三汀
母と娘の遍路へ桜ちる真昼　葉光
番外へ来るお遍路も春のもの　乱蛙楼
遍路宿二階へもくる筧水　五健

〔京都の巻〕　山川紫明選

祇園

一力の暖簾成駒屋が出そう　水客
天晴れな男祇園で飲んでいる　木履
鬼灯を買うた祇園の石畳　柳一
祇園からあなた任せの遊びに出　佐保蘭

島原

道中の傘を拡げた日本晴　風林
八文字踏む道中へ花が散り　晃洲
島原を出れば今から昭和なり　憲一
島原を巡査はにべもなく通り　紫香

金閣寺

金閣寺信心で行くとこでなし　世間音
団参の疲れ金閣雨となり　狸公三
金閣寺或日維持費のことに触れ　佐保蘭
金閣寺此処で盃なめたがり　有耕

新京極

京極を旅の浴衣で二度通り　水客
信心は新京極を斜に抜け　世間音
京極は宵長二郎に似た顔に逢い　いの助

知恩院

甚五郎の傘仰いでる団体旗　いの助
国宝の廊下うかうか通りすぎ　澄風
知恩院へマイクの据る大晦日　世間音

刑法学者としても、古川柳研究家としても一代の権威であった三面子岡田朝太郎博士が昭和十一年十一月十三日、相州葉山の自邸に於て溘焉として長逝された。行年六十有九歳、法名は法性院釋朝楽居士。

古句畑では曩に今井卯木、武笠山椒両氏を喪い、次いで西原柳雨翁に告別し、今又岡田三面子先生の訃に遇う

ことは、川柳体系をつづける上に於ての一大痛恨事である。

殊に博士の該博なる知識と不屈不撓の研鑽に俟つところの多い柳界に於て博士の永眠は何ものにも代え難い損失と言わねばならない。

日本随一の柳書の蔵書家であって、しかもこれを自他のために活用し、活用せしめられたことは川柳に生くる者の牢記して謝恩すべきであろう。故西原柳雨翁の編著になる大部の柳書の素材と、これが指導は殆ど博士の川柳愛に依る好意だと言っても敢て過言ではなかろう。柳雨翁の研究上の指導と補遺、柳書上梓の斡旋、生活上直接間接の後援、それ等を思うとき、博士の人格の如何に高潔であったかは想像するに難くない。由来学者は、真理に没頭するため頭の冷徹さが自然人情味に欠陥を来たすものであるが、ひとり岡田博士に於ては人情味豊かにして機宜に適した処断に出て、法の真精神を活かされた点、人間三面子の全貌に触れた感がある。

その一二の例を挙げてみよう。

孫文の中華同盟会に参加した汪兆銘が肅親王暗殺を企てて捕えられたとき、時の司法大臣はその処置について博士に相談があった。博士は「死刑に処するよりいっそ逃がせ、処刑にすれば騒ぎが大きくなる。逃げたものは仕方がないと言うことで済むから」と言われた。そして博士の意見が用いられ後年汪氏は政界の大立物となった。刑法学者の博士にこの味うべき言葉のあったことは甚だ面白い。

これに反し自己に対しては厳として法の侵すべからざる精神を以ってのぞまれ、法の文字以上の責任を果たされている。

その例として博士は令息三男の事業失敗に依る多額の負債を敢然として引受けられ—法律的には親は独立した息子の債務弁済の義務はないが—月々これが償還に務められた。その義理堅い道義観には博士を知る限りの人々は讃嘆して止まない。（中略）

私がこの九月の中旬に上京して真っ先に訪問したのが明大の岡田博士であったが、既に病を得て帝大の呉内科へ入院、面会を謝絶されているのであった。単にお見舞状にとどめ所用を果して帰阪したところ、葉書を寄せられた。このはがきの表書には、東京帝大病院呉内科、七月廿六日岡田三面子とあるが、本郷局のスタンプは九月

二十六日となっている。九月を七月とどうして書き違えられたものか、それは不明である。

最初は喘息で苦しんでいられたそうであるが、病名は腎臓病、肝臓病、心臓病等々併発、遂に起たれなかったのである。

まだ少し早いと閻魔苦笑い

の句を見ても、まだ死を予期されていなかっただけにこの突然の報を知って甚だ悼惜に耐えない。博士の逸話と追憶を書けば果てしがない。謹んで冥福を祈る。合掌

麻生　路郎

博士の主な川柳著書は『寛政改革と柳樽』『謡曲と川柳』、随筆『虚心観』など。

『川柳雑誌』にも幾多の玉稿を寄せられた。

(106)

十二月に路郎先生の作品を抄出しようと思うので、今回は昭和十一年の川柳塔欄への掲載句を紹介する。当時の風俗に興趣あり。

元日のネオンサインへちと捌け　西田　艸楽
春至る日の清閑は人も来ず　山本　雨迷
グラビアでスキーの姿見たばかり　麻生　葭乃
除夜の鐘旅で聞く身でなかりけり　同
うつくしいさかなが二匹そんな恋　山本　丹路
おゝ寒いと寒さ袂に抱く女　春元　紀太
葬式で会いぼろいことおまへんか　須崎　豆秋
気の毒な姿に変わる焼きリンゴ　奥野　禿山
宮仕え恋までゆずりつつがなし　吉田　水車
剛情は既に白髪が物語り　市場没食子
尋ね人余り美人でなさそうだ　岩崎　柳路
あほくひかって一升瓶は空　尼　緑之助
お元日損した顔と思われず　姫田　夕鐘
口で割る箸へかゝった牡丹雪　平井　春光
代書屋の食いついて書く近視眼　喜多　春秋
堤防のそれから酒井雲となり　大西　八歩
残業に母の事などかんがえる　三鴨　美笑
人間の忘れていたる水の味　住田　乱耽
屑拾いやっぱり得意あるときく　橋本　緑雨
こんなにして呑んでいるうちだけが無事増位　汀柳
学問をしてもわからぬ親心　後藤　青児

刺繍屋の男朝からたすき掛け　西村　明珠
若水や父のくすりに子のくすり　関本　雅幽
ほんとうに惚れてチップをおしかえし　大鶴　喜由

台中新竹地方大震災

とび出せば近所の顔は揃うてる　宮内　耕朗
はちまきをして浴場の用を足し　高橋かほる
最終の辞令が死亡診断書　岡田　某人
一人酌ぐことも忘れる為めの酒　朝田　新水
逢うまでを梅一輪にたそがれる　竹内機見女
財政は頓にすぐれず石の門　石曽根民郎
豆腐屋の子供豆腐を冷たがり　眞田　幸捐
秀才の一銭店を商えり　月原　宵明
岩田帯もう春めいた春めいた　後藤　大朗
置炬燵女のひざがせまるなり　生田　翠夢
金屏風借りて来たのでないのなり　青木　史呂
だんだんと寝酒の味に老けている　中澤　濁水
使われの身の使う身を思いやり　西　いわを
先代の濡場そっくり子の舞台　新見世間音
そこら中春が来ている告知板　植山　九天
オーバーの重さに馴れて余寒へ出　浜田久米雄

護身術初段未だにミスで有り　酒井　大楼
動かない空気の下の答案紙　石崎　柳石
満開の春が誘うた浮気なり　町田　承春
巻尺の百呎にも陽があたり　水谷　鮎美
近来の世相論語を読み直し　奥野　其奥
金で得た地位は金ゆえ捨てるのさ　丘　遊舟

(107)

昭和十一年三月号の路郎先生の巻頭言から。

第六十八議会は解散し、一手販売のような総選挙が行われた。雷が鳴り、地震があった。

無闇と雪が降った。そして二・二六事変勃発である。

春寒し拾い手のない首二つ
我が世とぞ思う春にはならざりし
身代りの緋繻しぐらい着てて欲し
鑢える文字は帰順の外になし
呼びかくる声は赤子よ兄弟よ
事変は数日で平静になり、野中四郎大尉は自決した。
勅命に抗して悲し雪と散る

二・二六事件忠義の裏表

建直し綾部でなくて興津の手

元老西園寺公爵は杖を大内山に運ばれた。この事変でその無力さをはっきり暴露したものに、新聞とラジオがある。飼犬がお預けを食った形はあまり見っともいいものではなかった。（筆者註―こういう筋道は昨今の世相と似たところがある。この句この記事が三月一日発行の『川柳雑誌』三月号に掲載）

今からでも遅くはないと酒のこと

選挙違反あの料理屋の灯を思い

雨の松本にて

遠く来て信濃に山のない日なり

聖書一冊菊一輪の二階也

勅題は何でしたかなと十二月

父のずぼらがいっそ目立つも十二月

句会吟

襟垢をためて恋でもあるまいか

歩行器の孫は芦屋で育てられ

桜かねと落ついている年になり

金があればうれしき春の雪なるに

あの頃は本を売っても逢いにゆき

洗面器女の客は譲り合い

洗面器さて勘定が気にかかり

煉瓦の下のみみずの如く生きるのみ

昭和十二年の句

お年玉位ならある暮の父

友達に別れた時がお元日

元日も二階二日三日も二階に居

ビルの窓誰を呼んでるのでもなし

闘病のそこにも春はさんさんと

春の日はねまきのままで暮れてゆく

夫婦あらそえり旅をしながらも

同情の最後の品に米俵

子が死んで葱や菜ッ葉の乳母車

とろろ昆布しおこぶ闘志衰えず

情痴の果てのひとり飯炊く

父・植木・小鳥・娘はうちにいず

千人針胡瓜抱えた手でも縫い

玉出駅踏切にて

日ぐるまも兵を見送る如く也

銃後々々飲まずに辻で別れたり
言うだけは言え言え若さ失うな
銀行のお世辞も気の腐るものの一つ

句会吟

大胆に男の顔を見直した
総辞職犬も一緒に引き揚げる
総辞職再び松の風を聴き
本復に庭の手入れを思いつき
本復をして辛辣な口をきき
包紙に鰻図案化されている
借着して今更僕は背が高し
菊一輪間借りの留守に匂うなり
間借りして無口いよ〳〵無口也

(108)

昭和十二年の『川柳雑誌』新春特集号は、本欄の先号に掲載した路郎先生の句、

友達に別れた時がお元日
元日も二階二日三日も二階に居

などの不朽句稿から始まる。

恒例の「日本柳壇百人撰」の諸家の自選には佳句が少ない。一九三六年の金字塔という副タイトルは立派だが、やはり自選の甘さはベテラン作家にも当てはまるもののようだ。

一萬円フフンと言って草に寝る　麻生　路郎
昼の風呂いっそあひるで居りましょか　麻生　葭乃
増税の風におののく生命の灯　井上　信子
子の後姿見倦かず湯呑持つ　川上三太郎
第五号外大阪は雪となり　岸本　水府
饒舌のあとのさびしさ家に着く　小川　舟人
借りる判貸す判代書見較べる　大野　琴荘
ひとりを愛す麝香撫子も白　清水　米花
新緑は木魚の音がするばかり　須崎　豆秋
老眼鏡をはずしても子の馴染まない　高島玉兎朗

岸本水府の句は二・二六事件の日の号外で、翌年のこの年、七月に盧構橋事変が勃発した。

エッセイは福田山雨桜の「川柳十徳」が、まとまった読物で副主幹らしいスタートを切る。次にその全文を紹介する。

菊池寛氏がかつて大阪で某新聞社主催の文芸講演会で「文学に親しめばこんな得がある」と言う意味の演題で語られた事がある。もう十年も前のことであるが、僕もこれを聞いて珍らしい文学観として未だに記憶している。尤も同氏の話は「文学―主として小説―には文学の使命と意義があるので、これに親しめば得をすると言ったような功利的な考えから文学をやるべきものではないが、実際に得をする点が多い事も考えていて貰いたい」と暗に阪神商工都市市民の文学的関心を喚起することに努められた話だったと思う。菊池氏の説かれた文学の功利観中には色々の点をあげられたが、僕が今記憶している限りでは世態人情に長け、生きた人間の学問が出来ると言うこと、自分自身を省察、分解する力と叡智とが増えるという点であったように思う。

川柳の場合でもこれと同様の事が考えられるのであって、川柳を作り、川柳を味わい、川柳を研究することも、功利的な意味から始めるべきではないが、真の川柳を知っていることによって、得をする事は決して尠くなくないのである。

次にその得をする点を十項目許り掲げて見たが、まだこの外にも沢山ある。そんなに得になる川柳なら一つやって見ようと言う様な奇特な方が一人でも沢山現れることを、心ある川柳家は待ち構えているのである。そして先ず新年から川柳を始めて貰うならば、これは所謂百年の計となって必ずや大成せられるに相違ない。

（一）ユーモアがわかる

英国あたりではユーモアのわからぬ男は紳士ではないと迄言われているそうだが、ユーモアを解することは馬鹿話の間からは仲々得られない。腹の中からこみ上げて来るようなユーモアの味、それは川柳のみが持つ特権だとは言わぬが、川柳も亦預って力がある。

秋風の中で乞食に拝まれる　　豆秋

（二）人間愛を深める

人類愛と言ってもいい。光った川柳は必ず人間味が滲み出ている。貧しきもの、無智なもの、弱きもの、病めるものを見ても、そこに美と真実を見出すのが川柳である。人間が人間を愛する至情の表白こそは川柳の生命である。よき友達の生れることも請合いである。

俺に似よ俺に似るなと子を思い　　路郎

（三）自然に親しめる

自然を詠う短詩には俳句が代表的なものであるが、川柳もまたこの畑に風馬牛でいるものではない。川柳独自の観察と角度から、自然の風情を探っている。

君見給え菠薐草がのびている　　路郎

（四）**観察が鋭敏になる**

「川柳は睨む」と言われるだけあって川柳をやっているうちには、生まれつき俊敏でないものでも相当な眼の持主となることが出来る。

心の働く素地が作られる。物を見る眼をゆるがせにしなくなる。

大晦日上唇が乾ききり　　鮎美

（五）**機智に富む**

目から鼻へ抜けるような小賢しさは時に嫌味を覚えさせることもあるが、人間機智に富むことは望ましい。川柳の上乗なるものは、よくこの機智を働かして三嘆これ久しうせしめる。川柳をしていれば自分も機智に恵まれてくるのは不思議であると言えば不思議だ。

逆とんぼ打って社長を出迎える　　杏三

（六）**心にゆとりができる**

今日のような経済機構と社会思潮の渦中にあっては、大抵の人はせっかちで神経質で、理屈っぽく、愚痴っぽく青白くなるばかりである。だまされると思って明日からでも川柳を始めるならば、妙に心の余裕が出来て昨日と違った世界を見出し、一服の煙草にも変った味を求め得るであろう。少くとも釣りに行く以上の効果はきっとある。

元日だせめて眼鏡を拭きましょう　　路郎

（七）**不平不満が緩和される**

如何に不平のあるときでもじっと心を静め、一句をものにして見ると今迄余りに興奮していたことに気付き、腹の固まりが解けてくる。不満が緩和されると言うより、悟りが開けてくると言った方が当っているかも知れない。

初婚には限らぬと言う年になり　　正光

（八）**ロマンチストになれる**

句を作り、句を詠み且つ味うことの楽しみ、快さに慣れるに従って、川柳作家は知らず知らず文学の母胎であるところのロマンチストになってくる。小説を読んで泣く女のように甘くはないにしても、句境と情緒に浸り、感傷を汲むことが出来るであろう。

牡丹雪はら〳〵旅にいる心　　葭乃

（九）**世間が広くなる**

川柳作家には職業、年齢、素養、性格、経験、習性、趣味等々あらゆる種別の、そして広範囲の階級人を集めている。川柳の精神がまた集めようとしている。また川柳に詠まれる対象が社会百般の人事葛藤に重きをおかれているので、これに親しむことで常に接触していない社会に対する認識が広まることは勿論、世間の裏表にも触れることが出来る。

葬式の人夫で食える道もあり　　白蝶

（十）**作品が残る**

これは極めて当り前の言葉で、五銭で三銭切手を買えば二銭残る、と言うのと同じことのようであるが、その相違を発見するのには川柳をやるに限る。釣銭は使えばすぐになくなるが、文字に残した作品は嫌が応でも後年に残るのである。しかしその作品が光ったものであればあるほど句の永遠性があるのだ。

そして川柳は他の文芸作品に比較して短い詩型であるから手軽に句を残すことが出来る。

作品が残るところに文学の尊さがあり、これに携わるものの喜びがある。黄金を以て替え難い心の富とも言えよう。

子を死なし学校に子の多いこと　　路郎

(109)

神様と行き違うた話　　路郎生

旧冬は随分と忙しかった。明けても暮れても川柳々々で暮らしていて、つくづく感じたことはその事に没頭すればするほど、ますますいよいよ忙しくなるということだった。

実は僕も今年は五十になるので、五十になったら少し落ちついて「川・雑」の仕事はすべて誰かに譲って僕自身は川柳の象牙の塔に閉じこもって、思うがままに書いたり読んだりしたいと思っていたが、それも昨年の改組からどうにも手を引く訳にいかず、私の考えていたことは当分実現しそうにもない。しかし何れにしても川柳のために働くことにかわりはないので、もう一度フンドシを締め直して大いにやって見たいと思っている。

私の元気はこの年になってもなかなか落ちない。むし

ろ、より以上に旺んであると言いたいが肉体の方はそうはいかぬ。それでひそかに警戒はしていたが、暮の二十四日だったか、玉出の街路上にこれという原因もないのに、木を切り倒したように物の見事にブッ仆れた。それがために、その夜の堂ビルの忘年会は出席を約してあったが失礼した。しかし尼崎の親友会の忘年川柳会は責任上出掛けることにしたが、これは家族が案じるので、機見女の護衛つきで出掛け辛うじて責をふさいだ。私は今でもなぜ仆れたかその原因を知らない。矢張りもう元気だけではいかぬ年になっていたのだろうか。そう考えると私が柳界のために働いて置きたいと思っている仕事は、いよいよ以ていそがねばならない。

私の家族が、私の仆れたことについて、非常な衝撃を受けたのも無理はない。私の父も大阪の北区の大火のあった直後、九月に脳溢血で亡くなったし、葭乃の父の蘆村翁も矢張り笠置でもんどり打ってブッ仆れて二年後、やはり脳溢血で亡くなったという前例がある。

殊に健康そのものだった葭乃が昨年の七月に突然仆れて病臥三ヶ月、まだ充分に健康体になってはいない時であるから萬一のことがあったらという考え方が子供達の頭に浮かんだらしい。

葭乃が私の仕事場へ出て来ての話に「澤田先生がお茶を喫みに来やはったので、あんたの仆れたことを話したら『そんなことはよくありますな。田舎では、神様と行き違うたのだと言います』と言やはんね。先生はお医者はんやから、そら血圧でも計って置けと言やはるかと思うてたら、まるで見当違いの返事をしやはったので、矢張りあんたが川柳々々で暮しているように、民俗学の事ばかり考えてはるのやなァ」という。

「アハハハ、そいつは面白い。それでええのや。エスペラントのザメンホフ博士も元は歯医者だったが、寝ても覚めてもエスペラントで門前雀羅だったということだし、そんな例は古今東西にある事だ。僕だって、親爺は商売人にするつもりで高商にまで入れてくれたが、矢張り川柳家の方が板についたのか、遂々自分で川柳業をはじめてしまったやないか。人間の仕事は何処に待ち伏せしているのか判ったものではない。まあ、そう心配するな。それよりも暮の忙しいのに神様と行き逢うた方がよっぽど面白いやないか」。

路郎先生は五十歳、私は七十歳、よう似ている。違う

のは先生は川柳界規模、私は川柳塔規模、行き違いも格が違うのである。

(110)

まぢっく・べっど　　麻生　霞乃

あんまり無口なのも親しみ悪いが、奥底にない事を捲し立てるのも疎ましいものである。

こんなことを考えると私は益々日常茶飯事の挨拶にまで、右すべきか左すべきか迷わされるのである。

假に途中で人に遇った場合、唯「今日は」と言っても挨拶であれば「どちらへ」と訊くのも挨拶である。「やあ」とか「まあ」とかあっさり片付ける方法もあれば、相手に一言も切込ませる隙のない位流暢に、時候の移り変わりから、無沙汰の詫び、向こうの肥えた事、こちらの痩せた事、序に家のごたごたまで一遍にぶちまける法もある。

お互いに敬い合い、親しみ合う事が挨拶の目的であるならば、余程相手の気持ちを呑込んでかからなければ、到底相手に親しみを感じさせる事は出来ないのである。商人には商人の軽さで、学生には書生気質で呼びかけるのが、ほんとうの挨拶であろうと考えるのであるが、そんな事はあらゆる社会を通り抜けて来た通人でなければ、手際よくやり終うせない芸当である。私のような者は、正真正銘、何処を叩いてもそんな魅力のある挨拶の出よう筈がないと諦めている。第一、相手を意識せねばならん事からして、一番肩の凝る仕事である。

日本人に生れて日本語さえ適切に使いこなせない私が、まんまと無傷なワン・センテンスを発見し、扨てそれを無調法な口から吐き出さねばならん時に、まだ、その上に先方の性格まで考慮に入れなければならなかったり、その場の雰囲気を見渡さなければならなかったりする事は、私にとっては拷問にも等しい責苦であると考えるのである。世間並の挨拶は作句以上にむつかしいものであるのに、ふっと眼が覚めたら、実際雀が鳴かぬ日はあっても、この挨拶ぜめに合わない日はない。

世間並の挨拶が面倒だからと言って、山奥へ遁れて蕨でも嚙っていたら、屹度、又世間並の五月蠅さが生む文明の利器をありがたがるに相違なかろう。又、社会の一員として存在している限り、遁世は卑怯な振舞でもある

し、假令僅かでも腰を掛けさせて貰っていれば、お役目も果たさなければならないと考えているので、私は極めて功利的な方法を案出した。それは唯私の脳のスイッチを切変えさえすれば、忽ちにして現れるマヂック・ベッドなのである。マヂック・ベッドは静かである。私一人限りである。

雨が降って花が咲いた。風が吹いて花粉が散った。人間の感情もその通り、自然の力に触れて絶えず動いている。人間の思想も撓みなく流れている。その流が広々とした大洋へ押し流される時には、昔は山肌をつたって居た清流であった事を忘れ果てているかも知れないのである。私は刻々に移って行くその心の姿を永遠に葬って終いたくはないのである。

洋装をした時に、浴衣を着た時に写真を撮るのと同じ気持ちで私は作句精進を続けて、句を楽しむという欲望を持つものである。

人の句を楽しむと言う事は、自分の心にハーモニーする楽器を探し求める欲望ではないだろうか。自分の句境が管楽器である場合、勢、弦楽器を求める傾向もあるであろうが、又他の管楽器ともよくハーモニーする事もあるのである。日本全国川柳家の真面目な作句精進こそは、虚空に渦巻く、香り高きグランド・バンドであると考えられるのである。

(111)

広辞苑の日章旗の項には「わが国の国旗とされている日の丸の旗」とあり、赤い丸の大きさや白地に占める位置の規定など細々と記し、「一八七〇年（明治三）の太政官布告で商船規則を制定し、旗の規格を定めているがこれを国旗とする明文はない」とある。

それで戦後も長らく曖昧な理由で袖にされていたが、このたび君が代と共に国旗・国歌の明確な存在権を得た。

次は昭和12年1月号掲載のものである。

国旗のウラおもて　　たかを・あきを

どこの国の国旗でも表裏があるものの、外国はそれをよく見分けがつくが、日本の白地に赤い「日の丸」は左右も表裏も判然しないから一寸困るようである。日本人全体がまだ国旗に対する観念が他の国人のように明かでないのは憤慨千万、万国に比類ない国柄だけに一層、国

旗に対する知識を一般化し正しい諸儀礼をも定めておきたいものだ。

七八年前、今は市になった豊中の克明小学校で正月元日の拝賀式の時、Kという一学務員が沢山な生徒の集っている席上で、国旗掲揚の方式に就て校長に面罵した事があった。その学務員の言うのには——二本の国旗を出す時はいつも交叉すべきである、それにこの学校の門には左右に二本ただ差し立ててあるのは、どうした事だ。教育者ともあろう者がそれほどの心得がなくて勤まるかと。

ところがその時の校長も国旗に関する正しい知識がないものだから、その時は無念を耐えて黙していたが、あまりといえば自分の教え児らの面前で恥をかかされ、残念でたまらず、すぐ大阪府庁にかけつけ学務課に相談に及んだが、そこでも明確なことは判らず、悶々に暮していたところ、この事情を聞き知ったわたしら同志のものが作った国旗宣揚会なるものが、国旗は交叉する方が却て過り（国際的の場合は別として）で校長のやり方が寧ろ正しいのだ。然し間違ったからとて、これを罪にする法律は作られない。これは明治大帝の有難いお思召しによるものと宣明してやったので、校長も大よろこび、半可通なその学務員は平あやまりに陳謝し自らその職をも辞したという。これはどちらも国旗に関する知識が足りなかったから起った事件である。

さて国旗のウラおもてを定めるのは、つまりこちらから向って左の方に棹があり、その左から右の方へ横にいれるのが本体なのである。（詳しい割出の寸法もあるが略す）ところが、この正しい方式から見ると、あの朝日新聞の社旗になっている六本の光線を放つ日の丸に「朝」の字を現わしてあるのが全く旗のウラおもてを理解しない時代の産物で、まことに不都合千万だと、私はその社に在職中度々忠告したのだけれど、どうしても改めようとしない。妙に頑固な社だ。

ある人が曰く——甲子園に、あの野球大会が続く限り社旗の違法は改めないよ。何故なら甲子園の夏は大概西風が多い。万一改めたが最後、外野から各スタンドの屋上に立てた社旗は右から左へ流れて「朝」の字が悉く裏返しになって頗る縁起が好くないからさ—と。

文章は以上で終りになっているが、筆者がジャーナリストであるので国旗から表裏論になって興味がある。星

条旗、三色旗、それにユニオンジャックにしろ殆んど表裏ありだ。

若い人が日章旗の日の丸をハート形にしたらと言うが、上下表裏のない方が平等で良い。

(112)

春寒炉辺　　森　東魚

子供が靴を左右間違えてはいているのは、間々見ることだが、大人のは珍らしい。私がある工事場を受持っていた時の事であるが、朝、例の通り監督員詰所へ挨拶に行って、主任のK氏と炉を隔てて向き合って馬鹿話をしていながらフト気付くと、オーバーシューズをかけた短靴をはいて居る彼氏の足がどうも外の方へ反っている。

「オーバーシューズがあべこべじゃないですか」私は遠慮なくこう言った。やや周章た彼は、足元へ目を落とすなり、爆笑した。

「ワッハッハ、家内の奴め、ウアッハッハ」そうして、そそくさとオーバーシューズを外したのであるが、見ると其の下の短靴そのものも、あべこべだったのである。妻君のエラーでは完全になかったのである。

「どうも歩いてながら変だと思った」彼氏は、こう言ってツルリと一つ顔を撫でた。

それから数日経ってである。私は電車の座席からすぐ前の足を見た。大人の足である。ゴムの短靴である。そして、右と左がアベコベなのである。私は過ぐる日の滑稽を又思い出した。粗忽者も随分あるものだと感心しながら、フト目を上げて見ると思わずハッとした。忽ち笑いは消え去った。冷たいもので顔を撫でられたような気がした—。前のその人は、黒い眼鏡をかけていた。彼は盲人なのであった。笑えぬ滑稽、それこそ、一層哀れが深い。寧ろ盲人のカンの良すぎるのは哀れが薄く思われる。

憎らしい程に盲目のカンのよさ

この頃俄かに債券が人気あるようである。

「三万五千円当ったのは、まさか、サクラじゃあるまいな」。こんな馬鹿口を叩き乍ら昼休みの事務室は賑やかである。債券の籤は、確かに当るに違いない、当るのである。只いつも自分でないのである。

「禁酒して、債券を一枚でも買おうか」

私は女房にこう言った。

「当りますか」。彼女は、実に明瞭極まるものである。

私は、黙って二階へ上がってしまった。

債券の当った話皆ナ話

S百貨店で光筆写真の展覧があった。実によく出来ている。原画と並べても区別がつかない位である。華山も竹田も栖鳳も——が、然し、それが似れば似る程一層そこに何か知らない一抹の侘しさが私には深まさる気がされてならない。

わからないわネと新ダイヤわかるなり

「路郎は摺り切れやしないか」本当に私はそう感じたのだ。旧臘、キングを訪れた時に。摺切れたという感じのある人物に、私は児玉源太郎、小村寿太郎両氏を偲ぶ。全く両氏は日露戦争で摺切れてしまったのではなかったか。川柳人では、卯木を思う。川柳江戸砂子に尊くも摺切れたのである。嘗て私の友人で「油が切れた」と一ト言を残して死んだのがある事は本誌に書いた。油が切れたのは、油さえ差せばまだ動いて呉れそうに思ふ。然し摺切れたのは、油をやっても間に合わない。

無暗に、摺切れるな。そうしてお互いに、有効に摺切れようじゃないか。

摺り切れる人間もいる春の風

(113)

昨昭和十一年に「職業川柳人宣言」をした麻生路郎が、川柳雑誌の改革出発に苦闘を続けるこの時期、詩人の藤村青一は初めて川柳雑誌に登場、「川柳壇無能論」と題する一文を草した。青年詩人らしい徒手空拳的きらいはあるものの、以後路郎先生の死に至るまで、高鷲亜鈍の筆名で路郎の作品に理論的解明を加え続けた情熱は、この時からのものと偲ばせられる。

川柳壇無能論　　藤村　亜鈍

「川・雑」へこの一文を草してデビューするという事は、一面僕が文学青年—良い意味で解釈して欲しい—である点を自ら進んで明らかにしたいからである。若し僕

の書く事に蒼白い舌足らずの面皰臭い議論であると貶す者があったら、僕は彼等に吹っかけてやることがある。御身等は御身等の半生賭けて為す川柳が一人の文学青年からも見向きされていない非文学的価値にこそ自省すべきであると。

御身等が市井の町人根性を持った無自覚的児戯的ボヤキ漫才の安易な阿呆笑いの支持を受けている限り、川柳は「キング」や「日の出」のポンチ絵にその存在を残す以外、正統の文学より永久に除外されたままになってしまうであろう。

文学青年と言えば直に蓬髪不孝者とみてしまうのは問題である。田を作らずに詩を作ろうとする意欲には、芸術のアポロに憧憬し、帰依しようとする純粋にして直情的な得難い真実があるのだ。その為に世俗的な一切の功利性を捨てて省みないという絶対的な境地こそ昂揚されるべきなのである。これ等の青年達が身も心も奪われるものを川柳に見出す事が出来るであろうか。換言すれば川柳の芸術価値に於て、その美に対する高貴性が経験し得るであろうか。

あるいは僕は僕の対象としている川柳が、現在の進歩的な川柳家からみて妥当をかくものであるかも知れない。まだ斯道に入って日なお浅い僕は、その柳壇の現在の動向に対して計り知れない数々の問題があろう。しかし、今僕の手元にある柳誌書冊（ママ）を見るに、成程、「番傘」も「昭和川柳」も「川柳研究」も、「むさしの」も又「ふあうすと」、「えるすて」も「みすか」もそれぞれにそれぞれの問題を持ち、主張も見受ける事が出来るけれど、その雑詠欄や句会報告などに現れている作句に、彼等の問題も主張も凡てボヤけてしまって、尚その上に、どの柳誌にも同一の名前が見出される風では、理論は理論丈の空転をしているばかりで、果敢な実践句の殆ど皆無なのに驚き入るばかりである。成程、「昭和川柳」や「えるすて」などは比較的、理論と実践に相俟つものがあるようであるが、前者のがらがらした同人達の勝手気儘のテンデンバラバラの論法で生活川柳が嘆言川柳になってしまい、後者のグルッペの鼻持ちならぬモダンボーイのダンディズムは既に文壇の使用ずみのオムツを有難がっているようで柳壇の笑い者である故に、僕の希求するものではない。凡そ大ざっぱに言って、現在の柳誌そのものの存在を理由するなら、柳壇それ自身が卑猥なユーモア

を感じさせるものであって、若し彼等にして真面目であればあるほど、喜劇的なペーソスさえ覚えてくるというのは、僕らのような川柳の素人にして客観し得る事柄である。

次号へ続く

(114)

さて川柳も確かに文学芸術である限りは文学である。その発生を江戸時代にみ、其角門の慶紀逸が寛延三年に出した「武玉川」初篇をもって川柳の契機となり、而して柄井川柳が、前者の雑俳の前句を篇したのを、今度は附句を独立せしめて「柳樽」を出してより以来、連綿として続いて来たところの日本生粋の文学として確立されてはいるのである。それ故に吾々が一度び「武玉川」や「柳樽」を勉強する時は、それは文学的に非常に意義あるものに相違ないけれど、僕はこのような文学的な価値を求める事は、京大のプロフェッサーとか一部のアカデミーの好尚家にまかせて置けば可いので、吾々はそれよりは実際問題として文学に於ける文学する精神、即ち川柳をして川柳する精神、所謂猿真似小器用に、チョクッと物をヒネって書くというのではなしに、川柳そのものに身も心も投げ入れようとする全的な精神を作者が持つ時に始めて文学的な価値を体得する——観賞し吟味し研究するのでなしに——ことになるのである。

斯る態度を堅持する場合、丁稚が丁稚のままで書き、商人、官吏、会社員、医者、軍人のままでそれぞれに書く事にはならないで、川柳する場合は、各々その立場を忘れ川柳家としての衿持と誇りをもって川柳しなければならない。例えば小説家が小説を書く事により小説家であり、画家が画を描く事によって、音楽家が音楽することによって、画家であり音楽家であることは、小説家は小説に、画家は絵画に音楽家は音楽によって生活の絶対価値を認める如く、川柳家は川柳することによって生活の絶対価値を獲得しなければならない。

それは決して商人の趣味や音楽ではない。万一商人であるとしたら、商人は二義的な生活の方便であって、先ず川柳家である事に一義的な絶対的生活を求めなければならないものだ。吾々は斯くする事によって、巷間の川柳を衆愚から別離し、所謂詩人の手に戻すべきであったのである。即ち川柳家は、川柳家である事によって川柳

の自律性がある。牧師が牧師である事によって牧師の存在がある如く、牧師は決して茶坊主であってはいけないのだ。

以上述べた川柳家の内部革命を提唱すると同時に、僕は柳壇の外部的な運動に就て、即ち、対文壇への進出、挑戦に対する柳友の猛省を促すものである。

一体、川柳人協会の設立に対する全国柳誌の非難、攻撃の馬鹿げた騒ぎはどうした事だ。どれもこれもケツの穴の小さい小兒病的、田舎大名の鮒侍位の豪ばりようでは決して耳も傾けられないじゃないか。

「真面目な批評ならいくらでも受ける」という路郎の態度は川柳家にしては一寸珍しい出来物である。欠点だらけは寧ろ路郎の最も躍如とした人間らしさであって、師の句はそれ故に一等芸術的なのである。政治家で事業家で、人触りのよい常識家は大家に成すまして涼しい顔をしているが、句は衆知の如く非常に詰らない。人間が出来て一分のスキ間のないといった世情にたけた、いわば世情に狎れあった奴には真の芸術家は居らぬものである。路郎はよく突飛な事をして柳人輩を驚かす。その事柄の良否は別として、とに角、驚かすという事はアリストテレスの「詩学」以来の芸術の根本義であって、師の芸術家としての天性的な素質を物語るものである。

(115)

前号のこの欄の執筆者、藤村亜鈍氏の実姉の嫁ぎ先、船場の羅沙問屋に大坂形水さんは丁稚奉公をして、今、ＯＳＫという紳士服の製造販売で大を成しておられる。

谷町は丁稚車につらい坂　　形水

氏は商売柄若者に理解があって、早くから私をおだて、「薫風さんは路郎先生を追い越して頑張ってるのは、えらいもんや」

「私のは小さいことばかりして、せわしながってるだけです」

と恥ずかしい答をしたものだが、川柳塔主幹ともなれば大仕事であること、年を取るとだんだん消化しきれなくなることを自覚したので、一度この一ヶ月間を振り返って見た。

呼吸不全の再検査と治療の三十六日間を終えて退院したのは五月三十日であった。

◇31日NHKリンクウ教室（13時―15時）、◇6月1日NHK梅田教室（10時―12時）、◇2日川柳塔常任理事会（1時から）ホテルアウィーナ、◇3日産経学園梅田（10時―12時）、南海電鉄サウスウエーブ柳壇整理完了。◇4日ライオンズ柳壇（12時―16時）於難波神社、話「アリンス国について」（これは調べる時が楽しい）◇6日家に居て川柳塔誌への文章と、角川春樹事務所からの依頼の原稿「芭蕉の一句と現代的鑑賞」（『俳句現代』8月号掲載）を執筆。◇7日NHKリンクウ教室、夜は本社6月例会（ホテルアウィーナ）散会後、編集仲間と乾杯交歓。◇8日土佐市の海地大破さんと寺尾俊平居へ、仏壇に合掌と墓参、岡山国際ホテルに泊り。◇9日林荒介さんの墓と仏壇に合掌のため米子へ。（戒名を彫るため寺の墓石は石屋に移しあり、石なき墓に礼拝ははじめて）仏壇のたたずまいまだなまなまし。◇11日全日本川柳協会の総会と東京大会へ。日本青年会館は雨の中七百六十名の出席、第二次選者の役目。黒川紫香さん高齢者表彰を受けられる。次女幸も参加。散会後、板尾岳人、板尾創路夫妻、幸と私の五人帝国ホテルで会食、帰阪。◇12日病院診察日。◇13日山陽新聞柳壇の選はじめる。◇14日藤川一馬氏の葬儀に参列（倉敷市へ）◇15日NHK梅田教室、午後永沢寺への吟行あるも予定変更して桝本露児氏葬儀に参列。◇16日山陽新聞柳壇選評句稿発送。朝日なにわ柳壇の選。◇17日出雲行き、松江到着後、観光、紙すき場、荒神谷遺跡大賀蓮見事也。島根ワイナリー。前夜祭あり参加者に好評。◇18日いずも川柳会75周年記念大会は百八十名を越す（於出雲ロイヤルホテル）。◇19日キリスト教月刊誌『声』、大阪都市協会発行『大阪人』、大阪府警発行『なにわ』誌の各川柳欄を執筆。◇20日松坂屋文化教室、高杉鬼遊さんの代講。朝日なにわ柳壇選評終了。◇21日NHKりんくう教室。◇22日毎日文化センター教室（10時―12時）川柳塔同人の選にとりかかる。◇24日横浜へ。あおば川柳会前夜祭（於ホテル青葉台フォーラム）◇25日あおば川柳会5周年記念句会、参加者九十名。◇26日朝日カルチャーセンター教室（10時―12時）、寺尾俊平句集の選と序文、事情あって先行の依頼。川柳塔の選を後にして鋭意集中する。疲労困憊。◇27日葉文館倒産の報、悲し。28日俊平句集の選終了、大野風太郎氏に送る。29日NHK梅田教室のあと大阪川柳人クラブ役員会。30日西村梨里さんと尾道へ。市

の西岡文化振興課長ほか五名の方に会う。

(116)

「川柳漫画に寄す」のタイトル、諸家の小文が掲載されている中で数篇を再録する。

柴谷宰二郎

二人三脚と思えばいいのじゃありませんか。川柳君のスピード（詞的価値）等は、独走の折に見てあげてください。

川上三太郎

川柳中の漫画的なところ

漫画中の川柳的なところ

この二線に関する限りのコンビネーションは最も安全なそして古典的なアダジオで祝福されるであろう。

堀口　塊人

川柳家は今日の川柳漫画なるものに満足して居ない。句も絵もさらに向上しなければならぬ。漫画は売れる。川柳は売れない。売れる為に漫画家は川柳漫画の現状に満足して居るのではあるまいか。そんな絵が多いと思う。

細木原青起

私は川柳は素人である。そのつもりで聞いて貰いたい。古川柳は（全部とは言わぬが）謎を以て世相人事を諷したものが多い。故に漫画が謎を解く形になって句も漫画も活きる。ところが今日の川柳はお上品で叙景が多く、俳句に近いようなのが大部分で漫画になりにくい。諷刺があっても真っ向から切り下し、表ばかりで裏がない。漫画にしても句の説明になって了うから甚だ面白くない。

こんなことを言うと川柳家諸兄からお叱りを蒙るに違いないが、私は『日の出』に毎号川柳漫画を画いて居るので、私の偽らざる感想である。其の為に私は川柳漫画の批判は差し控える。

川柳家は上品な漫画を希望されることと思うが、しかし、俳画風では意義をなさない。滑稽に描いても結局画作者に依って品の上下は左右されるものである。

絵になる川柳は矢張り古川柳のようなのが欲しいと思う。大衆を対象としないならば是れは又別である。しかし川柳は滑稽詩であるという先入主が大衆から失せない以上は、大衆雑誌が桁はずれの漫画を描いても止むを得まい。要は川柳雑誌で川柳漫画の行く道を研究運動する

ことである。

前田　五健

路郎柴舟の累卵の遊び、素文の命の洗濯、浮世さまざま、楽天の金言警句川柳漫画等々各態各様に面白い。早く言えば漫画と言うより川柳挿画だと私は思う。また川柳を絵にする、絵に川柳の賛する、其処に自ら二途がある。誰れだったか「画は山川草木、句は棚引雲霞の気持ちでなくてはならない」と言う。私もその通りだと思う。要は川柳を選べば画も挿画や説明画でなく、なんとか展開してくるものと思う。大衆向なら仕方もなく出版目的によってはあれでいいのであろう。若し私が描くとすれば素朴に純真に訥弁に描いて行きたいと思う。

小川　武

川柳漫画は、やはり筆ですナ、どうもペン描きの漫画はホークで飯を食べているようでピッタリきません。しかし川柳家が重爆機などの新しいものを詠んで絵にする場合、さァ筆描きノースロップは仲々むずかしい。

長尾のヲっさんかて筆描きですね。それにモボやアパートばかり描いている漫画家にとっては川柳漫画は何よりの勉強になります。

(117)

編集後記に当たる「編集縦横」とは別に、月々頁の穴埋めに楽屋落ち的小文が掲載されている。興味ある項を転記する。

川柳横丁　（筆者　不死鳥）

★路郎が新年号の編集に夢中になっていると三男のポーが横から「お父さん」「ウム」「川柳雑誌付録あるのン」路郎グッと詰って「幼年クラブと違う違う」。

★水府は福助やグリコで磨いた腕で、番傘二十五周年記念事業を素晴らしく賑やかにやってのけた。艱難汝を璧にすである。

★路郎の悪戦苦闘ぶりを気遣った森東魚「オイ、摺り切れるナ、摺り切れるなヨ、摺り切れちゃ駄目だせ」と泣かんばかりに手を握る。

★川柳職業人の意義を解さない柳人の多いのに驚く。川柳を解さない社会人を笑えない。

★珍竹林が雅号を気にしている。それで雅号のことを少し書く。

きん坊は錦浪で死んだ。鯛坊は周魚になったが、飴ン坊は京魚になりきれずに飴ン坊で死んだ。雅号は符号であるから、何んでもいいという理論はなりたたない。改号は早い方がいい。

★番傘二十五周年の大会に、道のためとは言いながら、公会堂の入口で所持品の受付をしたり、エレヴェーターへの案内をしたりしていた紋付袴氏の労を犒いたい。

人生五十涙ぐましき事多し　　不死鳥

★豆秋が風のようにやって来て「もうお目にかかれぬかも知れぬので暇乞いに来ました」という。訳を聞けば、友だちに鰒を喰べさされ、今晩の十二時までが危ないと聞きましたからと言う。それからもう一年余りになる。

★路郎が南海高島屋の中を迂路々々しているうちにバリカンを買わされた。別に酔ってた訳ではなく、あのチャキ〳〵という音を想像して童心が悠然と湧いて来たんだそうな。

そのバリカンでアートとポーを丸刈にした機見女、腕が鳴ると見えて、東魚先生を丸刈にしたいと、その来訪を待機している。川柳家で丸刈志望者は、今のうちに川柳無料丸刈所まで申し込まれたい。

★大連の月南夫人が逝く、仁川府の可宵夫人が亡くなる。「南無女房乳をのませに化けて来い」の古句を舌の上に乗せてしみじみ味う。

★川柳漫画を論難している人があるかと思えば、川柳と商品の広告とを結びつけて得意になっている人もある。どちらが川柳を冒瀆するものか分かったもんじゃない。

★葭乃が「選をしに行きなはるか」と聞くから、何んのことかと思ったら選挙のことだった。なるほど選に違いない。第四区は十人立っているから行けば九人没、行かねば全没だ。「近作柳樽」の選と比率に大差がない。「棄てるな一票」の宣伝もいいが、もっと大選挙区にしないと棄権する方が公平な場合もある。

★裏日本と言う言葉には親しみよりも哀愁を感じる。北陸と言う言葉には強さを感じる。

★すべての物が落ちる力を失うまでは防空は不可能だ。

★電車の中には生活がない。汽車の中には生活がある。

★煙草好きの路郎が銀紙を蒐め出した。銀紙を蒐めて飛行機を献納するのかと思ったら、川柳会館を建てるんだそうだ。その言い草がいい。飛行機なら俺が言い出さずとも出来るが、川柳会館はそうはいかぬと。

(118)

準戦時体制化の川柳

阿部佐保蘭

関東防空演習も異常なる緊張裡に第二日に入って、夜来の雨は蕭々として、今更に北支の冷雨を想わせるものがある。私は今、予行練習に入る前の寸時を割いて、出征柳友の身に憶いを走せつゝ、この拙なきペンを走らせている。

私は一昨日、SHK（川柳翻訳会）賛助会員桝谷紅ン坊君からこんな印刷物をうけた。

初陣とほゝ笑み乍ら髭を剃り

日本男子の本懐、私の念願が叶った此度の応召には熱誠溢るゝ御歓送を戴きまして何んとも感謝の言葉も御座いません。

束にして敵を撃つ気の鉄兜

日の丸の元気で頑張る私の勇姿を御想像下さい。

丸髷も銃後を護る襷掛け

銃後の護りに御健闘下さる貴家御一統様の御健康を祈ります。

私は九月七日のあの盛んなる見送りの朝を思い出し、明朗、啞三味、陣居、車山、米花、紅茶碗、鶏六の諸柳人と共に叫んだ万歳の声に今更血の湧くのを覚えた。私は八日締切りのきやりの社人吟へ早速句を送った。

出征の友の手固く握りしめ

神前に誓う勇士のうしろつき

出征の友を送って乾く咽喉

このウインドも出征を祝す文字

赤ん坊を軍歌であやすこの頃

出征の兵士憶えば言えぬ愚痴

私は今朝同じくSHK会員の清水淳吾君から八月五日見送り以来始めての消息に接した。

露営に結ぶ夢も十数日、日中は酷暑乍ら血生臭き戦場の巷にも朝夕の秋風が訪れました。

私は今、上海の東部前線揚樹浦路という処で陸軍部隊との共同戦線下に約二千米の地点に陣地を構築している支那中央軍二十万の兵と相対して居ります。（中略）

ペンを走らせているこの間にも黄浦江上の軍艦から打出す砲の音、飛行機の落す爆弾の響き、豆をいる様な小

銃機銃の響き、これ等も既に覚悟を決めた今に至っては痛快なる音楽のリズムの様に聴こえて来ます。大いに頑張ります。皆様に宜しく御機嫌よう。

九月九日　於上海　　清水　淳吾

私は只今我が柳友の武運長久を祈り、一日も早く暴支膺懲の目的を達し、無事凱旋の日を心から祈りました。

たゞ友の殊勲と無事を祈る秋

☆私は『川柳雑誌』九月号の中から戦時体制下の川柳をピックアップしてみる事にする。

極道もいざ出征となる笑い　　新水
街の風陳列にある日本刀　　鮎美
笑い話へ千人針が通るなり　　夕鐘
燈火管制虎刈りにして貰い　　豆秋
馬に草やるを忘れず兄は征き　　変人
召集の椅子二つ三つ空いてあり　　いわを
千人針の中を通った胸さわぎ　　青児
郷を発つ感激死んでよい覚悟　　可宵
軍刀の重さ炎暑を突きぬける　　九天
戦勝へニュースはありったけの声　　久米雄

☆路郎の書く「編集縦横」に、日本人の血は南京を落し、日本人の血は川柳を創作する。あらゆる方面に多事多端であった一九三七年は本号を以て幕を閉ずることとなった、と。

(119)

この欄を書き始めてはや十年になる。気が付けば今世紀も最後の月、の思いと同じだ。

長長と『川柳雑誌』時代の記事を紹介して路郎先生の辿られた道の何が伝えられたか、甚だ心もとないが、来月号で百二十回となるのを区切りとして、この欄を擱くことにする。

路郎門作家抄（合同句集『私達』から）

福寿草松にしたがいそろかしこ　　麻生　葭乃
売ると言う家に油絵裸婦の像　　足立　春雄
税務署と聞いて蠅取紙を踏み　　吾郷　玲人
人間ドッグ合間〳〵に妓が訪ね　　井上　湧三
本棚へ衣食削ったのを竝べ　　市場没食子
一代で仕上げ遠慮のない鼾　　石川侃流洞

けだものの争うごとき恋やせん　奥村　丹路
政見を聴いて一票引込める　尾崎　方正
車窓暖かチルチルミチル顔並べ　大坂　形水
元祖元祖本家本家土産物　大西　八歩
初孫のミルクの匂いまで愛し　大西　迷窓
めったに〳〵女女をほめず　大鶴　喜由
晩酌の猪口にも春の舌ざわり　大森娯句楽
重鎮と言われ目方は十二貫　岡村　牛耕
年賀状女将の書いたものでなし　岡田　夜潮
春雨へ女房と濡れるあほらしさ　川村　好郎
労働歌重役室の窓閉まる　河村　日満
立読みの間に止んで傘忘れ　金井　文秋
パンの耳好きなのも居る子沢山　北川　春巣
年上の女とくぐるてっちり屋　菊沢小松園
みんな寝てしもうて母のいい月見　黒川　紫香
人間の慾でたまった古道具　小西　雄々
直された癖で謡っている謡　後藤　梅志
精神一到酒は欠かさず　桜川　不水
春日遅々として仁王さんねむくなり　清水　白柳
未亡人主人の箸で食べてみる　直原七面山

骨立てたまま二次会へついて行き　須崎　豆秋
金貯めて冷たい夫婦とはなりぬ　田垣　方大
胸をやむ人とは見えぬ大獅子吼　高沢　一浪
重役になり人間になり損ね　武部　香林
二人ずつ二人ずつ居る中之島　武部　若菜
神経を抜けば地獄の面白さ　戸田　古方
参政権女は蕗の方がよし　戸倉　普天
市場籠持つひとときを女医愛し　土井　文蝶
帰化しても唄は二上り三下り　内藤草一郎
母と往く心斎橋の片日照り　中島生々庵
義理がたい人に元日起される　西尾　栞
女なる悲しみおんな酌をする　西村　梨里
駅長を一人残した春の汽車　浜田久米雄
夫婦だろ女がうどん代払う　早川　清生
突撃のニュースに兄は見当らず　橋本　緑雨
暇な事受付嬢のかんぜより　弘津　柳慶
もう一人のぼくを殺して子と遊び　福田　妄夢
三流館夫婦仔犬を抱いて来る　不二田一三夫
並木道母校へ続くなつかしさ　本田恵二朗
立話どっちも煙草きらして居　正本　水客

雨降れば降るとて二階仲がよし　丸尾　潮花
しなびても土筆袴はつけて居た　真鍋　一瓢
アルバムに母も十九の春を持ち　松江　梅里
とやかくを言わずいっしょにしてやりな三鴨　美笑
十二月誰か故郷を思わざる　水谷　谷水
喰べながら喰べる話がまだ続き　森下　愛論
男皆阿呆に見えて売れ残り　山川　阿茶
数珠持ってするパチンコの高野山　八木摩天郎
民主主義俺の老後は寂しかろ　若本多久志
六角堂幾何学的に暮れて行き　笠原　路生
花道は相合傘の幅に出来　高橋かほる
きんぎょやに雛妓袂を教えられ　長崎　柳秀
長襦袢女は風邪をひかぬもの　西田　艸楽
茶碗の丸さたのしみに満つ　福田山雨楼

(120)

路郎作品抄（六十句）

二階を降りてどこへ行く身ぞ
見渡すとユダのこころをみんな持ち
寝転べば畳一帖ふさぐのみ
その日ぐらしも軒に雀がこぼるるよ
てにをはのあはぬ悔みとなりにけり
大杉を殺し思想を取り逃がし
君見たまへ菠薐草が伸びてゐる
まだ嘘が半分まじった辞世なり
雑談の前にお布施がさらされる
そろばんの三桁四桁の人生か
凡聖一如元旦のこころ知る
草の根よ僕も闘ふ草の根よ
あの博士今度は民主主義を売り
古くとも僕には仁義礼智信
酒とろりとろり大空のこころかも
のみに来た友に家賃をきかれて居
十二月まがりくねったとこで飲み
ビールの泡を吹いて話をそらす気か
行末はどうあろうとも火の如し
少女で通すちちははの前
若い燕切符を買うて渡される
友達をみんなだまして南に居

恋の罠あの眼だろうか眼だろうか
サルトルを伏せて女に溶け込みぬ
愛人が雪の中の黒点となりぬ
もう未練ないが糸屑とってやり
秋さらり銀の襖のものおもひ
人妻よ不惑とはかなしくもあるかな
名をすてて十七八の恋もせむ
俺に似よ俺に似るなと子を思ひ
結界の中へうけとる子煩悩
凧あがりきって親子が口をきき
妻や待たむ靴音を高めんか
乳の出る機械に母はなっている
子よ妻よばらばらになれば浄土なり
子を死なし学校に子の多いこと
すべりんこ親は涼しいとこで待ち
子沢山僕の枕は何処へいた
十日戎両手でうける気で出かけ
病院の廊下財布のまま渡し
聖書一冊菊一輪の二階也
寒がりがつまみ出してる黒の石

草莽の臣かなしみの炭をつぐ
待ったなしの歩にさされたる犬養毅
奈良二郎つかい果たした人も聴き
夕桜とんぼがへりがしてみたし
遠く来て信濃に山のない日なり
思い出の橋ばかりなり水都祭
いつ死んでもいいと言うとこまでは来た
古希はよし弟子に孫弟子ひまご弟子
われ老いしか千代紙を美しと見る
初日の出自由はここにあるものを
時計が一つ鳴った役目を果たすよう
妻よ踊れ残こんの色香ほのぼのと
李白という友あり遠きむかしにも
老人におもちゃなしバラの前に立つ
自分すら救えぬ人の立候補
一行詩これが私の墓だとは
しがみつくほどのこの世でなかりけり
死の影が紋十郎の背後から

句の評価は個人により異なるし、重い句が良くて軽い

句はつまらぬとも言えない。路郎先生の句に親しんでいると、雑詠と課題吟の区別はつきにくい。句の背景に思想や社会があり、生活を色濃く感じる。「人間陶冶の詩」を自ら実践された証左と言うことが出来る。

(121)

路郎先生の最期

産み落とされて七十余年をウロチョロす
振りむけばやっぱりついて来る妻よ
敷かれてやるひまもなかりしに金婚か
山と河人ひとりなき舞台なる
捨てること何んでもないと思いしにドッグ入りこのボロ船をどうする気
部分品がもうおまへんと言われそう
人生を暗いところで探りあて
炎の中に忘の字が灰となって残り
死はゆらぐ文楽人形に死はゆらぐ
死の影が紋十郎の背後から
臨終が冬なら〝いろはおくり〟で逝かんかな
雲の峯という手もありさらばさらばです

先生は昭和四十年三月末に入院、五月に退院はされたが、喜寿金婚の祝いを目前にした七月七日幽明境を異にされた。川柳に手を染めてから六十二年と二ヶ月だった。川柳界の芭蕉は、芭蕉の旅と変らぬ峻しい人生の行旅を続けた。

芭蕉の臨終には、木節、去来、惟然、正秀、之道、伽香、支考、呑舟、丈草、乙州、其角、次郎兵衛が侍した。遺骸は、十人の門弟に囲まれて川舟で淀川を溯り、粟津の義仲寺へ送られた。

路郎の眼に、虚空の芭蕉の幻が消えて川舟が現れた。川霧に包まれた芭蕉の門弟の顔に、なつかしいわが門下生の顔が重なって来た。

炎天に寒疣立てて師を葬送る　　薫風　合掌

橘高薫風略歴

〈本　名〉　橘高　薫

〈本籍地〉

大阪府豊中市中桜塚三丁目十三番十五・一〇二号

〈現住所〉

大阪府豊中市中桜塚三丁目十三番十五・一〇二号

〈生年月日〉

大正十五年七月十一日

〈学　歴〉

昭和十八年三月　兵庫県立尼崎中学校卒業

〈職　歴〉

元旅館経営

現在マンション経営

〈川柳歴〉

昭和三十年一月　川柳作家として活動開始（現在に至る）

昭和五十年六月　日本川柳協会理事に就任（平成四年五月まで）

平成四年六月　社団法人日本川柳協会理事に就任（平成六年五月まで）

平成六年六月　社団法人日本川柳協会常務理事に就任（現在に至る）

平成七年六月　全日本川柳誌上大会特別委員長に就任

平成八年六月　全日本川柳誌上大会出版委員長に就任（現在に至る）

昭和三十二年一月　麻生路郎氏に師事

昭和三十三年二月　『川柳雑誌』編集に従事（昭和四十年九月まで）

昭和四十年十月　川柳塔社創立委員として「川柳塔」誌を発行（現在に至る）

昭和四十五年十一月　川柳塔社副主幹、副理事長に就任（平成二年九月まで）

平成二年十月　川柳塔社理事長に就任（平成六年五月まで）

平成六年六月　川柳塔社主幹に就任（平成十二年九月まで）

平成十二年十月　川柳塔社名誉主幹に就任（現在に至

る）
昭和六十二年四月　日本現代詩歌文学館評議員（現在に至る）
平成六年七月　大阪川柳人クラブ副会長（現在に至る）

〈文化団体歴・選者歴〉
昭和五十年一月　キリスト教月刊誌「声」川柳（現在に至る）
昭和五十五年六月　朝日新聞なにわ柳壇（現在に至る）
昭和五十六年一月　山陽新聞柳壇（現在に至る）
昭和五十六年五月　ＮＨＫラジオ川柳選評（平成二年まで）
昭和五十六年十月　西日本文字放送川柳教室（昭和六十四年まで）
昭和六十年一月　大阪都市協会月刊誌「大阪人」川柳（現在に至る）
平成六年六月　大阪府警察本部月刊誌「なにわ」川柳（現在に至る）
平成六年六月　南海電鉄情報誌「サウスウェーブ」川柳（現在に至る）
平成八年十月　第十一会富山県国民文化祭川柳大会（選者）
平成十一年十月　第十四回岐阜県国民文化祭（選者）
第一回全日本川柳誌上大会（選者）
第二回全日本川柳誌上大会（選者）
第五回全日本川柳誌上大会（選者）
第二十一回全日本川柳誌上大会（選者）
第二十三回全日本川柳誌上大会（選者）
第二十四回全日本川柳誌上大会（選者）

〈講師歴〉
昭和五十五年六月　朝日カルチャーセンター（現在に至る）
昭和五十六年六月　ＮＨＫ文化センター大阪（現在に至る）

昭和五十六年六月　ＮＨＫ学園川柳入門（現在に至る）
昭和五十六年十月　毎日文化センター（現在に至る）
昭和五十六年十月　産経学園梅田第二（現在に至る）
平成元年一月　豊中身障者福祉センターひまわり（現在に至る）
平成九年四月　ＮＨＫりんくう文化教室（現在に至る）
平成十二年七月　よみうり松坂屋大阪文化センター（現在に至る）

〈賞罰〉
昭和五十五年五月　第十二回三條東洋樹賞受賞
「時の川柳」を創立し主幹をつとめていた三條東洋樹が昭和四十二年二月私財を投じて創設した賞。その年度の柳界に功績のあった川柳作家と結社を表彰した賞であり、川柳界のノーベル賞とも称されていた。昭和五十八年十一月東洋樹が没するまで続き、十八人の川柳作家と二つの柳社が表彰された。東洋樹の川柳理念は十七音の定型、平易簡明な句姿、批判精神を重視するものであり、川柳界に大きな影響力を及ぼしていた。
平成十三年四月　春の叙勲木杯（もくはい）一組台付賜与さる。

〈川柳関係著作〉
昭和三十七年九月　川柳句集「有情」発行
昭和四十年七月　「檸檬」発行
昭和四十八年十一月　「肉眼」発行
昭和六十年八月　「愛染」発行
平成七年十一月　「古稀薫風」発行
昭和五十四年七月　著書「麻生路郎」発刊
昭和五八年七月　「なにわ川柳この一句」発刊
昭和六十年七月　「川柳に見る大阪」発刊
平成十一年三月　「師弟」発刊

あとがき

先に上梓した句集を読み返して、中にはそこそこの出来の句もあろうが、大方の句は気に入らず、なろうことならもう一度川柳活動を一からやりなおしたい思いにかられた。今度の文集もまた同じ残念の感を抱くに違いない。

この方は恩師路郎先生顕彰の紙碑である。

この二冊の集成は、馬車馬のように突っ走った時代の私の足跡であり多くの柳人との遊歴の名残りでもある。振り返っていとおしくないはずはない。

これからの私には老境の短い歳月が残されている。いささかの余裕と遊び心を持って、道草を楽しみながら歩き続けたい。

初心時代に散逸した句の蒐集と整理をわずらわせた山本義子さん、長浜澄子さん、川柳平安誌のエッセー集めにご協力下さった田中博造氏に心からのお礼を申します。沖積舎の伊丹啓子さん、ありがとうございました。

平成十三年十一月三日

橘高　薫風

橘高薫風川柳文集

平成十四年三月五日発行

著　者　橘高薫風

発行人　沖山隆久

発行所　株式会社沖積舎

東京都千代田区神田神保町一-五二　郵便番号一〇一-〇〇五一

電話〇三-三二九一-五八九一　振替〇〇一三〇-七-一七七六三一

文昇堂＋互恵印刷／松栄堂製本

ISBN4-8060-6592-7 C0392